

京都府遺跡調査概報

第115冊

1. 三角古墳群第2次
2. 観音寺遺跡(平成15年度)
3. 諸畑遺跡第3次
4. 長岡京跡右京第829次・友岡遺跡
5. 椋ノ木遺跡第7次

2005

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター



三角古墳群の上空から舞鶴湾を望む（上が北）

序

京都府埋蔵文化財調査研究センターでは、京都府内の公共事業に伴う埋蔵文化財の発掘調査を行ってまいりました。この間、当センターの業務の遂行にあたりましては、皆様方のご協力を賜り、厚く御礼申し上げます。

本書は、『京都府遺跡調査概報』として、平成15・16年度に実施した発掘調査のうち、京都府土木建築部、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所、京都府南丹土地改良事務所、京都府乙訓土木事務所、京都府流域下水道建設事務所の依頼を受けて行った、三角古墳群第2次、観音寺遺跡、諸畑遺跡第3次、長岡京跡右京第829次・友岡遺跡、棕ノ木遺跡第7次に関する発掘調査概要を収めたものであります。本書が学術研究の資料として、また、地域の埋蔵文化財への関心と理解を深める上で、御活用いただければ幸いです。

おわりに、発掘調査を依頼された各機関をはじめ、舞鶴市教育委員会、福知山市教育委員会、八木町教育委員会、長岡京市教育委員会、精華町教育委員会などの各関係諸機関、ならびに調査に参加、協力いただきました多くの方々に厚く御礼申し上げます。

平成17年3月

財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター
理 事 長 上 田 正 昭

凡 例

1. 本書に収めた概要は、下記のとおりである。

- | | |
|-------------|---------------------|
| 1. 三角古墳群第2次 | 2. 観音寺遺跡 |
| 3. 諸畑遺跡第3次 | 4. 長岡京跡右京第829次・友岡遺跡 |
| 5. 棕ノ木遺跡第7次 | |

2. 遺跡の所在地、調査期間、経費負担者および概要の執筆者は下表のとおりである。

No.	遺跡名	所在地	調査期間	経費負担者	執筆者
1.	三角古墳群第2次	舞鶴市下安久	平16. 5. 14～平16. 8. 25	京都府土木建築部	伊野近富 田代 弘
2.	観音寺遺跡	福知山市字観音寺	平15. 5. 7～平15. 12. 19	国土交通省近畿地方 整備局福知山河川国 道事務所	伊野近富 黒坪一樹
3.	諸畑遺跡第3次	船井郡八木町諸畑 小字松本	平16. 9. 6～平16. 11. 29	京都府南丹土地改良 事務所	福島孝行
4.	長岡京跡右京第 829次・友岡遺跡	長岡京市友岡小字 西山16-1	平16. 7. 26～平17. 1. 21	京都府乙訓土木事務 所	竹原一彦
5.	棕ノ木遺跡第7次	相楽郡精華町大字 下狛小字棕ノ木	平16. 8. 18～平16. 10. 1	京都府流域下水道建 設事務所	高野陽子

3. 本書で使用している座標は、国土座標第6座標系によっており、方位は座標の北をさす。

また、国土地理院発行地形図の方位は経度の真北をさす。

4. 本書の編集は、調査第1課資料係が当たった。なお、遺物の写真撮影は、同資料係主任調査員田中彰が行った。

本文目次

1. 三角古墳群第2次発掘調査概要-----	1
2. 観音寺遺跡平成15年度発掘調査概要-----	21
3. 諸畑遺跡第3次発掘調査概要-----	117
4. 長岡京跡右京第829次(7ANNM-5地区)・友岡遺跡発掘調査概要-----	137
5. 棕ノ木遺跡第7次発掘調査概要-----	153

付表目次

1. 三角古墳群第2次	
付表1 三角4号墳石室内出土土器法量表-----	19
付表2 三角4号墳石室内出土玉類法量表-----	20
付表3 三角古墳群出土鉄器類法量表-----	20
2. 観音寺遺跡	
付表4 A地区検出遺構-----	27
付表5 A地区竪穴式住居跡SH02084出土遺物一覧表-----	38
付表6 A地区弥生時代中期土坑一覧表-----	41
付表7 A地区弥生時代中期土坑内出土土器一覧表-----	42
付表8 A地区弥生時代後期土坑一覧表-----	72
付表9 B地区検出遺構-----	80
付表10 遺物観察表-----	101

挿図目次

1. 三角古墳群第2次	
第1図 調査地および周辺遺跡分布図-----	1

第2図	三角古墳群位置図	2
第3図	三角2号墳調査後墳丘測量図	3
第4図	1・4号経塚実測図	4
第5図	三角3号墳調査後墳丘測量図	5
第6図	三角3号墳主体部実測図	6
第7図	2・3号経塚実測図	7
第8図	三角4号墳調査前墳丘測量図	8
第9図	三角4号墳断面図	9
第10図	三角4号墳調査後墳丘測量図	10
第11図	三角4号墳石室実測図	11
第12図	三角4号墳石室検出状況図	12
第13図	石室床面の割付図	13
第14図	三角4号墳石室出土主要遺物	13
第15図	三角4号墳石室出土土器類実測図	14
第16図	三角4号墳石室出土玉類実測図	15
第17図	三角3・4号墳出土鉄器類実測図	16
第18図	1～4号経塚遺物実測図	17

2. 観音寺遺跡

第19図	調査地周辺遺跡分布図	22
第20図	由良川流域の縄文・弥生時代遺跡	23
第21図	観音寺遺跡のこれまでの調査地	24
第22図	A・B・C区全体図	26
第23図	A地区遺構平面図	28
第24図	A地区(西半)南壁土層断面図	29
第25図	土坑S K02042平・断面図	29
第26図	縄文土器・打製石斧実測図	30
第27図	打製石斧実測図	31
第28図	環濠S D03071・沼地状落ち込みS X03070平面図	32
第29図	環濠S D03071(弥生時代中期)・沼地状落ち込みS X03070(弥生時代後期)	33
第30図	環濠S D03071下層出土土器実測図1	34
第31図	環濠S D03071下層出土土器実測図2	35
第32図	環濠S D03071最下層出土土器実測図1	36
第33図	環濠S D03071最下層出土土器実測図2	37
第34図	竪穴式住居跡S H02084・02150平・断面図	38
第35図	竪穴式住居跡S H02084出土弥生土器実測図	39

第36図	溝 S D 02087・02088平・断面図	40
第37図	溝 S D 02122出土弥生土器実測図	40
第38図	溝 S D 02087・02088出土土器実測図	45
第39図	土坑平・断面図 1	46
第40図	土坑平・断面図 2	47
第41図	土坑(S K 02105)平・断面図 3	48
第42図	土坑出土土器実測図 1	49
第43図	土坑出土土器実測図 2	50
第44図	土坑出土土器実測図 3	51
第45図	土坑(S K 02112)出土土器実測図 4	52
第46図	土坑(S K 02115)出土土器実測図 5	53
第47図	土坑出土土器実測図 6	54
第48図	土坑(S K 02146)出土土器実測図 7	55
第49図	土坑出土土器実測図 8	56
第50図	土坑出土土器実測図 9	57
第51図	土坑出土土器実測図10	58
第52図	土坑出土土器実測図11	59
第53図	多孔土器実測図	59
第54図	土製品実測図	60
第55図	石器実測図 1	61
第56図	石器実測図 2	62
第57図	沼地状落ち込み S X 03070平面図	63
第58図	沼地状落ち込み S X 03070出土土器実測図	64
第59図	竪穴式住居跡 S H 02085・02086・02101平・断面図	65
第60図	竪穴式住居跡 S H 02085・02150出土土器実測図	66
第61図	竪穴式住居跡 S H 03085石器実測図	67
第62図	竪穴式住居跡 S H 03097平・断面図	68
第63図	竪穴式住居跡 S H 03097出土土器実測図	68
第64図	遺構面精査中出土土器実測図	68
第65図	土坑平・断面図	69
第66図	土坑 S K 03099・03101平・断面図	70
第67図	土坑 S K 03103平・断面図	71
第68図	土坑出土土器実測図 1	72
第69図	土坑(S K 03103)出土土器実測図 2	73
第70図	石器実測図 2	74

第71図	土坑 S K 02126出土土器実測図	74
第72図	竪穴式住居跡 S H 02086出土土器実測図	75
第73図	竪穴式住居跡・土坑出土土器実測図	75
第74図	溝 S D 03002出土土器実測図	76
第75図	土壙墓 S T 03005平・断面図	76
第76図	土壙墓 S T 03005出土土器実測図	77
第77図	土坑 S K 03001出土土器実測図	77
第78図	土坑 S K 03001平・断面図	78
第79図	溝 S D 02002出土土器実測図	79
第80図	B地区遺構平面図	80
第81図	B地区南壁土層断面図	81
第82図	方形周溝遺構、土坑平・断面図	82
第83図	方形周溝遺構 1 弥生土器出土状況図(1)	83
第84図	方形周溝遺構 1 弥生土器出土断面図	84
第85図	方形周溝遺構弥生土器出土状況(2)	84
第86図	方形周溝遺構 1 弥生土器出土状況(3)	85
第87図	方形周溝遺構 1 出土土器実測図 1	86
第88図	方形周溝遺構 1 出土土器実測図 2	87
第89図	方形周溝遺構・溝出土土器実測図	88
第90図	土坑 S K 03128・03129平・断面図	88
第91図	土坑 S K 03084平・断面図	89
第92図	土坑出土土器実測図	90
第93図	土坑 S K 03109出土土器実測図	91
第94図	石器実測図 3	91
第95図	竪穴式住居跡 S H 03120平・断面図	92
第96図	竪穴式住居跡 S H 03120出土土器実測図	92
第97図	土坑 S K 03003平・断面図	93
第98図	土坑 S K 03004平・断面図	94
第99図	土坑 S K 03003・03004出土遺物実測図	95
第100図	C地区遺構平面図	96
第101図	C地区東壁土層断面実測図	97
第102図	C地区出土土器実測図	98

3. 諸畑遺跡第3次

第103図	調査地位置図および周辺の遺跡	117
第104図	トレンチ配置図	118

第105図	A地区平面図	119
第106図	A-1・2トレンチ土層断面図	119
第107図	B地区遺構配置図	120
第108図	B地区南壁土層断面図	120
第109図	竪穴式住居跡SH01・02、類竈SK07平面・断面図	121
第110図	竪穴式住居跡SH03平面・断面図	123
第111図	竪穴式住居跡SH04・不明遺構SX08平面・断面図	124
第112図	B地区鎌倉時代遺構平面・断面図	126
第113図	C地区遺構配置図	127
第114図	C地区南壁土層断面図	127
第115図	竪穴式住居跡SH05平面・断面図	128
第116図	竪穴式住居跡SH06・07・08平面・断面図	129
第117図	竪穴式住居跡SH09平面・断面図	130
第118図	出土遺物実測図(1)	132
第119図	出土遺物実測図(2)	133
第120図	出土遺物実測図(3)	134
第121図	出土遺物実測図(4)	134
第122図	出土遺物実測図(5)	135

4. 長岡京跡右京第829次(7ANNM-5地区)・友岡遺跡

第123図	調査地位置図	137
第124図	今回調査地および周辺調査地位置図	138
第125図	遺構平面図	139
第126図	A・B地区遺構図	141
第127図	掘立柱建物跡SB14・19実測図	142
第128図	土坑SK56実測図	143
第129図	井戸SE111・溝SD90実測図	144
第130図	C地区遺構平面図	145
第131図	掘立柱建物跡SB320実測図	146
第132図	溝SD113須恵器甕出土状況図	147
第133図	出土遺物実測図1	149
第134図	出土遺物実測図2	150
第135図	出土遺物実測図3	151

5. 棕ノ木遺跡第7次

第136図	周辺の遺跡	154
第137図	調査区位置図	155

第138図	周辺調査区遺構配置図-----	156
第139図	土層実測図-----	157
第140図	遺構平面図-----	158
第141図	掘立柱建物跡 S B 21・S B 43実測図-----	159
第142図	掘立柱建物跡 S B 4 実測図-----	160
第143図	土坑 S K 12・44・45実測図-----	161
第144図	出土遺物実測図-----	163

図 版 目 次

1. 三角古墳群第2次

図版第1	(1)三角2号墳全景(上が北)	(2)三角3号墳全景(上が北)
	(3)三角4号墳全景(東から)	
図版第2	(1)三角3号墳主体部検出状況(西から)	
	(2)1・4号経塚検出状況(東から)	
	(3)2号経塚検出状況(南西から)	
図版第3	(1)3号経塚検出状況(南西から)	(2)3号経塚北端部検出状況(南東から)
	(3)4号経塚和鏡出土状況(東から)	
図版第4	(1)三角4号墳石室検出状況(南から)	
	(2)三角4号墳羨道部の崩落した天井石(北から)	
	(3)三角4号墳玄門部の崩落した天井石(北から)	
図版第5	(1)三角4号墳墳丘全景(北から)	(2)三角4号墳石室全景(南から)
	(3)三角4号墳石室全景(北から)	
図版第6	(1)三角4号墳奥壁(南から)	
	(2)三角4号墳奥壁と左側壁の関係(南西から)	
	(3)三角4号墳左側壁の構築方法(西から)	
図版第7	(1)三角4号墳右側壁の構築状況(東から)	
	(2)三角4号墳左側壁の構築状況(西から)	
	(3)三角4号墳墳丘盛土の堆積状況(南から)	
図版第8	(1)三角4号墳石室堀形東半部(南から)	
	(2)三角4号墳墳丘北側の溝(東から)	
	(3)三角4号墳石室内遺物出土状況(南東から)	

- 図版第9 出土遺物(1)
- 図版第10 (1)出土遺物(2) (2)出土遺物(3)
2. 観音寺遺跡
- 図版第11 (1)調査区全景(南西から) (2)調査区全景(東から)
- 図版第12 (1)平成14年度調査地全景(東から)
(2)平成14年度調査A地区東半部全景(下が北)
- 図版第13 (1)A地区遠景(南から) (2)A地区全景(下が北)
- 図版第14 (1)B地区全景(下が北) (2)C地区全景(上が北)
- 図版第15 (1)A地区環濠S D03071(北西から) (2)A地区環濠S D03071(北西から)
(3)A地区環濠S D03071(北から)
- 図版第16 (1)A地区環濠S D03071(北から)
(2)A地区環濠S D03071南端断面(北から)
(3)同上拡大(北西から)
- 図版第17 (1)A地区土坑S K03089(弥生時代中期)(南東から)
(2)A地区土坑S K03090(弥生時代中期)(北から)
(3)A地区土坑S K03100(弥生時代中期)(南から)
- 図版第18 (1)A地区土坑S K03086(弥生時代後期)(東から)
(2)A地区土坑S K03098(弥生時代後期)(西から)
(3)A地区土坑S K03103(弥生時代後期)(東から)
- 図版第19 (1)A地区弥生時代土坑群(北から)
(2)A地区竪穴式住居跡S H02084(西から)
(3)A地区竪穴式住居跡S H03097(東から)
- 図版第20 (1)A地区竪穴式住居跡S H02150(東から)
(2)A地区竪穴式住居跡S H02086(南東から)
(3)B地区竪穴式住居跡S H03120(北から)
- 図版第21 (1)A地区土壙墓S T03005(西から)
(2)A地区土壙墓S T03005遺構内出土土器(南西から)
(3)A地区土坑S K03001(西から)
- 図版第22 (1)B地区方形周溝遺構1掘削作業風景(北から)
(2)B地区方形周溝遺構1溝内出土土器(遺物番号336)(北から)
(3)B地区方形周溝遺構1出土土器実測作業風景(北西から)
- 図版第23 (1)B地区方形周溝遺構1溝内出土土器(南から)
(2)B地区方形周溝遺構1溝内出土土器335・333・336ほか(北東から)
(3)B地区方形周溝遺構1溝内出土土器333・335(西から)
- 図版第24 (1)B地区方形周溝遺構1溝内出土土器340(東から)

- (2) B地区方形周溝遺構1 溝内出土土器338・342(南から)
 (3) B地区方形周溝遺構1 溝内出土土器342と炭化材(東から)
- 図版第25 (1) B地区方形周溝遺構1 南西隅(北西から)
 (2) B地区方形周溝遺構1 土器334出土状況(北西から)
 (3) B地区方形周溝遺構1 全景(北から)
- 図版第26 (1) B地区土坑S K03128(北西から) (2) B地区土坑S K03129(北から)
 (3) B地区土坑S K03109(南西から)
- 図版第27 (1) 土坑S K03003(東から) (2) 土坑S K03004(南東から)
 (3) 土坑S K03004断面(南から)
- 図版第28 (1) B地区田畑区画S X03137(西から)
 (2) C地区全景(南東から) (3) C地区溝完掘状況(東から)
- 図版第29 出土土器(1)
 図版第30 出土土器(2)
 図版第31 出土土器(3)
 図版第32 出土土器(4)
 図版第33 出土土器(5)
 図版第34 出土土器(6)
 図版第35 出土土器(7)
 図版第36 出土土器(8)
 図版第37 銅鐸形土製品
 図版第38 土製品

3. 諸畑遺跡第3次

- 図版第39 (1) 諸畑遺跡全景(南から) (2) A地区全景(北から)
- 図版第40 (1) B地区全景(北から) (2) C地区全景(南から)
- 図版第41 (1) 竪穴式住居跡S H01・02完掘状況(南から)
 (2) 土坑S K07煙道部炭化材検出状況(東から)
 (3) 竪穴式住居跡S H04遺物出土状況(北西から)
- 図版第42 (1) 竪穴式住居跡S H03炭化材検出状況(北東から)
 (2) 竪穴式住居跡S H03遺物出土状況(北東から)
 (3) 竪穴式住居跡S H03完掘状況(北東から)
- 図版第43 (1) 竪穴式住居跡S H03遺物出土状況(1)(西から)
 (2) 竪穴式住居跡S H03遺物出土状況(2)(北から)
 (3) 土坑S K14遺物出土状況(東から)
- 図版第44 (1) 不明遺構S X01完掘状況(南西から)
 (2) 土坑S K11遺物出土状況(南から)

- (3) 柱穴Pit06遺物出土状況(南から)
- 図版第45 (1) 竪穴式住居跡 S H05完掘状況(北から)
 (2) 竪穴式住居跡 S H06完掘状況(北西から)
 (3) 竪穴式住居跡 S H09完掘状況(北西から)
- 図版第46 (1) 竪穴式住居跡 S H07完掘状況(北から)
 (2) 竪穴式住居跡 S H08遺物出土状況(東から)
 (3) 竪穴式住居跡 S H08完掘状況(東から)
- 図版第47 出土遺物(1)
- 図版第48 出土遺物(2)

4. 長岡京跡右京第829次(7ANNM-5地区)・友岡遺跡

- 図版第49 (1) A地区調査前(北から) (2) B・C地区調査前(北東から)
 (3) A地区調査風景(南から)
- 図版第50 (1) A地区検出遺構全景(北から) (2) A地区検出遺構全景(南から)
 (3) A地区掘立柱建物跡 S B 14・19(北から)
- 図版第51 (1) A地区掘立柱建物跡 S B 14・19(西から)
 (2) A地区土坑 S K 56集石検出状況(西から)
 (3) 土坑 S K 56完掘状況(西から)
- 図版第52 (1) A地区溝 S D 2(東から)
 (2) A地区掘立柱建物跡 S B 14柱穴 P 44(東から)
 (3) B地区検出遺構全景(西から)
- 図版第53 (1) B地区柵 S A 89(東から) (2) B地区井戸 S E 111(南から)
 (3) B地区井戸 S E 111(北から)
- 図版第54 (1) B地区溝 S D 90(北から) (2) C-2・3地区検出遺構全景(北から)
 (3) C-3地区検出遺構全景(北から)
- 図版第55 (1) C-3地区掘立柱建物跡 S B 320・溝 S D 317(南から)
 (2) 溝 S D 317(南から) (3) 溝 S D 317(北から)
- 図版第56 (1) C-3地区掘立柱建物跡 S D 320(東から)
 (2) C-2地区柵 S A 340(南東から)
 (3) C-2地区谷部(北から)
- 図版第57 (1) C-1地区溝群全景(1)(西から) (2) C-1地区溝群全景(2)(西から)
 (3) C-1地区溝 S D 113(東から)
- 図版第58 (1) C-1地区溝 S D 113須恵器甕出土状況(北から)
 (2) C-1地区溝 S D 113須恵器甕出土状況(東から)
 (3) C-1地区検出遺構全景(西から)
- 図版第59 (1) C-3地区柱穴 P 327土師器皿出土状況(東から)

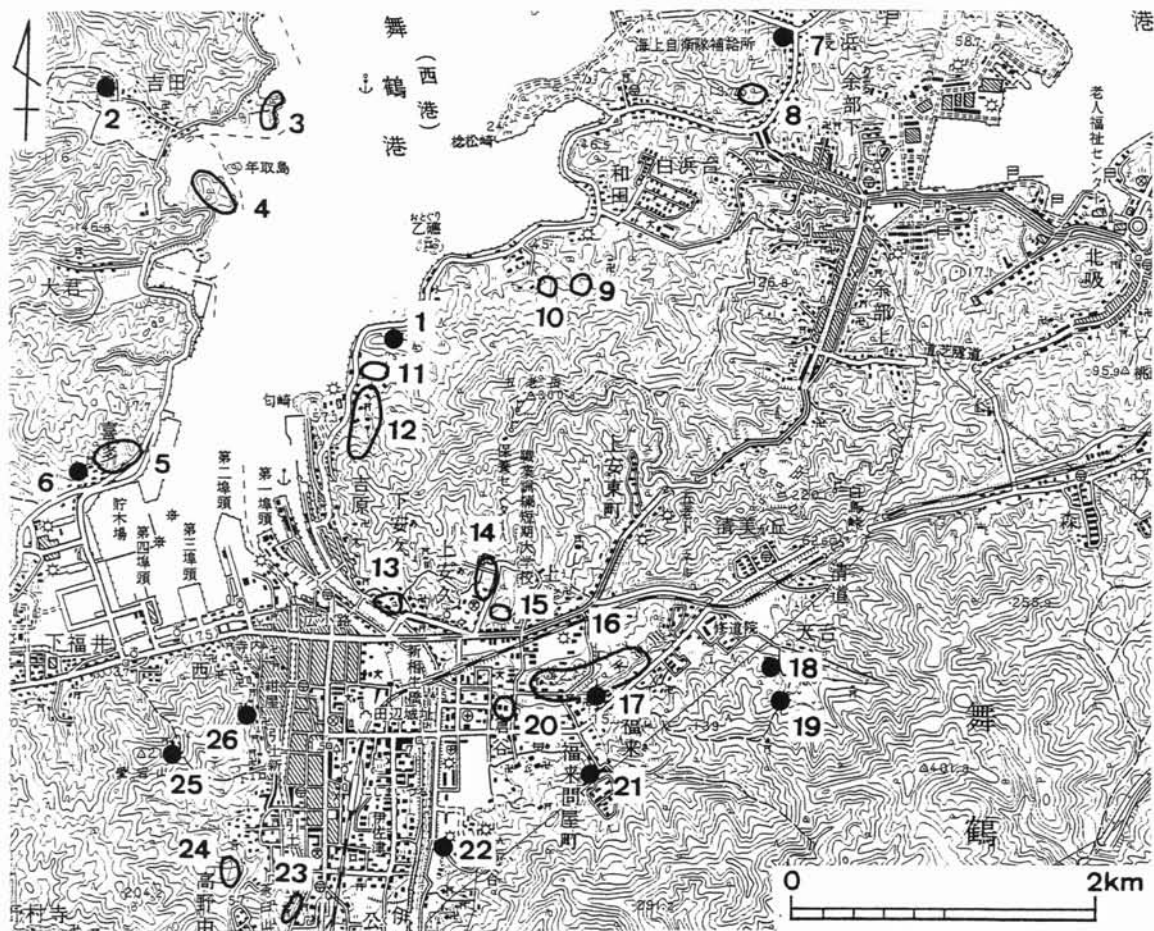
- (2) C-1 地区溝 S D 1 畦断面(東から)
 (3) C-1 地区溝 S D 113 畦断面(東から)
- 図版第60 (1) C-2・3 地区全景(北東から) (2) C-2・3 地区全景(西から)
 (3) C-2・3 地区全景(左が北)
- 図版第61 出土遺物(1)
- 図版第62 出土遺物(2)
5. 棕ノ木遺跡第7次
- 図版第63 (1) 調査地遠景(南東から) (2) 調査前全景(南西から)
 (3) 南壁土層断面
- 図版第64 (1) 坪境溝周辺南壁土層断面 (2) 調査区全景(南から)
 (3) 南東区近景(西から)
- 図版第65 (1) 南東区柱穴群検出状況(南から) (2) 掘立柱建物跡 S B 21(南から)
 (3) 柱穴 S P 9 断面(南から)
- 図版第66 (1) 土坑 S K 44 検出状況(西から) (2) 土坑 S K 12 全景(南から)
 (3) 溝 S D 1・2 北部検出状況(南から)
- 図版第67 (1) 上層遺構面調査区作業風景(北西から)
 (2) 下層遺構面調査区全景(南から) (3) 土坑 S K 45(南から)
- 図版第68 出土遺物

1. ^{みすみ}三角古墳群第2次発掘調査概要

1. はじめに

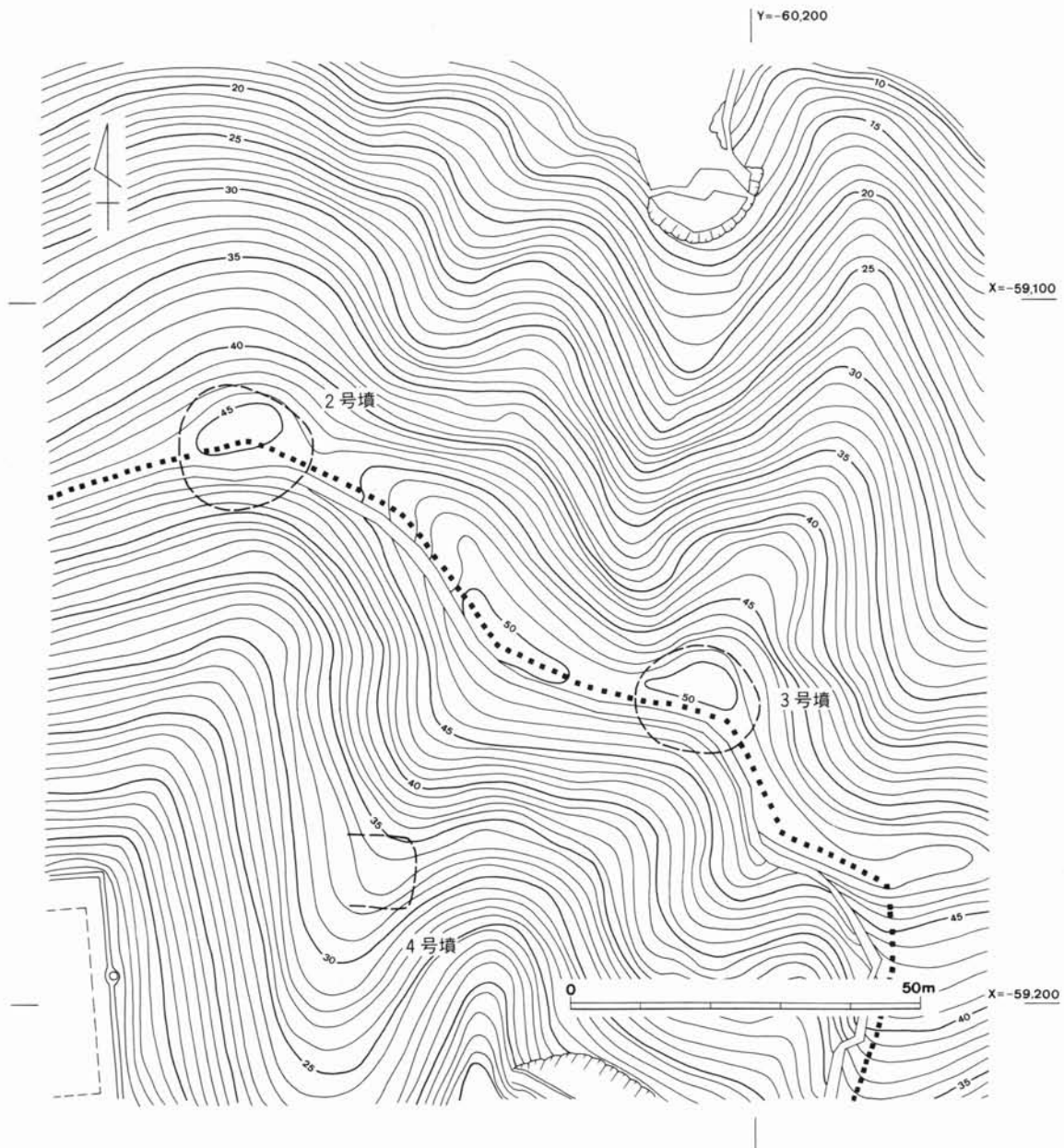
今回の調査は、京都府土木建築部の依頼により、臨港道路建設に先立つ調査として実施した。三角古墳群は、舞鶴西港を望む丘陵上に位置しており、平成15年度の試掘調査により、古墳3基（木棺直葬墳2基、横穴式石室墳1基）と経塚3基が存在したことが明かとなり、平成16年度に本調査を実施した。所在地は、舞鶴市下安久である。

現地調査は、平成16年5月14日～8月25日までである。調査面積は約600m²である。現地調査は、当調査研究センター調査第2課課長補佐兼調査第2係長奥村清一郎、次席総括調査員伊野近富、主任調査員田代弘が担当した。



第1図 調査地および周辺遺跡分布図(国土地理院1/50,000舞鶴)

- | | | | | | |
|-------------|-------------|------------|------------|-------------|-----------|
| 1. 三角古墳群 | 2. 浄土寺跡 | 3. 伊崎古墳群 | 4. 吉田古墳群 | 5. 喜多古墳群 | 6. 喜多家奥古墳 |
| 7. 高倉神社境内遺跡 | 8. 長浜古墳群 | 9. 長江寺跡 | 10. 和田古墳群 | 11. 二尾遺跡 | |
| 12. 匂ヶ崎古墳群 | 13. 上安久古墳群 | 14. 上安久遺跡 | 15. 高迫山古墳群 | 16. 福来古墳群 | |
| 17. 福来大光寺 | 18. 天台南谷古墳群 | 19. 天台南谷遺跡 | 20. 倉谷遺跡 | 21. 倉谷丸山古墳群 | |
| 22. 切山古墳 | 23. 茶臼山古墳群 | 24. 天狗岩古墳群 | 25. 愛宕山経塚 | 26. 桂林寺遺跡 | |



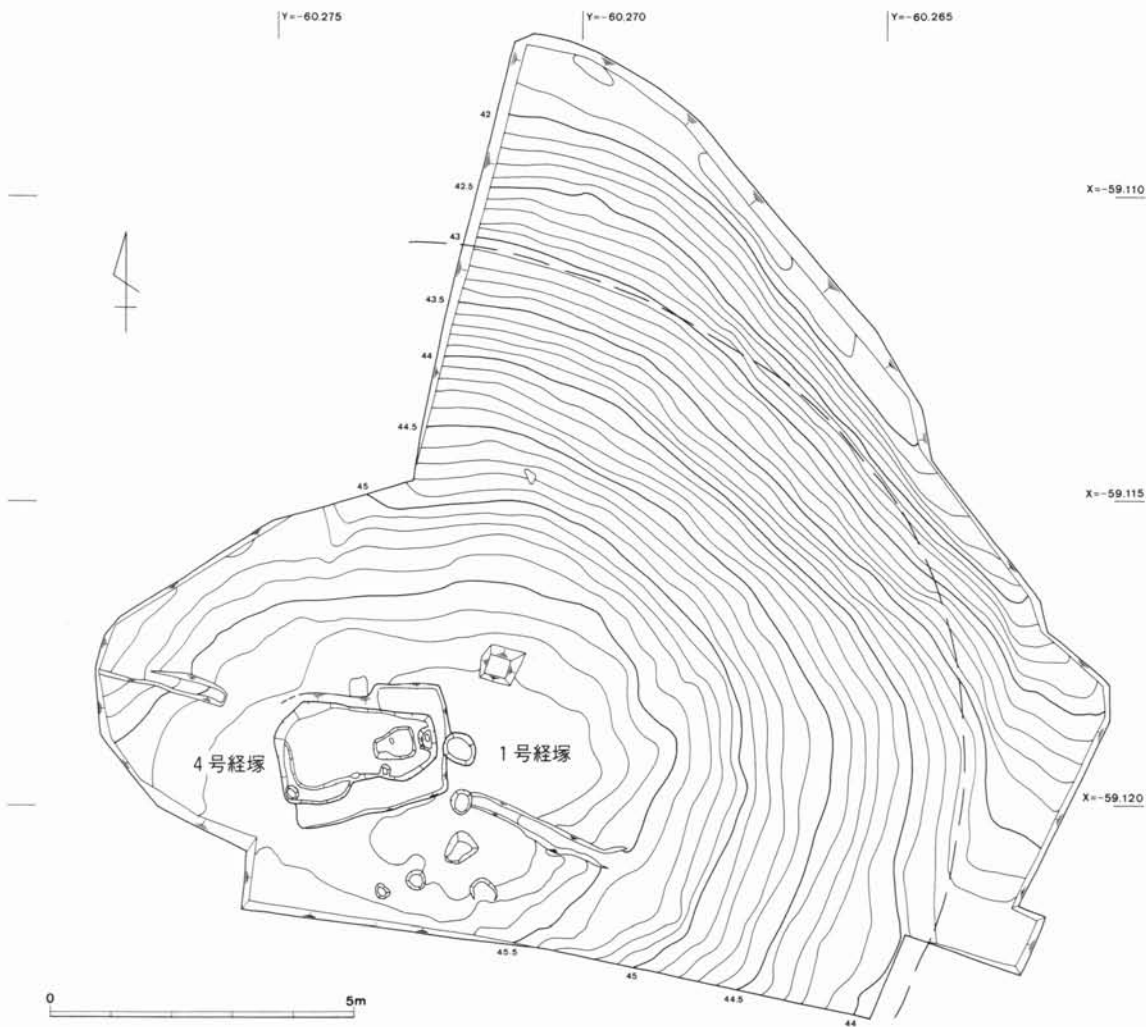
第2図 三角古墳群位置図

調査期間中は、京都府教育委員会・京都府港湾事務所・舞鶴市教育委員会・京都府立丹後郷土資料館・地元町内会などの関係諸機関の指導・助言・協力をいただいた。また、地元の方々には、作業員・調査補助員・整理員として従事していただいた。ここに、記して感謝の意を表したい。

なお、今回の調査に係る経費は、全額、京都府土木建築部が負担した。

2. 位置と環境

舞鶴市は京都北部に位置している。地勢の違いによって4つに分割でき、今回の調査地は伊佐津川が形成した、いわゆる西舞鶴の地にある。調査地は、西舞鶴から海岸線を通って中舞鶴あるいは東舞鶴へ行く途中にある。遺跡は少なく、南方の谷には土師器や黒色土器が散布する平安時代の二尾遺跡や、さらに南方の丘陵上にある匂ヶ崎古墳群(後期：8基)があるに過ぎない。なお、



第3図 三角2号墳調査後墳丘測量図

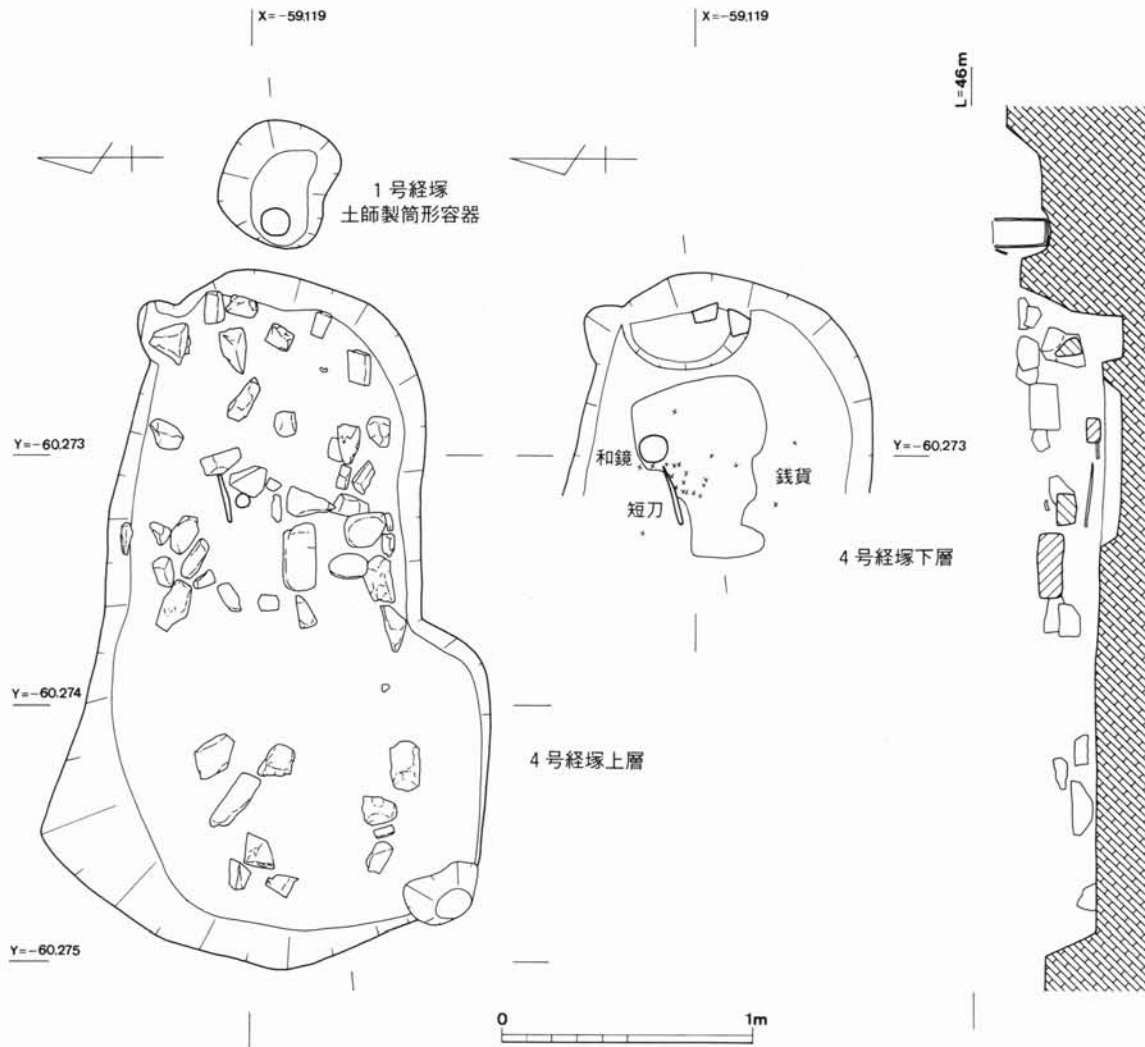
匂ヶ崎では、大正時代に銅鐸の出土が報告されているものの、ここで出土したものではないようである。古墳群は、舞鶴西港を挟んで西側に伊崎古墳群(後期：4基)、吉田古墳群(後期：7基)などが散見できるのみである。

経塚については、調査地から南東約3.5kmに天台南谷経塚がある。平安時代末期の経塚が14基確認された。経塚などの構造は攪乱が激しく不明な点が多いが、4タイプに分けている。出土遺物には和鏡、短刀、白磁椀がある。

3. 調査概要

調査前の状況としては森林に覆われていた。尾根に沿って石柱が建てられていたが、これは、旧陸軍と民地との境界を示すものであった。

今回3基の古墳(2・3・4号墳)の調査を実施した。2号墳と3号墳は海が見える標高50m前後の丘陵稜線上にあり、4号墳は標高30mの丘陵腹部にある。ここからは北側にある丘陵稜線により、北方の海は望めない。経塚は、今年度の調査で新たに1基確認され、合計4基となった。



第4図 1・4号経塚実測図

2号墳墳頂に1・4号経塚、3号墳墳頂に2・3号経塚がある。丘陵は花崗岩のバイラン土で形成されており、黄色をベースに赤色・白色の砂礫や粘土が縞状にあった。そこに、暗褐色の遺構が確認された。

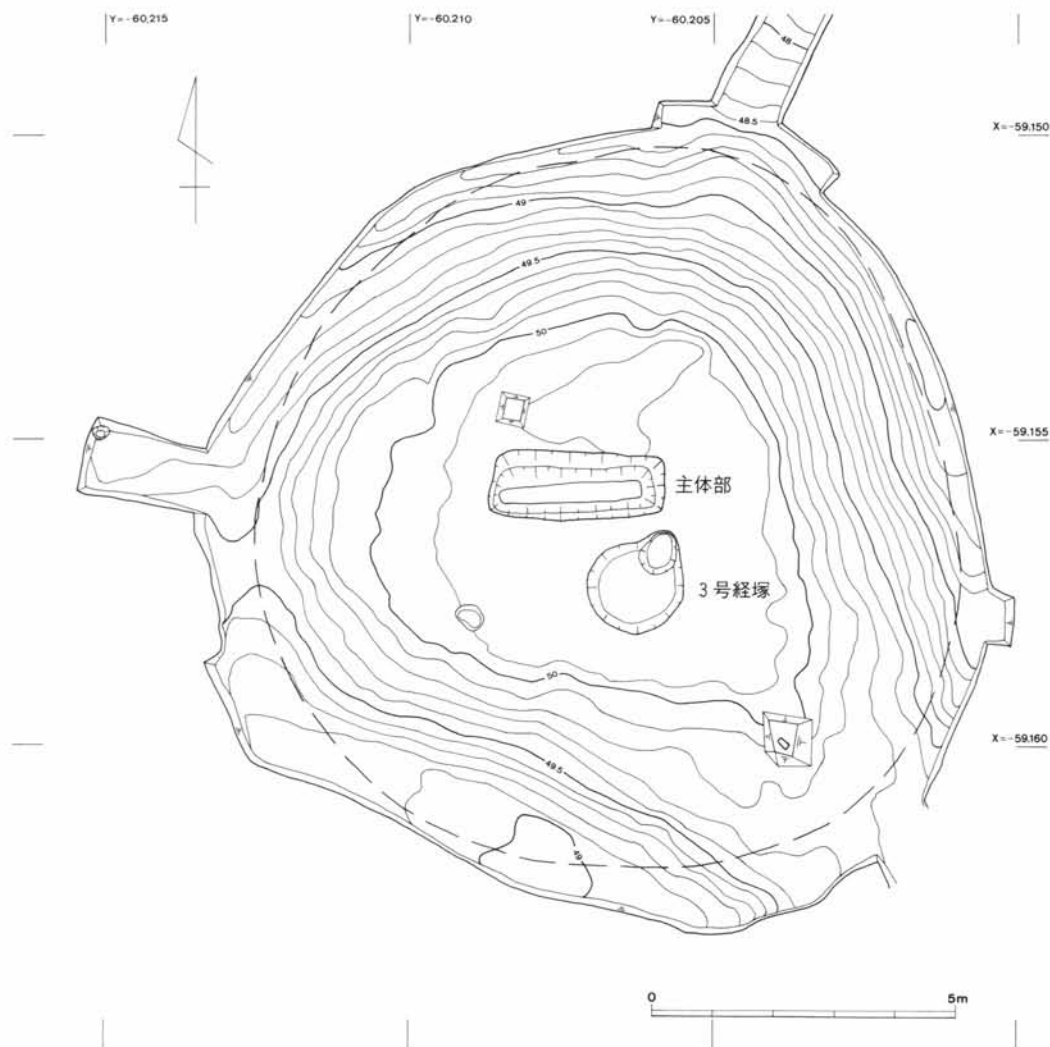
(1)三角2号墳

1) 墳丘

墳形 調査区の西端にある直径19mの円墳である。高さは北側で2.7m、南側で1.7mである。中央部である尾根上には高さ1.4mの石柱があり、南部には山道が作られており、これによって墳丘は改変されている。北西部と南部は、調査地外であった。したがって、墳丘端は北東部のみ弧状で確認できたものの、丘陵の斜面が急激になるため、墳端は不明瞭である。かろうじて、東端では等高線がゆるやかになる地点が確認されたため、墳形を円墳と復原した。

墳丘造成 墳丘は地山を整形して円形としており、墳頂部に若干の盛土をしていたようである。

埋葬施設 木棺直葬墳で、墳頂部に東西方向の主体部があったようだが、経塚により削平されていた。



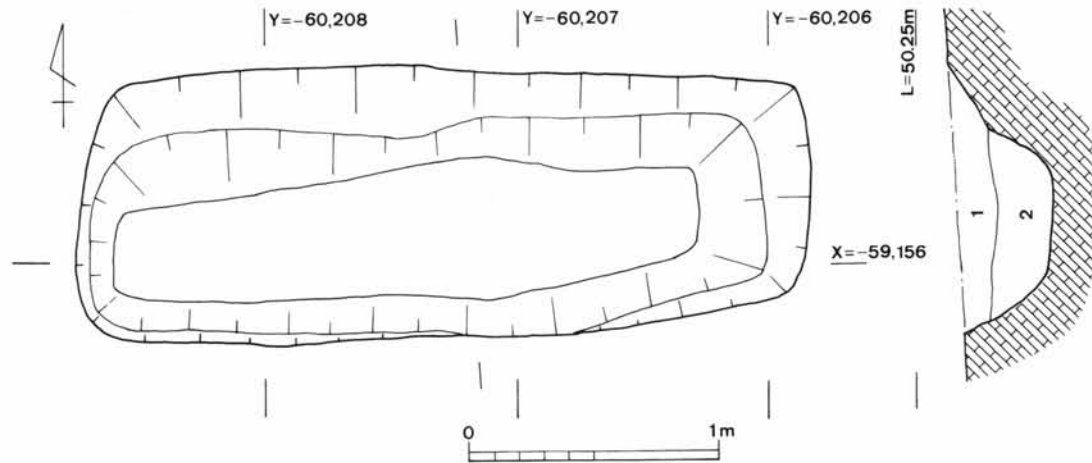
第5図 三角3号墳調査後墳丘測量図

2) 1号経塚

墳頂の東部にある。東西にやや長い楕円形の土坑(0.50~0.45m)の西寄りに直径10cm、器高25cmの土師製筒形容器が据えられていた。かつては、土坑の上部には集石があったようであるが、検出段階ではまわりに石が散見されるのみであった。容器には土師器の蓋が被せられていたようだが、蓋の外縁は容器上端から数cm下に落ち込んでいた。また、中央の破片は容器内部に落ち込んでおり、銭貨2枚も埋納されていた。容器の中には土坑の埋土と同じ暗褐色土で充填されていた。経などの有機物は確認できなかった。

3) 4号経塚

1号経塚の西側で新しく確認された経塚である。東西に長い隅丸の方形土坑(2.75×1.25m、深さ0.2~0.4m)の中に拳大の石を配していた。土坑の東寄りは50cm程度の方形に2~3cm掘り窪められており、埋土は暗茶褐色土であった。この箇所には和鏡1面、鉄製短刀1本、および銭貨30数枚が出土した。刀はほぼ水平に置かれており、切っ先は東に向いていた。その先に和鏡が鏡面を上にしてほぼ水平に置かれていた。これらの、周辺および少し上に銭貨が撒れたようであった。ほとんどは、脆くなっており、原形をとどめていなかった。



第6図 三角3号墳主体部実測図

(2)三角3号墳

1) 墳丘

墳形 調査区の東部にある直径15mの円墳である。現存の高さは北側で1.6m、南側で1.1mである。2号墳と同じように中央部および南側は石柱と山道により墳丘は改変されていた。表土を除去すると花崗岩の風化土が露出し、その中央部で主体部を検出した。埋土は暗褐色土である。中央部はさらに黒ずんでおり、この部分が木棺の痕跡と考えられる。

墳丘造成 墳丘は地山を整形して円形としているが、瘦尾根のため部分的に盛土していたようである。しかし、流失のためか盛土の痕跡はほとんど認められなかった。

埋葬施設 木棺直葬墳で、主体部は東西方向の長方形土坑である。掘形は一辺3.2×1.2m、深さ0.4mの規模をもち、木棺痕跡は、幅0.85m、長さ2.7m、深さは0.4mである。鉄斧1点が掘形南肩で出土した。

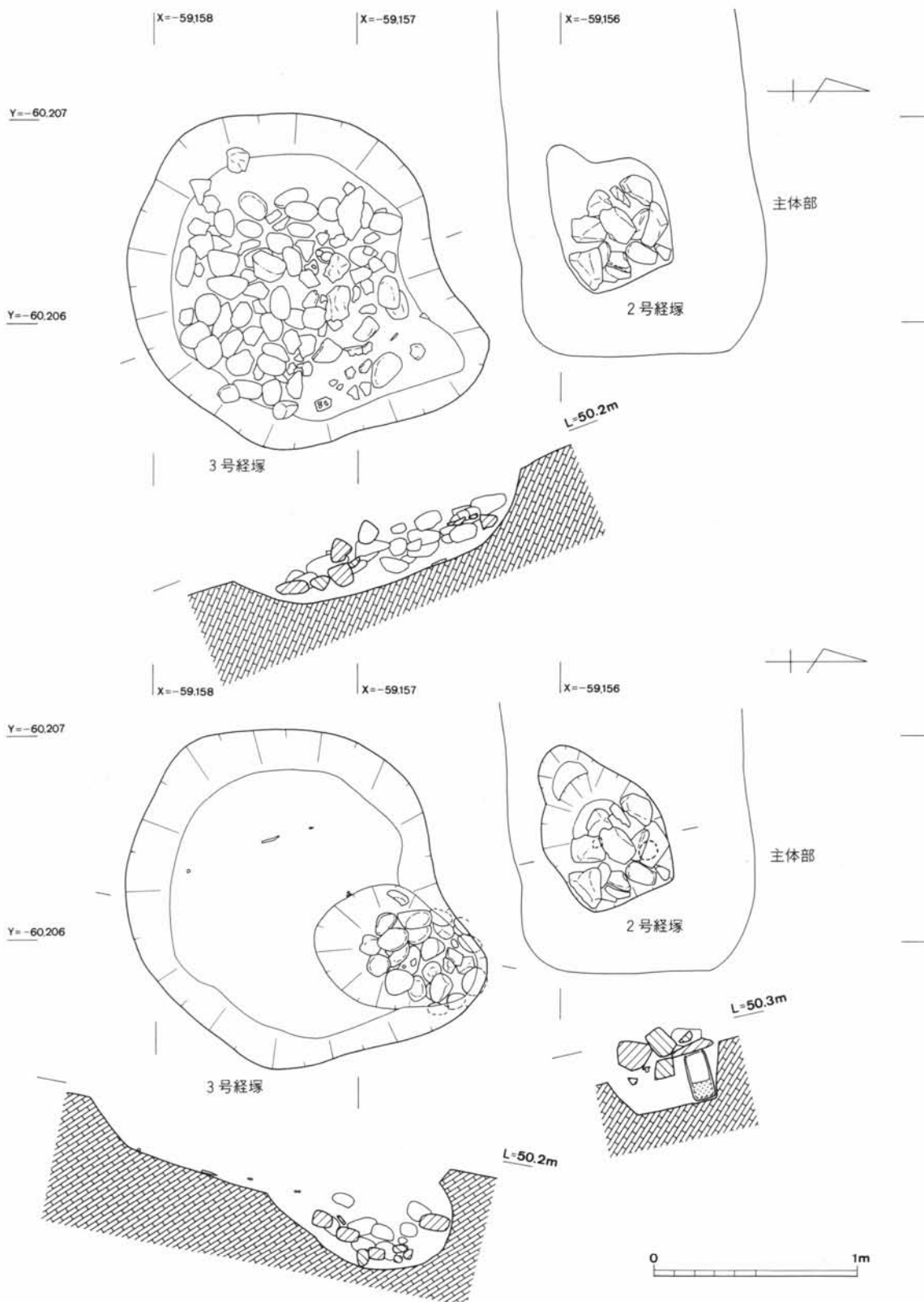
2) 2号経塚

主体部の直上で出土した、南北に長い楕円形土坑の北寄りに土師質筒形容器を据え、20cm大の扁平な石で蓋をした構造の経塚である。土師製の蓋があったが、これは土坑の中に散乱しており、土師質筒形容器の蓋として使用した状況ではない。石の蓋によって円筒の中は上半分が空洞であった。この円筒の上部には10石ほどの石を配していた。

3) 3号経塚

墳頂部のやや南寄りで確認したもので、楕円形土坑(1.50×1.85m)の中に多数の石を配していた。更に、北端の土坑の壁の地山を横方向に穴を掘り(奥行き85cm、幅60cm)、土坑全体には10～20cm大の石を充填していた。土坑の中には鉄釘が2本あり、先端は向き合っており、木箱に打ち付けられた状況を示していたので、木製の箱があったと考えられる。埋土は暗褐色である。ほかに瓦器鍋片、銭貨5枚以上が出土した。なお、前年度調査でこの地点から水晶製数珠玉1点が出土した。

(伊野近富)



第7図 2・3号経塚実測図(上段：上層、下段：下層)

(3)三角4号墳

4号墳は、南北にのびる狭く急峻な尾根上に立地しているため、余裕をもって墳丘を形成するための十分なスペースがない。このため、尾根の切断と削平を行って兆域と盛土を確保する方法が採られており、結果、自然地形に対する大規模な改変が行われた(第8図)。

1) 墳丘

墳形 墳丘北側斜面の溝が直線的に掘削され、これにあわせて墳丘北側斜面が成形されていること。墳丘南側の盛土が石室主軸に対して直行する斜面を形成すること。東西の墳丘基底が、尾根に平行して直線的であること。以上の三点から、三角4号墳は、方形墳と考えられる。規模は、東西長約11m、南北長約11mと推測する(第10図)。高さについては不明である。

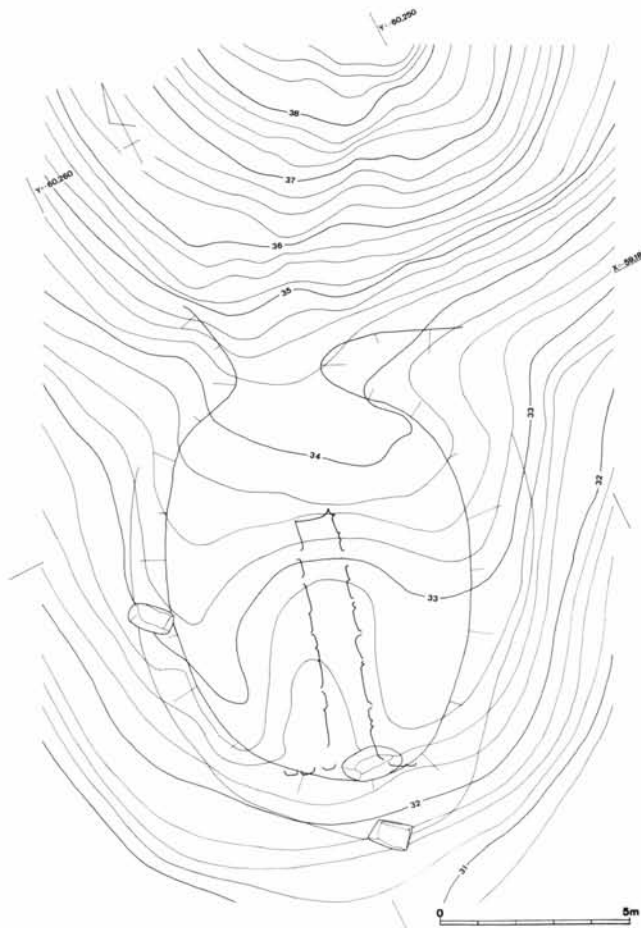
墳丘造成 緩傾斜地が急傾斜地へと変化する付近に、幅約2.5~3.0m、深さ約0.5~1.0mの溝を、尾根に直交させて掘削し、墳丘北側斜面を構築している(図版第8-(2))。溝の北側は急傾斜地であるが、この斜面部に対しても削平が行われていた。高さ約6m、幅約8mにわたって斜面が削り取られた痕跡を確認した。この削平は、溝との切り合い関係をもたないことから、溝の掘削と同時に行われたと考えられる。

墳丘南側については地形的制約があり、盛土を確保できない事情がある。溝と斜面掘削によって得られた排土を、不足する南側の盛土として利用したと考えられる。盛土は石室構築後に行わ

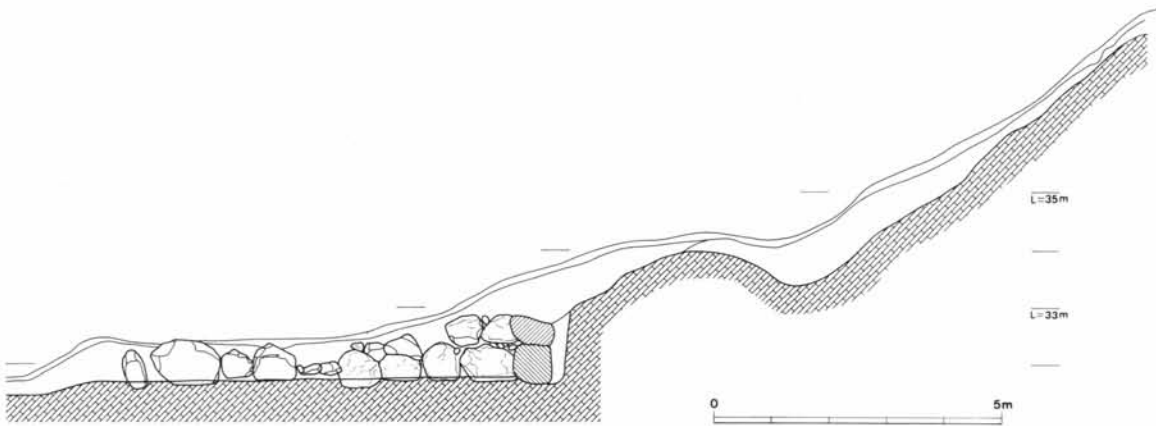
れたものであるから、溝と斜面の削平、つまり、墳丘北側の成形は、石室構築後、最終段階で行われたものと考えられることができる。

2) 石室

石室掘形 石室は、尾根主軸と主軸を同じくして構築されていた。したがって、石室床面の平坦面と石室構築空間を確保するために、大がかりな地形改変が行われた(第9図)。石室を構築するのに先立ち、掘形が掘られた。この掘形は、盛土が行われる前に掘られたものである。掘形の平面形は、長さ約8m、幅約4.5mの「コ」字形である。羨道側がややすぼまっている(第12図1)。奥壁側は高さ約1.5mの掘削が行われるが、羨道側では0.3m前後と少ない。奥壁側である北側と羨道部側である南側では掘削土量に大きな差があるが、これは旧地形の形状に



第8図 三角4号墳調査前墳丘測量図



第9図 三角4号墳断面図

よるものである。

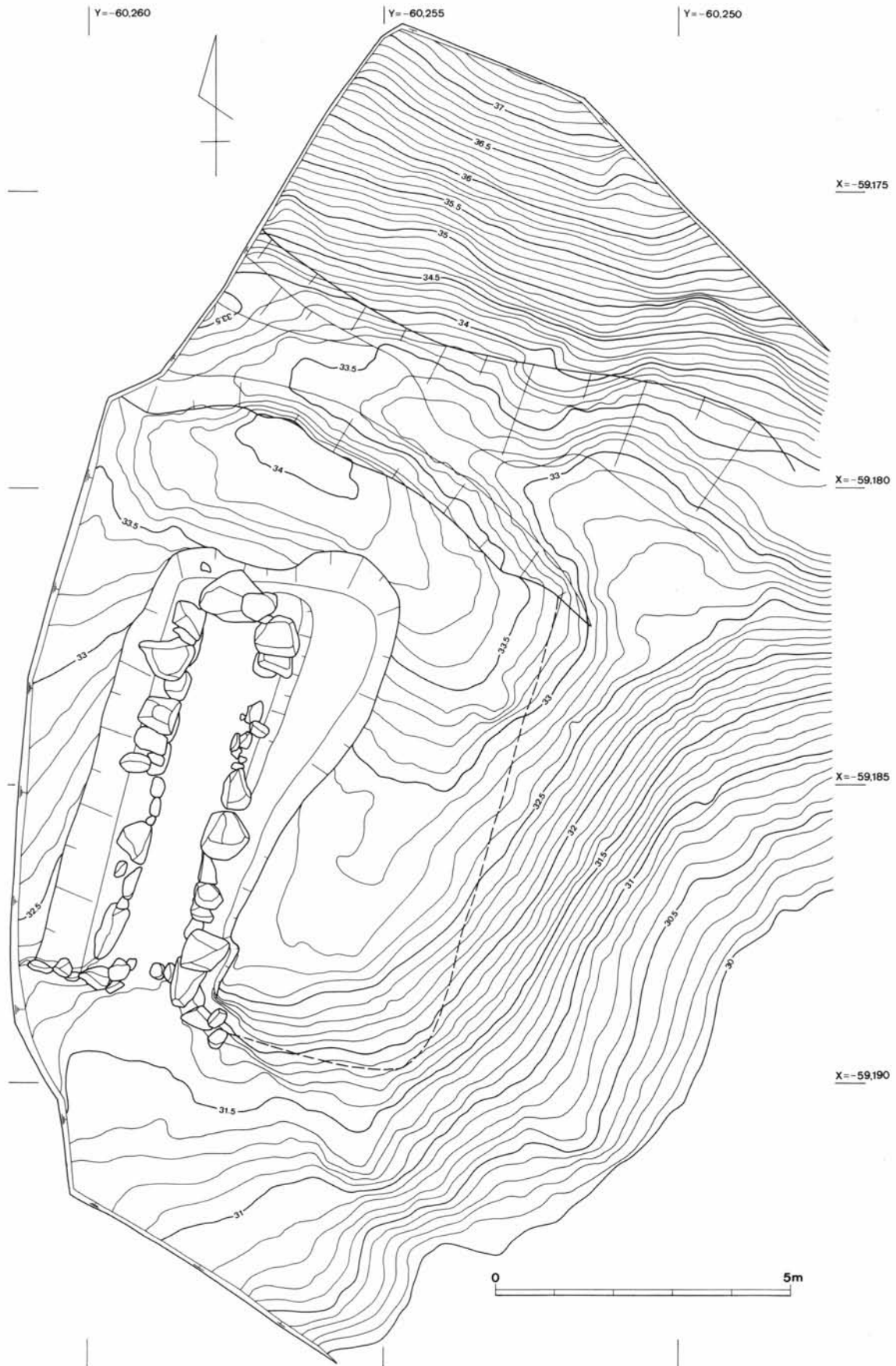
石室構築 石室は、掘形の中に配置されているが、中心ではなく、西側に偏っている。東側に大きなスペースを残しているのである(第12図2、図版第8-(1))。スペースは、作業空間として理解できるが、羨道部側が狭いことを思うと、作業過程で、平面プランの設計変更が生じた可能性も考えられる。いずれにしても、石室掘形と石室平面プランの形状が合致しない点を指摘しておきたい。

石室平面プラン 平面プラン上、玄室と羨道は明確に区別されていないが、側壁石材の配置の差異から、羨道部と玄室の境を認識することができる。左側壁には、奥壁から約3.2mの地点に縦長の巨石が据えられている(図版第7-(2))。この巨石を境にして羨門までの側壁基底石材の置かれ方に違いがみられるからである。奥壁側では掘形が全般に深く、しっかりと据えられているのに対して、羨門側では掘形が浅い。基底部のあり方の違いは、天井部の架構方法の差異を示すものであろうから、基底部が変化する場所で石室内の役割が異なると推測されるのである。立石は10cmほど内側に突出しており、袖石として意識されていた可能性が高い。掘形の形状と考え合わせてみると、当該石室は、奥壁側から見て左片袖の石室として構築された可能性が高い。

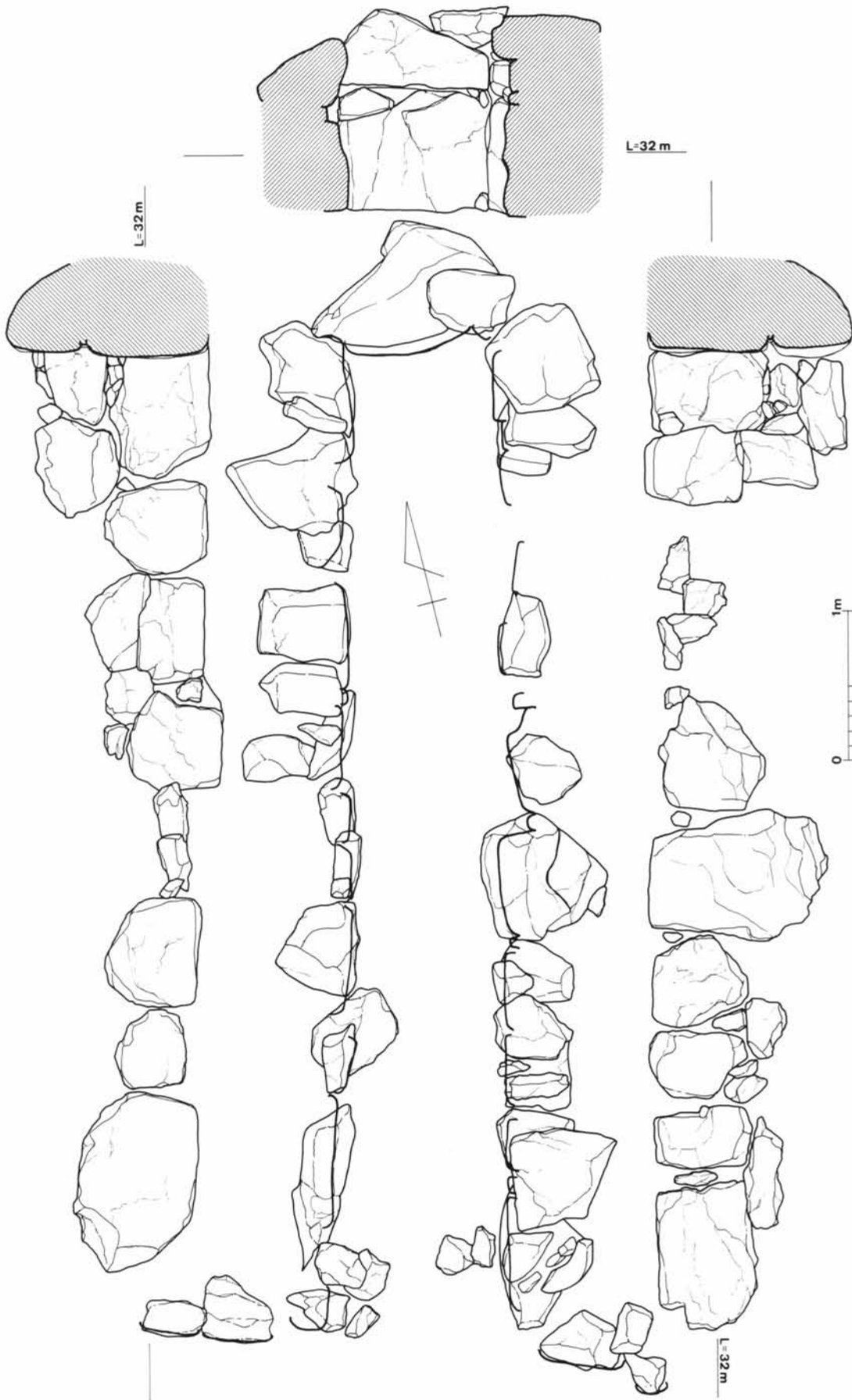
天井石 天井石は破壊されて旧状をとどめない。石室周辺に散在する天井石と見られる巨石の様子から、ある程度、旧状を知ることができる(第12図1、図版第4-(1)~(3))。巨石は、5個認められた。石室内に落ち込んでいたもの3個、墳丘裾部に転落していたもの2個である。いずれも一面に平坦面が認められる自然石である。平坦面を石室側壁上に架け、天井石として用いたと考えられる。石室中央に転落していた巨石一つの法量を記しておく。長さ約1.6m、幅約1.3m、厚さ約1m以上を測る。

奥壁 奥壁は2個の巨石を据え、補助的に大小の石を用いて造られた(図版第4-(1))。下段の石材は横幅約1m、高さ約0.9mである。上段の石材は、横幅約1m、高さ約0.5mである。奥壁の右上に厚さ約0.3mの平坦な石材が置かれている。天井石架構のための石材であろうか。

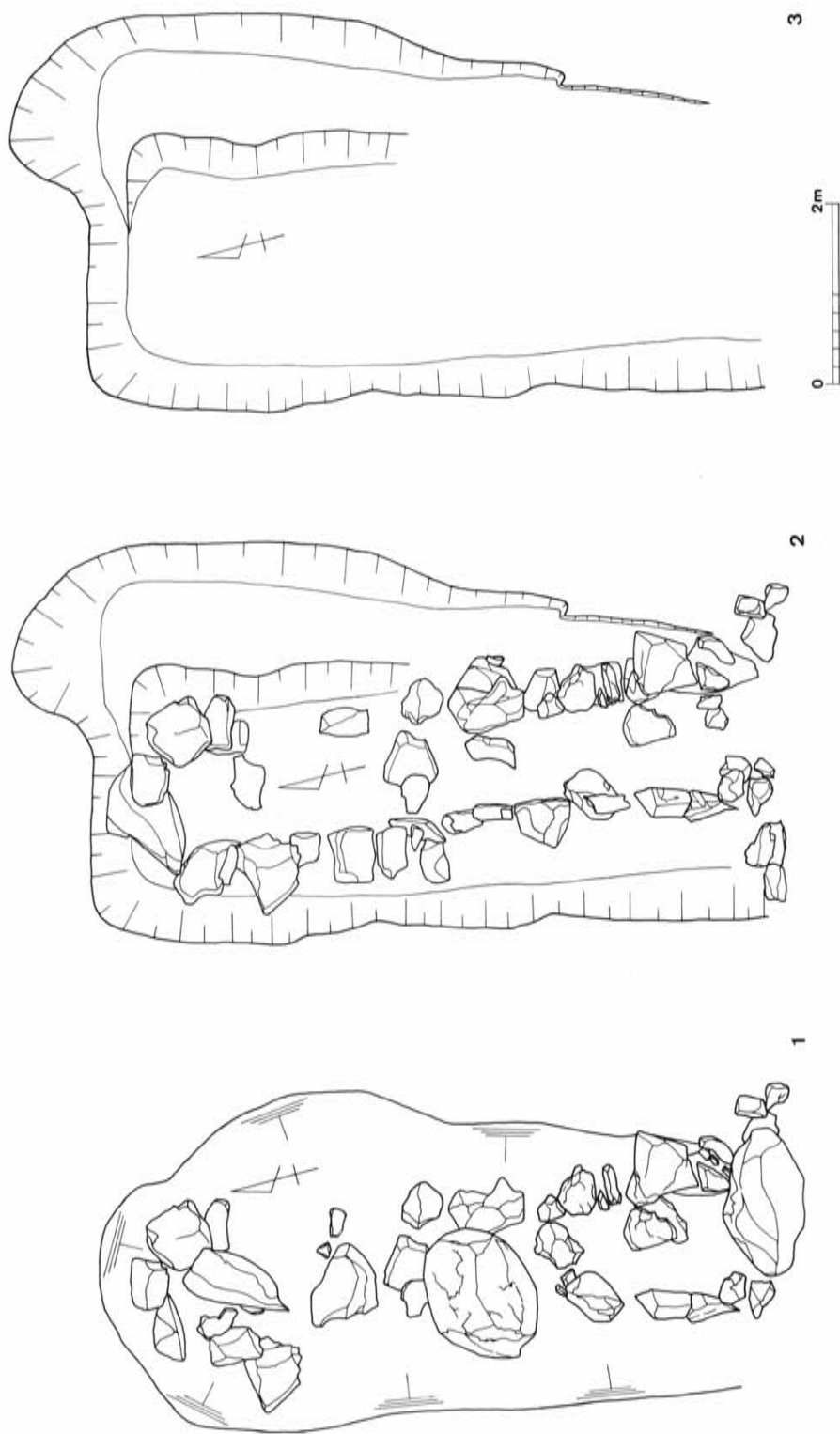
玄室 上記の理由から、奥壁から左側壁の立石まで約3.2mを玄室と考える。幅は約1.0~1.1mである。



第10図 三角4号墳調査後墳丘測量図



第11図 三角4号墳石室実測図



第12図 三角4号墳石室検出状況図

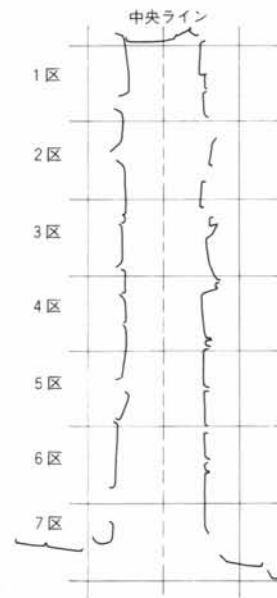
1：天井石崩落状況（調査前）

2：掘形と石室検出状況

3：石室掘形検出状況

羨道 玄室と推定した場所から、羨門までを羨道と考える。羨道は長さ約3.6m、幅は約1.0～1.1mである。羨門から約0.5mのところ
 で石列を検出した(図版第5-(2))。羨道閉塞として配置された石材の一部が遺存したものであろう。石材の大きさはおよそ人頭大である。

羨門部列石 当古墳では開口部に面して列石を配置し、羨門部を構成している。この列石は、右側壁側で3石分、左側壁側で2石分を確認した。幅0.5～0.6m、高さ0.5～0.6m、奥行き0.5～0.6mの自然石を並べて造られている(図版第5-(2))。現状では一段のみを検出したが、複数段存在したと考えられる。



第13図 石室床面の割付図

4. 出土遺物

1) 古墳時代の遺物

今回の調査で出土したのはそれほど多くない。2号墳に伴う古墳時代の遺物は皆無である。経塚に伴うものは若干ある。

4号墳床面付近から出土した遺物には、須恵器、玉類、鉄器類などがある。大半が細片であり、遺存状況は良くない。盗掘などによる遺物散逸に加え、天井からの攪乱が床面付近にまで及んだことが原因と考えられる。以下、出土遺物の概要を記す。詳細は付表1～3を参照されたい。

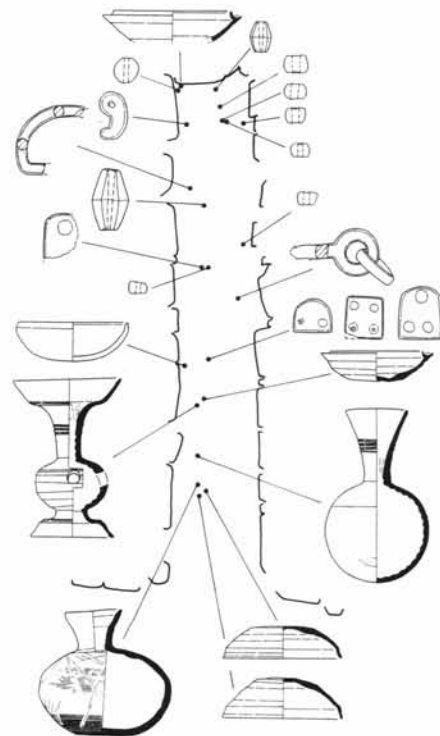
なお、遺物は第13図の割付に基づいて、出土地点を記録しながら取り上げた。第14図は主な遺物の出土地点を示したものである。

土器類(第15図1～22) 土器類には、須恵器と土師器がある。土器類は、1～5区では細片が出土したのみであり、出土量は極めて少ない。5・6区で検出したものが多く完存するものも見られた(図版第8-(3))。

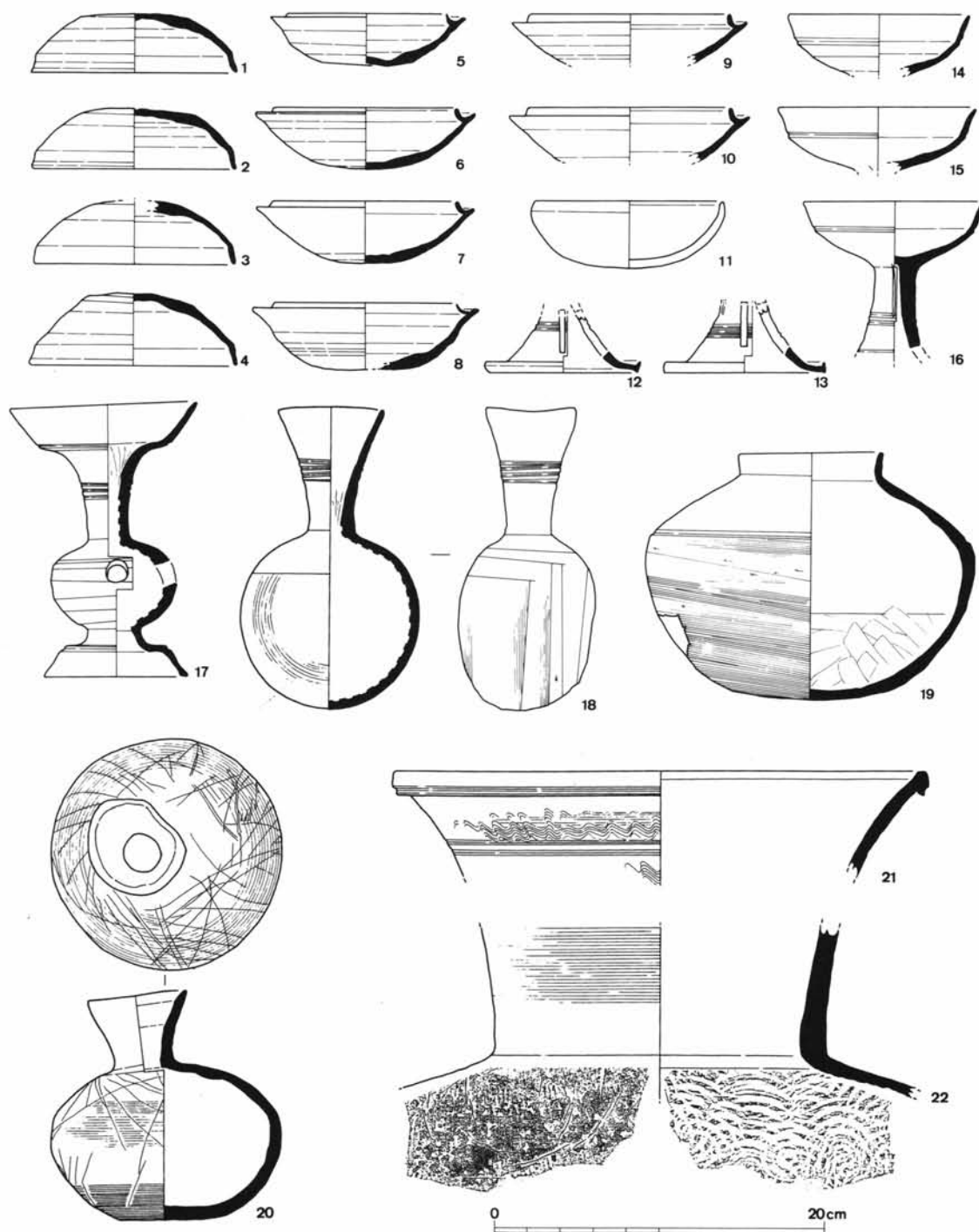
1～10は、須恵器杯身である。11は、土師器杯である。12～16は、須恵器高杯である。12・13は脚部の一部が、14～16は杯部が遺存したものである。17は須恵器台付臬、18は須恵器瓶、19は短く立ち上がる口縁部をもつ須恵器直口壺、20は須恵器提瓶、21は須恵器甕である。20の体部外面には、多数の斜線文が線刻されている。

玉類(第16図1～18) 玉類は、1区を中心として6区にかけて分布していた。ガラス製玉類を主体とする垂飾が攪乱をうけて移動し、広範囲に分布することになったのであろう。

1～9は、ガラス製小玉である。全て風化して膨張し



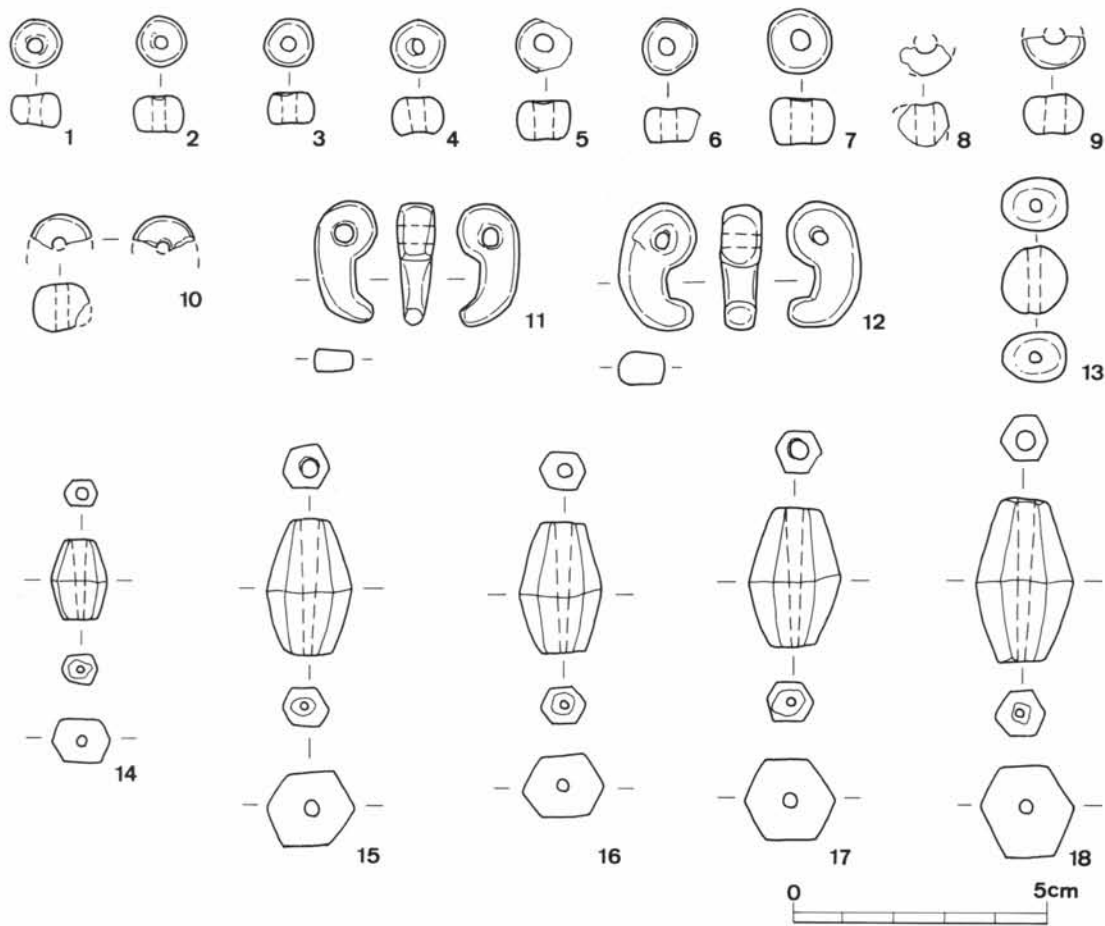
第14図 三角4号墳石室出土主要遺物



第15図 三角4号墳石室出土土器類実測図

ており、脆弱である。10～12は、ガラス製勾玉である。10は、勾玉頭部の一部が遺存したものである。11は、風化により器表面全体が剥落している。12は、一部風化するものの良好な状態である。緑色のガラス製勾玉である。13は、碧玉製である。対称性を欠く縦長の玉である。研磨が不十分で光沢がない。粗製品である。14～18は、水晶製切子玉である。上面側からの片面穿孔により紐孔があげられている。

鉄器類(第17図1～16) 4号墳出土で検出した鉄器類は(1～15)、馬具を構成する金具とみられ



第16図 三角4号墳石室出土玉類実測図

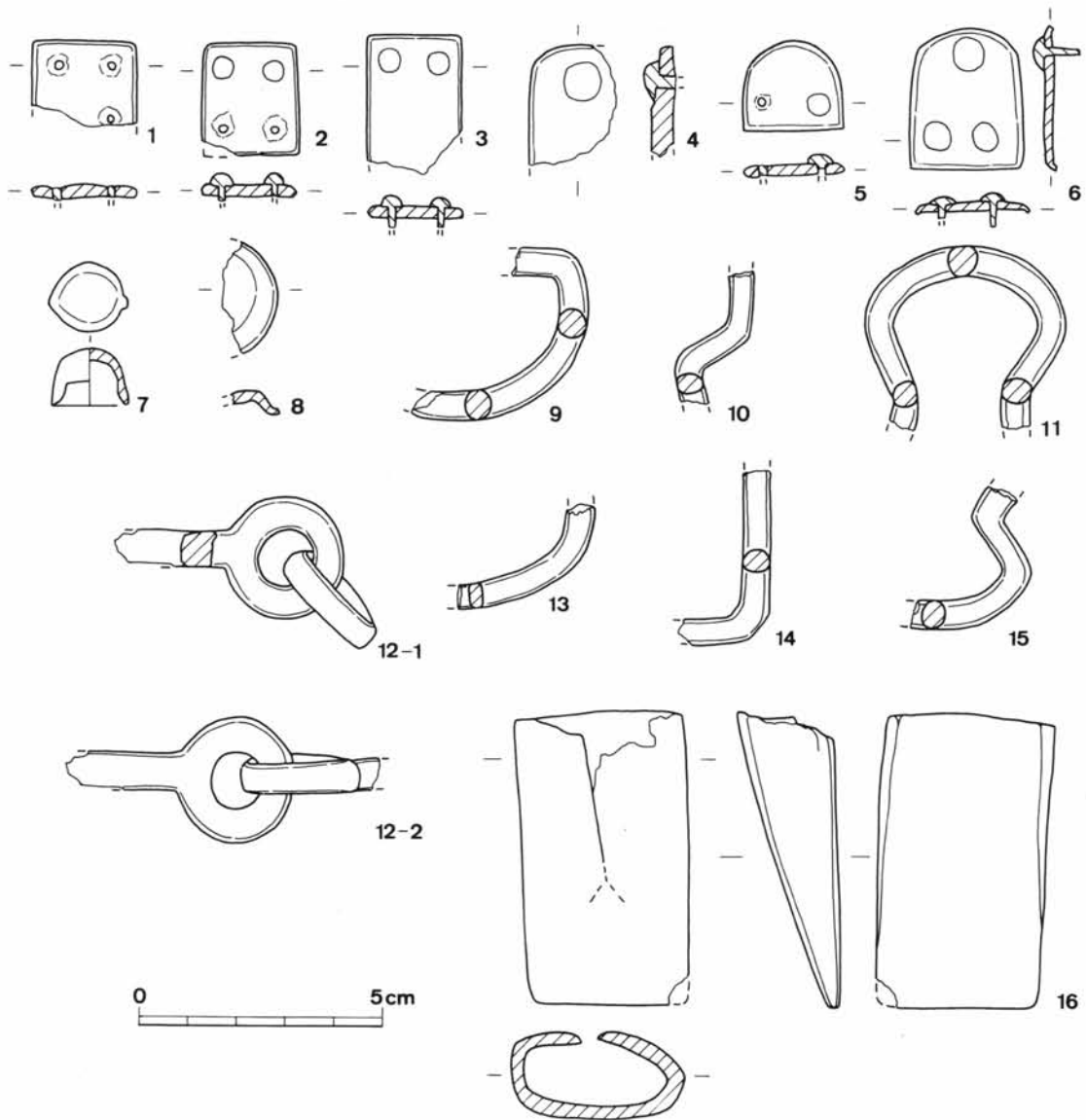
るものに限られる。鉄族などの武器類は認められなかった。

1～3は方形の金具である。1・2は正方形に近く、4本の鉤がある。3は長方形で、上端付近に2本の鉤がある。4～6は一方が半円形をした金具である。5は2本、6は3本の鉤がある。7は、2か所に突起をもつ半円形の金具である。釘隠として用いたものであろうか。28は、円形の座金具の一部である。7・8は金銅装であり、鞍金具と思われる。12は轡の一部(銜)であろう。9～11・13～15は、鞍金具の一部とみられる。16は、3号墳主体部から出土した装着部が袋状の鉄斧である。

(田代 弘)

2) 中世の遺物

土器類(第18図1・5～11) 1号経塚の土師質筒形容器(6)は、口径11.8cm、器高22.5cmの円筒形で、ほぼ完形である。成形は粘土紐巻上げである。幅2～3cmの粘土紐を反時計回りに巻き上げている。内面は不調整のため、粘土紐巻上げ痕が明瞭に認められる。口縁部の内面は縦方向のユビオサエである。胎土は白色砂を含み、焼成は良である。色調は淡橙褐色である。土師質筒形容器の蓋(5)は、口径15cm、残存高3.3cmである。上半部は欠損している。破片は容器の底の方に埋没しており、蓋として機能した後、土圧などにより破損し、内部に崩落したと考えられる。内

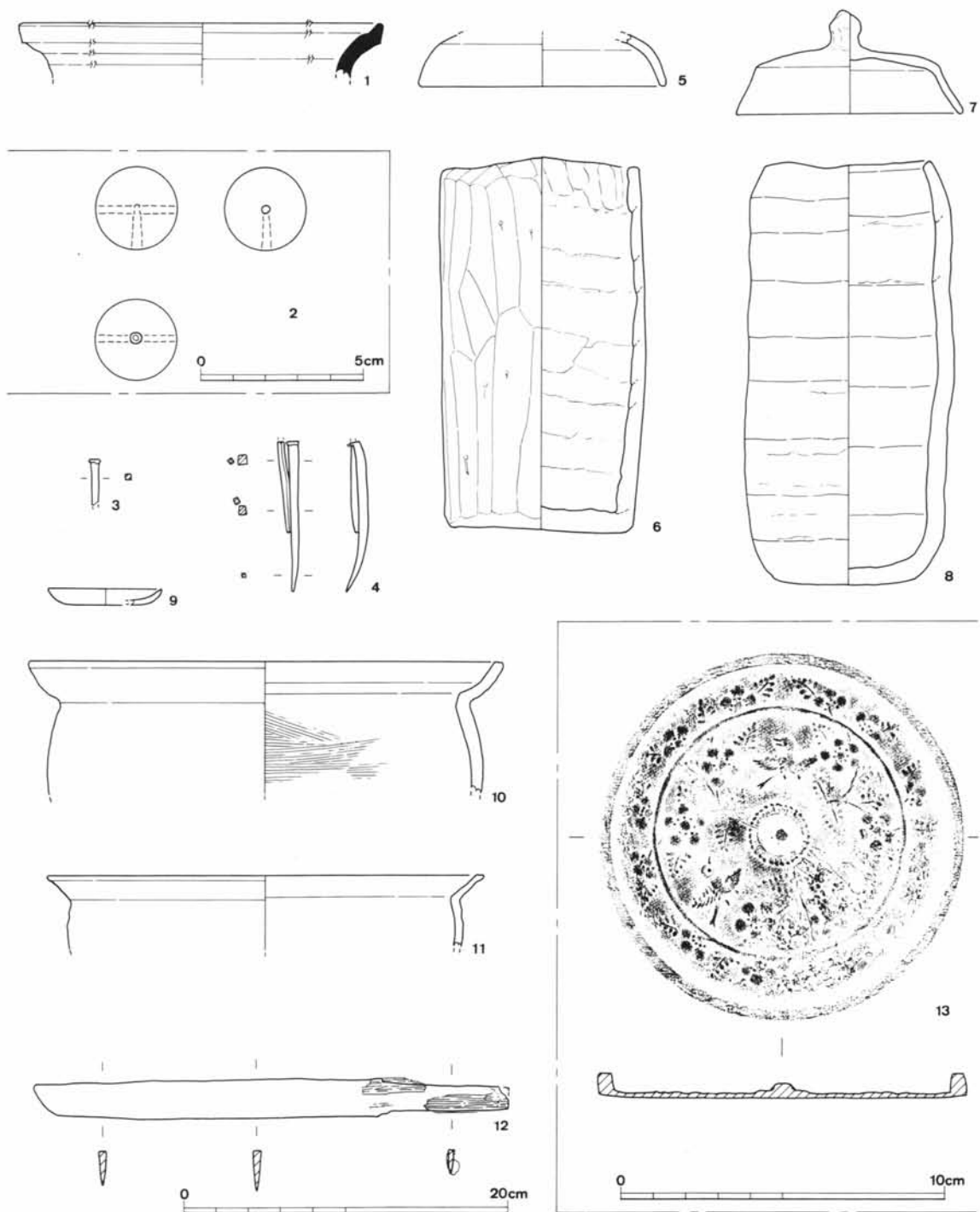


第17図 三角3・4号墳出土鉄器類実測図
(3号墳：16 4号墳：1～15)

外面ともナデ調整である。胎土は良である。焼成は良、色調は明茶褐色である。銭貨が2枚経筒の中から出土した。銭銘は不明である。直径2.5cm、厚さ1mmである。

4号経塚では、上層で越前焼甕(1)が出土した。小破片のため口径は不明だが、少なくとも22cmはある。残存高は3.5cmである。胎土には白色砂を含む。焼成は良、色調は暗茶褐色である。同じく上層から瓦器鍋(10)が出土した。口径は27cm、残存高は4.4cmである。胎土は精良で、焼成は良である。色調は淡灰褐色である。内面はヨコナデ、外面には煤が付着している。土師器皿(9)は口径7cm、器高1cmである。胎土は良で、焼成は良である。色調は淡橙褐色である。口縁端部は尖り気味である。表面の磨滅が著しいが、内外面ともナデ調整と思われる。

2号経塚では、土師質筒形容器(8)と同蓋(7)が出土した。土師質筒形容器(8)は口径10.3cm、器高25.8cmである。胎土は砂粒をほとんど含まず、焼成は軟である。色調は明茶褐色である。幅



第18図 1～4号経塚出土遺物実測図

3～4 cmほどの粘土紐を輪積みして成形しており、内外面はていねいなナデを施す。蓋(7)はつまみをもつもので、口径13.8cm、器高6.5cmである。口縁部は外反している。つまみを除いた蓋の高さは4 cmである。内面はハケ目後、ナデである。外面はナデである。つまみは宝珠様で先端部は尖っている。下半は縦方向のエビオサエである。

3号経塚からは、瓦器鍋(10)が出土した。口径は27cm、残存高は4.4cmである。胎土および焼成は良である。色調は淡灰褐色である。内面はヨコナデ、外面には煤が付着している。

玉類(第18図2) 3号経塚では上層から水晶製数珠玉(2)が出土した。直径2.5cmの円球である。円球の中心部横方向に直径2mmの円孔を穿つ。中心部分の直径は2mm、円球外縁の直径は4mmである。

金属器類(第18図3・4・12・13) 下層からは、鉄製短刀と和鏡が1点ずつ出土した。また、和鏡周辺では30数枚の銭貨も出土した。銭貨は磨滅が著しく、図版第9の4枚(1~4)はまだ遺存状態の良いものである。銭銘は、開元通寶(621年初鑄)(図版第9-1)、大観通寶(1107年初鑄)(図版第9-3)は確認できたものの、図版で提示したものを含めて、ほかの多くのものは不明である。鉄製短刀(12)は長さ29.2cm、刃長21.5cm、刃幅2.4cm、刃棟厚0.5cm、茎長7.8cmである。切っ先はやや短く、研ぎ直しがされているのではなかろうか。柄には木製の痕跡がある。和鏡(13)は直径11.3cmの円形である。厚さは0.2cmであるが、縁は0.7cmと分厚い。縁の幅は0.5cmである。中央には鈕がある。直径1.9cmで、中央が高いかまぼこ状を呈している。厚さは0.5cmである。側面には紐を通すための円孔がある。外縁に沿って直径7.8cmの隆起線文がある。幅0.1cm、高さ0.1cmである。この隆起線文を境として、外区には山吹文様とともに2羽の鳥を描いている。いずれもレリーフである。したがって、鏡種は山吹双鳥鏡である。文様は、当初は表面に土とともに紙様のものが付着しており、不鮮明であったが、表面を清掃すると、文様が判明した。

5. まとめ

今回の発掘調査によって2・3号墳が木棺直葬墳、4号墳が横穴式石室墳と判明した。更に、木棺直葬墳の上面では4基の経塚が確認された。3号墳からは鉄斧が1点出土したのみである。古墳時代中期的な様相の袋状鉄斧だが、これのみで時期を決定付けることは難しい。西舞鶴地域では約50基の古墳が知られているが、伊佐津川右岸の境谷にある切山古墳が土壙の中に組合式石棺を置くもので、古墳時代中期初めに遡るものである。今回の例とは埋葬形態が異なる木棺直葬という埋葬形態で、かつ、出土遺物をほとんどもたないものは、大宮町左坂古墳群、宮津市霧ヶ鼻古墳群など、京都北部での発掘調査によれば、古墳時代中期から後期初めの例が多いようである。今回調査した古墳もこの範疇と考えておきたい。

4号墳からは多数の須恵器が出土した。これらは胎土などから地元の製品ではあるが、大阪府陶邑古窯址群の編年観にしたがえば、TK217~TK46に併行する。したがって、6世紀末~7世紀初頭に築造され、7世紀代にも追葬されたと考えられる。立地としては、日本海側が見えない尾根の腹部にあり、西舞鶴地域としては平野部からは遠い地にある。丘陵には1基のみ築造されており、単独墳として把握できる。可耕地の狭い地に築造された古墳は、より広い範囲を治めた有力者の墓とも考えられるが、立地からいえば海を生産基盤とした有力者との関係を窺わせる。近隣にはない石材を運搬していることは、水上運搬に長けた人々の関与が考えられるので、4号墳の被葬者は、農耕以外に水上運搬あるいは漁労を生活基盤とした有力者の可能性が高い点を指摘しておきたい。

古墳の上層で検出された4基の経塚は、出土遺物から平安時代末期から鎌倉時代にかけてのも

のと考えられる。経塚の構造は、土師質筒形容器を据えた小規模な土坑のもの2基と、やや大きな土坑の中に、銭貨とともに、木箱、鉄製短刀、和鏡を埋納したものの2種ある。土坑の壁を更に掘り、埋納スペースを作ることも行っている。舞鶴市内では天台南谷遺跡でこれらのタイプの存在が明らかであり、当地では普遍的な経塚のあり方といえよう。舞鶴地域の中世の経塚を考える上で、貴重な資料となった。

(伊野近富)

注1 岡崎研一「三角古墳群」(『京都府遺跡調査概報』第109冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2003

注2 難波靖明・太田とし子・川瀬恵子・寺師定一郎・藤原志津枝・稲田律子・浜田多津代・山尾路明・吉田美鈴・太田光義・丸岡てる代・内海佳津枝・近江玲子・真下定平・大石洋一・真下春美・中村ひろみ・川瀬裕之・倉橋俊則・寺尾貴美子

付表1 三角4号墳石室内出土土器法量表()は現存長

番号	種別	出土地区	法量(cm)		備考
			口径	器高	
1	須恵器杯蓋	6区	12.3	4.6	
2	須恵器杯蓋	3区	12.2	3.6	
3	須恵器杯蓋	1・3区	12.0	(3.9)	
4	須恵器杯蓋	6区	12.4	4.4	
5	須恵器杯身	5区	9.4	3.2	
6	須恵器杯身	2・4区	11.0	3.7	
7	須恵器杯身	2・3・4区	11.0	3.9	
8	須恵器杯身	3区	11.0	4.0	
9	須恵器杯身	3区	12.0	(3.0)	
10	須恵器杯身	1区	12.2	(3.2)	
11	土師器杯	4区	11.4	(4.5)	
12	須恵器高杯	7区	底径9.0	(3.4)	脚部のみ遺存
13	須恵器高杯	7区	底径9.8	(3.8)	脚部のみ遺存
14	須恵器高杯	1～3・6区	10.9	(3.6)	口縁部のみ遺存
15	須恵器高杯	7区	12.0	(3.7)	口縁部のみ遺存
16	須恵器高杯	1・3・7区	10.9	(9.2)	口縁部のみ遺存
17	須恵器台付甕	3・4区	11.2	16.5	
18	須恵器瓶	6区	6.2	18.3	
19	須恵器壺	2～4・7区	8.5	14.8	
20	須恵器横瓶	6区	5.9	13.5	体部に線刻あり
21	須恵器甕	7区	32.0	(6.5)	口縁部のみ遺存
22	須恵器甕	7区	頸径20.4	(10.5)	頸部のみ遺存

付表2 三角4号墳石室内出土玉類法量表()は現存長

番号	種別	出土地区	法量(cm)			備考
			長さ	幅	厚さ	
1	ガラス小玉	3区	1.0	1.0	0.7	白色・風化し膨張
2	ガラス小玉	1区	1.0	1.0	0.7	白色・風化し膨張
3	ガラス小玉	1区	1.0	1.0	0.6	白色・風化し膨張
4	ガラス小玉	2区	1.1	1.1	0.8	白色・風化し膨張
5	ガラス小玉	1区	1.1	1.1	0.8	白色・風化し膨張
6	ガラス小玉	3区	1.1	1.1	0.7	白色・風化し膨張
7	ガラス小玉	1区	1.3	1.3	0.9	白色・風化し膨張
8	ガラス小玉	1区	(0.6)	(1.0)	0.8	白色・風化し膨張
9	ガラス小玉	1区	(0.6)	1.2	0.8	白色・風化し膨張
10	ガラス勾玉	3区	(0.8)	(1.2)	1.0	頭部遺存
11	ガラス勾玉	1区	2.4	1.2	0.8	白色・全面風化
12	ガラス勾玉	1区	2.5	1.5	0.8	緑色
13	碧玉製玉	1区	1.0	1.3	1.3	縦長の丸玉
14	水晶切子玉	1区	1.6	1.1	0.9	
15	水晶切子玉	4区	2.7	1.7	1.4	
16	水晶切子玉	6区	2.5	1.6	1.2	
17	水晶切子玉	3区	2.7	1.8	1.6	
18	水晶切子玉	2区	3.2	1.9	1.8	

付表3 三角古墳群出土鉄器類法量表()は現存長

番号	種別	出土場所	法量(cm)		備考
			縦長	横長	
1	革金具	4号墳石室2区	(1.8)	2.1	方形か、下端折損
2	革金具	〃 4区	2.2	2.1	方形
3	革金具	〃 2区	(2.8)	2.0	長方形、下部折損
4	革金具	〃 3区	(2.4)	(1.8)	革尻金具
5	革金具	〃 4区	1.8	2.1	革尻金具
6	革金具	〃 4区	2.8	2.4	革尻金具
7	金具	〃 2区	1.5	1.6	金銅装 鞍金具か、鉄隠しに用いたものか
8	座金具	〃 1区	(2.3)	(1.2)	金銅装、鞍金具か
9	金具	〃 2区	(3.5)	(3.7)	鞍金具か
10	金具	〃 2区	(2.8)	(1.6)	鞍金具か
11	金具	〃 2区	(3.7)	(4.1)	鞍金具か
12	轡	〃 3区	(4.7)	2.5	銜であろう
13	金具	〃 2区	(2.2)	(2.7)	鞍金具か
14	金具	〃 2区	(3.6)	(1.8)	鞍金具か
15	金具	〃 2区	(3.0)	(2.5)	鞍金具か
16	鉄斧	3号墳主体部	6.0	3.6	装着部が袋状

2. ^{かんのんじ}観音寺遺跡平成15年度発掘調査概要

1. はじめに

この発掘調査は、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所が由良川中流部改修工事の一環として進めている堤防建設に伴うものである。

観音寺遺跡は、京都府福知山市字観音寺小字仲宮・大木巻地先に所在する弥生時代中期から鎌倉時代にかけての集落遺跡である。大正11年に当時の中筋村観音寺から出土した磨製石剣により弥生時代遺跡として早くから知られ、^(注1) 今日までの間に、多くの調査が実施されてきた。

今回の調査地点は、京都府教育委員会が刊行した『京都府遺跡地図』によると、観音寺遺跡の北西端に当たっている(第19図)。近畿自動車道敦賀線の高架橋脚の西側一帯に相当し、調査はA・B・C地区とした3か所で実施した。調査面積は、A地区876.7m²、B地区930.8m²、C地区1,282.9m²の合計3,090.4m²である。

現地調査は、平成15年5月7日～12月19日までの間に、調査第2課第2係長伊野近富、同主任調査員戸原和人、同専門調査員石尾政信・黒坪一樹が担当して実施した。また、本書の執筆は、伊野、黒坪が分担して行った。

調査を進めるにあたっては、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所をはじめ、福知山市教育委員会、京都府教育委員会・綾部市教育委員会などの関係諸機関からご教示・ご協力を賜った。また、作業員・調査補助員の方々には猛暑、厳冬の中、熱心に作業に従事いただき、整理員の方々には遺物の洗浄から実測・製図作業を願った。心より御礼申し上げる。^(注2)

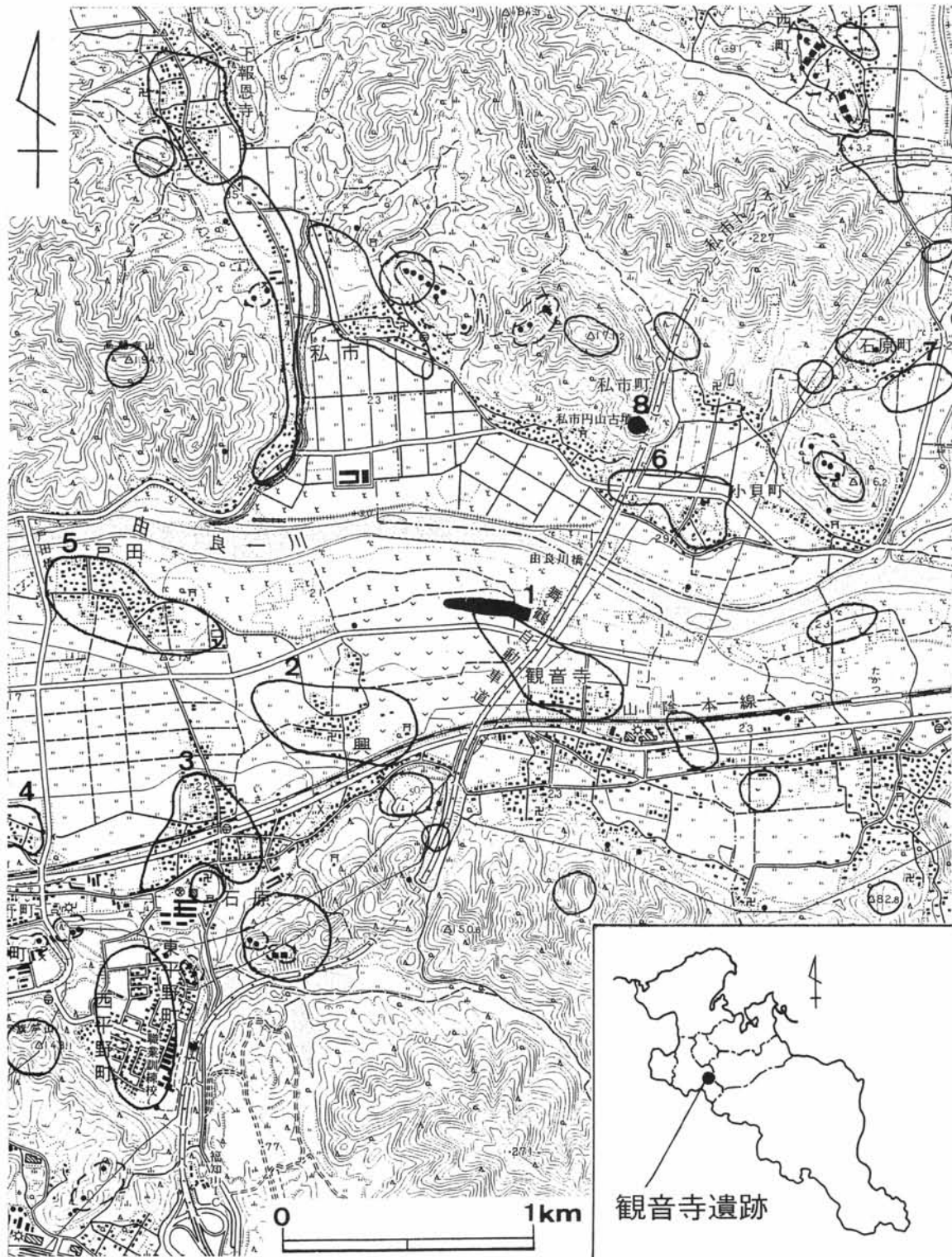
なお、調査に係る経費は、全額、国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所が負担した。

2. 位置と環境

観音寺遺跡は、福知山市と綾部市にまたがる福知山盆地の平野部にあつて、由良川によって形成された自然堤防上に立地する。以下、周辺遺跡を概観することで、観音寺遺跡の歴史的環境をみていきたい。

福知山盆地に分布する縄文時代の遺跡としては、福知山市武者ヶ谷遺跡・半田遺跡・石本遺跡、綾部市石原遺跡・小貝遺跡などがあり、その多くは台地上などの高台に立地する。なかでも武者ヶ谷遺跡から出土した隆帯文土器は、縄文時代最古の草創期に位置づけられ、全国的に著名である。このほか、由良川流域では、下流域の自然堤防上に舞鶴市志高遺跡・桑飼下遺跡・桑飼上遺跡などが見られる。後述するように、今回の観音寺遺跡の調査で縄文時代晩期の土坑を確認したように、由良川中流域における福知山盆地内においても、今後、自然堤防上や低位段丘上で縄文時代の遺構・遺物の確認が増加していく可能性は高い。

弥生時代に入ると、近隣に多くの集落遺跡や墳墓遺跡が点在するようになる。特に、弥生時代中期になると、大規模な集落が核となってその周辺に小集落を形成し、各地域における共同体社会を形成していたと考えられている^(注4)。由良川沿いの自然堤防上を中心に数多くの集落が形成され



第19図 調査地周辺遺跡分布図(国土地理院1/25,000福知山東部)

- | | | | |
|----------|---------|---------|-----------|
| 1. 観音寺遺跡 | 2. 興遺跡 | 3. 石原遺跡 | 4. 土遺跡 |
| 5. 戸田遺跡 | 6. 小貝遺跡 | 7. 石原遺跡 | 8. 私市円山遺跡 |

た(第20図)。現在、核となった主な集落跡として、石本遺跡・半田遺跡・宮遺跡・愛宕山遺跡・青野遺跡などがあるが、観音寺遺跡(興・観音寺遺跡^(注5))もそのひとつで、当該遺跡の周辺には中期、後期を通じて戸田遺跡・土遺跡・石原遺跡などの集落跡が点在している。戸田遺跡は観音寺遺跡と同様、沖積地の低地に展開する遺跡であるが、このほかの遺跡は、現在の由良川左岸の一段高い低位段丘上に立地している。なかでも石原遺跡では後期の円形竪穴式住居跡や集落の外縁をとりまく周濠などが確認されている^(注6)。

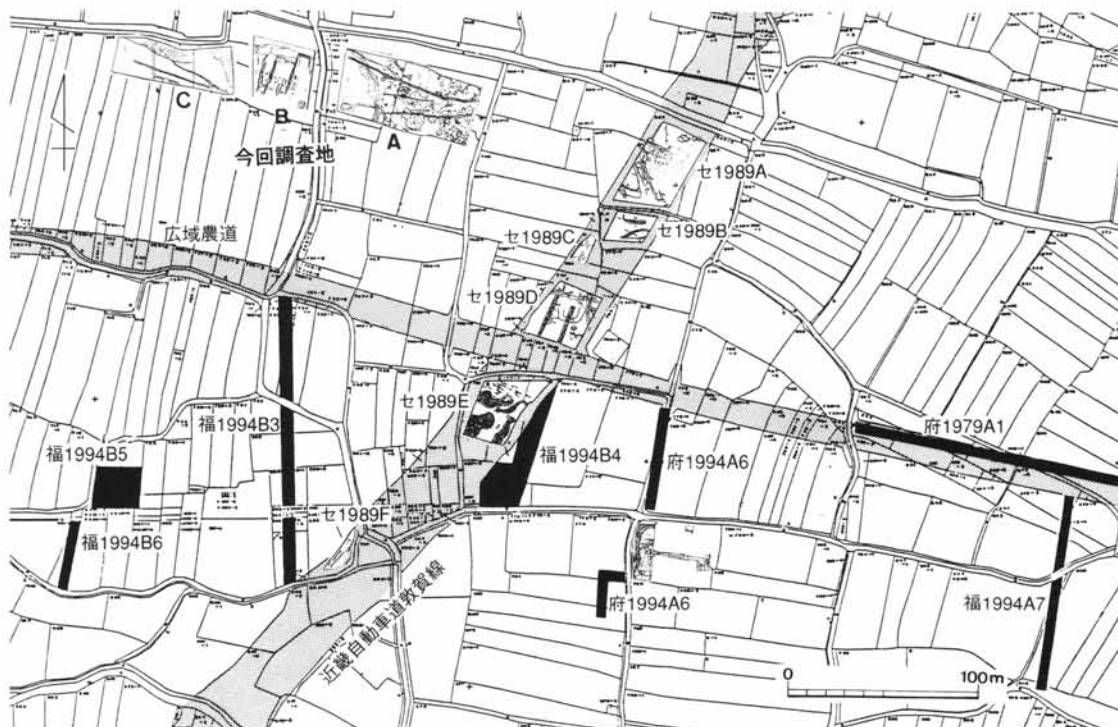
古墳時代の集落跡については、調査例が少なく実態は不明な点も多く、古墳のあり方から当時の姿を概観することとしたい。

前期古墳としては、景初4年銘鏡が出土した福知山市広峰15号墳(前期)^(注7)が著名である。ただし、由良川中流域を統括した首長墓とは言い難い。全体としては、福知山市の豊富谷墳墓群や寺ノ段古墳群のように、弥生時代後期から続く台状墓に近い形態の方墳が多く認められる状況である。中期に至り、ようやく由良川中流域を統括した首長墓と位置づけられる古墳が認められるようになる。大型の方墳である綾部市聖塚古墳、同菖蒲塚古墳、京都府内最大の円墳である綾部市私市円山古墳(中期)^(注8)などである。後期には由良川の支流である小河川流域ごと*に*いわゆる群集墳が形成される。代表的なものに、猪崎古墳群、向野古墳群、牧古墳群、下山古墳群などがある。中には、牧正一古墳のように3基の横穴式石室を内部主体とする特異な前方後円墳なども存在する^(注9)。

奈良・平安時代の集落跡に関しても、良好な調査資料は少ない。そうした中、福知山市和久寺廃寺、綾部市綾中廃寺といった白鳳期創建と考えられている古代寺院が認められるほか、大型の掘立柱建物跡が確認された綾部市青野南遺跡は、古代の何鹿郡衙跡に推定されている^(注10)。



第20図 由良川流域の縄文・弥生時代遺跡
(注4の文献より引用・加工)



第21図 観音寺遺跡のこれまでの調査地(調査年次と地区名、『興・観音寺遺跡』1995に加筆)
(セは当調査研究センター、福は福知山市教育委員会、府は京都府教育委員会の略)

3. 観音寺遺跡の過去の調査

観音寺遺跡で実施した今回の発掘調査は、第15次調査として整理され、これまでに14回の調査が実施されてきた。ここではこれまでの主な調査を簡単に振り返っておきたい。なお、この観音寺遺跡とその南西に位置する興遺跡とは、現在の行政区分の字名から個別の遺跡ととらえられているが、両遺跡は大きく一体の弥生時代遺跡であるとして「興・観音寺遺跡群」ともよばれている^(注11)。遺跡(遺構・遺物)の内容や、地勢的見地からみても両遺跡は密接に関連しながら弥生時代社会を形成してきたといえる。そこで以下、興遺跡の調査事例も含めて記述する。

観音寺遺跡がはじめて報告されたのは大正11年に遡る。『京都府史跡勝地調査会』第3冊において、石剣の克明な写真とともに遺跡の状況が報告されたことに始まる^(注12)。

その後、遺物の出土は単発的に報告されていたものの、本格的な発掘調査は昭和54年の京都府教育委員会の調査からであった(観音寺遺跡第1次調査)^(注13)。この調査は広域農道建設に先立って行われたもので、調査地点は、当時は桑畑であった現在の近畿自動車道と広域農道の交差点東側である。事前の試掘調査としてトレンチ調査が行われ、顕著な遺構は検出されなかったものの、弥生土器・土師器・須恵器などの多くの土器片をはじめ、滑石紡錘車・土錘などが出土した。

多量の出土遺物などから観音寺遺跡が由良川中流域における弥生時代中期の大規模な遺跡として注目されたのは、昭和63年度から行われた近畿自動車道建設に伴う調査の結果による^(注14)。調査は、昭和63年度に試掘調査(第2次：興遺跡、第3次：観音寺遺跡)が、翌、平成元年度に本格的な面調査(第4次：興遺跡、第5次：観音寺遺跡)が実施された。その結果、興遺跡からは、弥生時代中期の環濠とみられる溝や土坑内から多量の土器をはじめ、分銅形土製品、木製簀^{かんざし}、石器など

が、観音寺遺跡からは、円形竪穴式住居跡や溝などの遺構が検出されるとともに、中期から後期の多量の土器がそれぞれ出土した。

一方、観音寺・興遺跡にまたがる広範囲な地点では場整備が実施されることとなり、その事前調査が平成4年度から同6年度にわたって、福知山市教育委員会・京都府教育委員会によって実施された(第6～11次調査)。この調査においても、特に弥生時代中期の遺構・遺物は数多く出土した。なかでも福知山市教育委員会が実施した第8次調査(D-1・2区：興遺跡)では中期の竪穴式住居跡9基、土坑131基が検出されるなど、まさに居住域の中心ともいえる部分が調査された。^(注15) また、平成6年度に京都府教育委員会が実施した観音寺遺跡の南東寄りの地点の調査(第12次調査)では、13～16世紀にかけての墳墓・掘立柱建物跡・集落内区画溝などが見つかった。^(注16) 当該遺跡が弥生時代に限らず、長期にわたって集落が営まれ続けていたことを物語るものといえる。

第14次調査は、平成14年度に当調査研究センターが本堤防建設事業に先立って実施したものである。調査地は、遺跡範囲の中では北西端付近に位置する。調査内容は、事前に遺構・遺物の広がりを確認する目的で実施した試掘調査と一部先行して実施した面調査(後述するA地区の東半分)。調査の結果、縄文時代晩期、弥生時代中期、弥生時代後期、古墳時代、鎌倉時代といった各時代の遺構・遺物が多数確認された。^(注17)

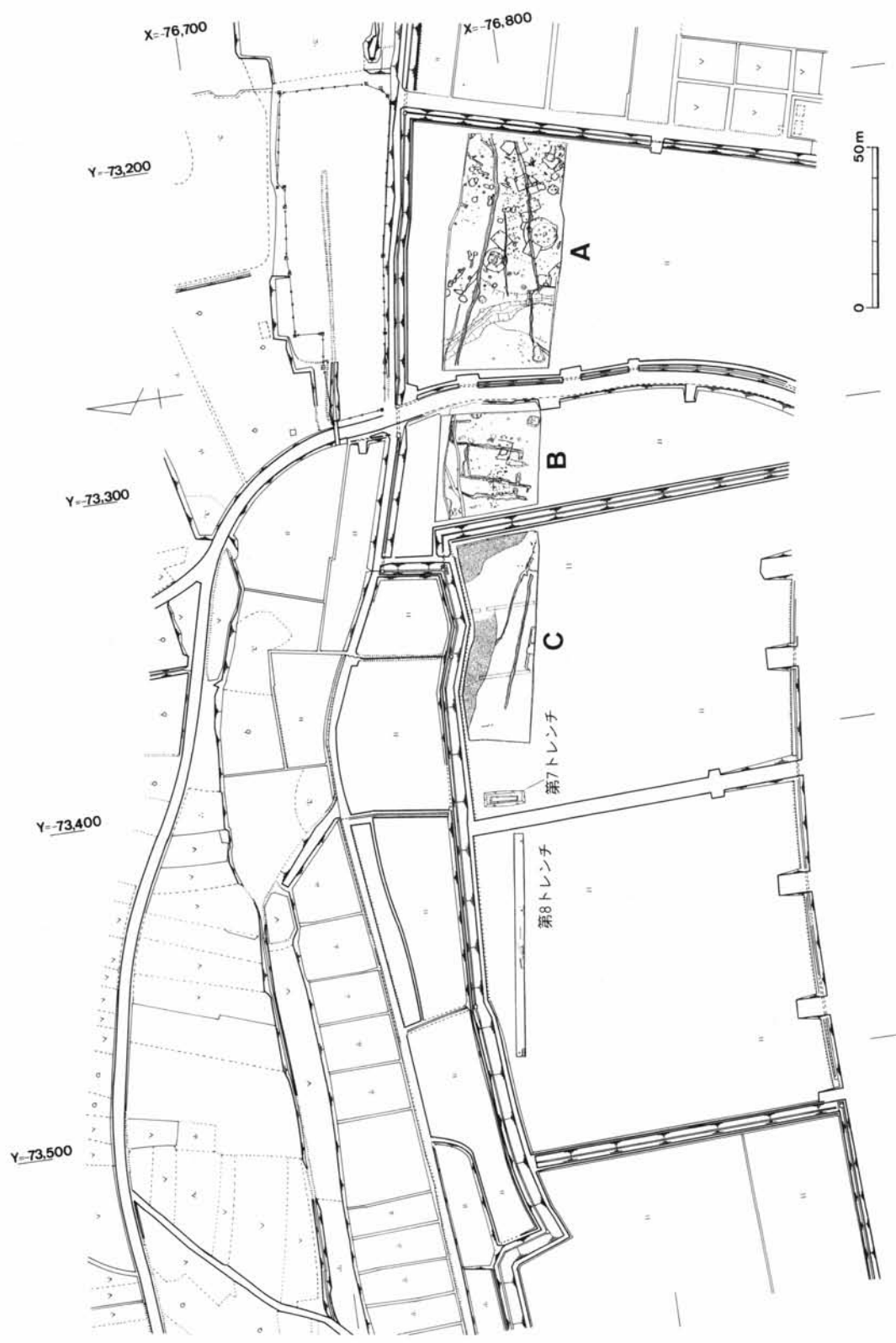
以上、観音寺遺跡の過去の主な調査を振り返った。これまでの調査では、広範囲に弥生時代中期を中心とする遺構・遺物が認められ、由良川中流域における拠点的な集落跡であることが明らかになってきたといえる。そして、その調査成果は北丹波地域の弥生時代を考えるうえで、欠くことのできない貴重な資料を提供してきた。

また、当遺跡は、弥生時代にとどまらず、古墳時代以後も中世に至るまで人々の足跡は途絶えることはない。古代から中世まで連綿と営まれ続けた大規模な複合集落遺跡と位置づけることができるだろう。

4. 調査の経過

国土交通省近畿地方整備局福知山河川国道事務所が進めている堤防建設に伴う観音寺遺跡の発掘調査は、平成14年度から実施している。先述のとおり、平成14年度の調査は、遺構・遺物の広がりを確認する目的で実施した試掘調査と一部先行して実施した面調査であった。

試掘調査は、対象地内に8か所の試掘トレンチ(第1～8トレンチ)を入れ実施した。その結果、西寄りに設けた7・8トレンチを除く6か所のトレンチで弥生時代から鎌倉時代を中心とする時期の遺構・遺物の広がりが確認されたため、順次これを拡張して面調査を進めることとなった。当該年度には、このうち第1・2トレンチ部を拡張した1,100㎡の面調査も実施した(後述するA地区の東半分に相当)。その調査成果はすでに報告しているが、概ね、縄文時代晩期から鎌倉時代にかけての遺構・遺物がみつかった。特に弥生時代のものが圧倒的に多く、竪穴式住居跡・土坑・溝状遺構の存在が明らかとなった。



第22図 A・B・C区全体図

今回の概要報告は、こうした経過を踏まえて実施したものであり、試掘トレンチの第3～6トレンチ部分を拡張したものである。調査は、A・B・Cの3地区に分けて行った。

平成15年5月8日から重機掘削を、また、5月9日から人力掘削を開始した。また、5月21日からは現地整理事務所で出土品の整理作業(洗浄および注記)も同時に進めた。調査を進めるに従い、3つの調査区それぞれで、縄文時代から鎌倉時代に至る時期の遺構・遺物が次々にみつかった。なかでも弥生時代中期の遺構として集落の西側を画する環濠の一部や墓とみられる方形周溝遺構がみつき、集落の居住域と墓域の一部が明らかになったことは、これまでの観音寺遺跡の調査のなかでも注目すべき成果の一つに位置づけられるものとする。

引き続き、こうした多くの遺構・遺物に関する調査の記録作業を重ね、同年11月18日にラジコンヘリによる空中写真撮影を行った。また、12月17日には現地説明会を開催し、約80名の参加を得た。

現地説明会終了をもって現地での全ての作業を終了したが、出土品の整理作業(洗浄から接合および一部の実測)を平成16年2月17日まで現地整理事務所で行った。そして、改めて、その後の整理作業(出土品の実測、製図作業)を平成16年度事業として、当調査研究センターの本部において実施した。

5. 調査の概要

(1) A地区の調査(第23図)

①層位

土層の堆積は、調査区南壁断面を中心に説明したい(第24図)。平成14年度の東半部南壁断面の土層が続いている。その基本土層は次の4つの層である。第1層：暗灰褐色粘質土(水田耕土・床土)、第2層：暗茶褐色粘質土、第3層：暗黄褐色粘質土、第4層：濁暗黄褐色細砂質土(土器・炭化物なし)となっている。全体に自然堤防(微高地)上の暗褐色系粘質土および細砂の堆積で、中世の柱穴以外の遺構は非常に見えにくい。奈良～鎌倉時代の遺構は第2層上面から入っているのが観察される。弥生時代の遺構は、第3層まで掘り下げた状態で確認されてくるが、実際には第2層中で掘り込まれているものと思われる。

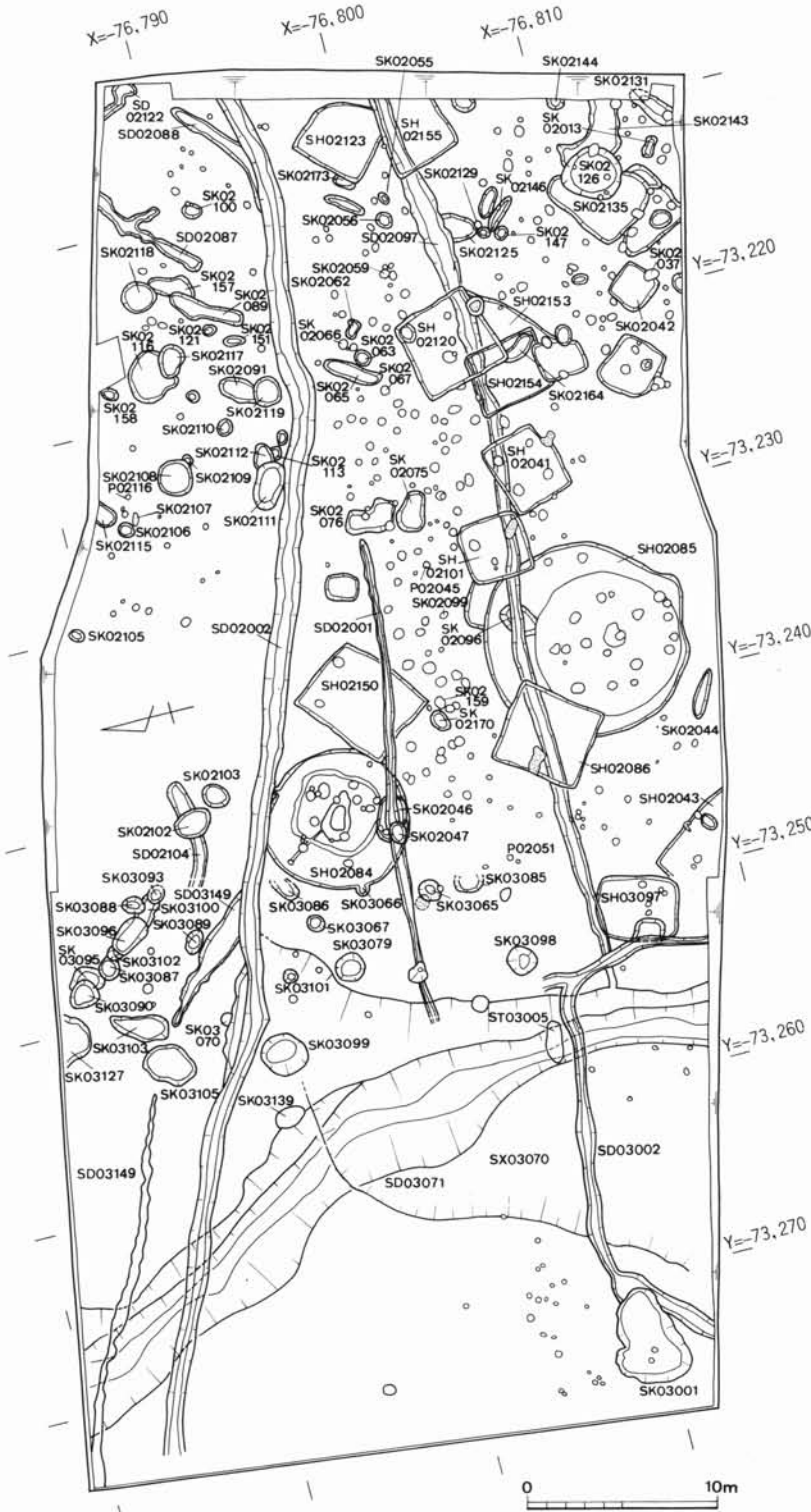
付表4 A地区検出遺構

時 期	遺 構
縄文時代晩期後半	土坑1基(S K 02042)
弥生時代中期後半(畿内第Ⅳ様式)	環濠1条(S D 03071)・竪穴式住居跡1基(S H 02084)・土坑46基・溝4条(S D 02087・02088・02122・02104)
弥生時代後期(畿内第Ⅴ様式)	沼状落ち込み(S X 03070)・竪穴式住居跡3基(S H 02085・02150・03097)・土坑15基・溝1条(S D 02097)
弥生時代末～古墳時代初頭	土坑1基(S K 02126)
古墳時代中期	竪穴式住居跡1基(S H 02086)
古墳時代後期末	竪穴式住居跡5基(S H 02041・02043・02101・02120・02153)・土坑(S K 02117)
奈良時代	溝(S D 03002)
平安時代末～鎌倉時代	土壙墓1基(S T 03005)・溝(S D 03002)・大型土坑(S K 03001)・土坑(S K 02047)・溝(S D 02001)・小柱穴156基

西に向かっては、弥生時代の落ち込み(後期)や環濠(中期)が大きく掘り込まれているため、埋土層の堆積となるが、それらが切れると再び西側は基本土層が続いていく。

②遺構・遺物

A地区から検出された時代ごとの検出遺構は付表4の^(注18)とおりである。



第23図 A地区遺構平面図

遺構に伴う出土遺物には、縄文土器・石器、弥生土器・土製品・石器、土師器(古墳~平安時代)、須恵器、瓦器、中国製陶磁器類などがある。

以下、時期ごとに、遺構の説明に続き、出土遺物、遺構外の遺物の順に説明していきたい。なお、弥生土器については巻末に観察表を掲載した。

1) 縄文時代晩期(第25~27図)

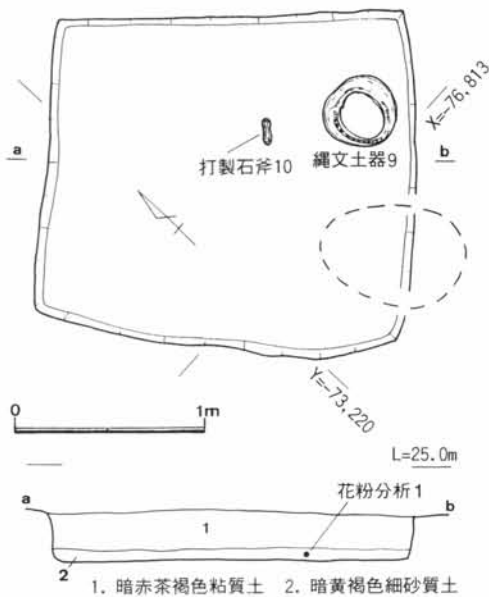
土坑1基のほかは土器の出土のみである。土器は縄文時代晩期後半とみられる凸帯文土器である。

土坑SK02042 一辺約2m、深さ約40cmを測る隅丸方形である(第25図)。出土遺物は、晩期の凸帯文土器(9)と別個体の破片(7)、打製石斧1点である。平成14年度の調査概要で、この土器の出土状況について、ほぼ直立した状態としたが、南東側に一定の傾きをもっている。検出面と土器中軸ラインとの角度

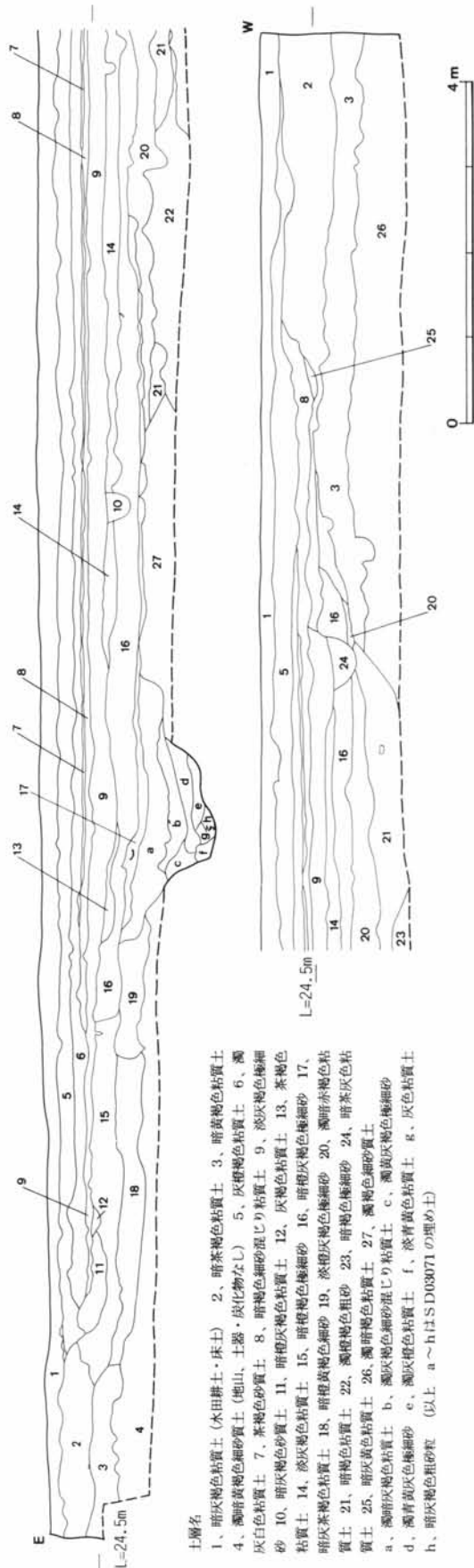
は直立で90°とすると、直角からおおよそ30°傾く。埋土および深鉢土器内に炭化物や自然遺物は残っていない。また埋土は2層の水平堆積である。平成14年度の調査概要では、貯蔵穴と報告したが、深鉢を土器棺とみて土壙墓の可能性もある。

(出土遺物)

凸帯文土器(9)は、器高40.2cm、復原口縁部径34.2cmを測る丸底の深鉢である。砂粒の多いざらついた胎土で、暗褐色の色調である。口縁端部は面取りされず、口縁端部よりやや下がった位置に一条刻目凸帯がめぐる。口縁部径が体部を含めた最大径となるものである。内面は水平に調整され、外面上半部には若干の指圧痕もみられる。家根氏編年^(注19)の晩期後半の船橋式から長原式にかけてのものとみられる。凸帯文土器7は口縁部の断片である。暗灰褐色の色調ながら、9に比べてやや砂粒分は少ない。斜めに刻みをいれた凸帯を口縁端部に貼り付けている。口縁端部には面をもたない。ほぼ直線的に立ち上がる口頸部で、くびれをもたないのが特徴である。9と同時期

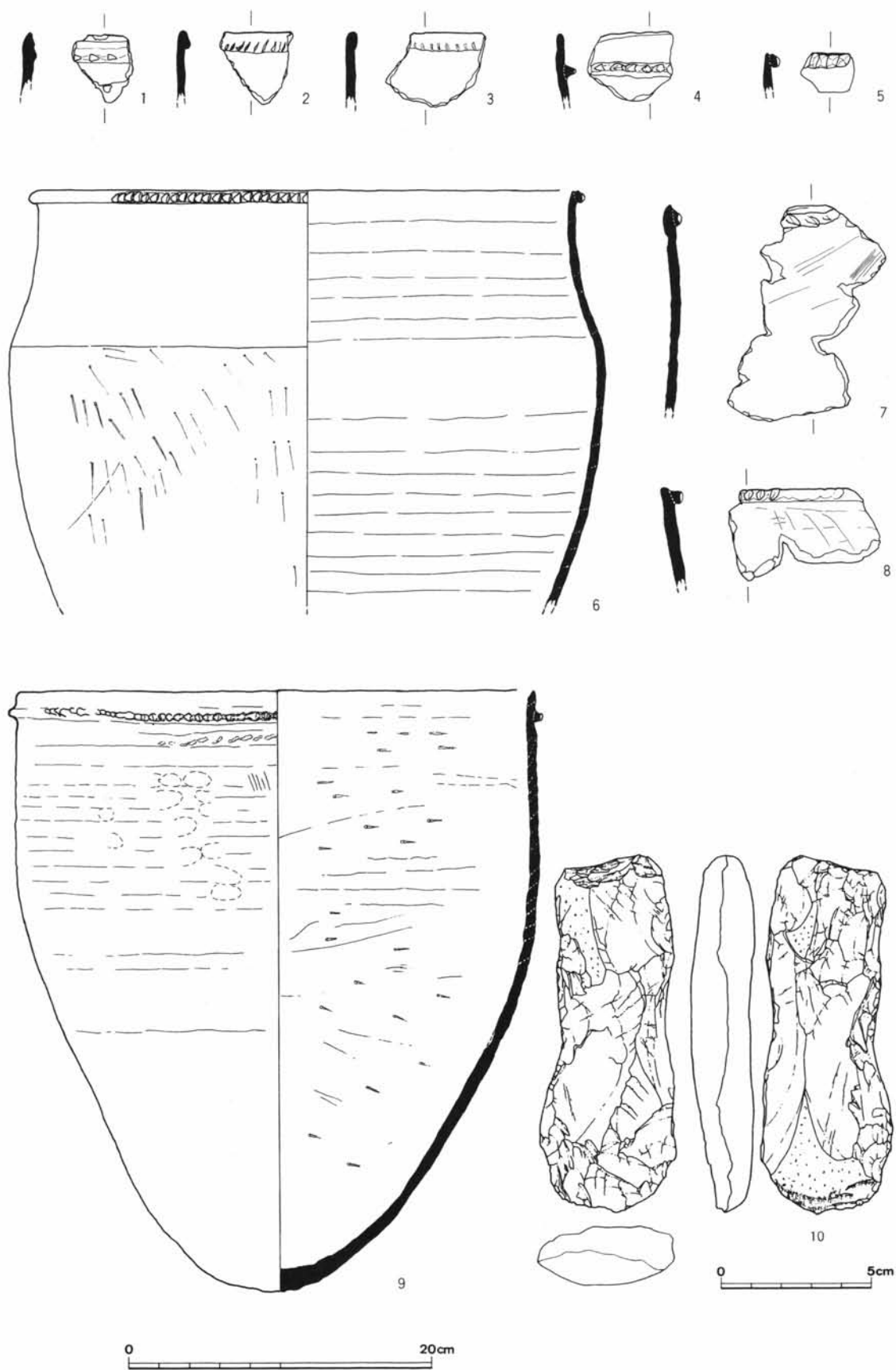


第25図 土坑 S K 02042平・断面図



第24図 A地区(西半)南壁土層断面図(西端Wが調査区南西角)

- 土層名
- 1、暗灰褐色粘質土(水田耕土・床土) 2、暗茶褐色粘質土 3、暗黄褐色粘質土
 - 4、濁暗黄褐色細砂質土(畑山、土器・炭化物なし) 5、灰褐色粘質土 6、濁灰白色粘質土 7、茶褐色砂質土 8、暗褐色細砂混じり粘質土 9、淡灰褐色極細砂 10、暗灰褐色粘質土 11、暗橙灰褐色粘質土 12、灰褐色粘質土 13、茶褐色粘質土 14、淡灰褐色粘質土 15、暗橙褐色極細砂 16、暗橙灰褐色極細砂 17、暗灰茶褐色粘質土 18、暗橙黄褐色細砂 19、淡橙灰褐色極細砂 20、濁暗赤褐色粘質土 21、暗褐色粘質土 22、濁暗褐色粗砂 23、暗褐色極細砂 24、暗茶灰色粘質土 25、暗黄褐色粘質土 26、濁暗褐色粘質土 27、濁褐色細砂質土
 - a、濁暗灰褐色粘質土 b、濁灰褐色細砂混じり粘質土 c、濁黄灰褐色極細砂 d、濁黄灰褐色極細砂 e、濁灰褐色粘質土 f、淡青黄色粘質土 g、灰色粘質土 h、暗灰褐色粗砂粒 (以上 a~hはSD03071の埋め土)

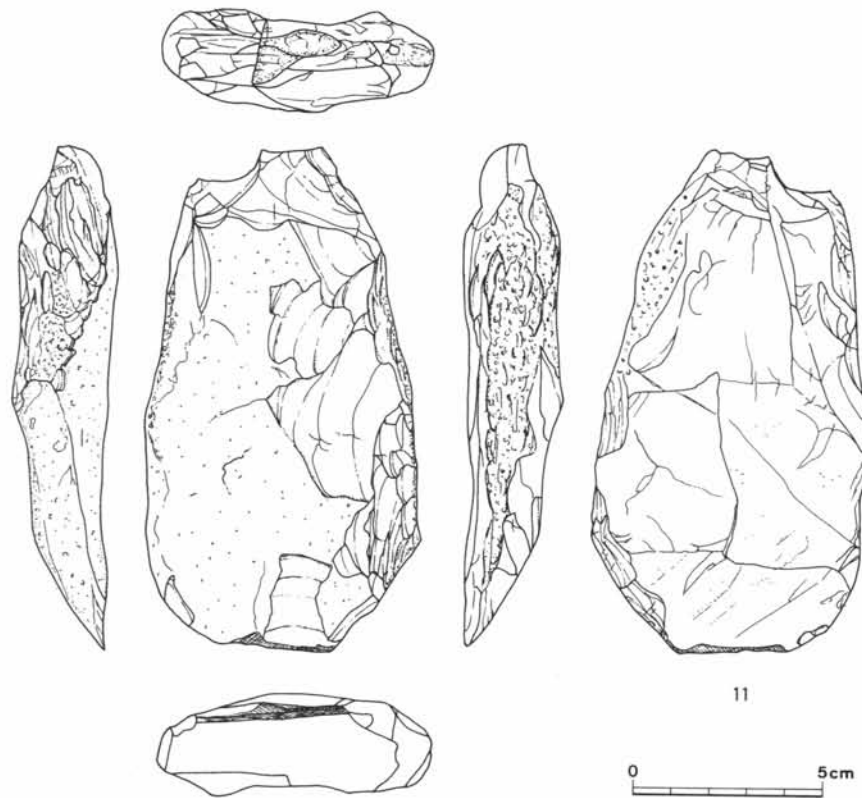


第26図 縄文土器・打製石斧実測図

のものであろう。

10の打製石斧は、両面加工の短冊形で、裏面の刃部先端に使用による磨滅痕がある。長さ11.8cm、幅4.5cm、厚さ1.9cmで、重さ120gを量る。暗青灰色の粘板岩製である。

遺構外の遺物 第26図4～6は、縄文時代の遺構ではなく、弥生時代中期の環濠内(弥生時代中期)から出土した。6は、凸帯文土器の深鉢上



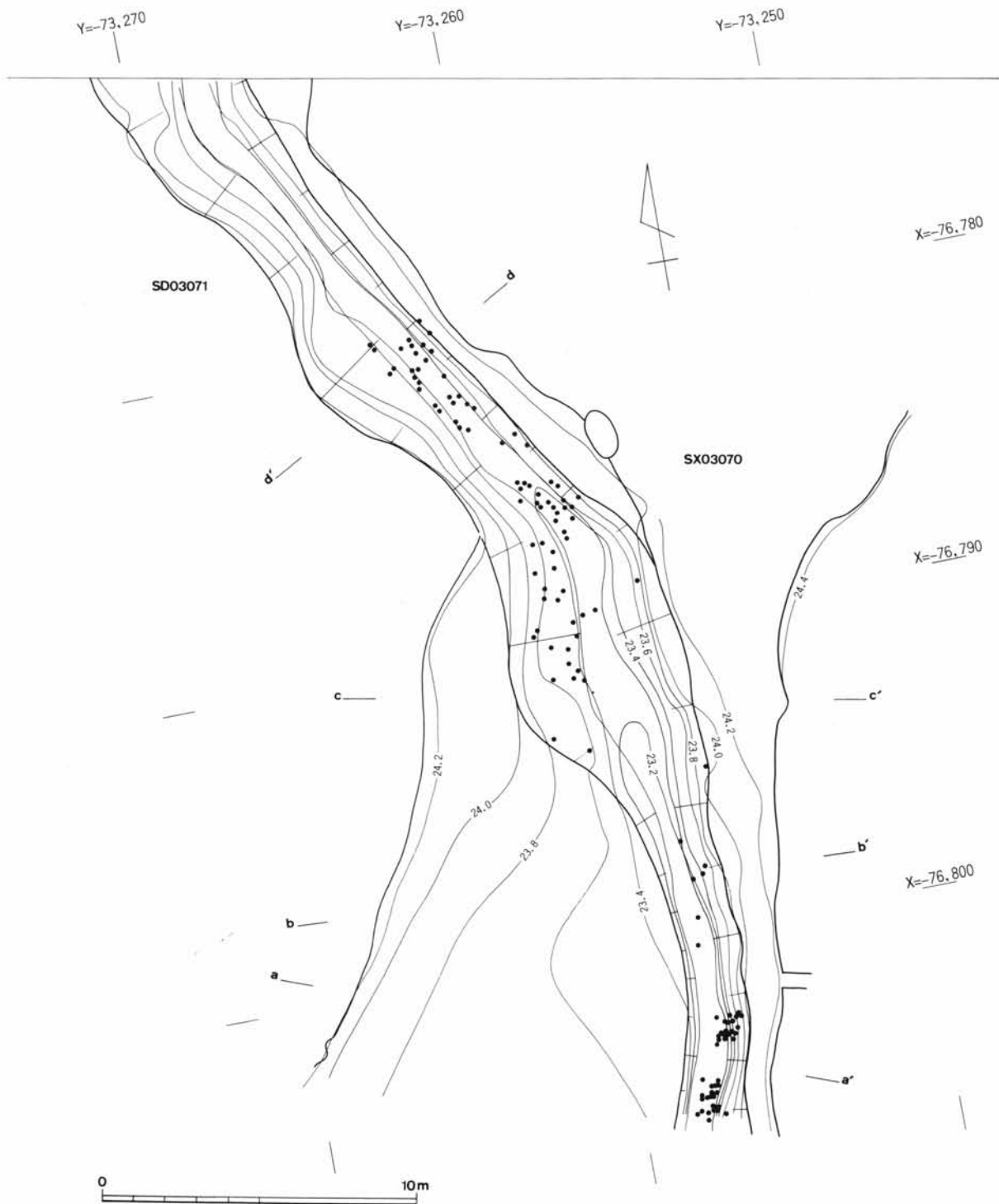
第27図 打製石斧実測図

半部である。口縁部径は37cmを測る。胎土は細かな砂粒を多く含んでざらつき、暗茶褐色の色調である。形態は口頸部でくびれをもつ。凸帯は口縁部のみの1条刻目である。宇治市寺界道遺跡における貯蔵穴S K02から出土した資料群(注20)に類似する。家根氏の編年観で判断すると、船橋期から長原期に至る過渡期のものと思われるが、同じ環濠内から出土した小破片の4・5とともに、製作技法・所属時期についてはさらに検討を要する。4は口縁より下がった箇所に凸帯が付き、5は6と同タイプである。

第26図1～3の縄文土器の小破片と、第27図の打製石斧11は、他時期(弥生時代)の遺物とともに出土したものである。2・3は、口縁部端に垂れ下がったような凸帯をもつ。また、打製石斧11は大型で、石材はチャートを用いている。これは時期不明であるが、少なくとも弥生時代のものとは言えない。両側面部は、連続した敲打による潰れ(整形)痕が観察される。扁平な素材の表裏面におよぶ剥離加工は少なく、もともとの礫形を利用している。下端の刃部に沿って、使用による磨滅痕が細くみられる。長さ13.2cm、幅7.3cm、厚さ2.6cmである。重さは330gを量る。

2) 弥生時代中期(第28～56図)

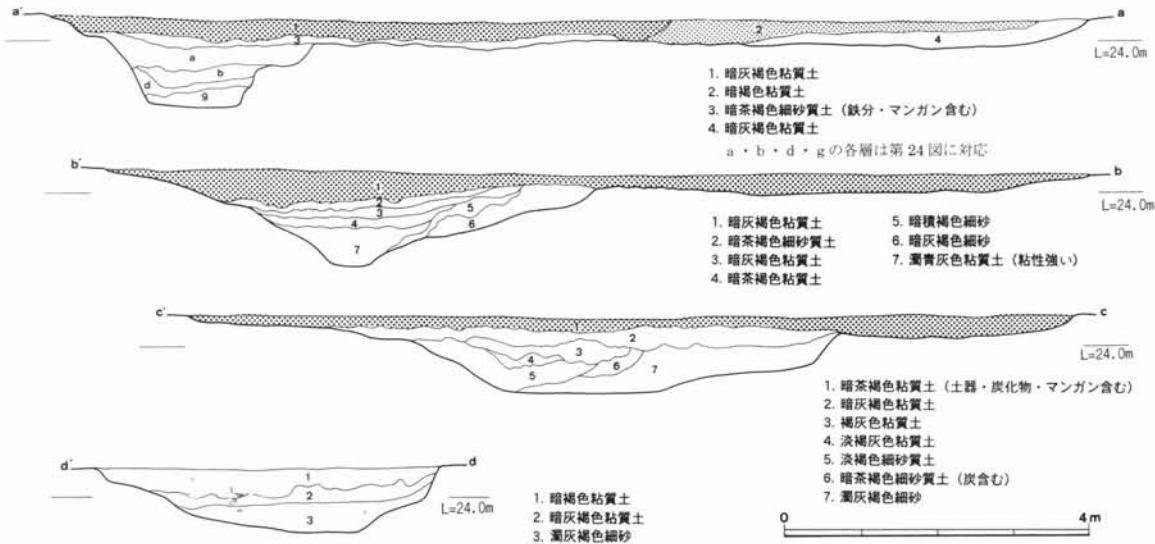
環濠S D03071(第28図) A地区西半部で、南東から北西方向にゆるやかに屈曲している。幅3.0～5.2m、深さ0.7～1.3mを測り、調査では総延長37m分を確認した。断面形は逆台形をなし、底面は平坦に近い。周濠の東岸は底面から急傾斜に立ち上がるが、西岸は弥生時代後期の遺構(沼地状の落ち込みS X03070)の影響を免れた調査区北西部で見ると、東岸と比較して立ち上がり傾斜はゆるやかである。



第28図 環濠S D03071・沼地状落ち込みS X03070平面図(黒丸は最下層出土土器)

環濠内・外縁での土手の存在は、平面および土層断面観察からも明確にできなかった。

溝内の等高線ラインをみると、ゆるやかに南東方向に下がっていく。埋土は基本的に2層(上・下層)に分けたが、上層は、弥生時代後期の沼地状の落ち込みS X03070に相当し、本来の環濠S D03071の埋土は下層のみである。細かく分層された下層は、粘土質と細砂質土が主で、流れを示すような砂礫はほとんど含まれない。一方、底面付近から集中して土器片が出土したこ



第29図 環濠S D03071(弥生時代中期)・沼地状落ち込みS X03070(弥生時代後期)網部断面図

とからこれらを最下層出土として、そのほかの下層中から出土したものは分けて取り上げた。ただし、現段階では両者に時期的な差異はほとんど認められないと判断している。溝の断面が逆台形で、底は平坦であることや、その内外に杭などの防御的な造作の痕跡がみられないことから、集落内の居住域と墓域を区切る意味合いの環濠であろう。

土器の出土量は非常に多い。下層と最下層に分けて掲示する。

(出土遺物)

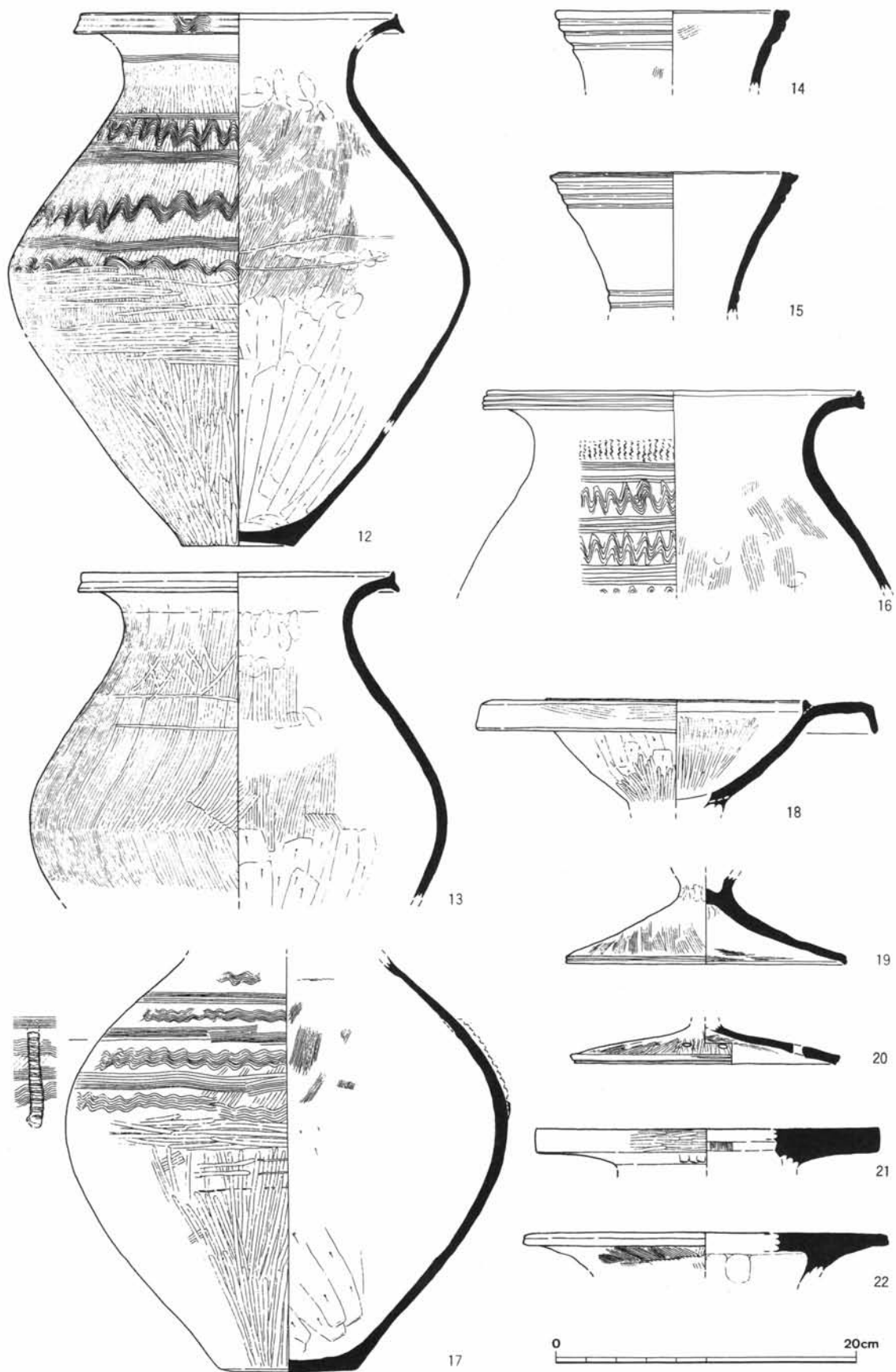
遺物はほとんどが土器で、石器が数点である。代表的なものについて、下層と最下層に分けて呈示し、説明していく。ともに弥生時代中期後半の畿内第Ⅳ様式のものである。なお、甕・壺・高杯・鉢形土器を口縁部・体部の形状で分類した。以下、中期の土器はこの分類で記している。

〈甕〉

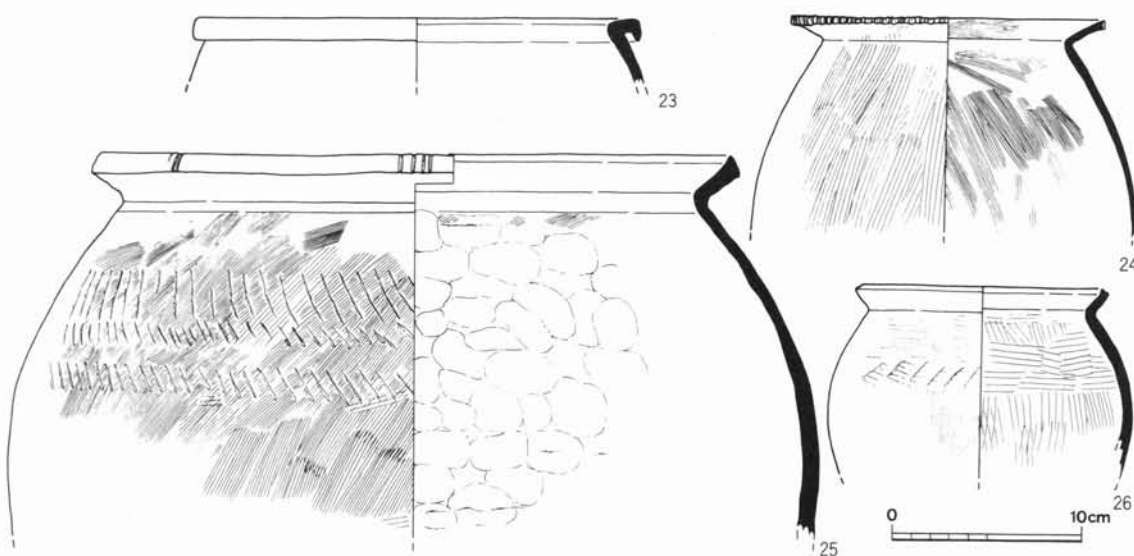
- 甕A1 「く」の字状口縁部をもち、端部に面なし。
- 甕A2 「く」の字状口縁部をもち、端部に面あり。
- 甕A3 屈曲する口縁部が内湾するもの。
- 甕A4 屈曲する口縁部をもち、端部を拡張させて面をなすもの。
- 甕B 屈曲する口縁部で端部を跳ね上げるもの。
- 甕C 口縁端部を拡張し端面が外傾する大型のもの。
- 甕D 屈曲する口縁部の端部が受け口状になるもの

〈壺〉

- 広口壺A1 口縁部が斜め上に大きく開き、端部拡張が見られず、狭い面をもつ。
- 広口壺A2 口縁部が斜め上に大きく開き、端部を上下に拡張し、垂直面や広い面をもつ。
- 広口壺A3 口縁部が斜め上に大きく開き、端部を下方に拡張し、垂直面や広い面をもつ。
- 広口壺A4 口縁部が斜め上に大きく開き、端部を上方に拡張して外傾する面をもつ。
- 広口壺A5 直立ぎみの頸部から口縁部が水平にのびて大きくひらき端部拡張がみられる。



第30図 環濠S D03071下層出土土器実測図1 (弥生時代中期)



第31図 環濠S D03071下層出土土器実測図2(弥生時代中期)

直口壺(壺B) 口縁部が直角近くに立ち上がる。

受口壺(壺C) 直に近く立ち上がる口縁部の中間より、受け口状に屈曲して開くもの。

水差形土器(壺D) 直口壺のなかで、口縁部の挟りや体部の肩に把手のつくもの。体部形は長胴形と算盤玉形(台付)のものがある。

無頸壺(壺E) 口縁部が外に短く屈曲するもの(E1)。口縁部が外に屈曲しないもの(E2)。

〈高杯〉

高杯A1 椀状に立ち上がる杯部をもつもの。

高杯A2 屈曲して直角近くに立ち上がる杯部をもつもの。

高杯B1 水平にのびる口縁部をもち、端部を垂下させるもの。

高杯B2 水平にのびる口縁部をもち、端部を垂下させない。

〈鉢形土器〉

鉢A 口縁が大きく開く扁球状の体部をもつもの

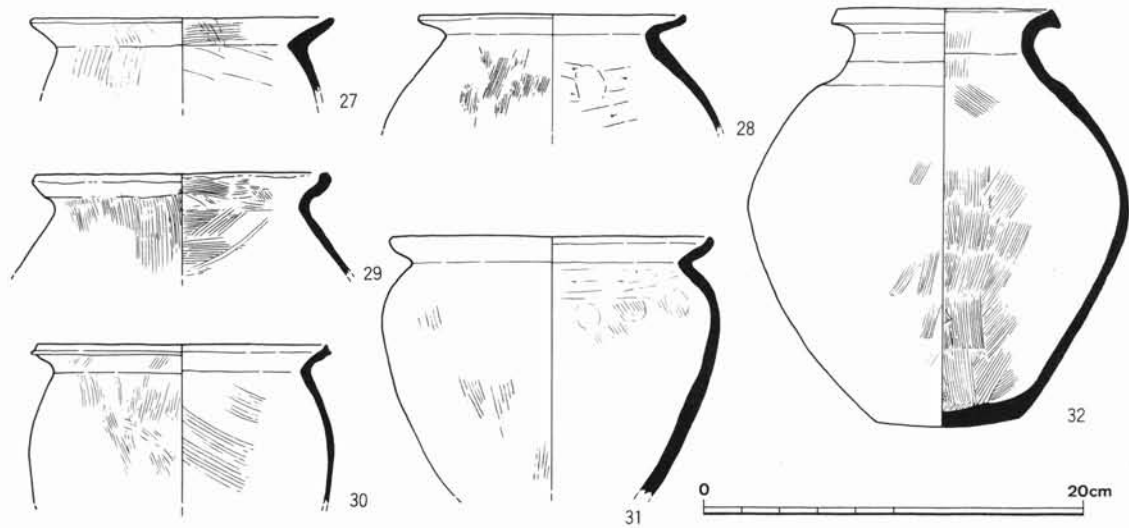
鉢B 甕形の口縁部をもち、張りのある短胴形のもの。

鉢C 口縁が大きく開き、外に短く屈曲する口縁部をもつ台付きのもの。

(出土遺物)

第30・31図12~26は、溝S D03071下層の出土である。12・13・16は、口縁部が斜め上方にゆるやかにのびる広口壺A2である。口縁端部に強いナデや凹線文が、そして体部には櫛描直線文・波状文がみられる。14・15は直口壺である。17は広口壺である。18は口縁部が水平にのび、端部を垂下させる高杯B1の杯部である。19・20は壺の蓋である。20には壺本体と紐でつなげるための小孔があげられている。

21・22は台形土器の断片である。平坦な台部を脚部から粘土を水平に補充拡張させて作り出している。一般的に台形土器は中期にほぼ限定されるようで、なおかつ完形品で出土する例は少ない。本例も破損品である。上面には使用痕(磨耗痕・圧痕など)はみられない。祀りの儀式などに



第32図 環濠 S D03071最下層出土土器実測図1 (弥生時代中期)

使用されたとみられる。23は無頸壺E1である。24～26は大小の甕である。24は「く」の字形口縁で、端部は細い面をもち、押圧による刻み痕がみられる。26は口縁端部を跳ね上げるタイプのものである。前者は丹後・北丹波において広く認められるもの、後者は外来的な要素をもつ。^(注21)

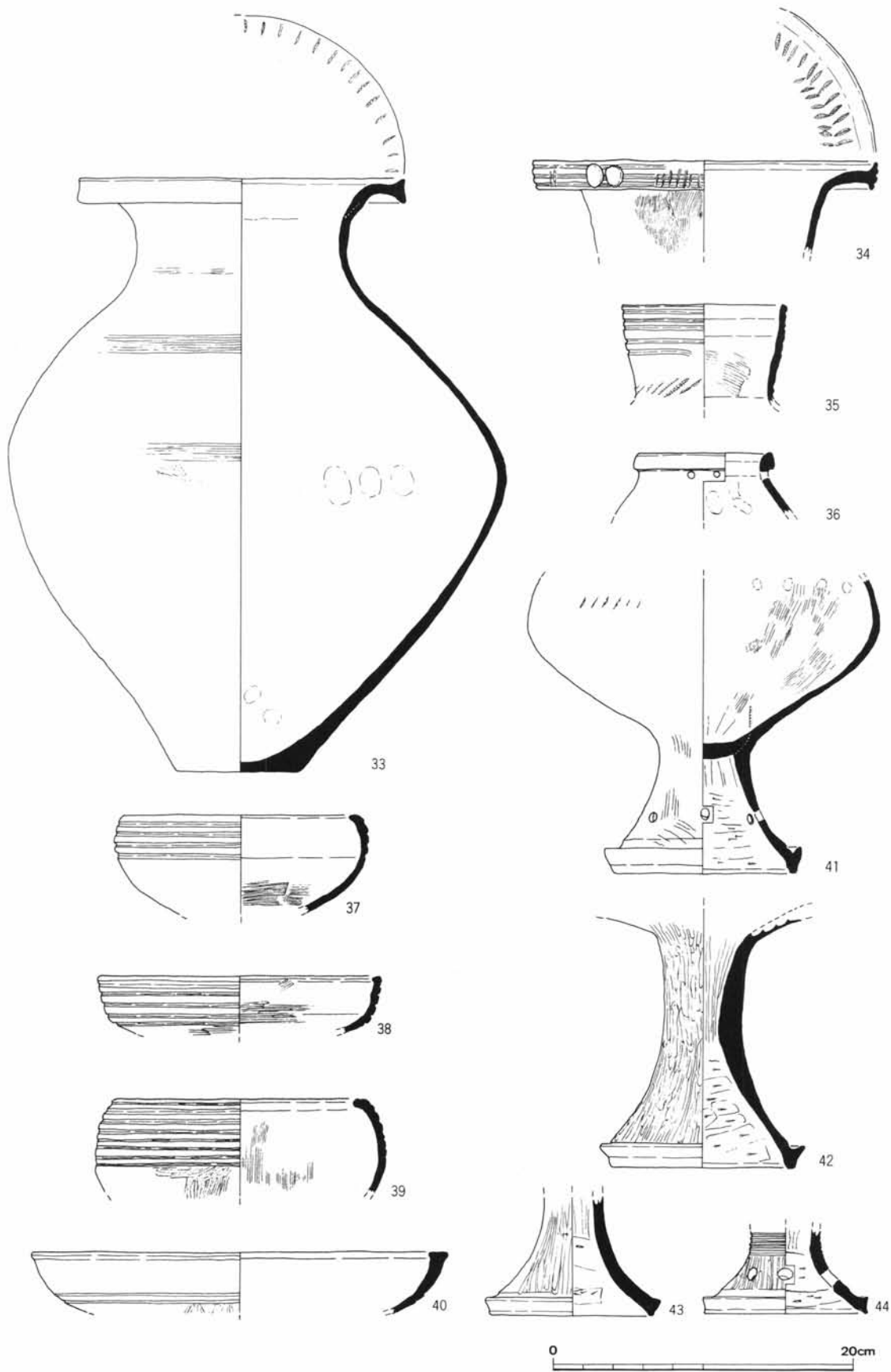
第32・33図27～44は、溝 S D03071最下層の出土である。27～30は甕である。「く」の字形口縁部で端部に面をもたない甕A1(27)、内湾する甕A3(28・29)、跳ね上げ口縁部をもつ甕B(30)が抽出される。31は短胴形の鉢Bである。32の短頸壺は、器壁が比較的厚くて無骨な作りである。33・34は広口壺A5である。口縁部が水平にまで大きく開き、端部を上下に拡張させたものである。口縁端面は33はナデで、34は3条の凹線文と円形浮文や直線文が施される。35は直口壺の口縁部である。36は口縁端部を折り返した無頸壺E1である。37・39は半球形の体部に凹線文が多用された無頸壺E2である。38・40は椀状の杯部をもつ高杯の断片である。41は無頸壺E2である。42～44は高杯や鉢、壺などの脚台部である。以上、畿内第IV様式でも後半～末の時期であろう。

最下層出土の石器は、215の頁岩製両刃磨製石斧、217の石錘片、228の敲石がある。敲石は255gを量る。

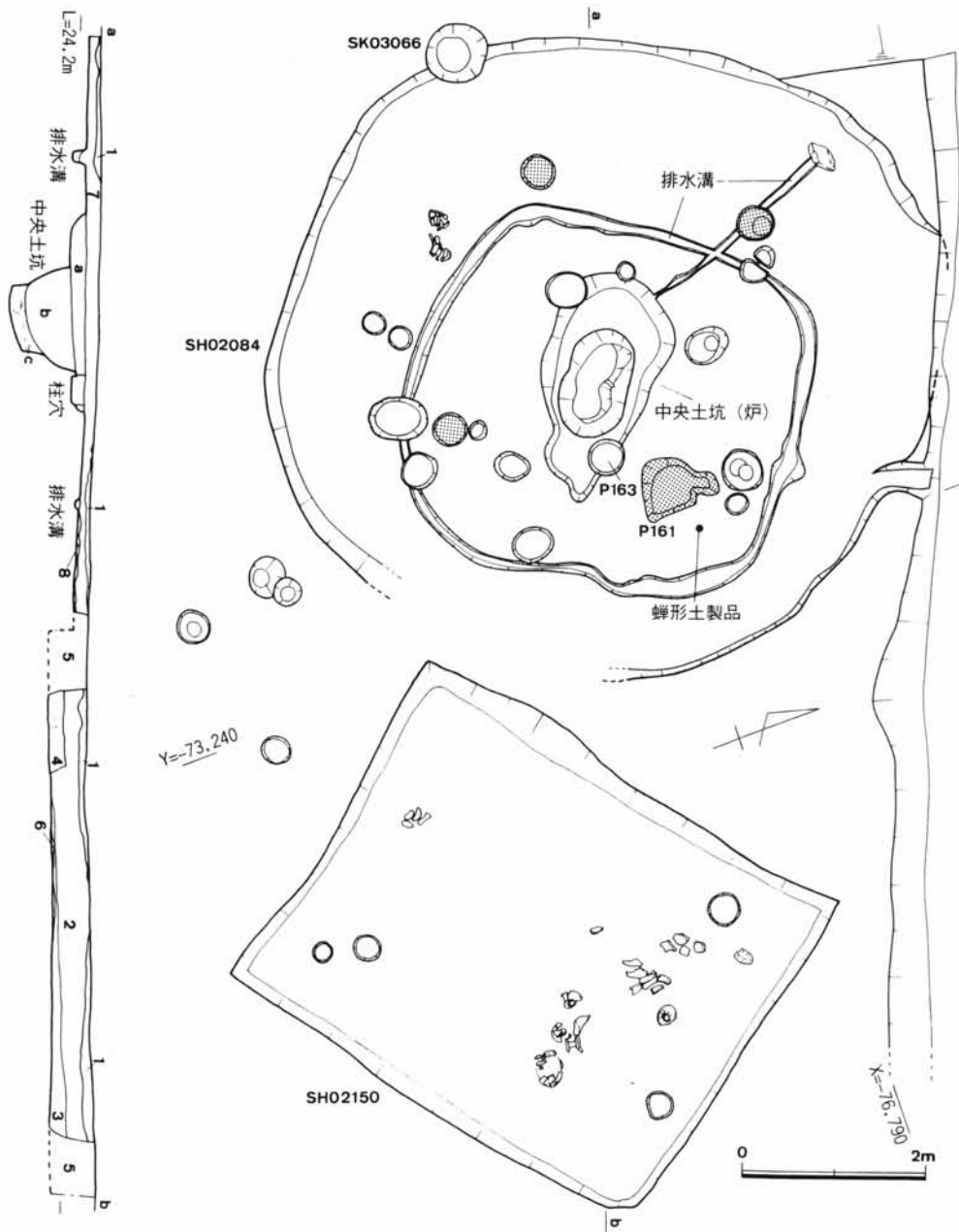
竪穴式住居跡 S H02084(第34図) 直径7.6m、残存の深さ約20cmを測る円形で、中央土坑・排水溝などの施設をもつ。弥生時代中期後半(畿内第IV様式)の土器や石器のほか、珍しい土製品(蟬形・銅鐸形)が出土した。出土遺物については、住居跡内の場所ごとに出土した遺物の器種と点数を一覧表で示した(付表5)。

(出土遺物)

45～60(第35図)の土器、205・207(第54図)の土製品、213・229(第55・56図)の石器がある。45・46・48・49は甕の口縁部である。49以外は跳ね上げ口縁形の甕Bである。47は直口壺(壺B)の口縁部である。50～53は体・底部である。54・55は扁球形の体部に跳ね上げ口縁部をもつ鉢Cである。56は無頸壺E1である。57は4条の凹線文が施された鉢Aである。58は脚の端部。59は円形透かしが巡る台付鉢の脚部であろう。60は篋描き沈線が施された脚台部である。



第33図 環濠 S D03071最下層出土土器実測図2 (弥生時代中期)

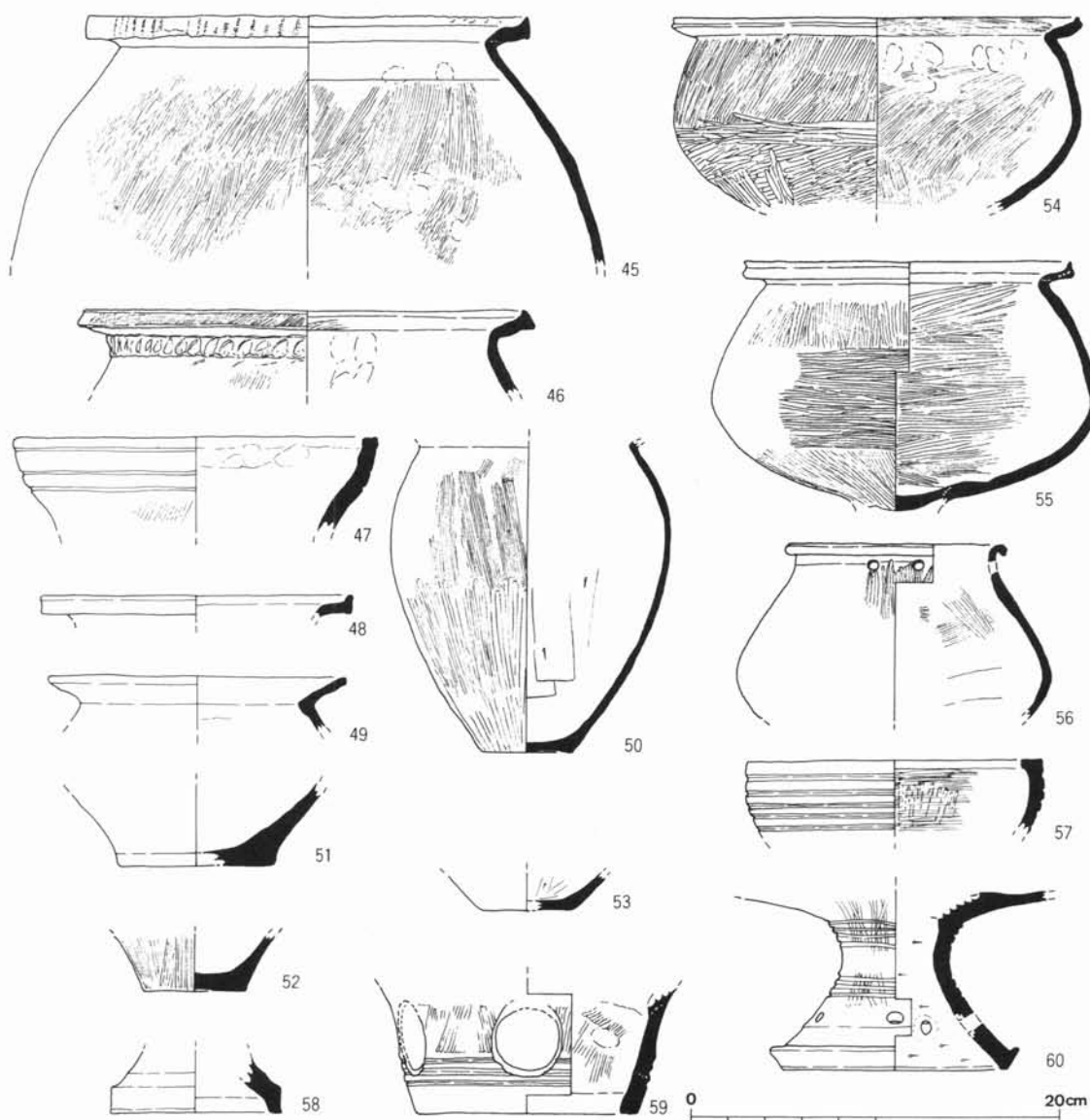


- 1. 暗灰褐色粘質土 2. 暗橙茶褐色粘質土 3. 暗灰茶褐色粘質土
- 4. 暗赤褐色粘質土 5. 暗濁黄褐色粘質土 6. 黄灰色砂質土
- 7. 暗茶褐色粘質土 8. 暗赤茶褐色土
- a: 淡黒褐色粘質土 b: 赤褐色粘質土 c: 淡茶褐色細砂
- a~b・炭化物・焼土多し。土器細片若干あり。

第34図 竪穴式住居跡SH02084・02150平・断面図(網部は支柱穴)

付表5 A地区竪穴式住居跡SH02084出土遺物一覧表 (器種区分は本文参照)

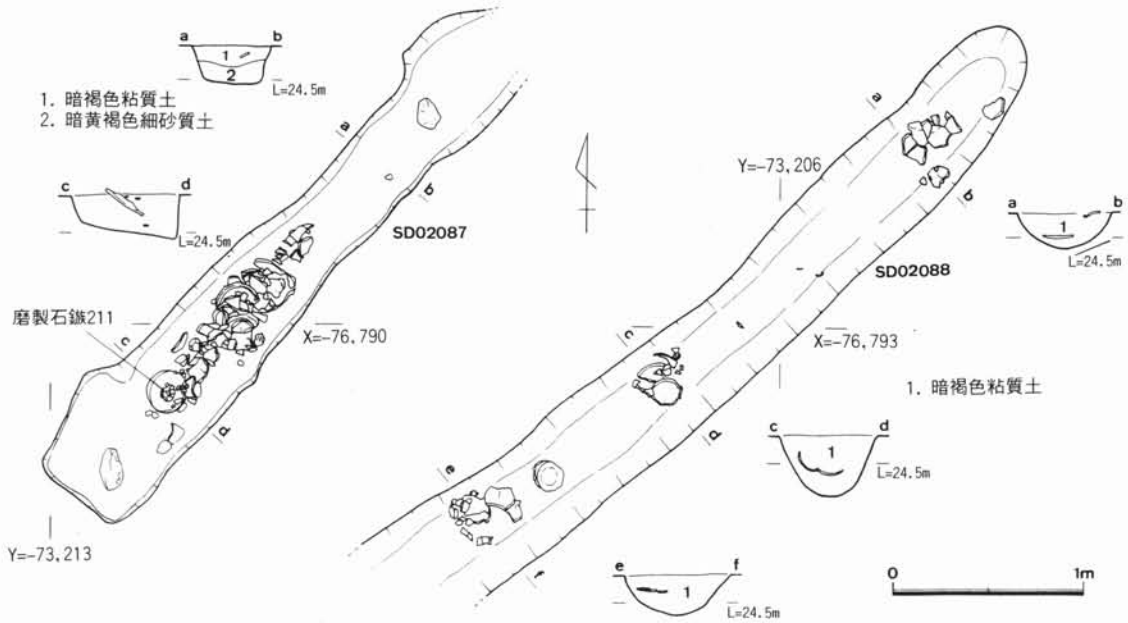
	甕					広口壺			壺C	壺D	壺D? 把手	壺E	壺F	鉢B	鉢C	底部壺・鉢	高杯		脚部	器台脚	台形土器	土製品	石器
	A1	A2	A4	B	C	A2	A3	A5									A	B					
柱穴	pit161										1					1	1						
	pit163																1						
中央土坑		1	1	1		1	1	1				2				2	1		1		1	1	敲石 1
底面		1	1	1	1									2	2	3	4	1	1				1
排水溝内																							
埋土中	4	3	1	3	1	2	2	1		1		1	1			7	5	5	5	1			1 石棒 1
合計	4	5	3	5	2	3	2	2	1	1	1	3	1	2	2	13	12	6	7	1	1	1	2



第35図 竪穴式住居跡 S H 02084出土弥生土器実測図

蟬形土製品(205)は住居底面で出土した。楕円形の完形品で、横断面は弧を描いて裏面が凹む。細かな線刻で眼・胸部の翅・筋状の腹部などが表現されている。線刻の幅は約0.8mmと細く、先端の鋭利な工具によるものであろう。まず、左右の翅の表現のようにみえる斜線と、縦線が引かれ、つづいて眼さらに横線が施される。最後にもう一度、長い縦線が4本引かれた結果、中央部は綾杉状の表現となった。裏面には何の線刻もなく、未調整のままである。滑らかな曲線は何かに沿わせていたかのようなのである。長さ6.1cm、幅2.8cm、高さ1.4cm、厚さ0.8cmで、重さ22.9gを量る。住居跡の底面から出土した。類例がない現状の中で、全体から受ける印象から昆虫の蟬としたが、今後とも慎重に検討していきたい。

銅鐸型土製品(207)は、土層観察用の畦内から出土した断片である。鐸身部のつまみ出しにより表現された鱗や粗い波状文がみられる。残存高さ2.4cm、残存径3.9cm、残存重さ24.4gである。銅鐸形土製品は京都府内では、弥栄町奈具岡遺跡^(注22)、長岡京市神足遺跡^(注23)などで出土している。銅鐸



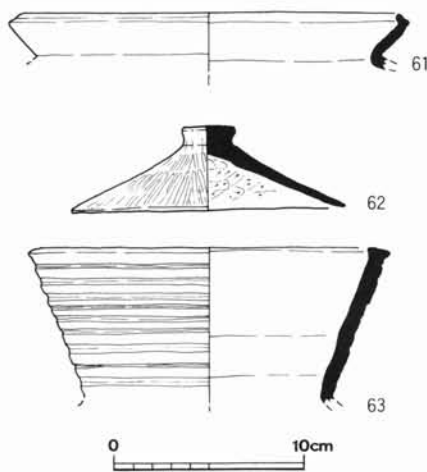
第36図 溝S D02087・02088平・断面図

と同様、祭祀用具と考えられるが、一方、今回のように集落内で他の遺物とともに出土すること
も多いことから、銅鐸とは異なる用途も考慮される。

213の石器は、磨製石棒の断片である。全体がよく研磨され、両側面に面取りがのこっている。
残存長13.2cm、幅4cm、厚さ2.6cmを量る。暗青褐色の頁岩ないし粘板岩製である。229は側縁に
敲打痕をもつ敲石である。175gを量る。

溝S D02087・02088・02122・02104(第23・36図) 溝状遺構は4条ある。断面形は溝S D
02087・02122が逆台形ながら底は傾斜している。溝S D02104は浅く、底は平坦面となっている。
溝S D02088は「U」字形で、底は平坦面をもたない。溝S D02087には壺・甕をはじめ土器の出
土が多く、また、磨製石鏃(211)も出土している。なお、溝S D02087・02088・02122は、長方形
区画を形成するようにもみえ、小規模ながら墓や祭祀的な場である可能性もある。

(出土遺物)



第37図 溝S D02122出土弥生土器実測図

第37・38図に示した。61~63は溝S D02122、64~75
は溝S D02087、76~81は溝S D02088から出土した。

61は跳ね上げ口縁の甕Bである。62は外面にいていねい
なミガキが施された蓋である。63は直口壺(壺B)の口縁
部である。全体に凹線文がひかれる。

64・65は広口壺A5で、急傾斜で上方にのびる口縁部
で、端面は上下に拡張されてナデ(61)や凹線文(62)が施
される。66・67は「く」の字形口縁部で端面に面をもつ
在地系のものである。68は甕の体部下半~底部断片であ
る。69は台付無頸壺E2である。5条の凹線文および2
個セットの小孔がみられる。70は上面が平坦となってい

付表6 A地区弥生時代中期土坑一覧表

土坑番号 (SK)	平面形	断面形	長軸	短軸	深さ	挿図番号
02013	楕円	平	2.70	1.40	0.10	
02055	楕円	U	0.60	0.40	0.10	
02062	不定形	U	0.90	0.50	0.10	
02065	長楕円	凹凸	3.00	0.75	0.15	
02066	円	平	0.35	0.35	0.10	
02075	不定形	U	2.20	1.20	0.20	
02091	楕円	平	—	1.15	0.37	
02096	楕円	U	2.10	0.80	0.15	
02099	不明	平	—	—	0.28	
02100	楕円	U	1.15	0.90	0.35	
02102	楕円	平	1.85	1.30	0.17	
02103	円	平	1.30	1.27	0.10	
02105	楕円	U	0.70	0.55	0.10	
02108	円	傾・凹凸	1.90	1.70	0.78	
02109	不明	平	—	—	0.20	
02111	楕円	平	2.45	1.52	1.40	
02112	楕円	平	2.25	1.00	0.58	
02113	楕円	U	0.70	0.43	0.20	
02115	不明	平	—	0.90	0.45	
02116	不定形	平	2.80	2.70	0.30	
02118	円	傾	1.70	1.70	0.15	
02119	円	傾・凹凸	1.42	1.32	0.65	
02125	不定形	平	—	1.40	0.12	
02129	円	平	0.40	0.40	0.10	
02131	楕円	U	1.80	0.80	0.30	
02146	長楕円	平	1.95	0.55	0.23	第39図
02147	円	U	0.58	0.55	0.22	
02151	楕円	平	1.10	0.50	0.18	
02157	不定形	平	1.60	0.70	0.15	
02159	円	平	0.52	0.50	0.17	
02170	楕円	U	0.90	0.70	0.20	
02173	楕円	U	1.10	0.50	0.12	
03065	不定形	U	1.20	0.95	0.40	第39図
03070	不明	平	—	—	0.10	
03087	楕円	凹凸	1.30	1.10	0.65	第40図
03088	楕円	平	1.20	0.85	0.20	第40図
03089	楕円	傾	1.10	0.90	0.35	第39図
03090	楕円	凹凸	1.60	1.35	0.65	第40図
03093	不明	平	—	—	0.25	〃
03095	不定形	U	1.90	1.50	0.45	〃
03096	不定形	平	1.80	1.40	0.60	〃
03100	不明	平	—	0.80	0.66	〃
03102	不明	平	—	—	0.50	〃
03105	不定形	平	2.70	1.85	0.10	第41図
03127	不明	U・傾	—	—	0.25	第39図
03139	楕円	U	1.60	1.00	0.20	

備考：断面形は底の形状を示す。平→平面、U→U字形、傾→傾斜面をもつ、凹凸→凹凸の面をもつ略。
 数値は、それぞれの深さの最大値を示す。単位m。

る蓋である。71は短く開く口縁端部をもつ鉢Cである。72は、杯部が途中で角度をかえて立ち上がる高杯A2である。73は高杯B1の杯部である。74・75は脚台部である。76は扁球形の無頸壺E2で、凹線文および小孔がみられる。77は小型の鉢である。78は跳ね上げ口縁の甕Bである。79

付表7 A地区弥生時代中期土坑内出土土器一覽表(器種区分は本文参照)

土坑番号 (SK)	甕				大口壺					壺B	壺C	壺D	壺E	壺F	細頸壺	不明	底部	高杯				鉢			脚部	器台	蓋	台形土器	多孔土器	完形品	土器破片数	備考		
	A1	A2	A3	A4	A5	A1	A2	A3	A4									A5	A1	A2	A?	B1	B2	B?									A	B
02013	1																		1	2				3					11					
02055																		2											11					
02062	1																1						2						30					
02065	1																1												54					
02066	1																2						1						101					
02075	1																2												46					
02091	8	3	5	2		6	3			1						2?	1	2					17	3	2	1	1	1	410					
02096						3	1	1	3	1						1							4	1	1	5		1	210					
02099																													15					
02100										1													1						26					
02105											1																		8					
02102	3					1				1						1							7	2	1	1	2	1	1	190				
02103	2	1	1																				5	3		1	2		86					
02108	2	17	1	8						1	2					1	1	1				12	14	7	2		2	1	6	3	13	1	1062	断面三角 突帯の壺 頸部片
02109	2									1													2						24					
02111	3	13	3	3	14	1	2	2	8	4	1	4	1		5	1	4	1	1			27	11		4	6	2	2	13	1	2	1089		
02112	1	6	1	4					1	4	1	3	1		2	1	1					14	4	1	6			1	2			379		
02113																													22					
02115	1	2	1	3	1											1	5	1				7						6	2	1		204	銅鑄形土 製品1	
02116	1	2																				3				1	1					116		
02118	2																											1				20		
02119	2	7	2	8	3				5	1												1	6	1	1	2	1	1	6	1		312		
02125	1	1														1	1	1				3	3	1				1				116		
02129	1	1																														11		
02131	1																										1					19		

02146																							1						29								
02147	1	1																							1				23								
02151	1	2																											133								
02157	1																												36								
02159	1	5																									2		57								
02170															1														8								
02173																													37								
03065	2	2																								1			45								
03070	1																												3								
03087	1																										1		15								
03088															1														6								
03089															1														30								
03090	1	1																								1			148								
03093	4																												43								
03095	1	1																											34								
03096	1	1																											325								
03100	1	2																									2	4	325								
03102	1	1																											84								
03105	1	3																											69								
03127																													15								
03139																											2		36								
合計	25	94	11	6	77	9	2	7	38	13	8	10	9	2	16	9	14	3	1	6	153	53	17	12	36	3	13	5	19	10	97	5	9	7	1	1	16073

は「く」の字形口縁甕で、端面に押圧による刻みをもつ。80は円形透かしをもつ台付鉢である。81は甕の底部である。

磨製石鏃211は粘板岩製で、長さ5.7cm、幅1.9cm、厚さ0.5cmで、重さ6.5gを量る。

土坑(第39～41図) 土坑は合計46基を検出した。8基の土坑が相互に切りあい関係をもち溝のように連なった土坑(S K 03087・03088・03090・03093・03095・03096・03100・03102)、円(楕円)形・不定形土坑(S K 0365・0389・03105・03127・03146)などがある(附表6)。

規模・平面形には差異があり、残存の深さは10cm以下のものから1mを超えるものまでである。土坑S K 02101は今回みつかった土坑中、最深のもので1.4mもある。逆台形の断面で、底は平坦となっている。氷室を思わせるようなもので貯蔵穴であろう。

さらに単独よりも切り合い関係を持つものが多い。底面の状態は、平坦なもの、「U」字形のもののほか、傾きや凹凸をもつものが多い点も特色である。また、土器の出土状況は、土坑底に限らず、中層および検出上面にも多くみられる。土器の完形率はきわめて低く、接合により80%以上が復原されたものは、土坑S K 03095の甕1点のみである。そのほかは数cm大の細片が圧倒的に多く、それらのなかに完形度40～50%の破砕品が目につく状況である。

円(楕円)や方形の整った平面形態をもつもの、底面が平坦なもの、複数の切りあい関係をもたないもの、完形度の高い土器の安置や副葬品的な遺物をもつものなどが、土壙墓としての可能性を高める要素と考えるが、これらの要素の一部しか満たさないものがほとんどである。土坑S K 02102・02115・03096・03100などのように、元来は土壙墓であったとみられるものも若干あるが、現状で判断する限りにおいて、破損した土器を数回にわたって廃棄した状況を示している。また調査地内に良質粘土の包含はなく、粘土採掘坑の性格も考えられない。

出土土器の器種をみると、台形土器や多孔土器などの特殊なものもごく少量あるが、日常的に使用された器種が高率で揃っている。かつては貯蔵穴であったものが、最終的に廃棄土坑としてその役割を終えた姿であろう。

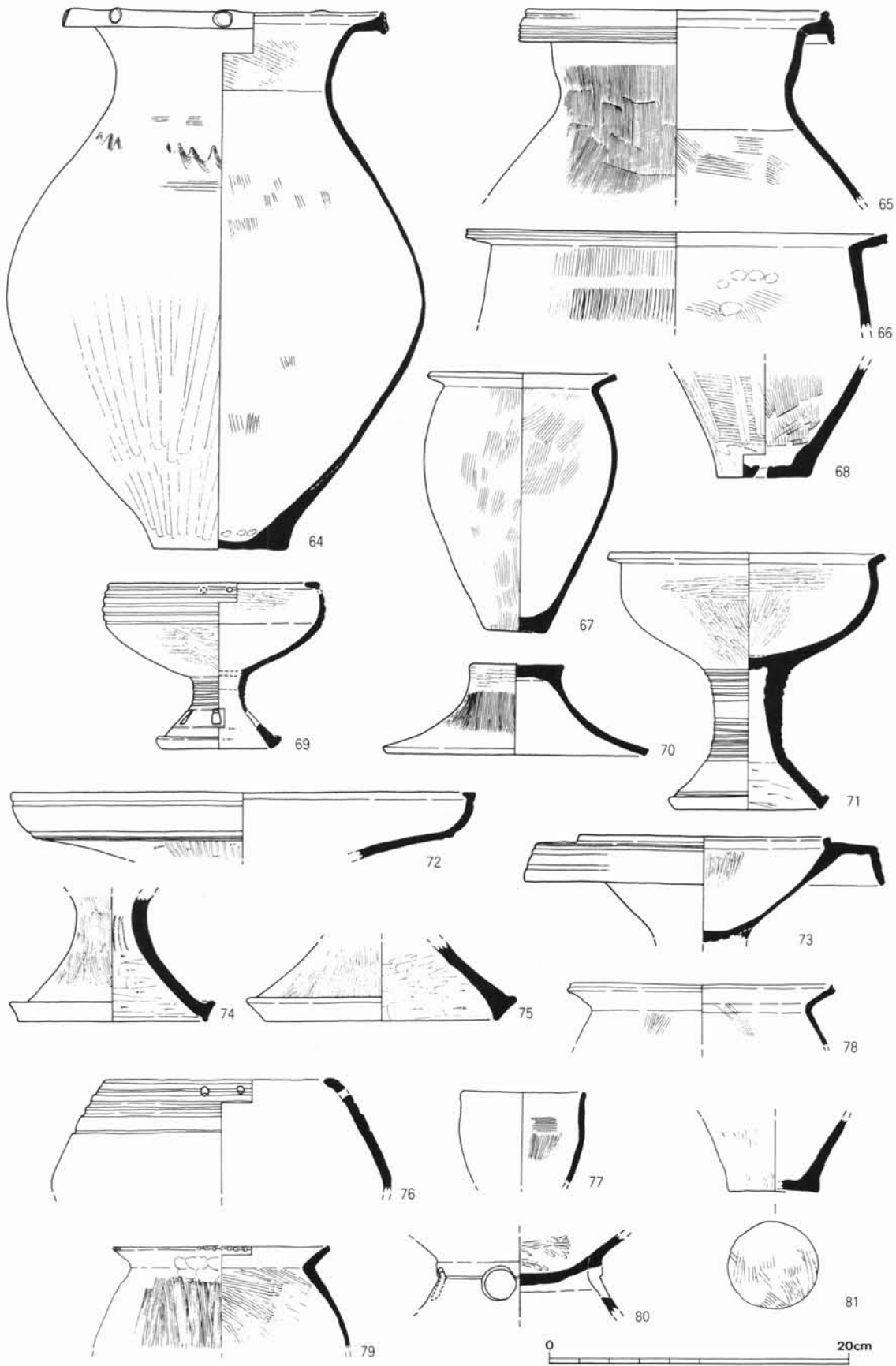
(出土遺物)

各土坑内から出土した土器の点数および器種の内訳は、附表7に示した。土器の胎土は長石・チャートの粒が多く混じり、ざらつく手触りのもの、色調は暗赤褐色や橙褐色のものが多い。これらは当遺跡の土器胎土の特徴といえる。以下、各土坑から出土した遺物を説明していきたい。

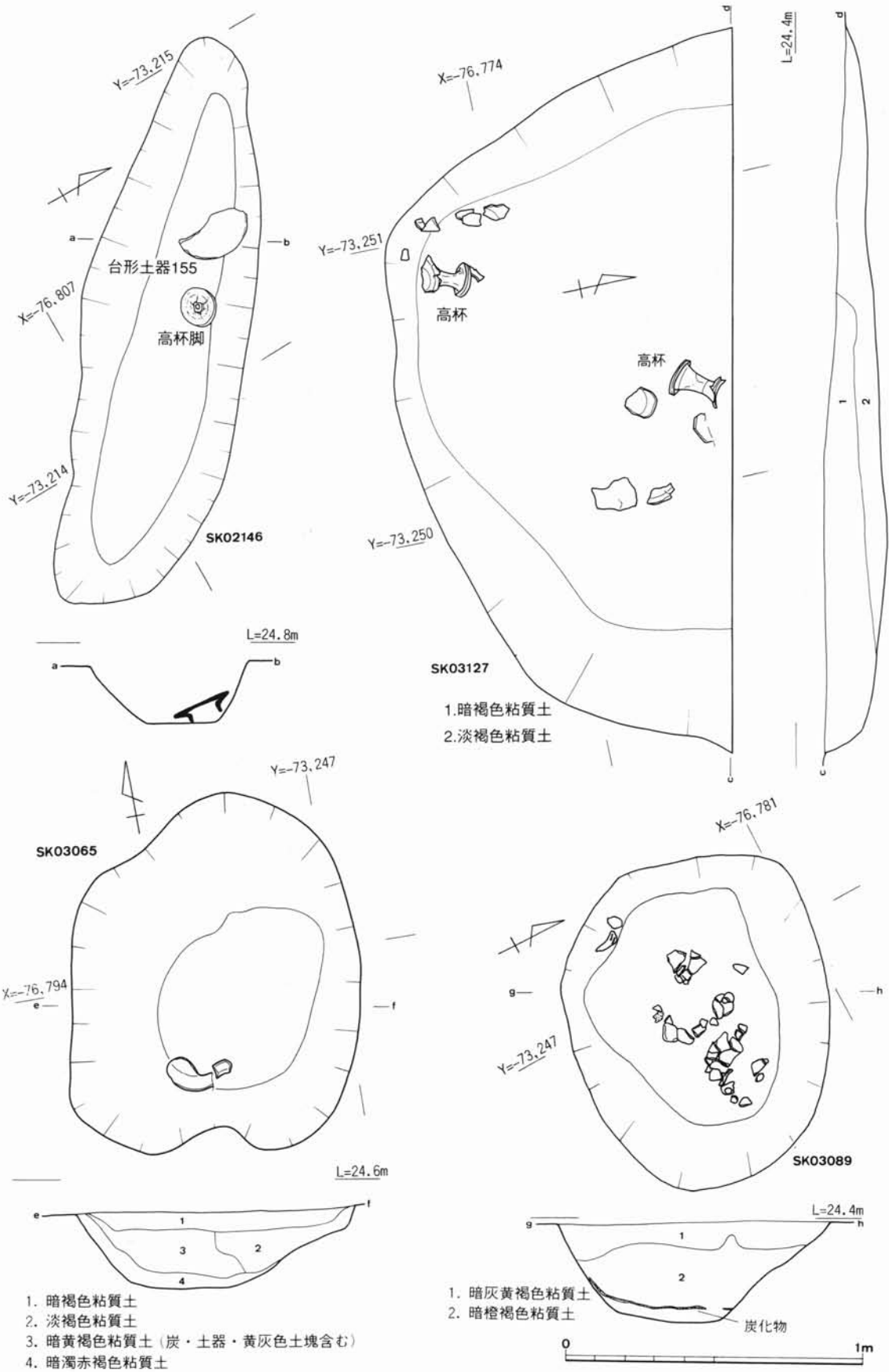
土坑S K 02013出土遺物(82) 82は、水平にのびる口縁部の端部が垂下する高杯B1である。ほか甕A2の断片と高杯A2が1点ずつと、高杯B1がもう1点出土している。

土坑S K 02066出土遺物(83～87) 83は広口壺A4である。口縁部～頸部の破片で、口縁端面に櫛描波状文が施される。84は直口壺の口縁である。85はおそらく甕の底部。86は体部の張る短胴の大型鉢Bである。口縁端部は拡張がみられ、外傾する端面をもつ。87は短い「く」の字状口縁部をもち、端面が外傾する大型の甕Cである。端面に2状の凹線文が施される。体部外面は板状工具によるハケ状のナデ磨きがみられる。

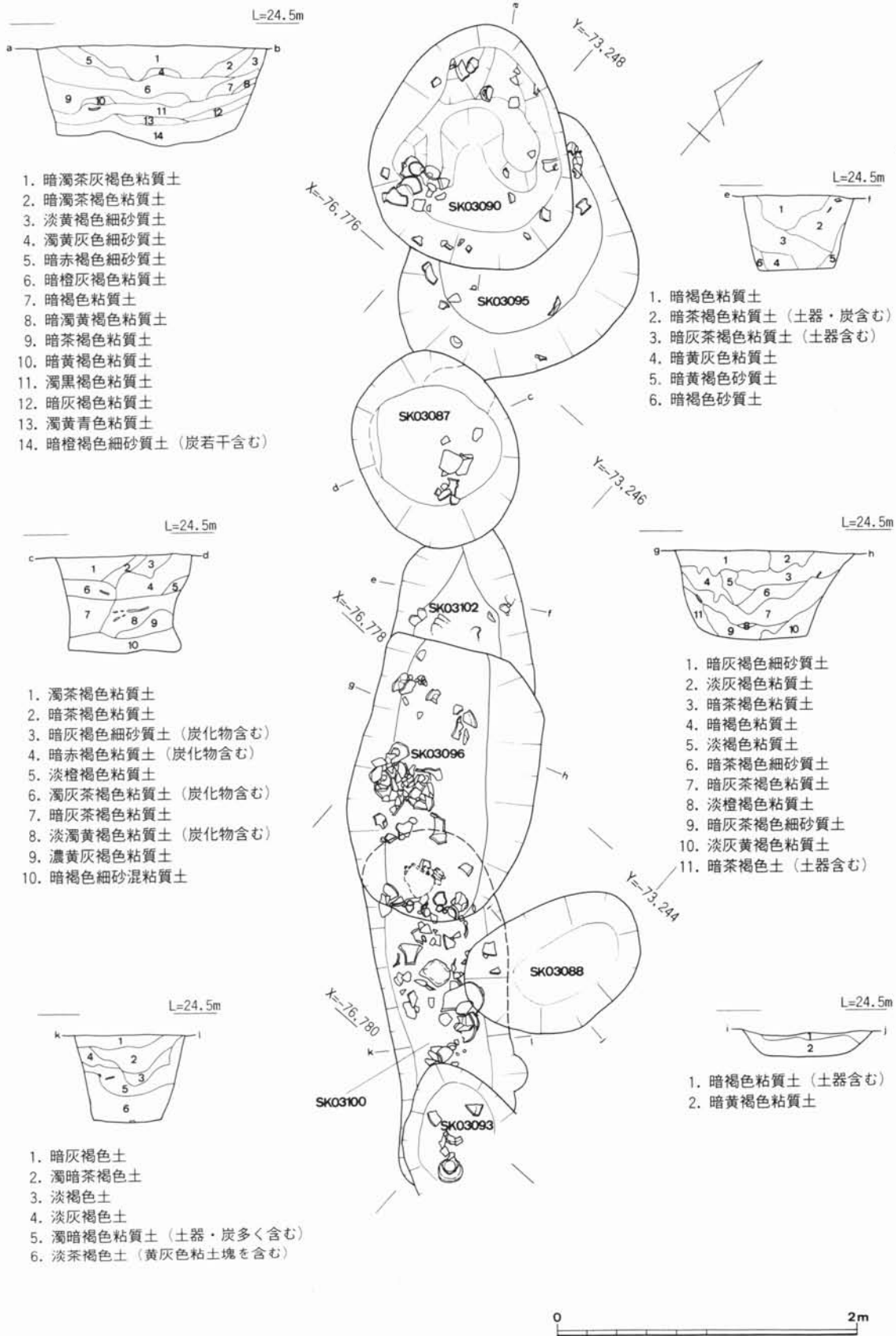
土坑S K 02075出土遺物(88) 甕Cの上半部である。「く」の字状口縁部で、端面につよいナデ



第38図 溝 S D02087・02088出土土器実測図(弥生時代中期)



第39図 土坑平・断面図1 (弥生時代中期)



1. 暗濁茶灰褐色粘質土
2. 暗濁茶褐色粘質土
3. 淡黄褐色細砂質土
4. 濁黄灰色細砂質土
5. 暗赤褐色細砂質土
6. 暗橙灰褐色粘質土
7. 暗褐色粘質土
8. 暗濁黄褐色粘質土
9. 暗茶褐色粘質土
10. 暗黄褐色粘質土
11. 濁黑褐色粘質土
12. 暗灰褐色粘質土
13. 濁黄青色粘質土
14. 暗橙褐色細砂質土 (炭若干含む)

1. 暗褐色粘質土
2. 暗茶褐色粘質土 (土器・炭含む)
3. 暗灰茶褐色粘質土 (土器含む)
4. 暗黄灰色粘質土
5. 暗黄褐色砂質土
6. 暗褐色砂質土

1. 濁茶褐色粘質土
2. 暗茶褐色粘質土
3. 暗灰褐色細砂質土 (炭化物含む)
4. 暗赤褐色粘質土 (炭化物含む)
5. 淡橙褐色粘質土
6. 濁灰茶褐色粘質土 (炭化物含む)
7. 暗灰茶褐色粘質土
8. 淡濁黄褐色粘質土 (炭化物含む)
9. 濃黄灰褐色粘質土
10. 暗褐色細砂粘質土

1. 暗灰褐色細砂質土
2. 淡灰褐色粘質土
3. 暗茶褐色粘質土
4. 暗褐色粘質土
5. 淡褐色粘質土
6. 暗茶褐色細砂質土
7. 暗灰茶褐色粘質土
8. 淡橙褐色粘質土
9. 暗灰茶褐色細砂質土
10. 淡灰黄褐色粘質土
11. 暗茶褐色土 (土器含む)

1. 暗灰褐色土
2. 濁暗茶褐色土
3. 淡褐色土
4. 淡灰褐色土
5. 濁暗褐色粘質土 (土器・炭多く含む)
6. 淡茶褐色土 (黄灰色粘土塊を含む)

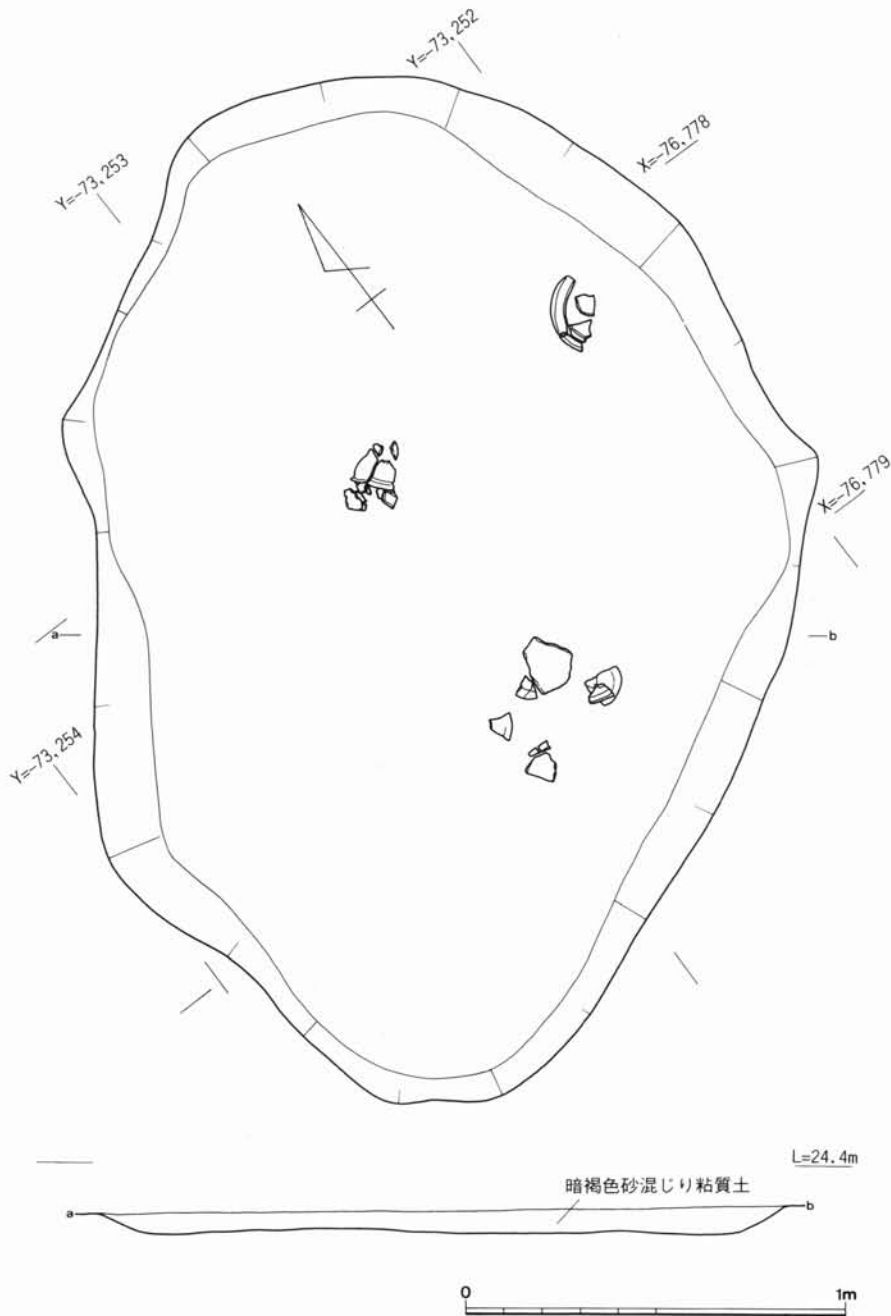
1. 暗褐色粘質土 (土器含む)
2. 暗黄褐色粘質土

第40図 土坑平・断面図2 (弥生時代中期)

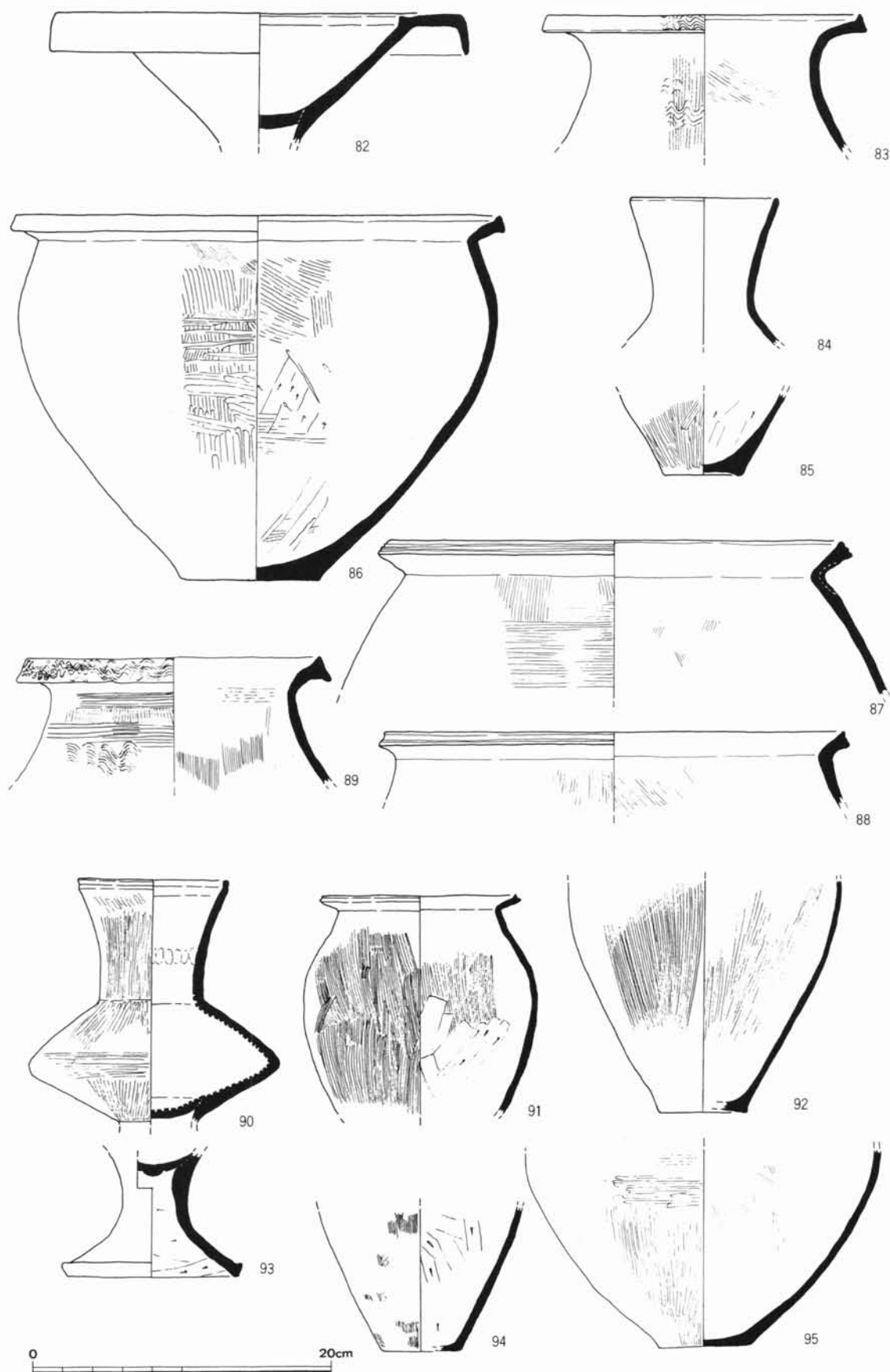
がかかり、2条の凹線文が施される。ほかに、広口壺A2、高杯B1の断片が1点ずつある。

土坑S K 02091出土遺物(89~98) 89は広口壺A2で、上下に拡張する口縁端面や頸部に櫛描波状文・直線文がみられる。90は、算盤玉形の体部をもつ長頸壺である。93は脚柱部である。90とは接合しない。91は、跳ね上げ口縁を有する甕Bである。92・94・95は、壺および甕の体部下半部である。96は把手付きの高杯A1である。体部上半部から口縁端部にかけて4条の凹線文や外面の精緻なミガキ痕がみられる。97は広口壺A2で、端面を拡張し垂直の広い面を形成する。98は斜め上に大きくのびる杯部をもつ高杯である。

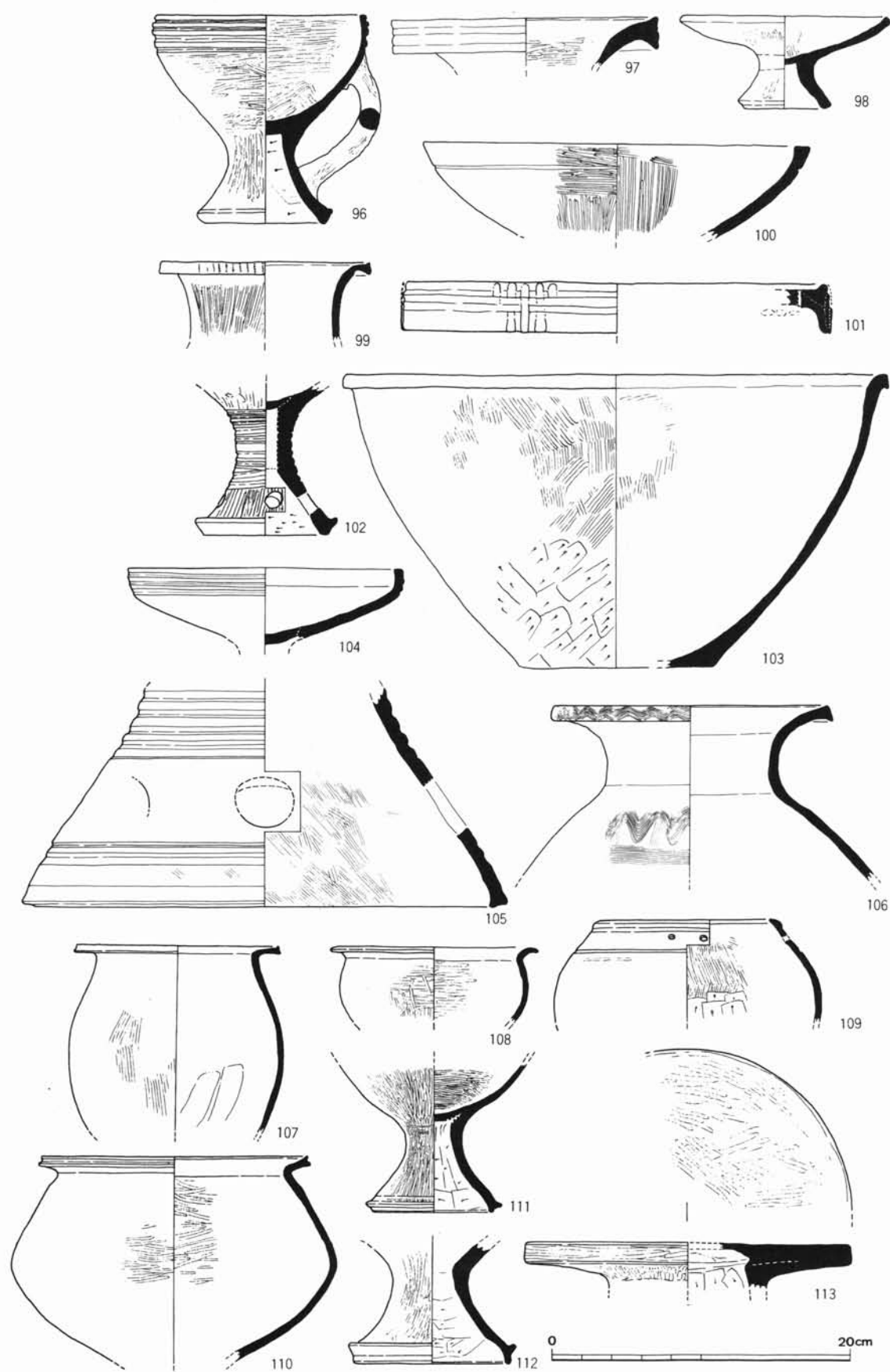
土坑S K 02096出土遺物(99~103) 甕は跳ね上げ口縁のものが7点ある。甕における他形態は



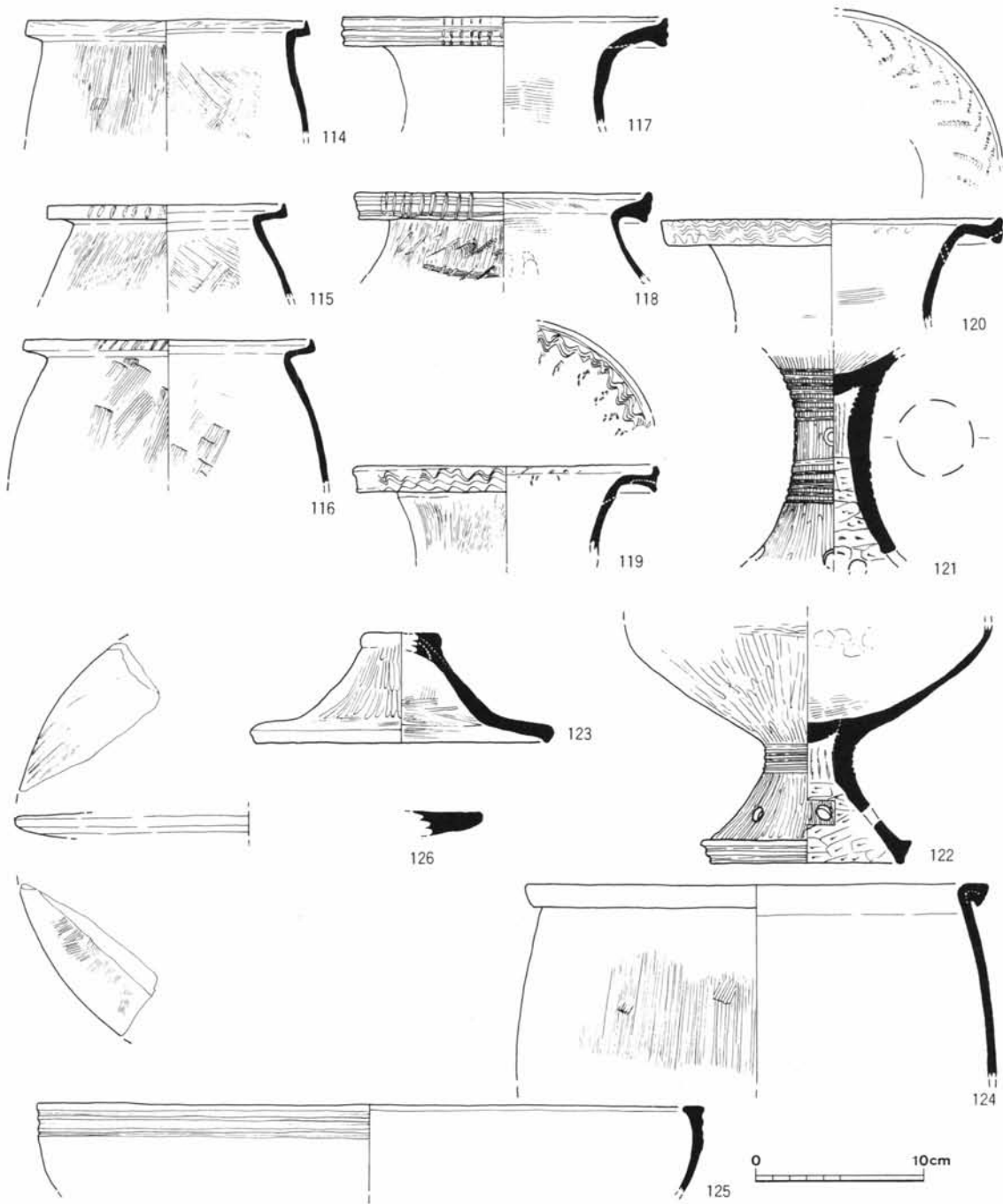
第41図 土坑(S K 02105)平・断面図3(弥生時代中期)



第42図 土坑出土土器実測図1(弥生時代中期)



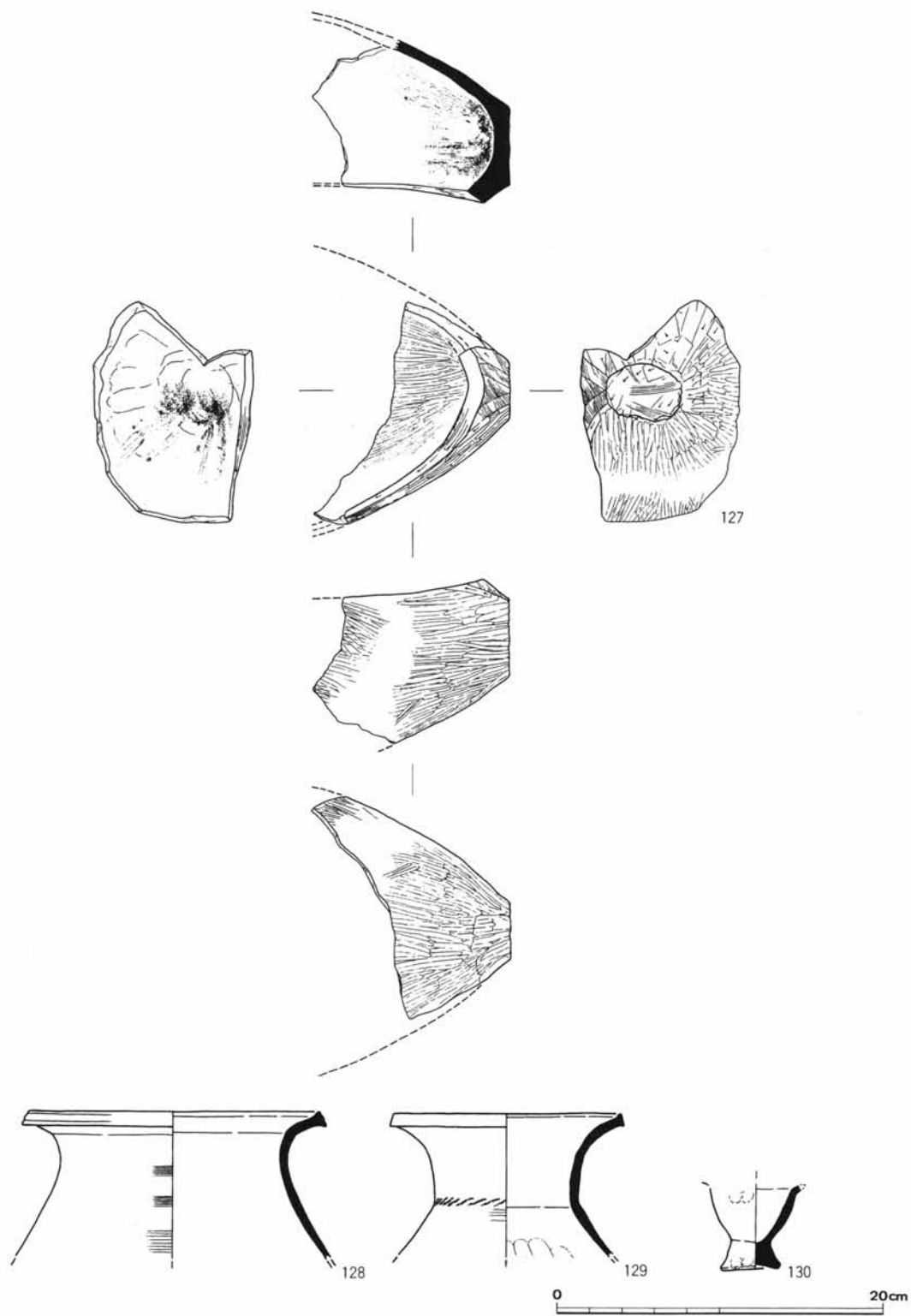
第43図 土坑出土土器実測図2 (弥生時代中期)



第44図 土坑出土土器実測図3 (弥生時代中期)

見当たらず、甕Bが突出している。珍しい台形土器を伴っていることも特筆される。99は広口壺A5である。直に立ち上がる頸部から端部が短く水平に開き、拡張された端面に直線文がみられる。100は、椀状の杯部をもつ高杯A1である。101は広口壺A3である。口縁端部を上下に拡張して垂直な広い面に凹線文や棒状浮文がみられる。102は高杯の脚柱部である。103は、体部が丸みを帯びて大きく開き、口縁端部を短く屈曲させた大型の鉢である

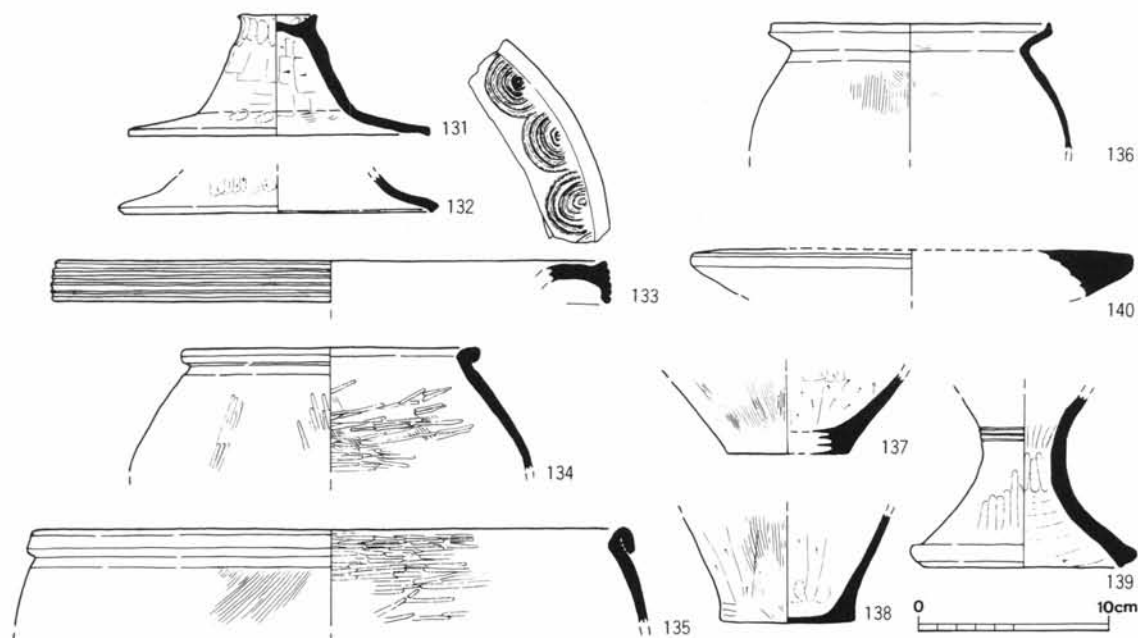
土坑S K 02102出土遺物(104) 高杯A2の杯部である。椀状で口縁部に4条の凹線文がある。円板が充填されている。



第45図 土坑(S K 02112)出土土器実測図4(弥生時代中期)

土坑S K 02103出土遺物(105) 大型器台である。明瞭な凹線文が施され、中間部の凹線文の引かれない部分に円形の透かしがあげられている。

土坑S K 02108出土遺物(106~113) 106は、口縁部が斜め上方にのびる広口壺A2である。107



第46図 土坑(S K 02115)出土土器実測図5(弥生時代中期)

は口縁端面に強いナデをかけるとともに、端部を跳ね上げた甕Bである。108は外反する口縁端部をもつ鉢Bである。109は無頸壺E2である。110は、扁球形の体部と甕状の口縁部をもつ鉢Cである。111・112は高杯の脚部である。113は、台形土器の平坦面をもつ上部断片である。

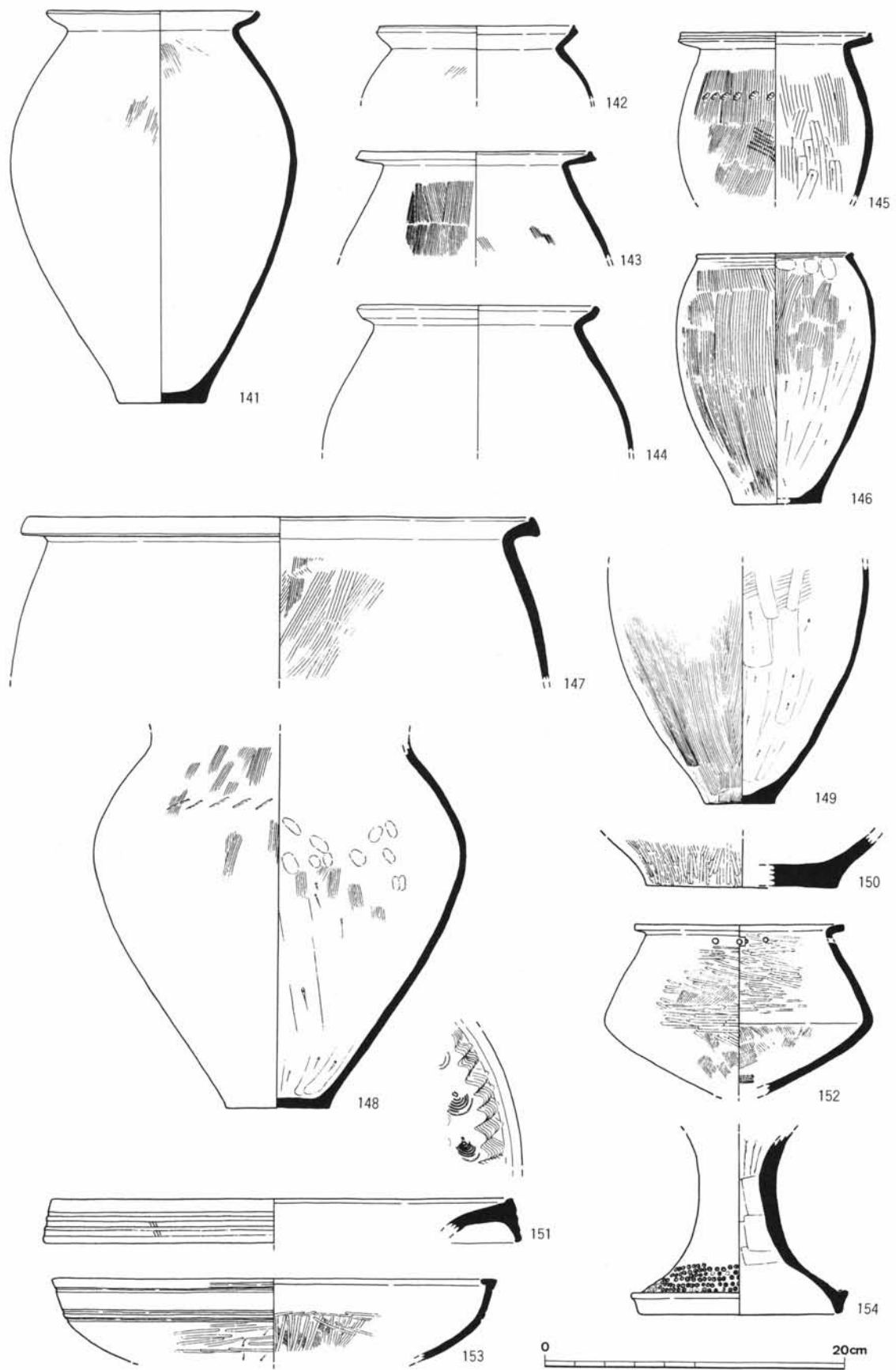
土坑S K 02111出土遺物(114～126・212) 甕Bの割合が高いことが指摘できる。114～116はそうした口縁端部を明瞭に大きく跳ね上げた甕である。広口壺は別個体とみられる口縁部が19点ある。117～120は広口壺の頸部から口縁部の断片である。117・118は口縁部端面に凹線文と直線文が、119・120には端面に櫛描波状文、さらに水平にのびた口縁内側にも波状文および櫛先押圧による列点文が施されている。121は脚柱部である。122は台付鉢である。123は蓋である。124は無頸壺E1である。口縁端部を短く折り返している。125は椀状杯部をもつ高杯A1である。126は台形土器の断片で、脚部を欠く。

石器には、212の打製石鏃がある。中間部から基部にかけて、直線的になるもので、長さ4.8cm、幅1.7cm、厚さ0.4cmで、重さ6gを量る。安山岩製である。ほか図化してないが台形土器の別個体の断片が2点、蓋1点などがある。

土坑S K 02112出土遺物(127～130) 127は片広口鉢といわれるもので、体部を斜め「V」字形にカットして片口を作り出している。精製した朱を入れる容器またはパレットのような使われ方をしたもので、壺の底に溜まっていた朱の痕跡が明瞭に観察される。奈良県の唐古・鍵遺跡から弥生時代後期(畿内第V様式)^(注24)のものが知られているが、中期後半の畿内第IV様式末頃とみられる本例はたいへん珍しい。

128・129は広口壺A2である。130はミニチュアの台付鉢である。

土坑S K 02115出土遺物(131～140・206・220～222) 131・132は壺の蓋である。脚部が屈曲して長く広がるものである。133は広口壺の断片である。口縁端部を上下に拡張し、垂下させた端

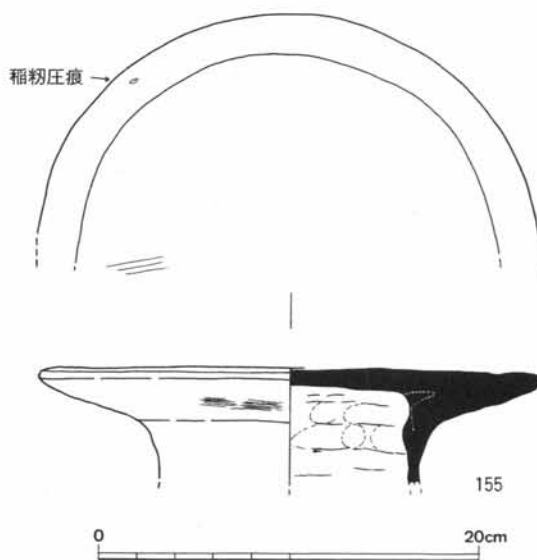


第47図 土坑出土土器実測図6 (弥生時代中期)

面に凹線文、口縁内面に扇形文がみられる。そのほかの壺には無頸壺E1が2点(134・135)あり、口縁部をごく短く折り返している。甕は甕A～Cがみられる。136は跳ね上げ口縁をもつ甕Bである。137・138は底部の断片である。139は無頸壺などの脚部である。140は台形土器の上面端部片である。

220～222は、粘板岩の横長および不定形剥片である。石器製作に伴うものである。

206は銅鐸形土製品である。半分のみ残存する。表面の磨滅が著しいが、文様は当初より描かれていないようである。鐸身に鱗はない。扁平な鈕(吊り手)を含め、全体に銅鐸の形状を忠実に再現する。高さ7.6cm、残存短径3.9cm、器壁0.5cm、紐の厚さ0.8cm、残存の重さ42.5gである。



第48図 土坑(S K02146)出土土器実測図7
(弥生時代中期)

土坑S K02119出土遺物(141～154) 壺・甕・高杯がある。141～145・147は甕である。口縁端部が内湾する141・144、跳ね上げ口縁をもつ142・143・145・147がある。図化していないが甕Aも9点の断片が出土している。146は無頸壺E1である。148は壺、149は甕の体部である。150は壺または鉢の底部片である。151は広口壺A3の口縁部である。端部内面に沿って波状文と扇形文が描かれている。152は扁球形の体部をもつ無頸壺E1である。153は高杯A1の杯部である。154は脚部である。裾部に小さな刺突文が横列に多数印されている。

土坑S K02131出土遺物(214) 第55図214は磨製偏平片刃石斧である。両側縁部に装着時に生じた剥離痕みられる。長さ7.3cm、幅4.4cm、厚さ1cmで重さ60gを量る。粘板岩ないし頁岩製で淡緑青色である。

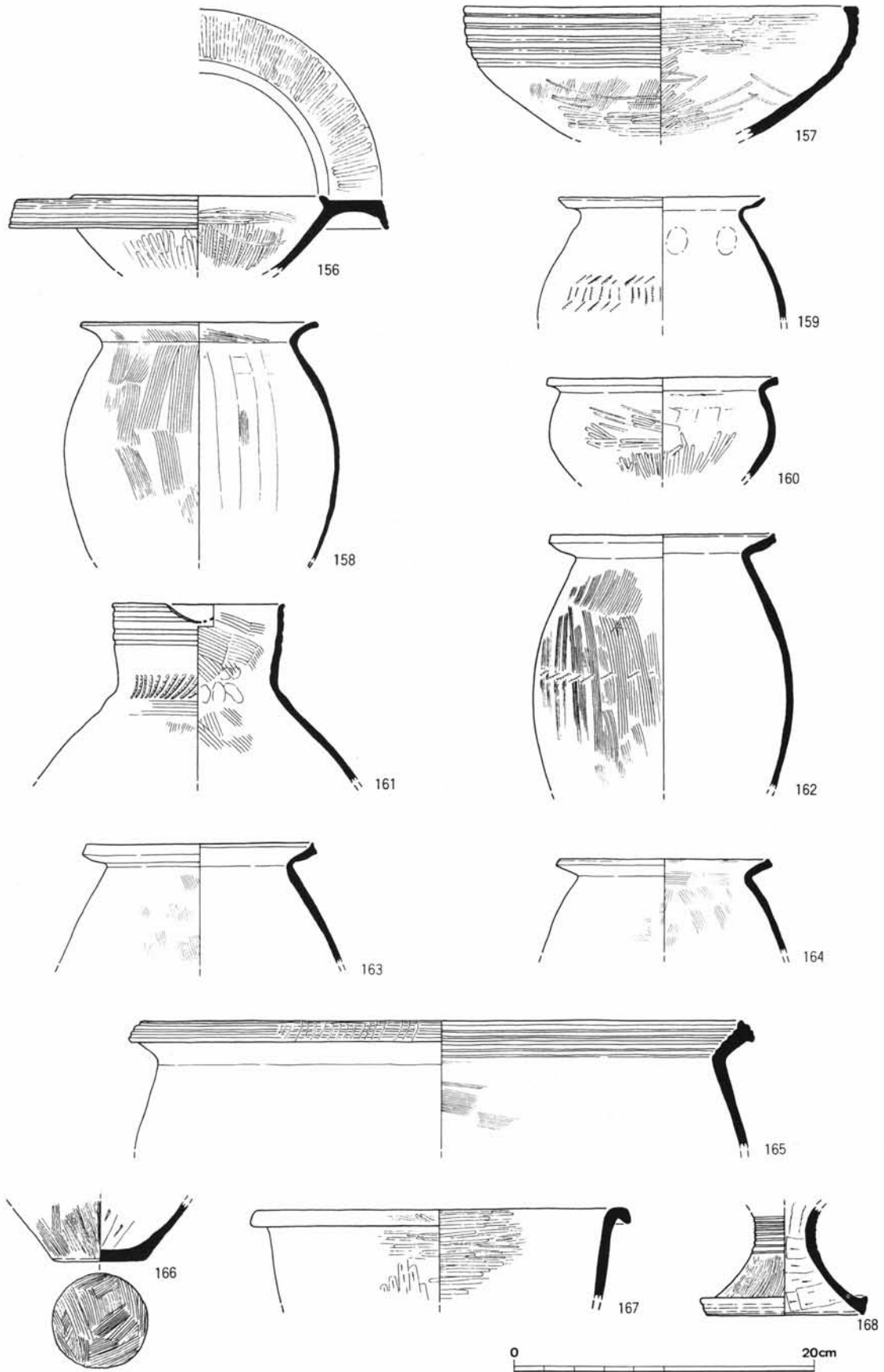
土坑S K02146出土遺物(155) 台形土器である。脚の端部はないが、平坦な上面との接合状態も観察できる好例である。上面の外縁に稲朮圧痕がみられる。

土坑S K02147出土遺物(219) 土器は図示していないが、甕A類の口縁部片2点、高杯を出土する。土器の破片数は23点である。

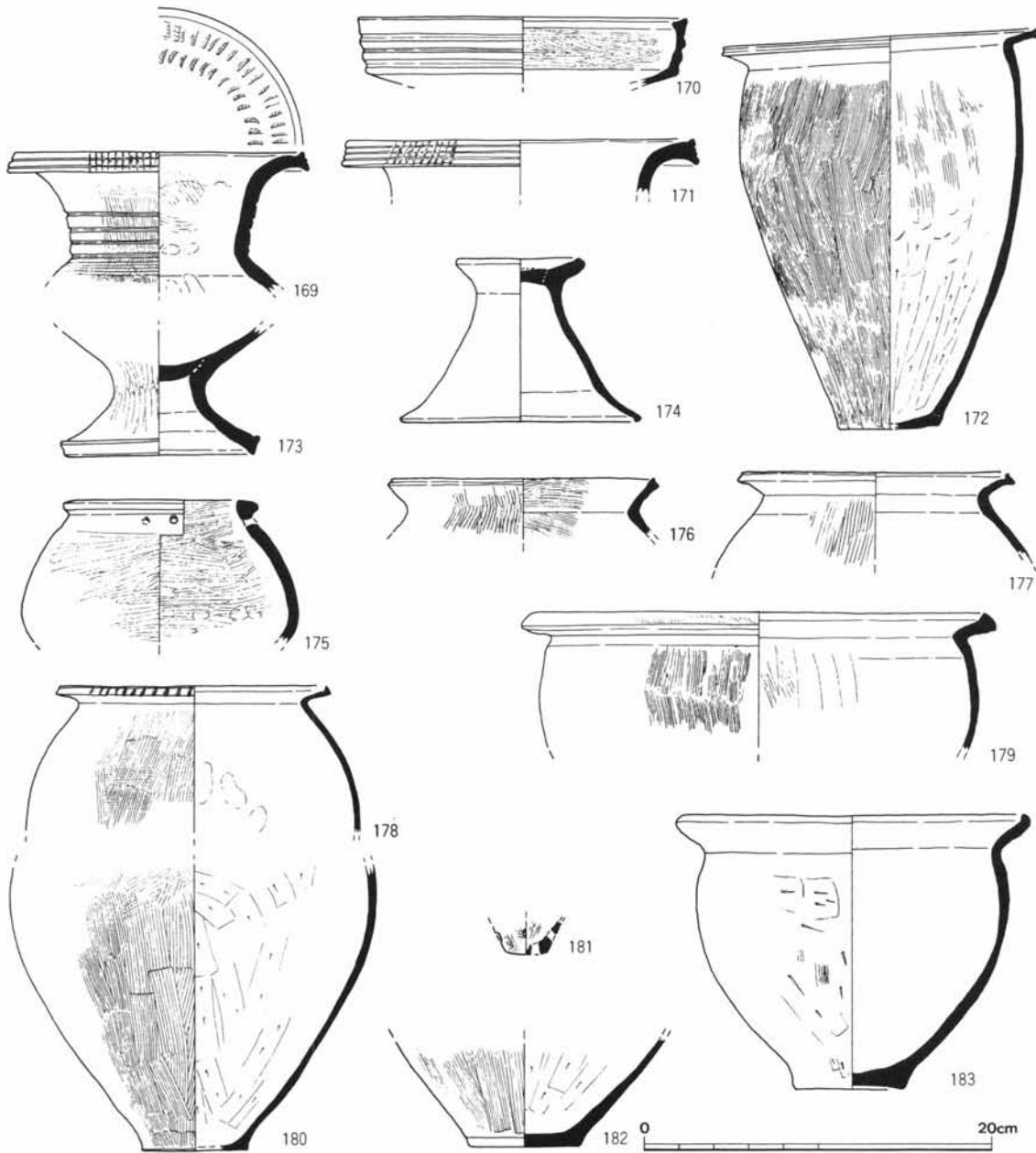
石器は、219の楔形石器が1点ある。横長不定形の扁平な剥片の両端部に、衝撃による剥離痕をとどめる。長さ2.1cm、幅2.8cm、厚さ0.4cmで、重さ3gを量り、濁茶褐色の粘板岩製である。

土坑S K03065出土遺物(156・157) 壺の出土を欠く。甕は甕A4点、甕B2点の口縁断片がある。高杯は高杯A1が1点(157)、高杯B1が2点(156はそのうちの1点)ある。鉢は鉢Bの断片が1点出土している。

土坑S K03087出土遺物(158～160・227) 壺の出土を欠く。甕は2点で、口縁部が「く」の字に外反する甕A1の158と内湾する甕A3の159がある。159は体部に3列の櫛先列点文がある。高



第49図 土坑出土土器実測図8 (弥生時代中期)



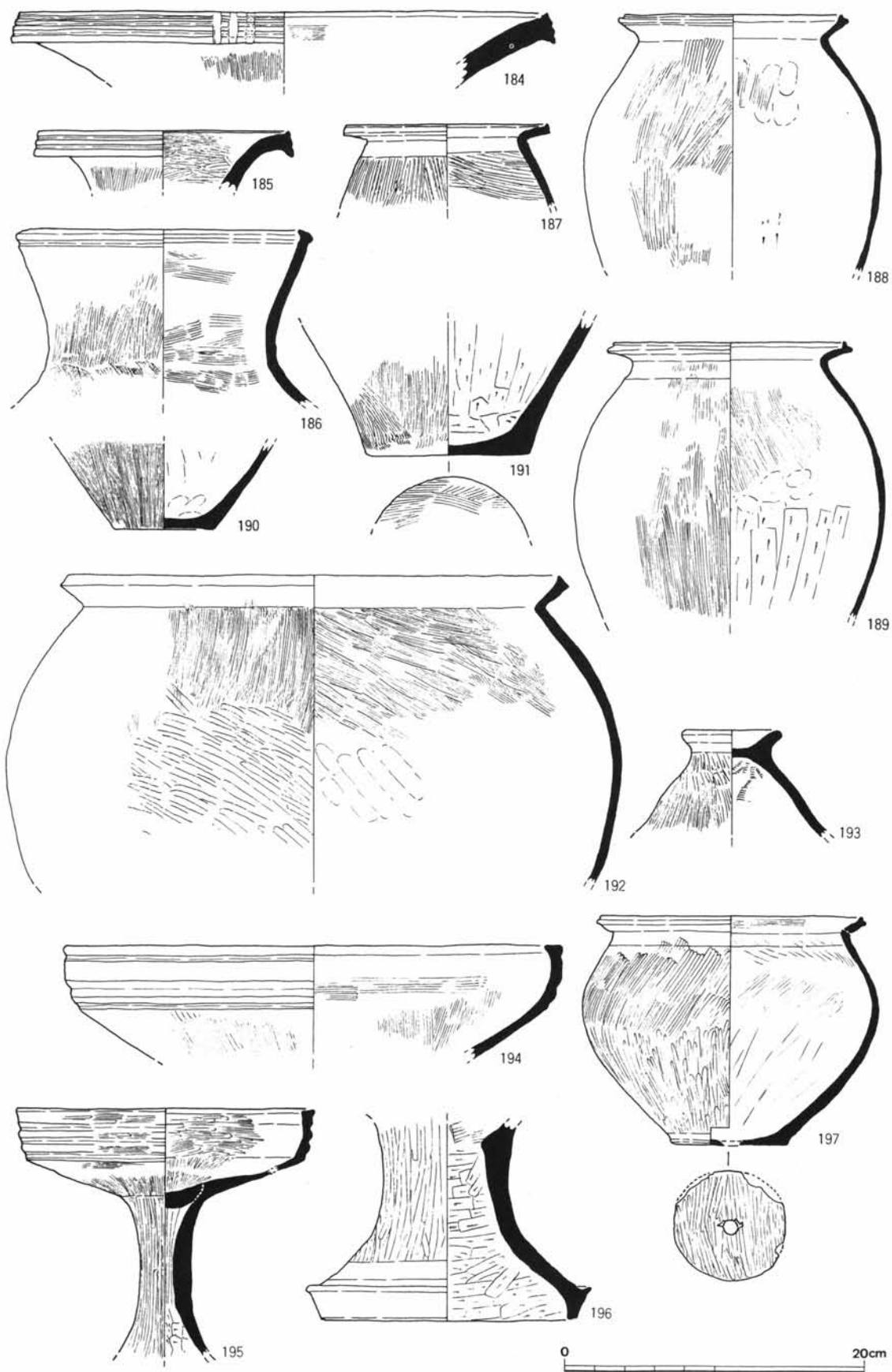
第50図 土坑出土土器実測図9(弥生時代中期)

杯は椀状の杯部をもつものが1点ある。160は張りのある短胴形の鉢Bである。

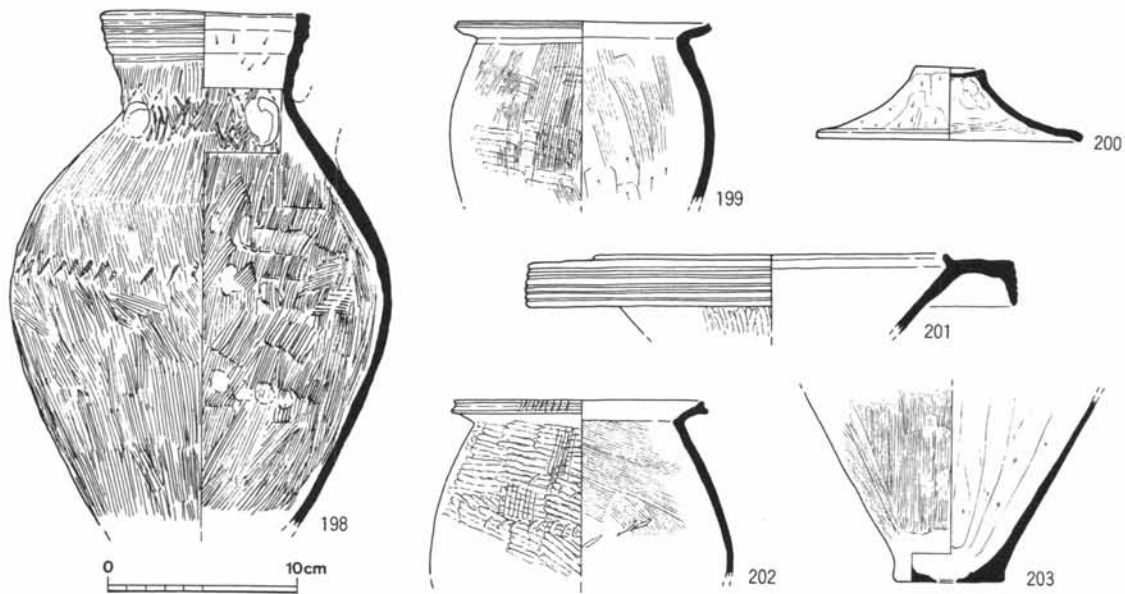
227は石器の敲石である。側縁の一部に敲打痕がある。重さ290gを量る。

土坑S K 03090出土遺物(161~168) 161は、注口のある水差形土器(壺D)である。甕は163の甕B、162・164の甕A2、そして165の甕Cの4点ある。165は口縁部外面に凹線文、内面にも細く浅い凹線文がていねいに施されている。166は甕の底部である。底面全体にハケメがみられる。167は口縁端部を短く巻き込むように折り返された鉢である。168は脚部の断片である。

土坑S K 03093出土遺物(169・170・216) 169は広口壺A2の口縁部である。口縁端面および頸部に凹線文が、口縁内面に櫛先列点文がみられる。甕は口縁端部に面をもつ甕A2が4点ある。170は高杯A2の杯部である。3条の明瞭な凹線文がみられる。



第51図 土坑出土土器実測図10(弥生時代中期)



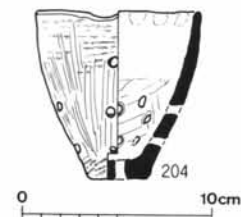
第52図 土坑出土土器実測図11(弥生時代中期)

石器は、玉作りなどに用いられたとみられる結晶片岩製の石鋸片(216)が1点ある。残部の長軸3.3cm、幅2.1cm、厚さ0.4cmで、重さ5gを量る。

土坑S K 03095出土遺物(171~174) 171は広口壺A2の口縁部である。172は甕Bで、接合によりほぼ完形品となった。173は脚部である。174は腰高の蓋である。土坑S K 03096出土の破片が接合した。

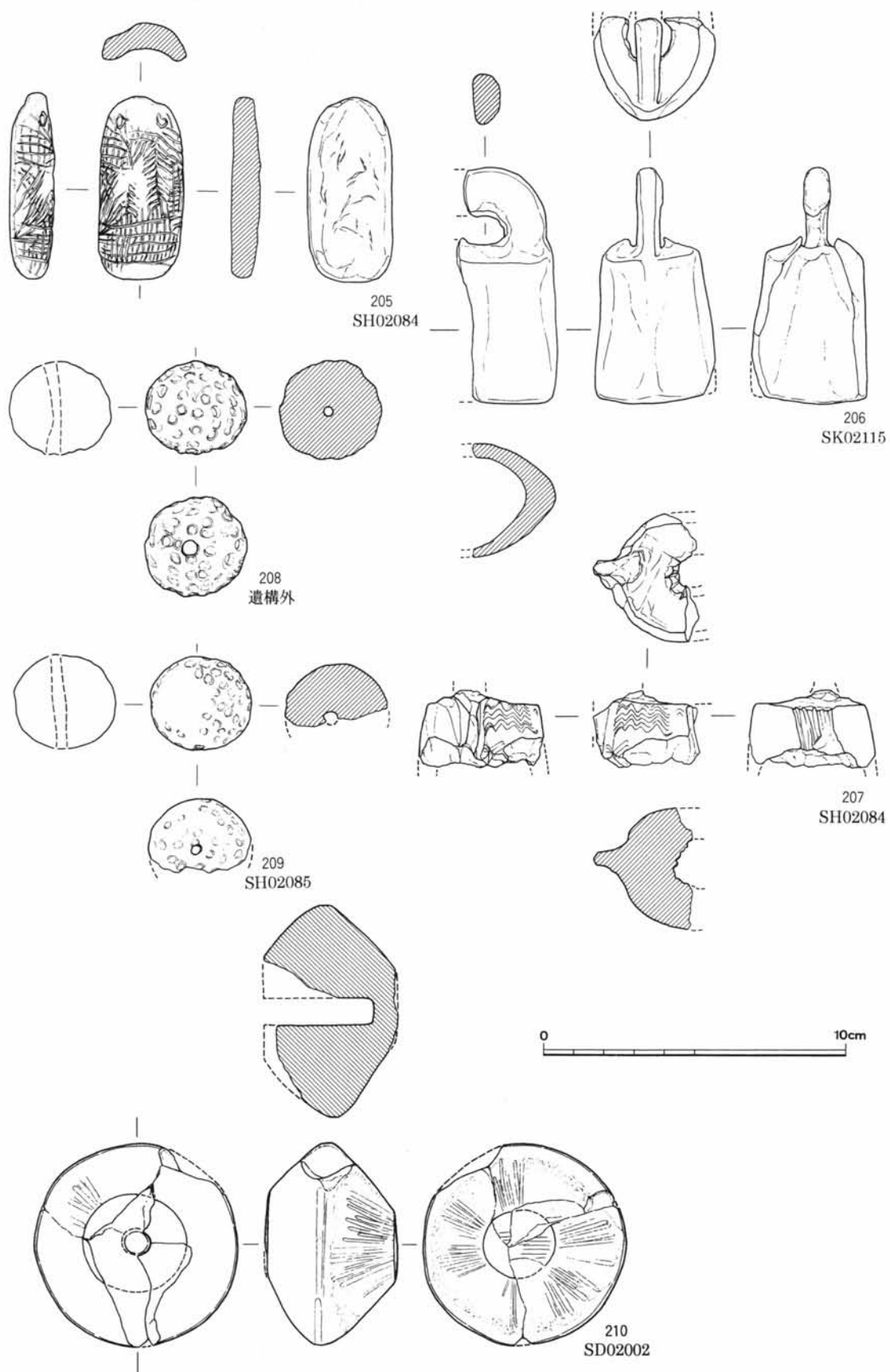
土坑S K 03096出土遺物(175~183) 175は無頸壺E1である。口縁を丸くかつ短く外反させている。偏球形の体部で内外面は細かなミガキ調整される。胎土はきめ細かなもので、赤味を帯びた暗褐色の色調である。176~179は甕である。176は、口縁端部に強いナデによる面をもつ甕A2である。177~179は跳ね上げ口縁部をもつものである。180・182は甕の体部上半~底部にかけての断片である。181は、複数の小さな穴をあけられた多孔土器の底部である。183は短胴で、口縁を外側に折り返して端部を跳ね上げる鉢Bである。

土坑S K 03100出土遺物(184~198) 184・185は広口壺A2の口縁部である。端面には凹線文が施される。186は直口壺の頸部である。内外面をハケ調整される。187~189は、口縁端部を跳ね上げる甕Bである。190・191は底部である。192・197は「く」の字形口縁をもつ短胴形の鉢Bである。192は大型のもの、197は底部中央に穿孔がみられる。193は蓋である。径6.8cmの大きなつまみ部をもつ腰高のもので、つまみ上面はナデにより皿状にくぼむ。194は高杯A1、195は高杯A2である。196は、底部最大径18.5cmを測る大型の脚部である。198はドーナツ形の把手が付く水差形土器(壺D)である。図示していないが、口縁外端部をナデにより窪ませて、そこに粘土紐を貼り付けて玉縁状に仕上げられた大型の鉢の断面がある。表面は赤っぽく仕上げられているが、磨滅により調整は不明。

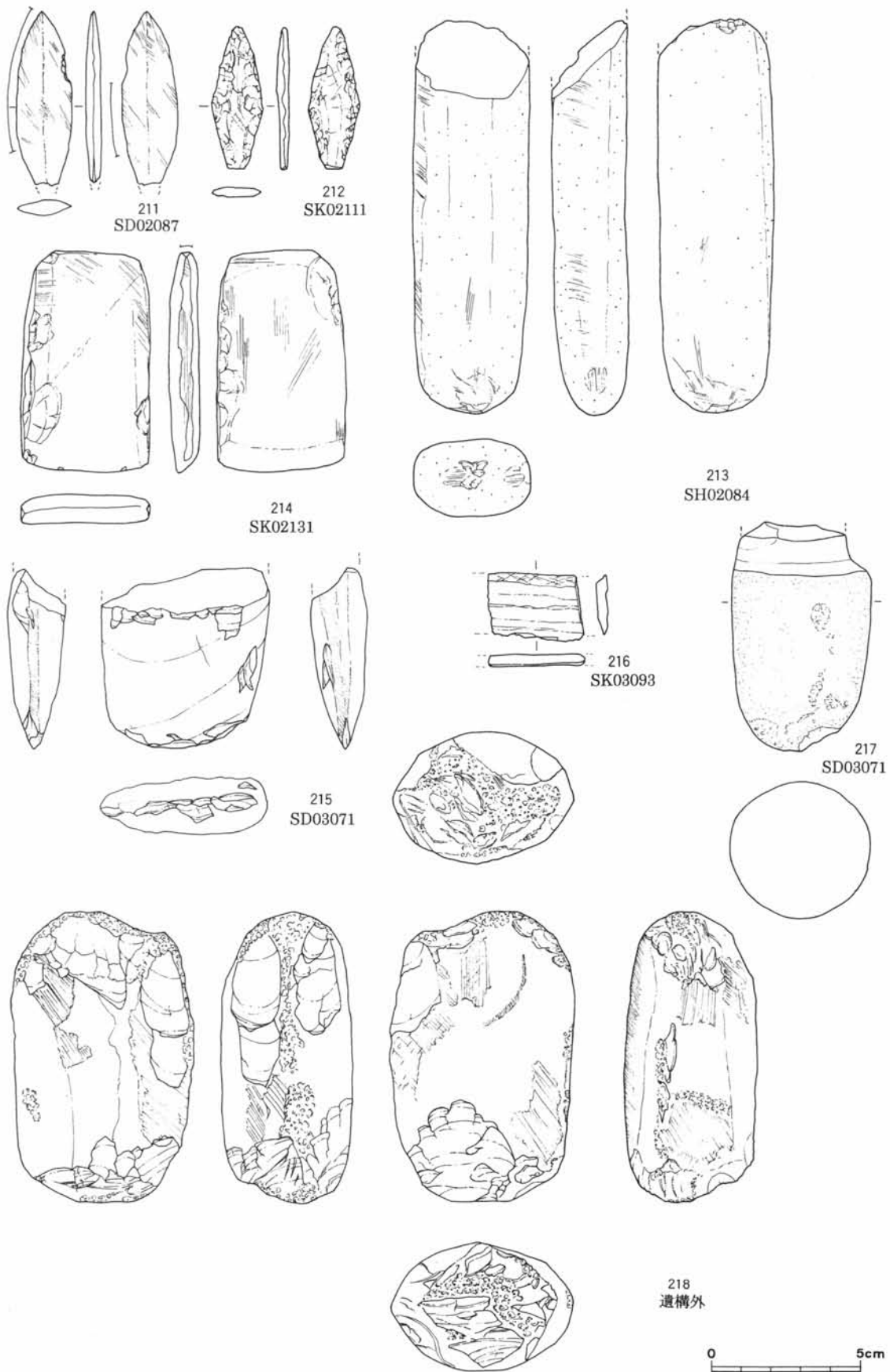


第53図 多孔土器実測図 (P51出土)

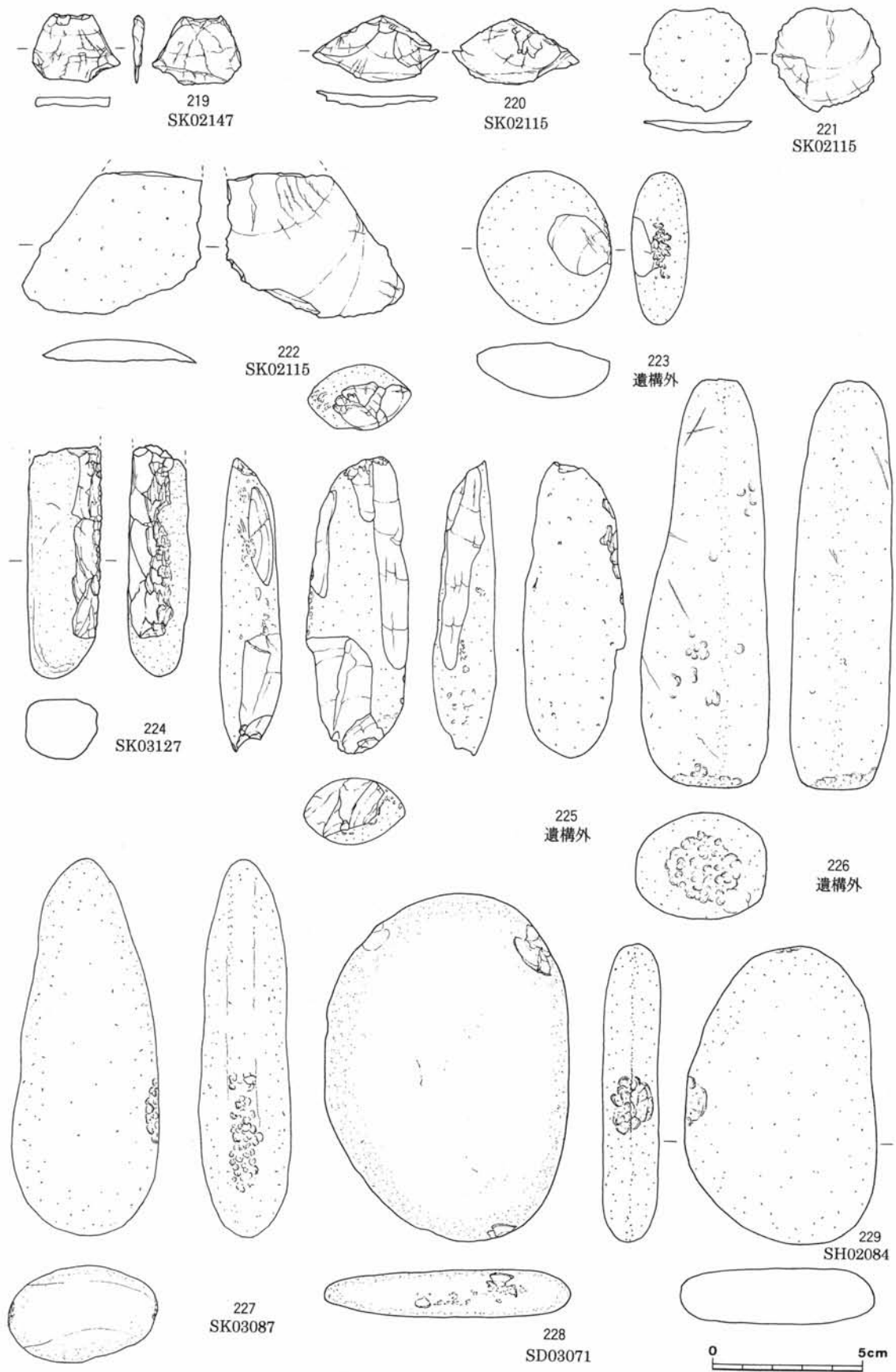
土坑S K 03105出土遺物(199~201) 199は甕A2で端面に面をもつ。



第54図 土製品実測図(弥生時代中～後期)



第55図 石器実測図1 (弥生時代中期)



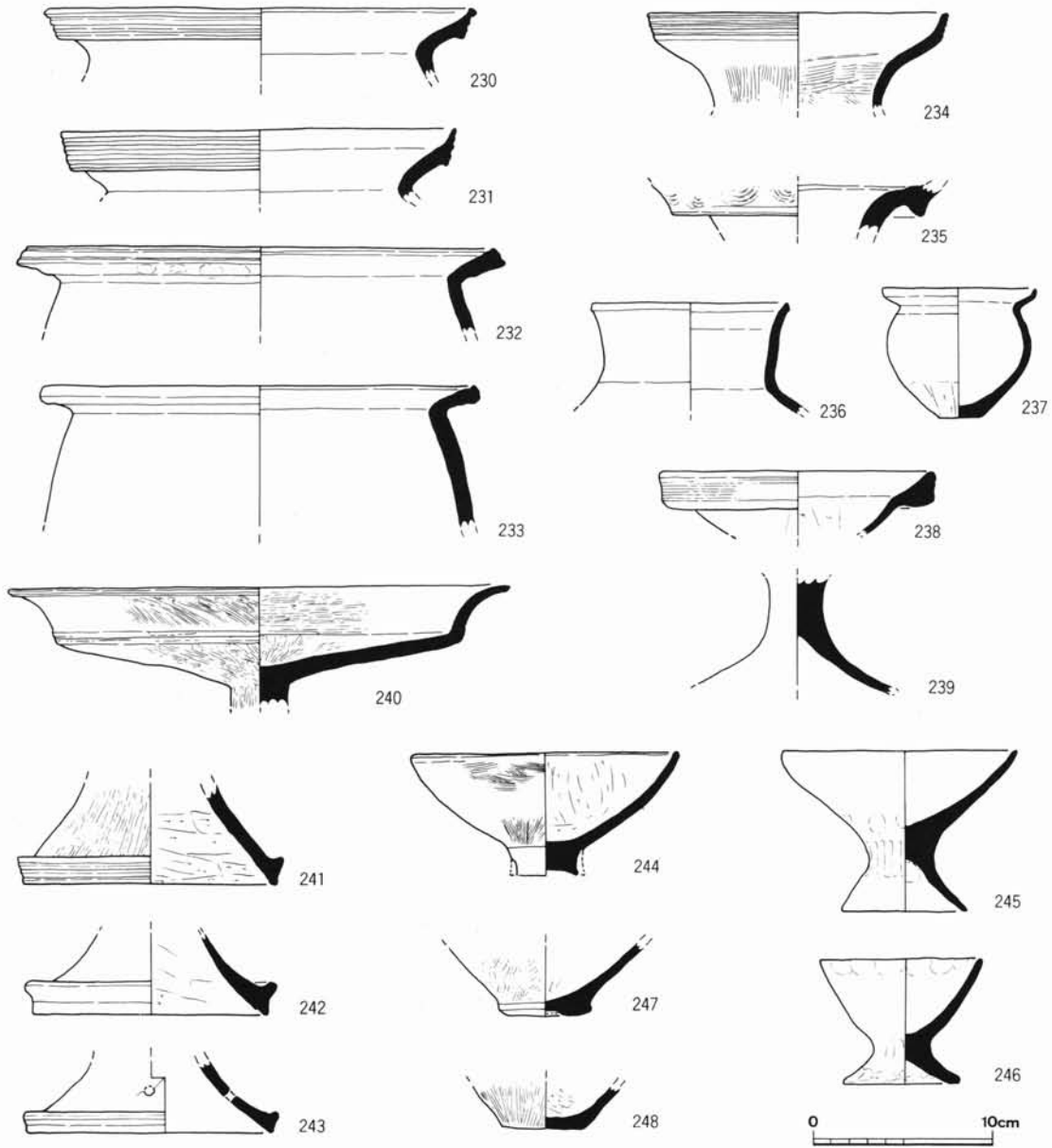
第56図 石器実測図2 (弥生時代中期)



第57図 沼地状落ち込み S X 03070平面図(網部分、断面は第29図参照)

甕A類はあと3点ある。B類も1点あり、強い跳ね上げで受け口状となっている。200はゆるやかに立ち上がる蓋である。201は口縁部を水平に拡張させ、端部を垂下させた高杯B1の杯部である。

土坑 S K 03127出土遺物(224) 片側縁に激しい打撃痕をとどめる敲石である。上端は欠損している。流紋岩製である。



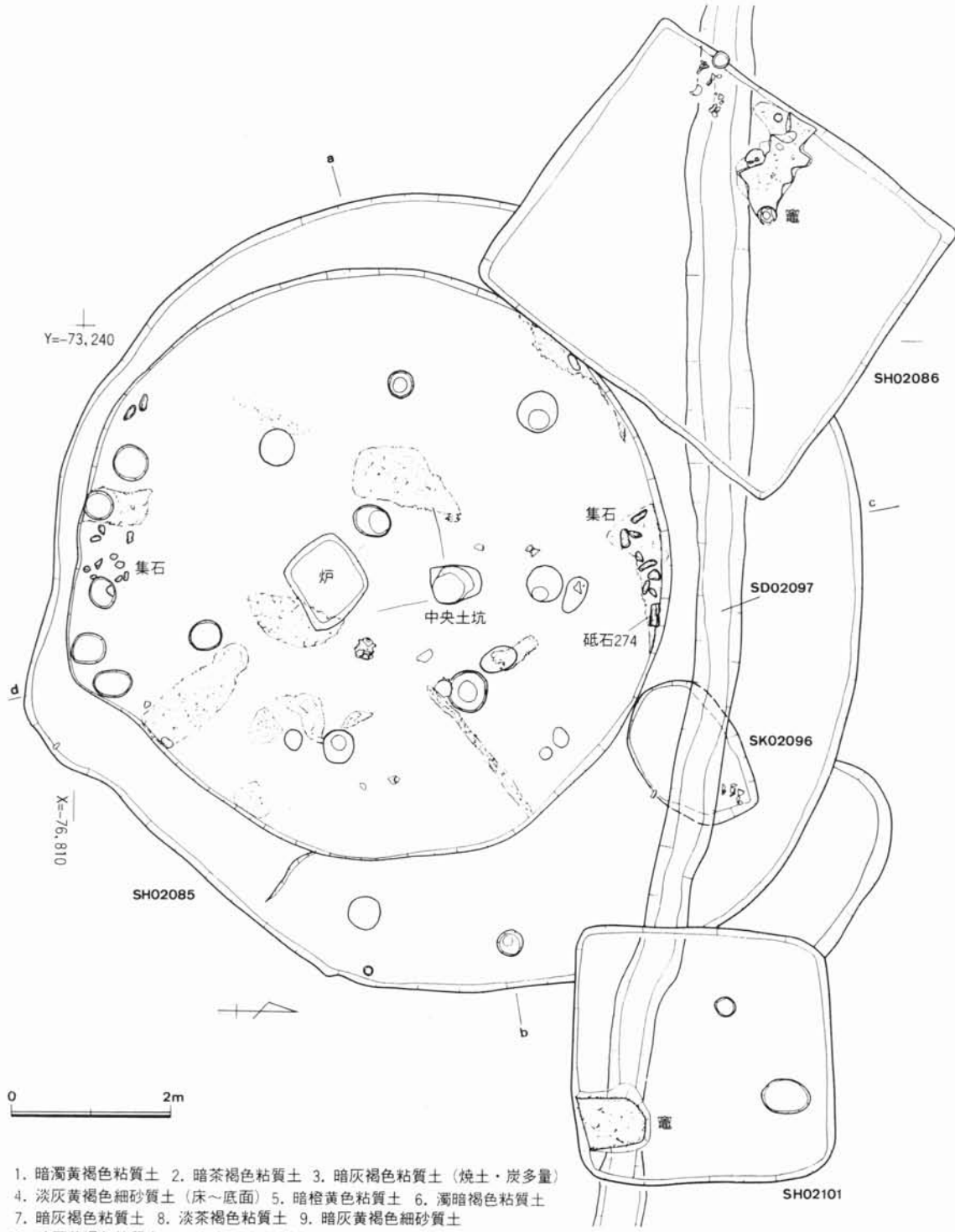
第58図 沼地状落ち込み S X03070出土土器実測図(弥生時代後期)

土坑 S K03139出土遺物(202・203) 202は跳ね上げ口縁をもつ甕Bで、体部外面に細かな左上がりのタタキ痕をとどめている。このタイプの甕にはタタキが施される傾向があるが、大部分のものはナデやハケで消されている。この土器は明瞭なタタキ痕を残す。203は底部を穿孔させた甕の断片である。

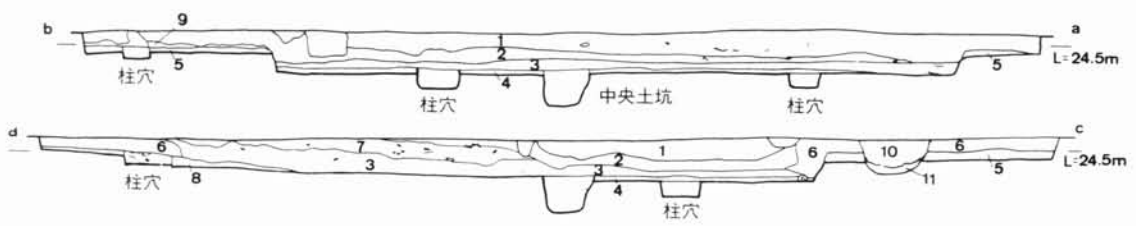
杭穴

掘立柱建物跡、柵などの抽出はできなかったが、今回の調査では直径15～25cmほどの柱穴あるいは杭穴とみられる遺構が多くみつまっている。鎌倉時代の土器である瓦器や、須恵器のほとんどが大部分であるが、それらとは埋土を異にする弥生時代のものも数基確認した。

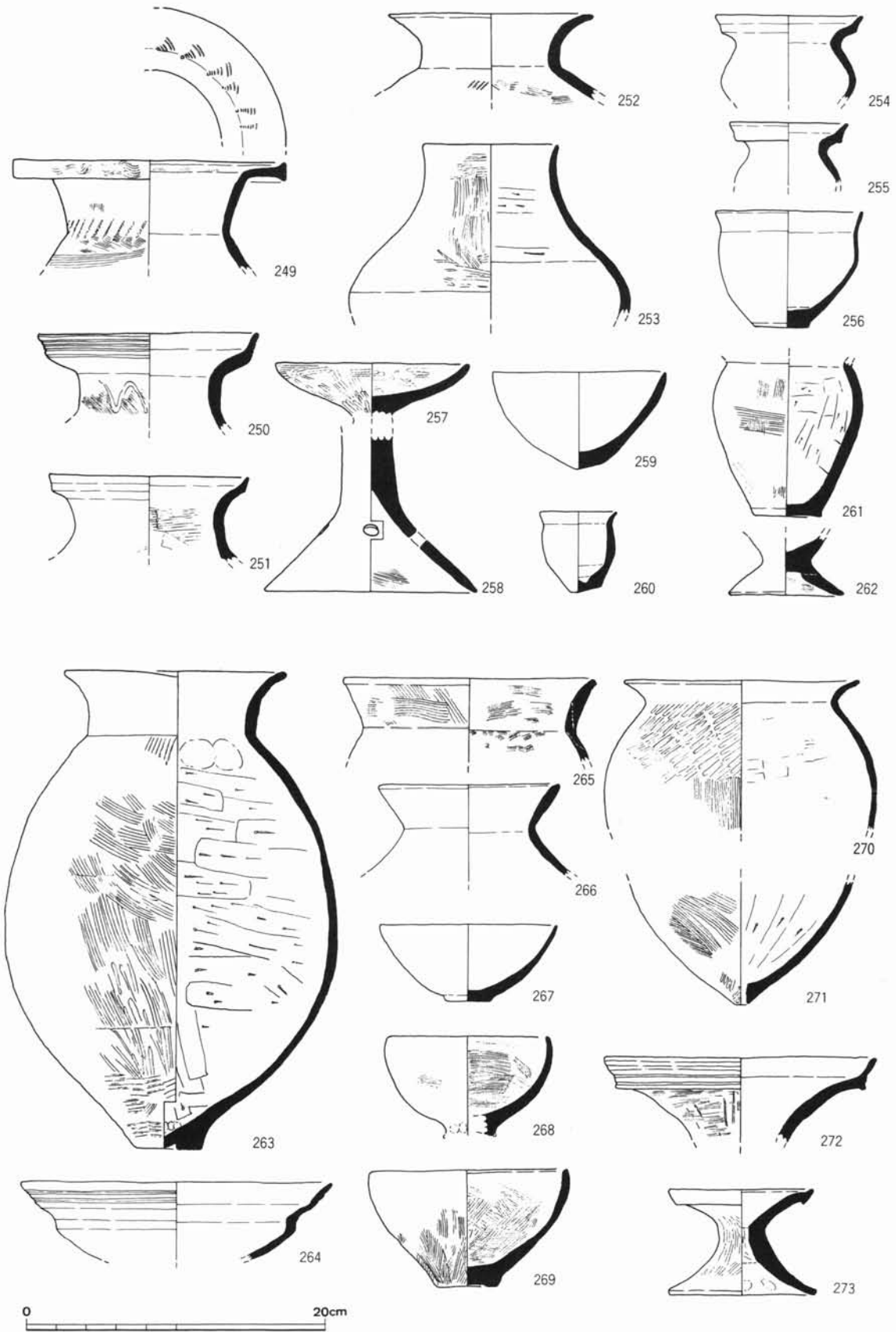
柱穴 P-02051は、直径約20cm、深さ約15cmをはかり、暗茶褐色粘質土の埋土である。この中から多孔土器(204)が1点出土した。



1. 暗濁黄褐色粘質土
2. 暗茶褐色粘質土
3. 暗灰褐色粘質土 (焼土・炭多量)
4. 淡灰黄褐色細砂質土 (床~底面)
5. 暗橙黄色粘質土
6. 濁暗褐色粘質土
7. 暗灰褐色粘質土
8. 淡茶褐色粘質土
9. 暗灰黄褐色細砂質土
10. 暗灰茶褐色粘質土
11. 濁橙灰色粘質土



第59図 竪穴式住居跡 S H02085・02086・02101平・断面図

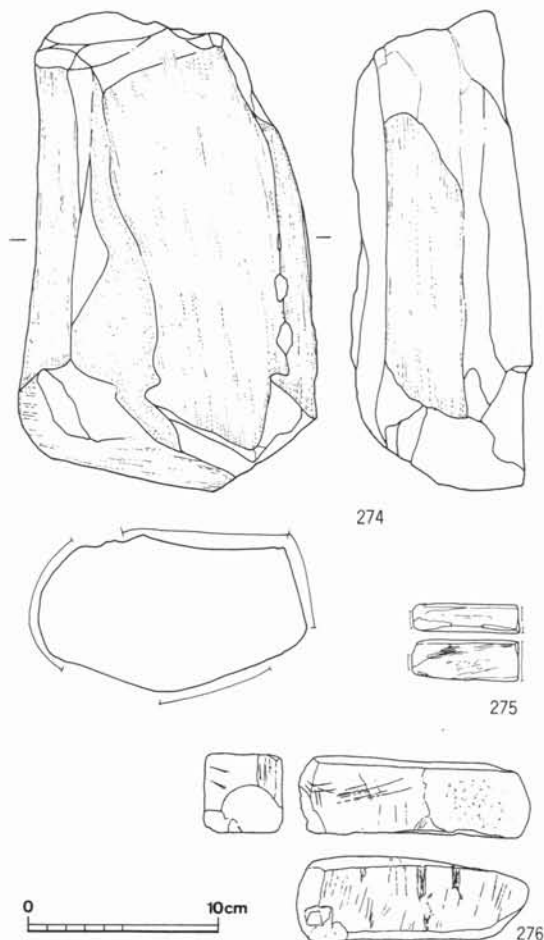


第60図 竪穴式住居跡 S H02085・02150出土土器実測図(弥生時代後期)

(出土遺物)

204は小型の片口鉢の体部下半および底部に、多くの小さな孔をあけたものである。土坑内土器と同じく、畿内第Ⅳ様式後半のものであろう。

遺構外の遺物(第54～56図) 210は上下端に平坦面をもつ算盤玉の形をした土製品である。中世の溝S D 02002からの出土であるが、形態・成形技法は弥生土器に属するものである。法量は、径6.8cm、高さ4.4cm、重さ145gである。放射状に細かなミガキ調整が施され、暗赤褐色に焼成されている。一方の面から円形(直径9mm)に同じ太さであけられた孔は3.6cmの深さまでで、反対側に貫通していない。類例として京都府内では八木町の池上遺跡^(註25)で出土している。さらに、大阪府の東奈良遺跡、楠遺跡からも報告されている^(註26)。いずれも弥生時代中期で、刀剣などの柄頭、紡錘車などといわれているが、祭祀的な要素が多分にあるようで、用途は不明である。



第61図 竪穴式住居跡S H 03085石器実測図
(弥生時代後期)

218は大型磨製石斧が敲石として転用されたもので、223・225・226の硬質および軟質の石材を用いた各種の敲石類とともに遺構面精査中に出土した。敲石は側縁部に明瞭な敲打・剝離痕のあるもの(223)、先端部に強い打撃による剝離痕をもつもの(225)、こつこつと敲かれて先端に明瞭な面を形成する乳棒形のもの(226)がある。

3) 弥生時代後期

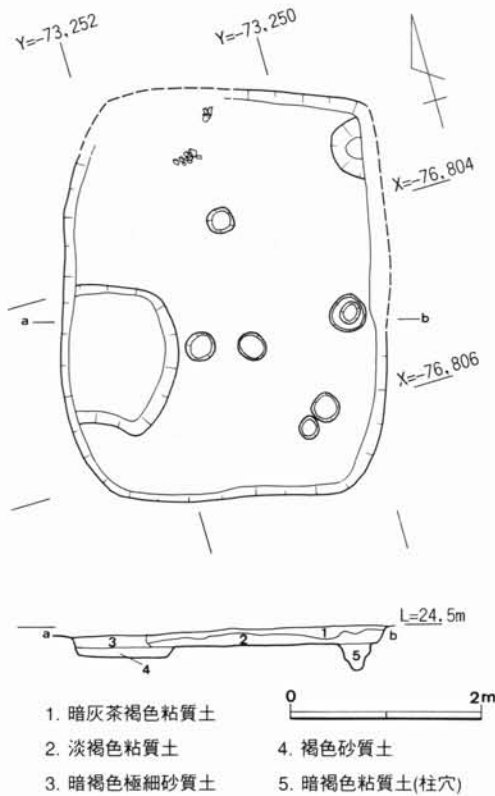
落ち込みS X 03070(第57図) 弥生時代中期の環濠である溝S D 03071が埋没していく過程で、広い範囲に生じた沼地状の落ち込みであろう。周濠の上位に南西から北東にかけて幅11m、長さ25.7mの範囲に広がり、残存する深さは約10～40cmを測る。暗灰褐色粘質土の埋土である。それより下層には鉄分の沈殿層がみられ、その直下は中期の環濠S D 03071の上面となる。

(出土遺物)

出土遺物には、壺・甕・高杯・器台などがある(第58図230～248)。

甕(230・231)は端面に擬凹線文の施された二段口縁をもつ。237はやや受け口状に内湾する小型の甕で、小さな底部をもつ。さらに、甕には外傾する面をもつもの(232)、端面に狭い面をもつもの(233)がある。

壺には二段口縁のもの(234・235)、直口壺(236)などがある。234は端面に擬凹線文、235は幅



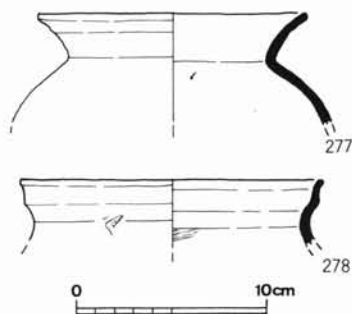
第62図 竪穴式住居跡 S H03097平・断面図

って拡張されたものと考え。中央に炉および方形土坑をもつ。

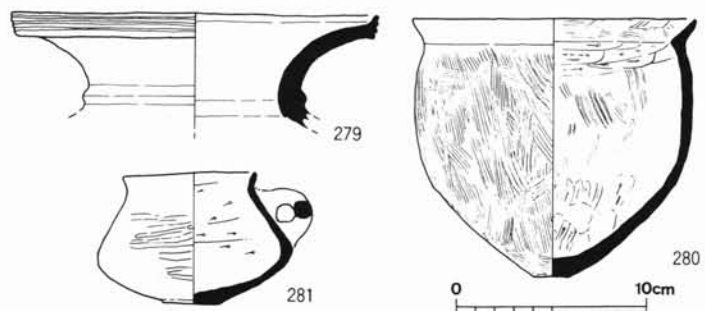
(出土遺物)

土器(壺・甕・高杯・鉢)、球形土製品、砥石などがある(第60図249~262、第54図209、第61図274~276)。

249は口縁端部が水平にのびる広口壺である。250~255は壺である。擬凹線やナデで調整された口縁部をもつもの(250・251・254・255)、大きく斜め上に外反させるもの(252)、フラスコ形の体部をもつもの(253)がある。256・259は鉢である。257・258は高杯の杯部と脚柱部である。別個体である。260はミニチュア甕の完形品である。祭祀用であろう。261は壺の体部、262は壺あるいは鉢の台部である。



第63図 竪穴式住居跡 S H03097
出土土器実測図

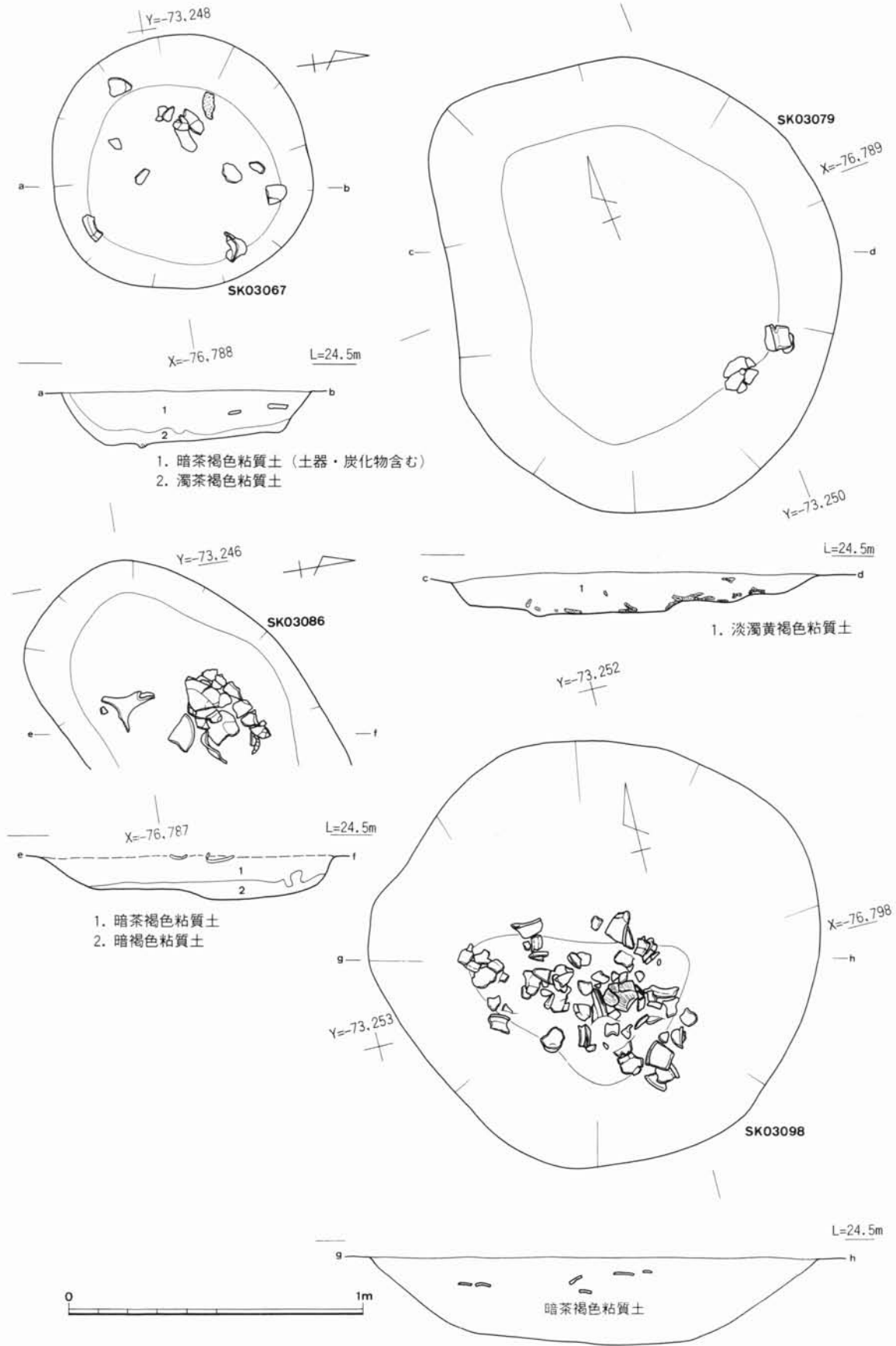


第64図 遺構面精査中出土土器実測図(弥生時代後期)

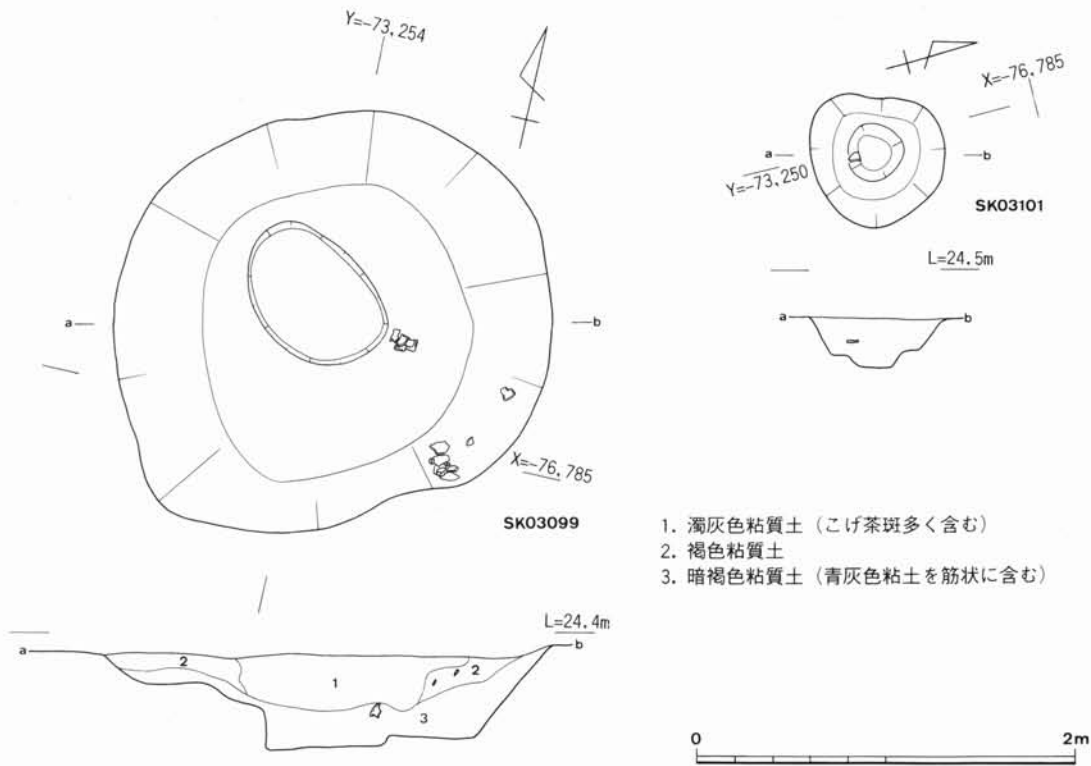
広の端面に扇形文と見られる文様がある。

238~246は、高杯の杯部および脚柱部である。238は極端に肥厚した端部から椀状の下半部に続く杯部とみられ、おそらく高杯であろう。240は、脚柱部から大きく水平近くにひらく杯部の端部を大きく外反させたもの。細かなミガキ痕が内外面にみられる。畿内第V様式新段階のものであろう。244~246は、椀状の杯部をもつもの台付きの鉢である。247・248は底部断片である。なお、241~243は中期の脚である。このほかに明らかに搬入土器とみられる断片が1点(図版第33左下)ある。胎土分析を行った結果、火山灰の胎土で特異なものである。

竪穴式住居跡 S H02085(第59図) 直径約10m、内側に直径約7mで一段くぼむ。ベッド状遺構としていたが、内側に焼け土や炭化材の痕跡が多く見られることから、焼失の後に建て替えにともな



第65図 土坑平・断面図(弥生時代後期)



第66図 土坑 S K 03099・03101平・断面図(弥生時代後期)

209は小型の球形土製品で、復原径3.4cmを測る。表面に多数の径2.0～2.5mmの円形刺突痕がみられ、堅果類の種実や桃・梅などの果核のようにもみえる。同じ大きさの孔が1か所で貫通している。紐や棒を通し、何かに使われたものであろう。なお、遺構外出土の208は、209とまったく同じ形態をもつ。209と比較して刺突痕の直径がやや大きい(3.0～3.5mm)が、1か所の貫通孔(穴)をもつ点も共通する。用途も同じであったであろう。

石器類のうち、第61図274は据え置きで使用された大型の砥石で、表裏面、側面ともよく擦り減って平滑な磨面を形成している。鋭利な刃物状のものによる深い線条痕などはとどめていない。食料調理などに使う石皿・台石の可能性もある。長さ25.2cm、幅14.9cm、高さ(厚さ)9.8cmで、重さ4.8kgを量る。275・276は手持ちで使用するものである。276は深い線条痕がみられ、金属器や石器などを研いだ痕跡がある。275は35g、276は300gを量る。このほか敲石状の円礫(使用痕なし)や青灰色の扁平な棒状の粘板岩(未加工)などがある。

竪穴式住居跡 S H 02150(第34図) 長辺5m、短片4m、残存深さ50cmを測る方形である。柱穴もあるが、部分的で支柱穴の抽出はできなかった。

(出土遺物)

壺・甕・高杯・器台・鉢などの土器がある(第60図263～273)。

263・266は緩く外反しつつ斜め上にのびる口縁部をもつ壺である。263は全体がわかるもので、体部外面の上半部はハケ、中間部～底部にかけてはミガキと水平方向のタタキ痕をとどめる。265は甕の口縁部である。267～269は椀形の鉢である。270は外反する口縁部をもつ甕である。外

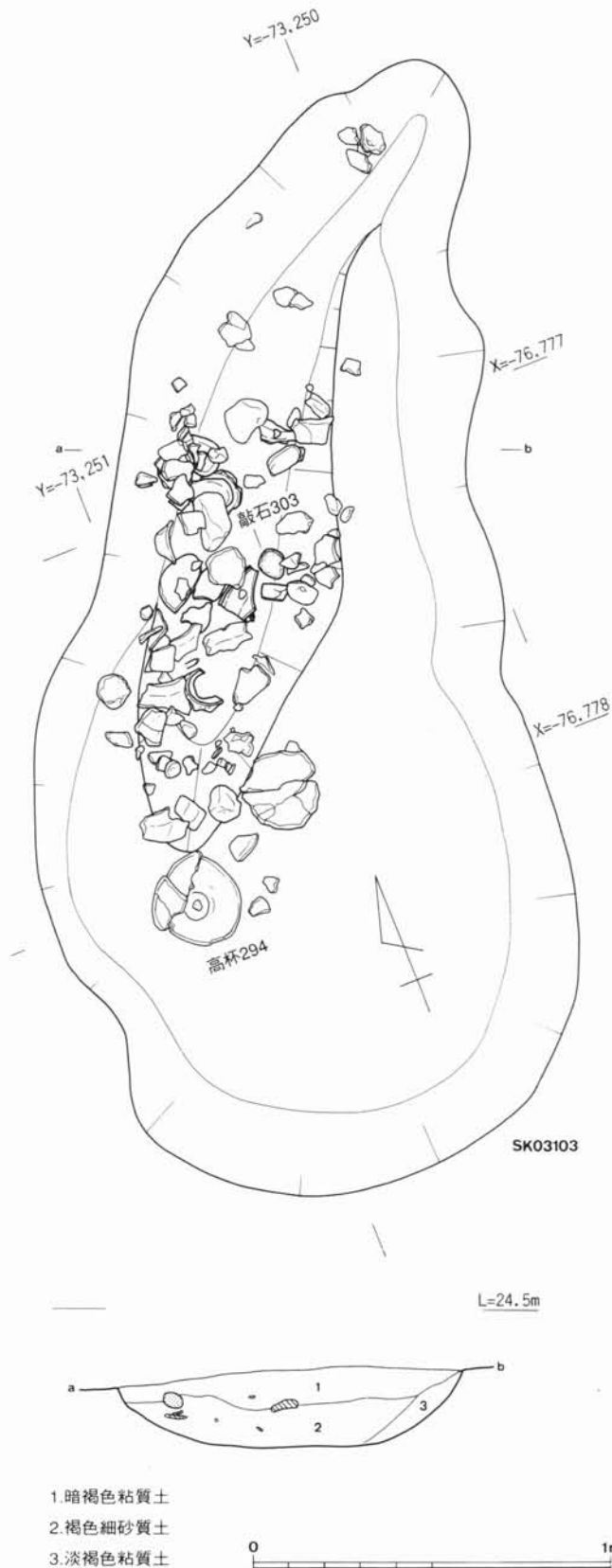
面に右上がりのタタキ痕その下位に縦方向のハケメがみられる。271は絞り込まれたような狭小な鉢の底部で穿孔されている。272・273は器台である。272は端部の外面に擬凹線を施す。273は均質な胎土を用いた小型品である。

竪穴式住居跡 S H 03097 (第62図) 長辺4.2m、短辺3.4m、深さ15~25cmを測る方形の竪穴式住居跡である。西側長辺の南側に接して浅い隅丸方形の土坑が掘られている。支柱穴の確定はできなかった。なお、同じ後期の溝 S D 02097によって北西部の壁を壊されている。

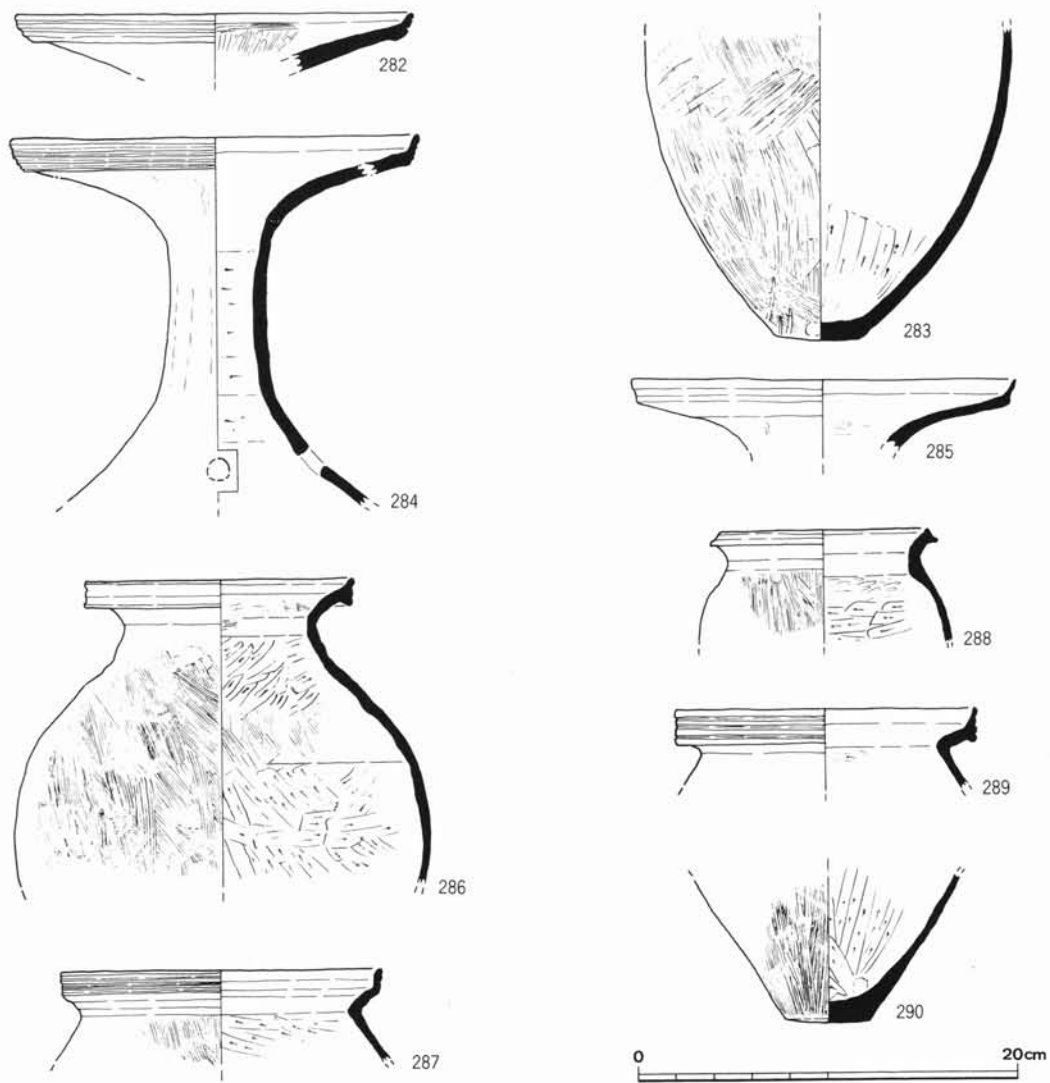
(出土遺物)

出土遺物は土器のみである(第63図)。器種のわかるものとして、甕の口縁部細片が合計5点ある。1点は淡赤褐色の色調で「く」の字に外反させるもの(277)。端部は肥厚させず先細りとなる。あとの4点はゆるやかな二段口縁をもつものである。278はその1点で、端部の面はナデで擬凹線文はみられない。そのほか、接合し得ない体部細片(2~5cm大)が200点近くある。

溝 S D 02097 (第23図) A地区を南北に縦断する溝である。平成14年度調査で検出していたもので、検出長約49.4m、幅の平均は約0.7m、深さの平均は約0.3mを



第67図 土坑 S K 03103 平・断面図(弥生時代後期)

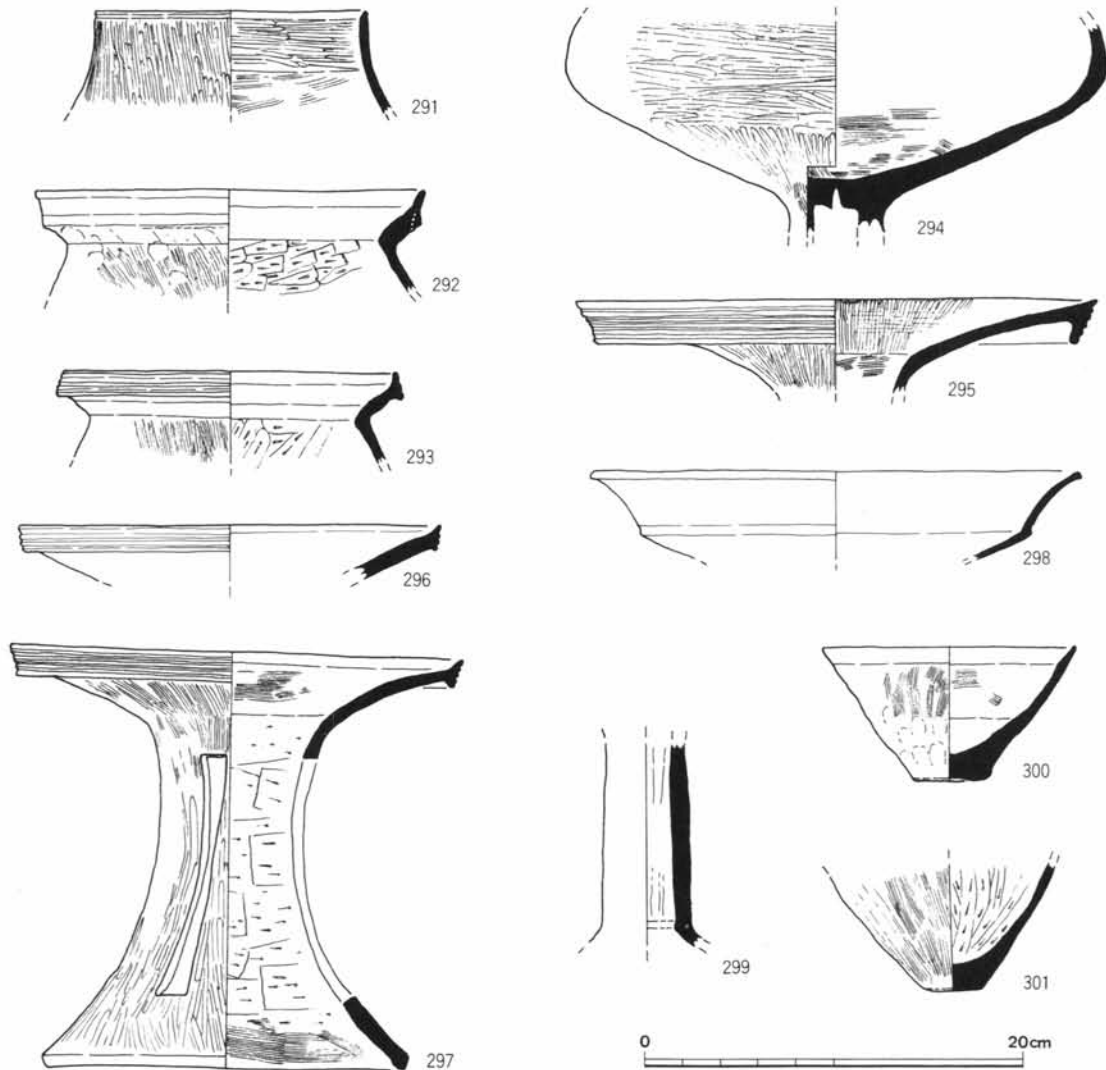


第68図 土坑出土土器実測図1 (弥生時代後期)

付表8 A地区弥生時代後期土坑一覧表

土坑番号 (S K)	平面形	断面形	長軸	短軸	深さ	図番号
02037	楕円	平	0.80	0.50	0.15	
02044	長楕円	U	2.52	0.52	0.27	
02059	楕円	U	0.50	0.40	0.15	
02076	不定形	平	1.60	1.00	0.20	
02089	溝状	平	3.80	1.05	0.18	
02106	楕円	平	0.80	0.60	0.20	
02117	不定形	平	1.80	1.30	0.10	
02135	不定形	平	3.00	1.60	0.15	
03067	円	傾	0.85	0.84	0.18	第65図
03079	楕円	平	1.50	1.30	0.22	〃
03086	不明	凹凸	—	—	0.15	〃
03098	円	平	1.50	1.45	0.30	〃
03099	楕円	傾・凹凸	2.30	2.00	0.50	第66図
03101	円	平	0.74	0.70	0.25	〃
03103	不定形	傾・凹凸	3.20	1.40	0.30	第67図

備考：断面形は底の形状を示す。平→平面、U→U字形、傾→傾斜面をもつ、凹凸→凹凸の面をもつ略。単位m。



第69図 土坑(S K 03103)出土土器実測図 2 (弥生時代後期)

測る。埋土は暗灰茶褐色細砂質土で落ち込み S X 03070 に流れ込む。土砂が流れ込んだ形跡が筋状に観察された。また、竪穴式住居跡 S H 03097 の北西部と切りあい、住居跡より新しい時期に掘られたものといえる。

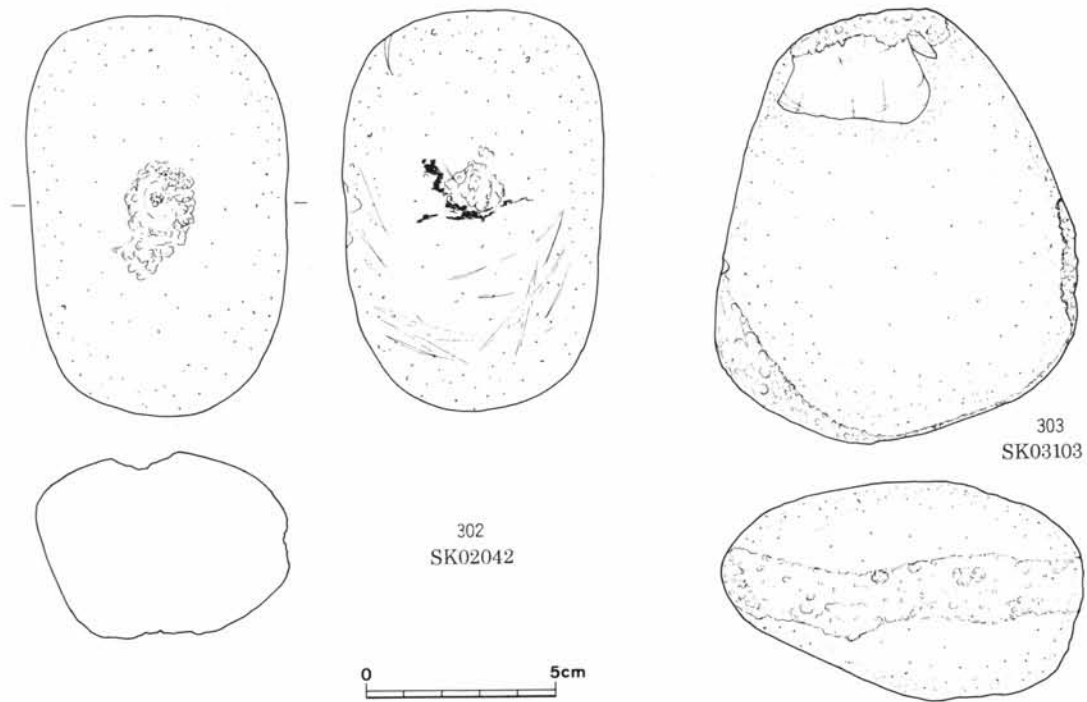
(出土遺物)

土器片は少なく、口縁部が緩く屈曲する後期の甕口縁部片などがみられる。

遺構外の遺物(第64図279~281) 弥生時代後期および中期の遺構を見つけるため、面を精査している際に採り上がったものは多い。ここでは後期のもので、残りの良好なものを記す。279は口縁端面に擬凹線、頸部に突帯のある壺、280は短い口縁部をもつ短胴形の鉢、281は精良な胎土を用いる把手の付いた鉢である。このほか、図版第33左下の台付鉢1点がある。

土坑

後期の土坑は付表 8 に示したように、合計15基である。第65~67図に円(楕円)・長楕円のもの为代表的に示した。分布状況を見ると、中期土坑の分布域と重なる。切りあいをみせるものがあり、平面形・深さ・底部形状はさまざまであること、土器や石器の出土状況が底ばかりではなく、

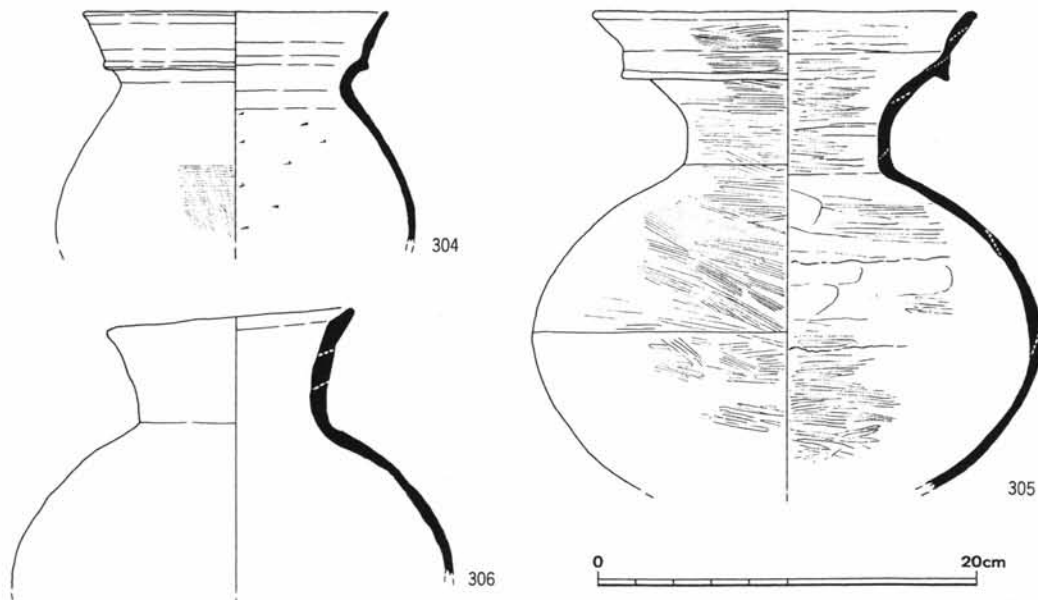


第70図 石器実測図2 (弥生時代後期)

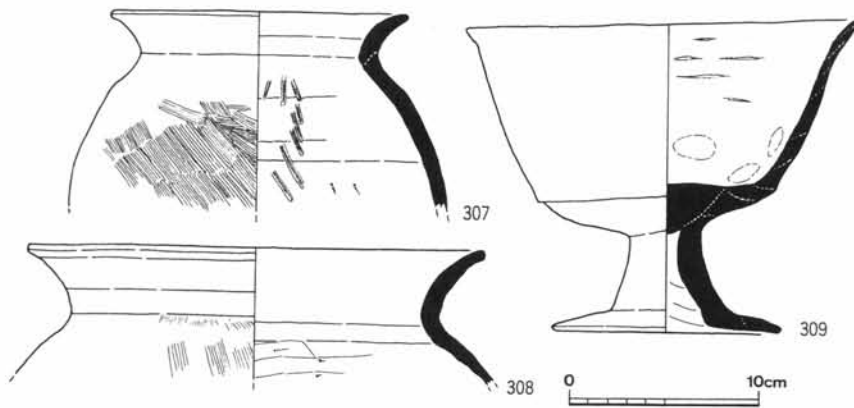
表層から中層にかけてもみられること、土器は破損品がほとんどで、土坑S K03103からの器台(297)の1点を除いて完形品がないことなど、中期土坑との共通点が指摘できる。土壙墓の存在を考慮し精査したが、結果的に土坑S K03103も含め、断定し得るものはない。現状では、日々の生活で生じるゴミや破損土器を投棄した廃棄土坑であると考え。以下、主な土坑からの出土遺物をみていきたい(第68～70図)。

(出土遺物)

土坑S K02044出土遺物(302) 凹石である。形の整った楕円礫の表裏面中央に、明瞭な敲打に



第71図 土坑S K02126出土土器実測図(弥生時代末～古墳時代)



第72図 竪穴式住居跡S H02086出土土器実測図(弥生時代中期)

よる凹みがみられ、深く切り込まれたような線状痕(使用痕)も複数みられる。さらに凹み部分の周縁に、暗赤褐色の色調変化がある。長さ10.6cm、幅6.9cm、厚さ5cmで、重さ545gを量る。

土坑S K 03079出土遺物(282) 端面に擬凹線を施す器台口縁部である。器種のわかるものはこれ1点だけである。そのほかは土器片のみで14点ある。

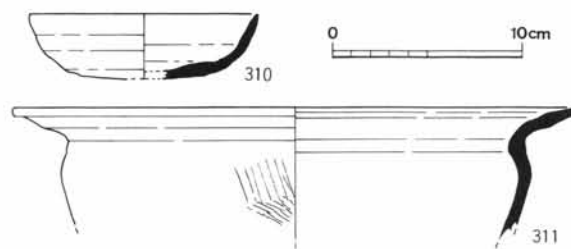
土坑S K 03086出土遺物(283~285) 283は底部から下半の断片で、底部は狭小である。284・285は下端部および脚柱部を欠く器台の断片である。器台はともに受け部が水平近くに大きく開く。端部を斜め上に短く拡張して端面に強いナデを施すもの(285)と、擬凹線文を入れているもの(284)がある。285は同一個体とみられる脚柱部もある。ほかは二段口縁で擬凹線をもつ甕が1点と、体部などの破片が11点ある。

土坑S K 03098出土遺物(286~290) 二段口縁をもつ甕の良好な資料群である。端面に擬凹線文を施すものと、ナデ調整するものがある。前者が6個体、後者が1個体復原される。図化したのは286・288の壺、二段口縁で端部外面に擬凹線をもつ甕の断片2点(287・289)、および290の壺または甕の体部下半である。

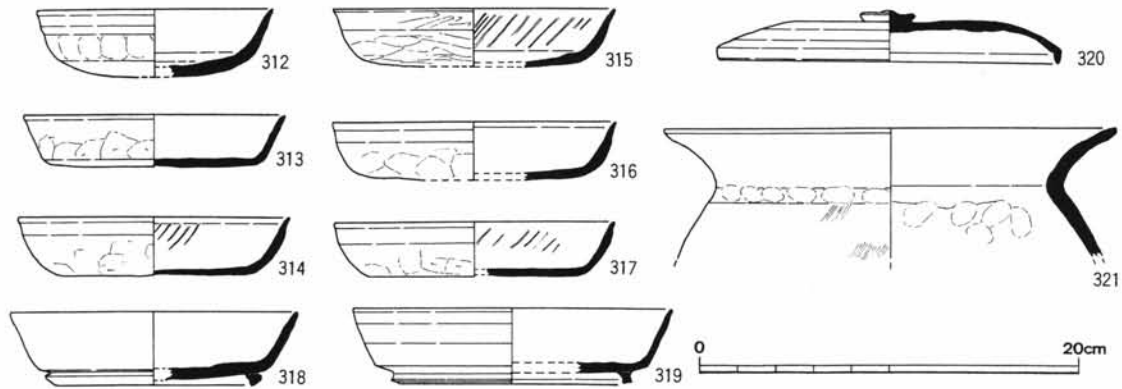
ほか、水平近くに大きく開く器台の杯部と、器台の脚端部片が1点ずつと、細かな体部片が200点以上ある。

土坑S K 03103出土遺物(291~301・303) 後期の土坑中、最も出土量の多いもの(破片数340点)である。壺・甕・高杯・器台・鉢・蓋、土錘(または土玉)、石器などがある。291は、口縁から滑らかな曲線を描いて膨れた体部に続く壺(脚柱付)の断片である。暗赤褐色の色調で、精良な胎土をもつ。292・293は甕で、二段口縁の端面にナデや擬凹線がみられる。294は杯部が滑らかに張り出す高杯で、精良な仕上がりをもつ。

器台は3個体(295~297)ある。297は接合により完形品となった。明赤色の色調で、



第73図 竪穴式住居跡・土坑出土土器実測図
(310: S H02153 311: S K02117)
(古墳時代末)



第74図 溝S D03002出土土器実測図(奈良時代)

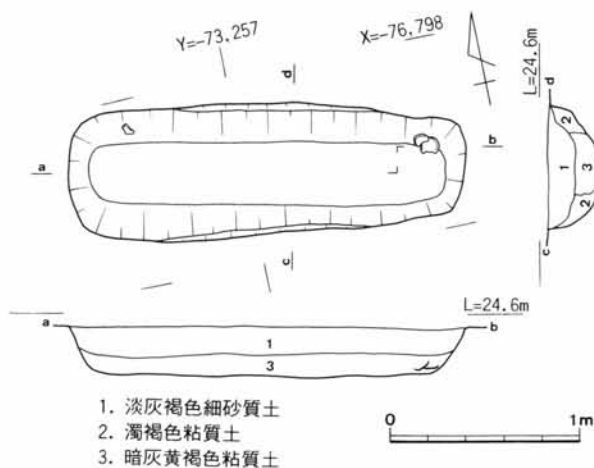
脚柱部に長い方形の透かしが3方向に入る。器壁の風化が進んでいるが、明赤褐色の胎土・色調や独特の透かしの造作など、完全な搬入品である。295は口縁端部を下方に拡張させ、擬凹線文が施されるものである。298は屈曲して外反する杯部をもつ高杯である。299は、高杯の脚柱部で、太さの変わらない柱状のものである。後期(畿内第V様式)前半のものである。同様の脚柱部は6個体分ある。300は、小さな底部から斜め上に体部がのびる鉢である。301は甕の底部断片である。さらに蓋が4個体分ある。

石器には敲石2点、使用痕のない敲石状の円礫が数点ある。敲石(303)は肉厚で三角おむすび形の礫の用い、周囲に敲打による明瞭なアバタ状の潰れ痕がある。これほどの面的な使用痕は、かなり使用頻度が高くないと形成されない。石器製作時に発生する剥片などは周囲になく、その用途・性格については不明であるが、植物食調理具とは思えない。長さ11.5cm、幅9.6cm、厚さ5.8cmで、重さ970gを量る。

4) 弥生時代末～古墳時代初頭

土坑S K 02126 ほぼ円形で、長軸約3m、短軸約2.7m、深さ約20cmを測る。底面は平坦となる。中から出土した土器群は残存状況の良好な一括資料である。

(出土遺物)

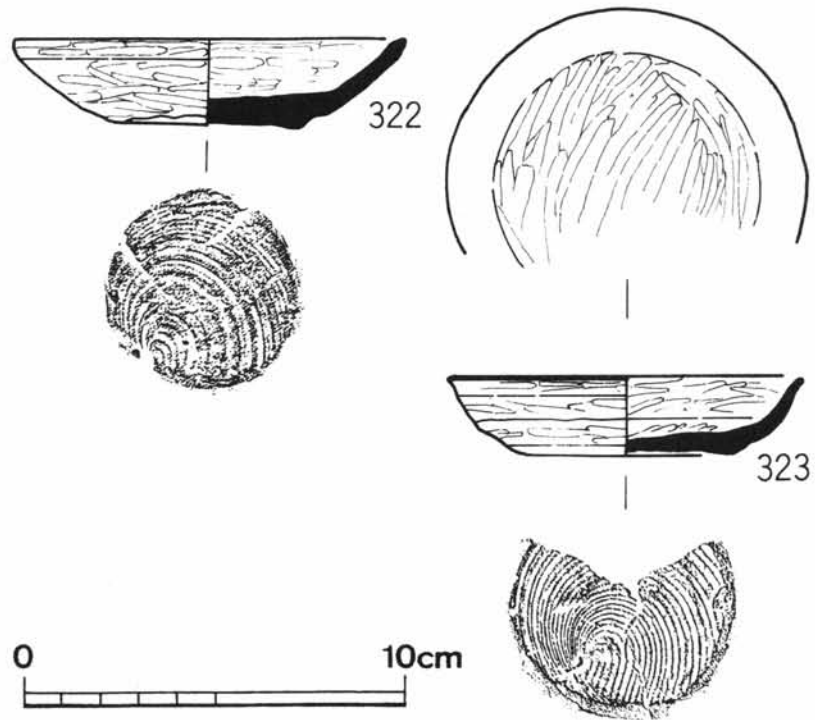


第75図 土壙墓S T 03005平・断面図

二段口縁の壺と甕である(第71図304～306)。304は二段口縁の甕である。口縁部はナデ、体部外面にわずかにハケメ、内面は屈曲部から少しあけてケズリ調整が施される。305は二段口縁の壺である。球形の体部から短く直に立ち上がる頸部から斜め上に口縁部が広がる。内外面はハケ調整が多用される。306は直口壺である。内外面はナデ調整、全体に無骨な作りである。これらは庄内式併行期のものであろう。

5) 古墳時代中期

竪穴式住居跡 S H 02086(第59図) 約4.8×4.1mの方形で、掘形の深さ約0.2mを測る。北側一辺の中間部に焼土の集中する竈部がみられる。そこから深い杯部をもつ高杯などが出土した。また埋土および底面において甕なども出土している。平成14年度の概報では後期のものと報告したが、古墳時代中期から後期にかけてのものと考える。



第76図 土壙墓 S T 03005出土土器実測図

(出土遺物)

すべて土師器である(第72図307~309)。307・308は甕である。外反し厚みのある口縁部はナデ調整され、とくに体部との境に強いナデがかかる。309は高杯で、短い脚柱部に深い鉢状の杯部をもつ。杯部は斜め上に長くのび、口縁端部はわずかに外反し、先はやや外反しつつで丸くおさまられる。全体にナデ調整される。

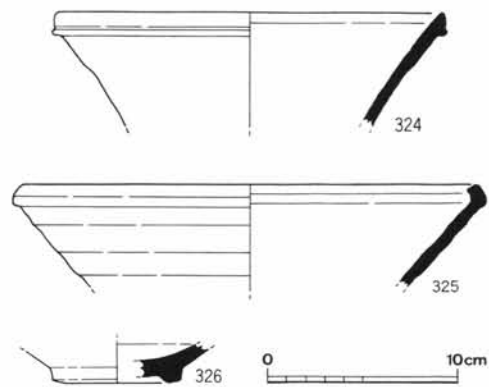
6) 古墳時代後期末

弥生時代中期・後期について大規模な集落の広がりが認められる。この時期の遺構としては、竪穴式住居跡5基と土坑1基がある。

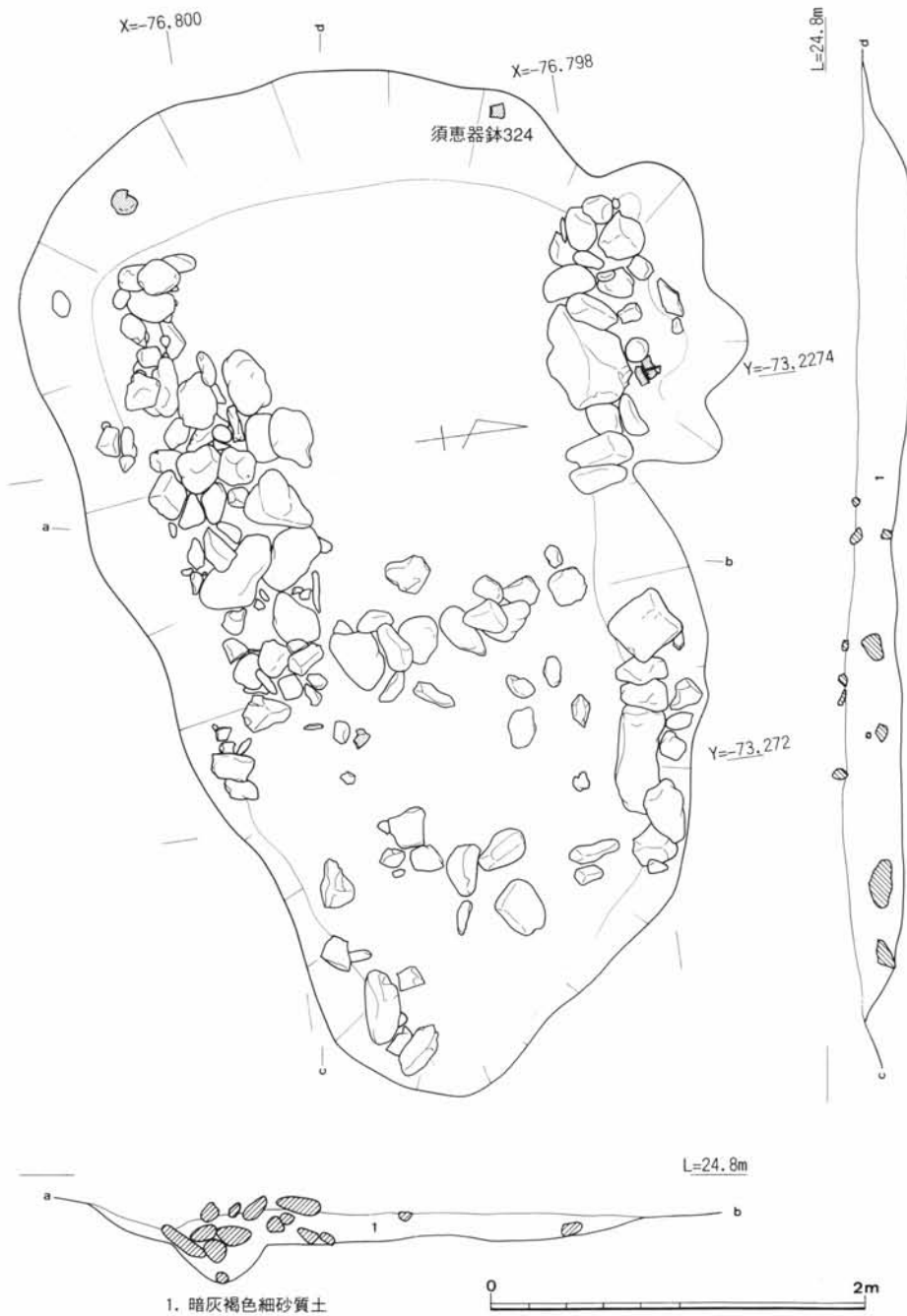
竪穴式住居跡 S H 02041・02043・02101・02120・02153(第23図) 竪穴式住居跡は5基検出した。竪穴式住居跡 S H 02041は、竈の煙道部が斜めに取り付け、長辺掘形の一部を掘り残す青野型住居跡である。竪穴式住居跡(S H 02043・02101・02120・02153)も、出土遺物は少ないが後期末とみられる。なお、平成14年度の概報で当該期とした竪穴式住居跡 S H 02123・02155・02154は、再検討の結果、前2者は掘形の残存が浅く(約10cm)、かつ時期の明瞭な遺物がないこと、竪穴式住居跡 S H 02154も出土遺物のないことから、時期不明の竪穴状遺構(S K)としておきたい。そのほかにも時期不明の方形または不定形な竪穴状遺構が4基ほどある。

(出土遺物)

第73図310は、竪穴式住居跡 S H 02153の埋土中か



第77図 土坑 S K 03001出土土器実測図



第78図 土坑S K03001平・断面図(網部は土器)

ら出土した須恵器杯で、古墳時代後期のものである。

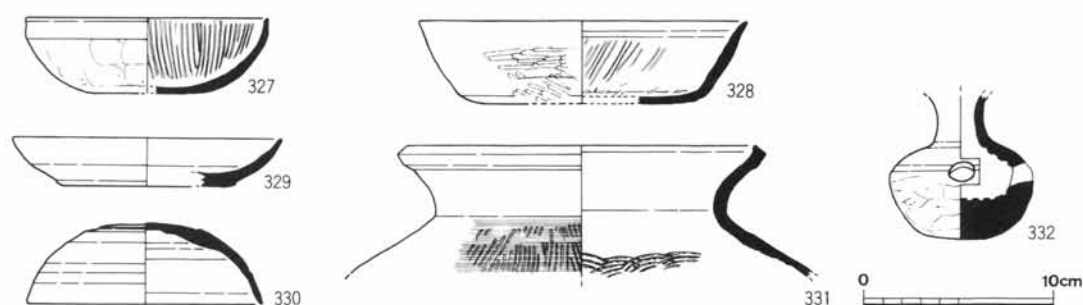
土坑S K02117 楕円形の浅いもの(約15cm)で、褐色粘質土の埋土をもつ。

(出土遺物)

甕ないし鍋形土器(第73図311)が出土している。311は口縁部内面に強いナデあり、外面はハケ調整される。7世紀にはいるものであろう。

7) 奈良時代

溝S D03002(第23図) A地区の南西側において、大きく2か所で屈曲させた溝である。長さ



第79図 溝S D02002出土土器実測図

27.5m分、幅0.4～1.2m、深さ6～10cmを測る。土坑S K03001により西側の一部を壊されており、土坑より古い時期である。出土遺物からみて時期は、奈良時代となる。

(黒坪一樹)

(出土遺物)

第74図に示した。須恵器杯(312)は軟質のもので、色調は内外面とも灰白色である。焼成は不良である。ロクロナデで調整しているものの、外面はユビオサエを施しており、土師器の要素が認められる。土師器皿(313～317)は、須恵器のように回転作用によるナデにもものが1点(313)ある。内面は縦方向のミガキを施し、外面はていねいなナデを施す。色調はいずれも赤褐色である。須恵器杯(318・319)は、色調が青灰色で、内外面ともロクロナデで調整している。底部は貼り付け高台である。須恵器杯蓋(320)は、つまみを有するタイプである。色調は青灰色であるが、口縁部はやや黒変している。土師器甕(321)は赤褐色のもので、胎土は白砂が目立つものである。口縁部はヨコナデを、体部はハケメを施す。以上の遺物はすべて奈良時代に属する。

8) 平安時代末～鎌倉時代

平安時代末の遺構としては、土壙墓S T03005がある。溝S D02001・土坑S K02046は、鎌倉時代に属する。

土壙墓S T03005(第75図) 長軸2.1m、短軸60～70cm、深さ25cmを測る隅丸長方形の掘形をもつ。淡灰褐色細砂質土と褐色粘質土の埋土である。棺の痕跡を捉えようと努めたが、断面観察でもまったくわからなかった。底面は平坦であるが、両側の立ち上がりはやや内湾している。北東隅に黒色土器の皿が2個体重なって出土した。供献されたものとする。この遺物の年代から推して、平安時代末期に設けられたものといえる。

(出土遺物)

黒色土器皿(第76図322・323)は、内外面ともミガキを施している。底部は糸切りである。322は表面が黒色だが、ところどころ磨滅しており、断面の褐色が見えている。323は漆黒色である。

土坑S K03001(第78図) 不定形な浅い土坑で用途は不明である。長軸5.5m、短軸2.6～3.6m、深さ20～30cmを測る。断面形は皿形で、底は若干の起伏がある。淡灰褐色細砂質土の埋土で、拳大から人頭大よりも大きな自然礫が無作為に投棄されている。礫の石材はほとんどがチャートと頁岩である。出土遺物は少ないが、須恵器鉢の口縁部、輸入白磁碗の断片などがある。

(出土遺物)

須恵器鉢(324・325)は灰色のもので、口縁部外面のみ、やや黒変している。口縁部がやや分厚くなる段階のものである。いずれも鎌倉時代後期の東播系である。白磁碗(326)は、内面は施釉、外面は露胎である。削り出し高台である。V類に分類され、平安時代末期から鎌倉時代初期に属する。

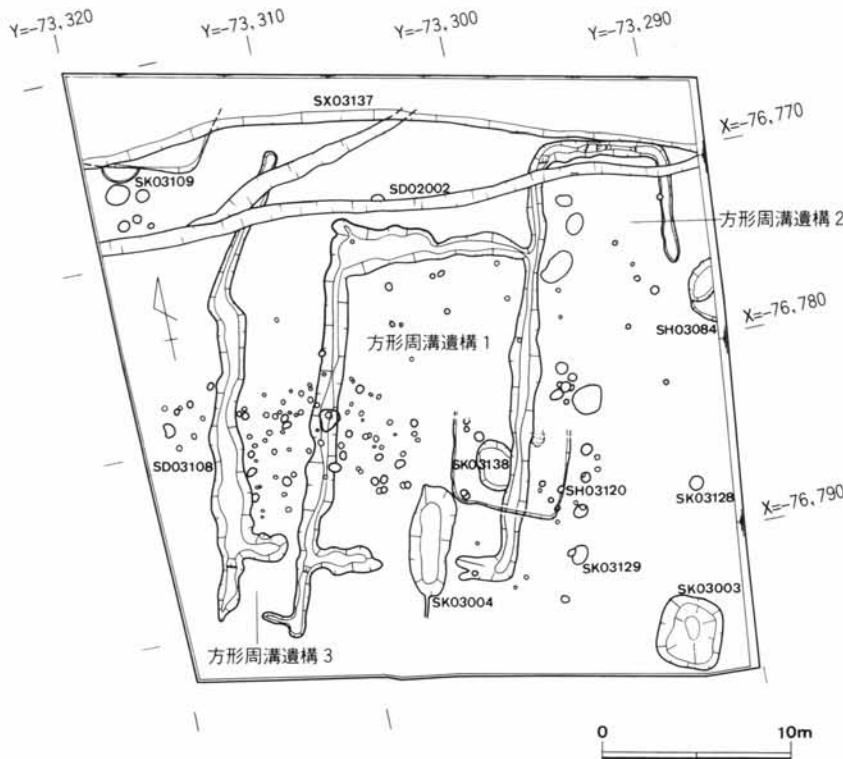
溝S D 02001(第23図) 幅約30cm、深さ約5cmで、長さ約16m検出した。暗灰褐色粘質土を埋土とする。瓦器碗の断片が出土した。

溝S D 02002(第23図) 鎌倉時代(13世紀代)の溝で、A・B地区を東西に縦断する。長さ74.3m、幅の平均約1.1m、平均の深さ約30cmを測る。溝の断面形は逆台形および「U」字形で、淡褐色細砂混じり粘質土の埋土をもつ。この溝は、平成元年度に調査した観音寺遺跡Aトレンチの溝S D 01と規模や東西の方向、出土遺物の時期をほぼ同じくすることから、つながりをもつ可能性が高い。^(注28)後述する柱穴の分布もこの溝より南側に集中することから、鎌倉時代集落における北端の区画を示している。

(出土遺物)

第79図に掲示した。土師器杯(327・328)は、内外面とも赤褐色で、内面には縦方向にミガキを

施し、外面にはていねいなナデを施す。ただし、328は口縁部近くに横方向のナデを施す。瓦器皿(329)は、内外面とも黒色であるが、黒色のつきが悪くところどころに断面の灰白色が見える。須恵器杯蓋(330)は、内外面とも灰色で、調整はロクロナデであるが、天井部外面のみヘラケズリを施す。須恵器甕(331)は、口縁部外面は濃緑灰色で、体部は



第80図 B地区遺構平面図

付表9 B地区検出遺構

時期	遺構
弥生時代中期後半	方形周溝遺構3基・溝1条(S D 03108)・土坑4基・柱穴状土坑2基
古墳時代後期末	竪穴式住居跡1基(S H 03120)
平安時代後期～室町時代	大型土坑2基(S K 03003・03004)・溝1条(S D 02002)・柱穴111基・田畑区画1か所(S X 03137)

灰色である。濃緑灰色部分は自然釉が付着している。須恵器甕(332)の色調は灰色で、外面はロクロナデである。内部に透かしを穿孔した際にできた円筒形の粘土塊がそのまま入っている。底部は分厚く2.2cmもある。327・328は奈良時代、329は鎌倉時代、330～332は古墳時代に属する。

土坑 S K 02046(第23図) 溝 S D 02001に壊された楕円形のものである。瓦器椀が2個体(図版第34中段)まとまって出土した。^(注29)

柱穴(Pit) 掘立柱建物跡や柵列を構成すると見られるが、抽出できなかった。平安時代から鎌倉時代の柱穴は合計156基ある。直径25cm前後、深さ数cm～20cmを測る。概ね暗茶褐色粘質の埋土である。瓦器、須恵器、土師器などの細片が少量出土するものがある。また、これらの柱穴は、溝 S D 02002の南側に集中している。

(伊野近富・黒坪一樹)

(2) B地区の調査

①層位

層位は、第81図に示した南壁で説明する。A地区で弥生時代以降の遺構が掘り込まれていた第2層以下の層と同じものがB地区にはなく、第2層：明濁橙褐色細砂、第3層：濁茶褐色細砂となって、薄い堆積状況を示す。土質はよく似ているので、同一層がそれぞれ大きく削平されたものとも考えられる。方形周溝遺構を設ける際、かなり大規模に土地が改変されたこと、また、度重なる後世の削平の大きさを窺わせる。

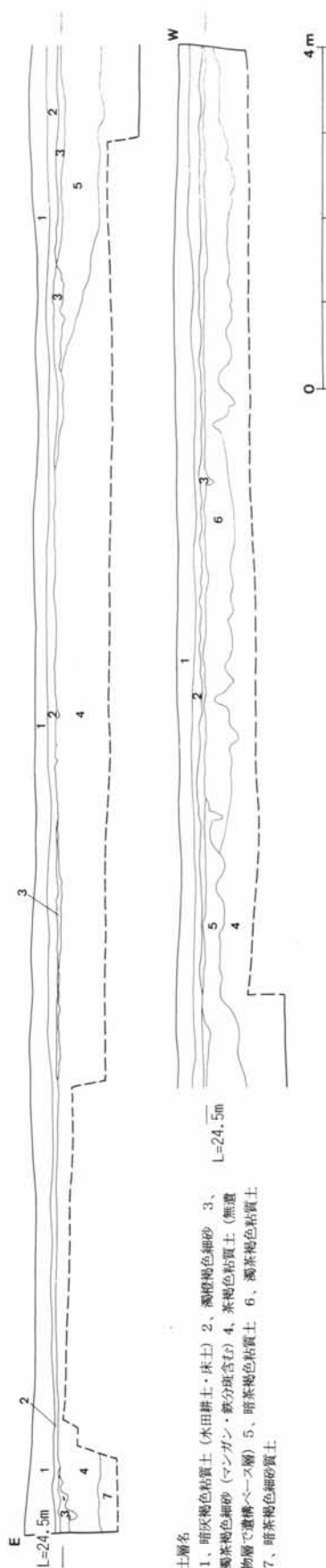
②遺構・遺物

B地区から検出された時代ごとの遺構は付表9のとおりである。出土した遺物には、弥生土器・石器・土師器・須恵器・陶磁器などがある。

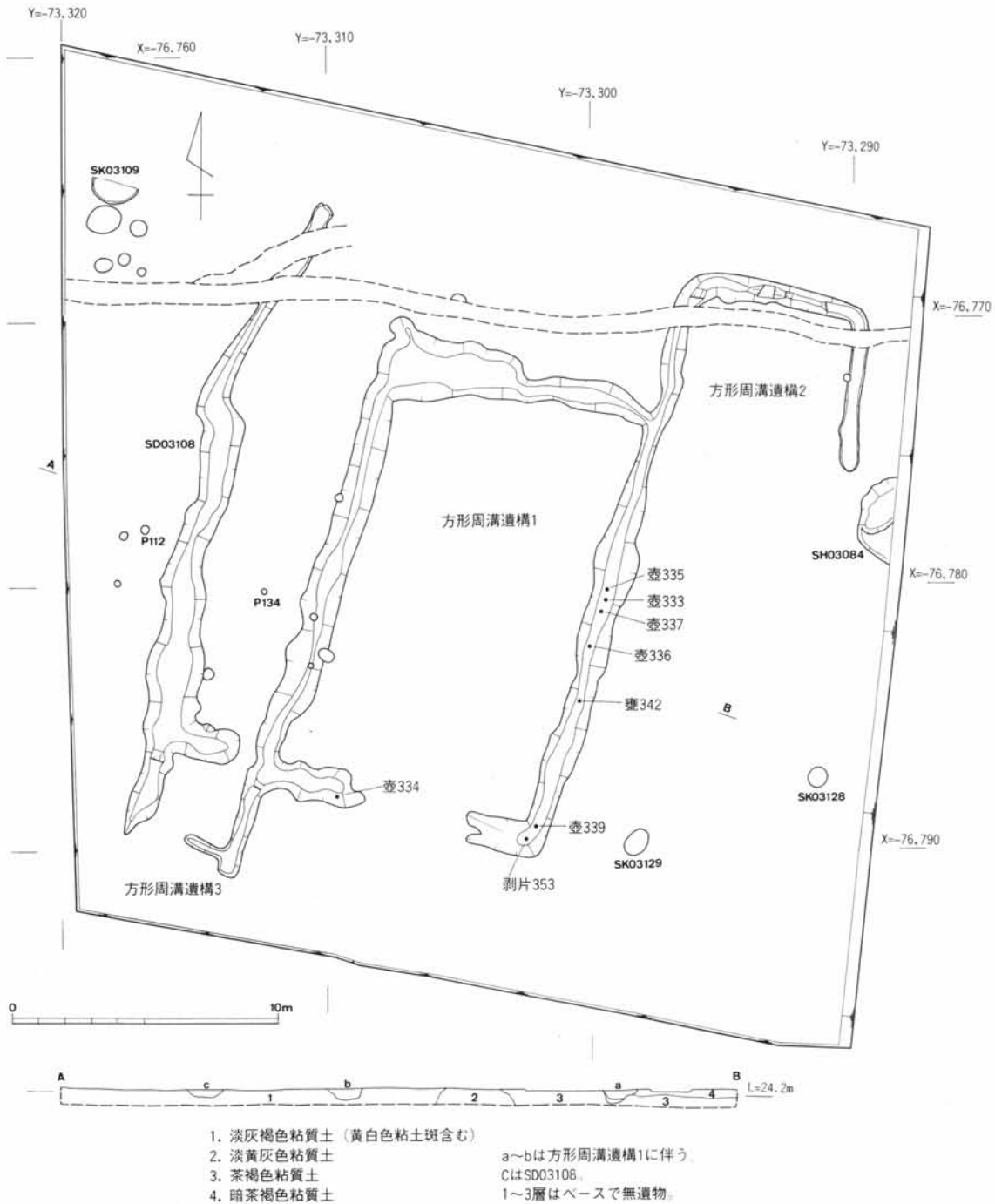
1) 弥生時代中期後半

方形周溝遺構^(注30)(第82図)

調査区のほぼ全域で、平均0.85m(最大1.25m、最狭0.47m)幅の溝が東西南北に走り、それらが大小の方形区画を形成している。方形区画は合計3基で、方形周溝遺構と確認された。

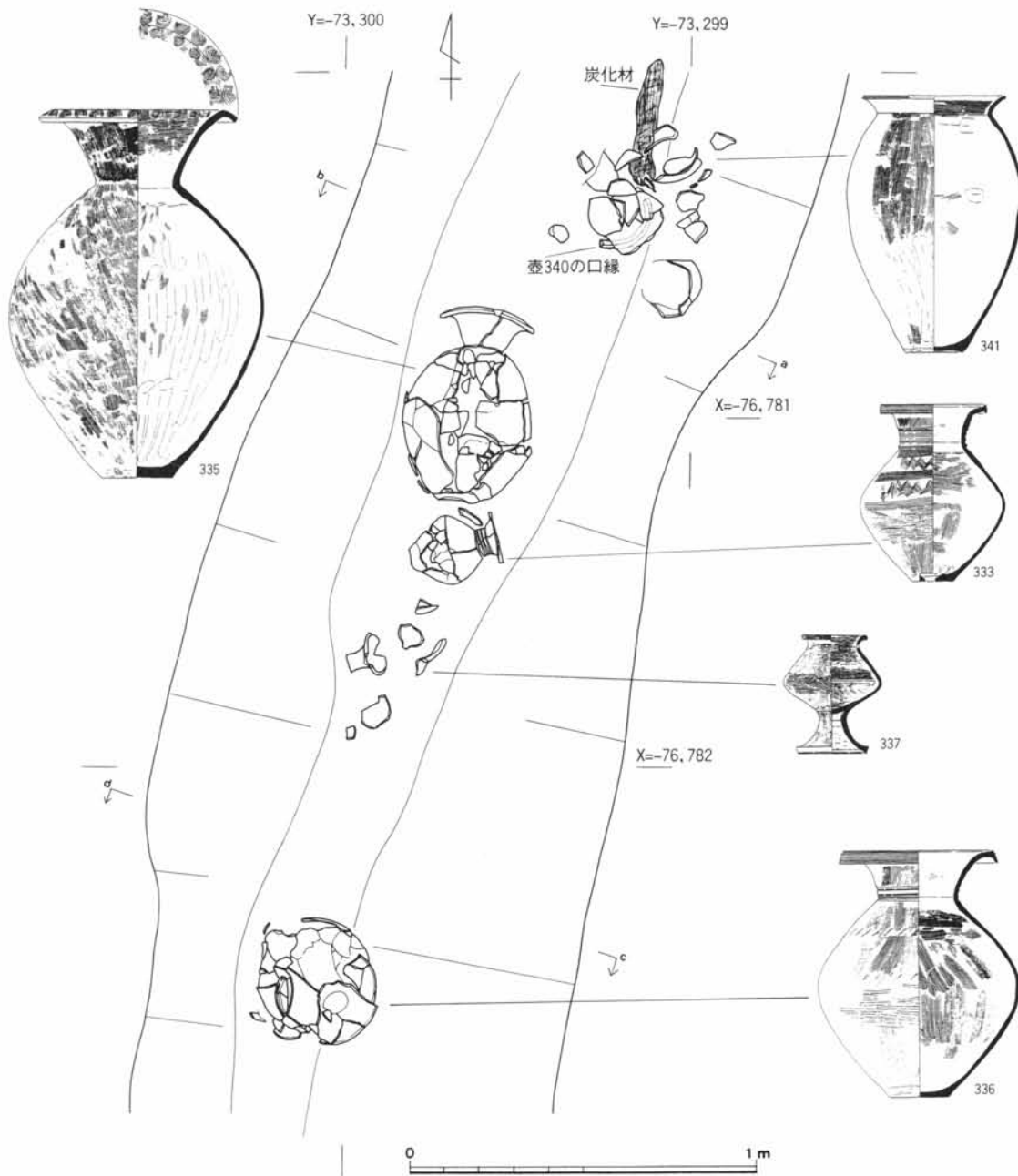


第81図 B地区南壁土層断面図



第82図 方形周溝遺構、土坑平・断面図

方形周溝遺構1 大型である。溝で囲まれた区画の長辺・短辺の寸法は、溝外側で約21m・11.6m、溝内側で19.7m・9.8mを測る。長辺が短辺のほぼ2倍の長方形である。同様のものは、福知山市石本遺跡の方形周溝墓などが^(註31)ある。溝のラインがやや蛇行していることや、幅も一定していないことは、削平の度合いが大きいことの表れであろう。また、南辺の溝の中間部が切れているのは、中世の大型土坑SK03004に壊されたことによる。溝南辺は、この大型土坑を挟んで、東西のコーナーに向かうほど深くなる。さらに東辺の土器集中部は最も深く、約40~50cmを測る。堆積土層は、東辺の土器集中部以外は暗褐色細砂質土のほぼ単一層である。底近くにおいても別

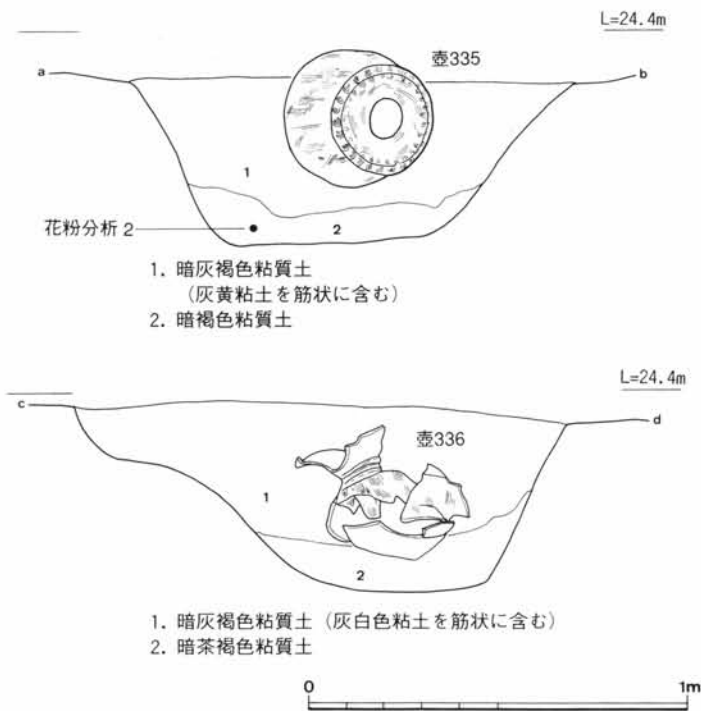


第83図 方形周溝遺構1 弥生土器出土状況図(1)

の土質の層は確認されなかった。

溝内の遺物は、1点の石器を除きすべて土器で、その完形率が比較的高いことが特徴である。土器は、図化した333～342の10点がほとんどすべてのものである。333・335～338・340～342は東辺中間の深く掘られた部分から、334は南辺中間の浅くなった部分、壺339と粘板岩の横長剥片(第94図353)は南東隅の深くなった部分からの出土である。ほぼ完形品のまま出土したのは333～335・336・341の5点である。そのほかのものは破損していたが、少し離れて出土した339を除き、破片の接合だけで60～80%にまで復原されるものであった。

出土状況は、壺(336)は口を斜め上にした状態で、334・335・333・342は、ほぼ横倒しの状態



第84図 方形周溝遺構1 弥生土器出土断面図

な傾斜で深くなっており、溝内の埋葬を念頭に断面観察をしたが、垂直に立ち上がる掘形や棺痕跡の土色変化を確認することはできなかった。

(出土遺物)

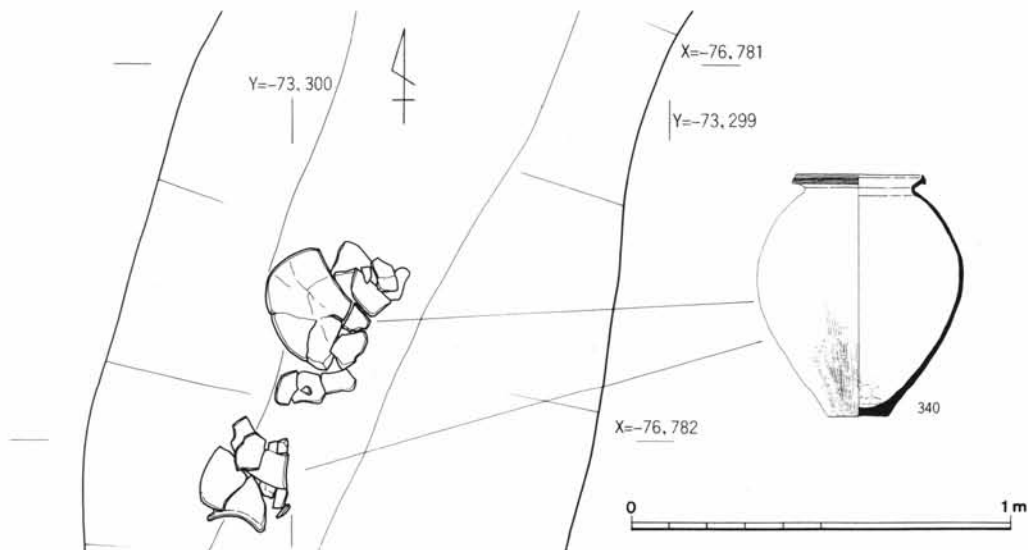
333は広口壺A2で、ほぼ直に立ち上がる頸部から大きく外反する口縁部をもつ。口縁端部には拡張がみられ、2条の凹線文が施される。頸部外面にも5条の凹線文、扁球形体部の外面は櫛描による直線文と波状文が交互に引かれる。底部中央には径9mmの孔が開けられている。

334は広口壺A4である。短い頸部から滑らかに口縁部が外反し、端部を拡張しているもの。頸部に2条の凹線文を施し、体部は中間部に最大径をもち、外面に櫛描直線文と波状文が交互に施

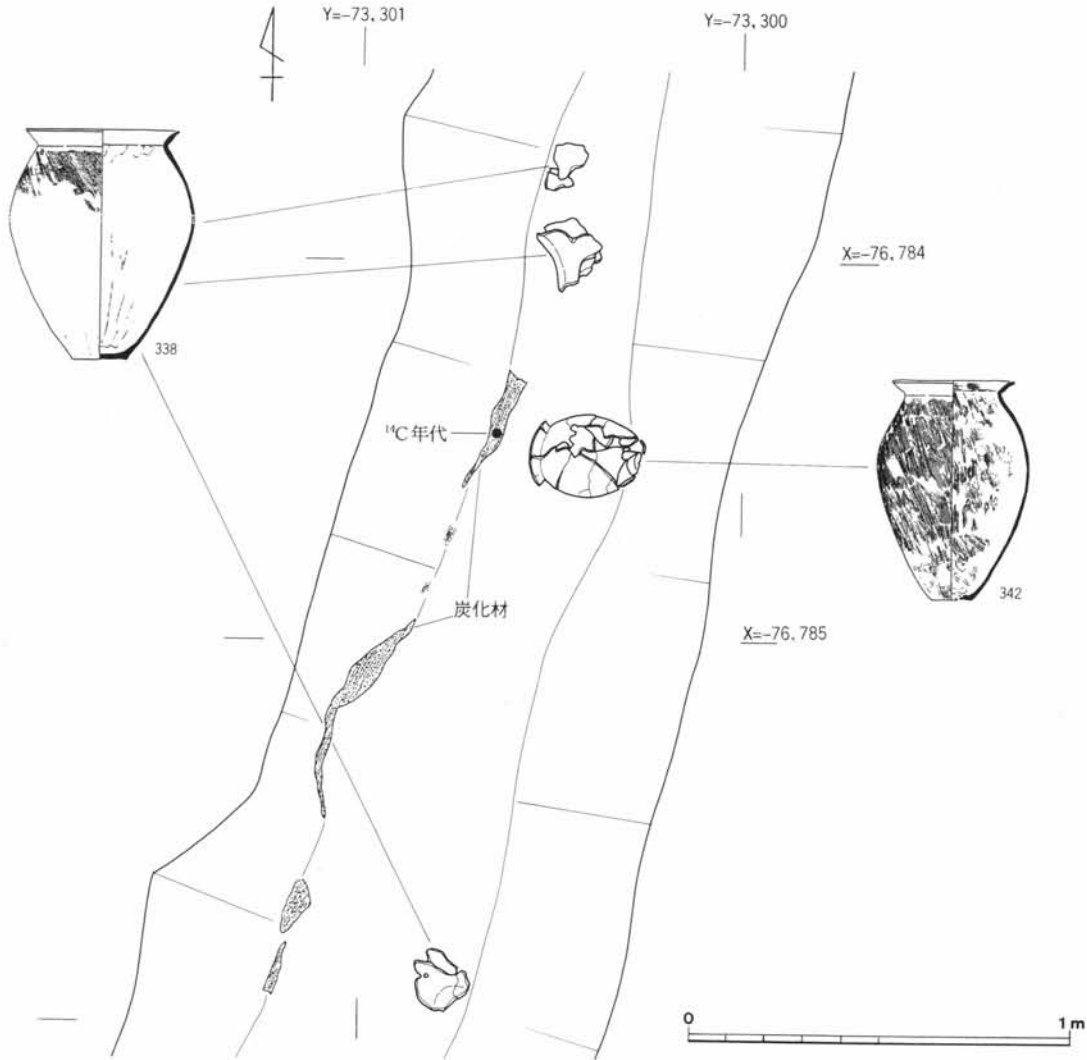
であった。甕(338~341)は破損した状態である。340のように離れたところに部位が散乱していたものもあった。また、破損した甕(340)の出土レベルは、壺(333・335・336)や台付無頸壺(337)よりも完全に下位であった。

さらに、338・342の出土箇所には、細長い炭化材が横たわっていた。これは溝上位から斜めに長く入っており、少なくともこの部分は短時間に埋没したと思われる。この炭化材については、放射性炭素年代測定を行った。

以上、土器の集中箇所は滑らかな



第85図 方形周溝遺構弥生土器出土状況(2) (第83図に示した土器より下位で出土)



第86図 方形周溝遺構 1 弥生土器出土状況(3)

される。底部からの立ち上がりはゆるやかである。

335は広口壺Aである。口縁部が斜め上に大きく開き、端部が屈曲・外傾して面をもつ。その面および口縁内面に扇形文をもつ。体部の最大径はほぼ中間部になる。口縁・体部の内外面はハケ調整される。

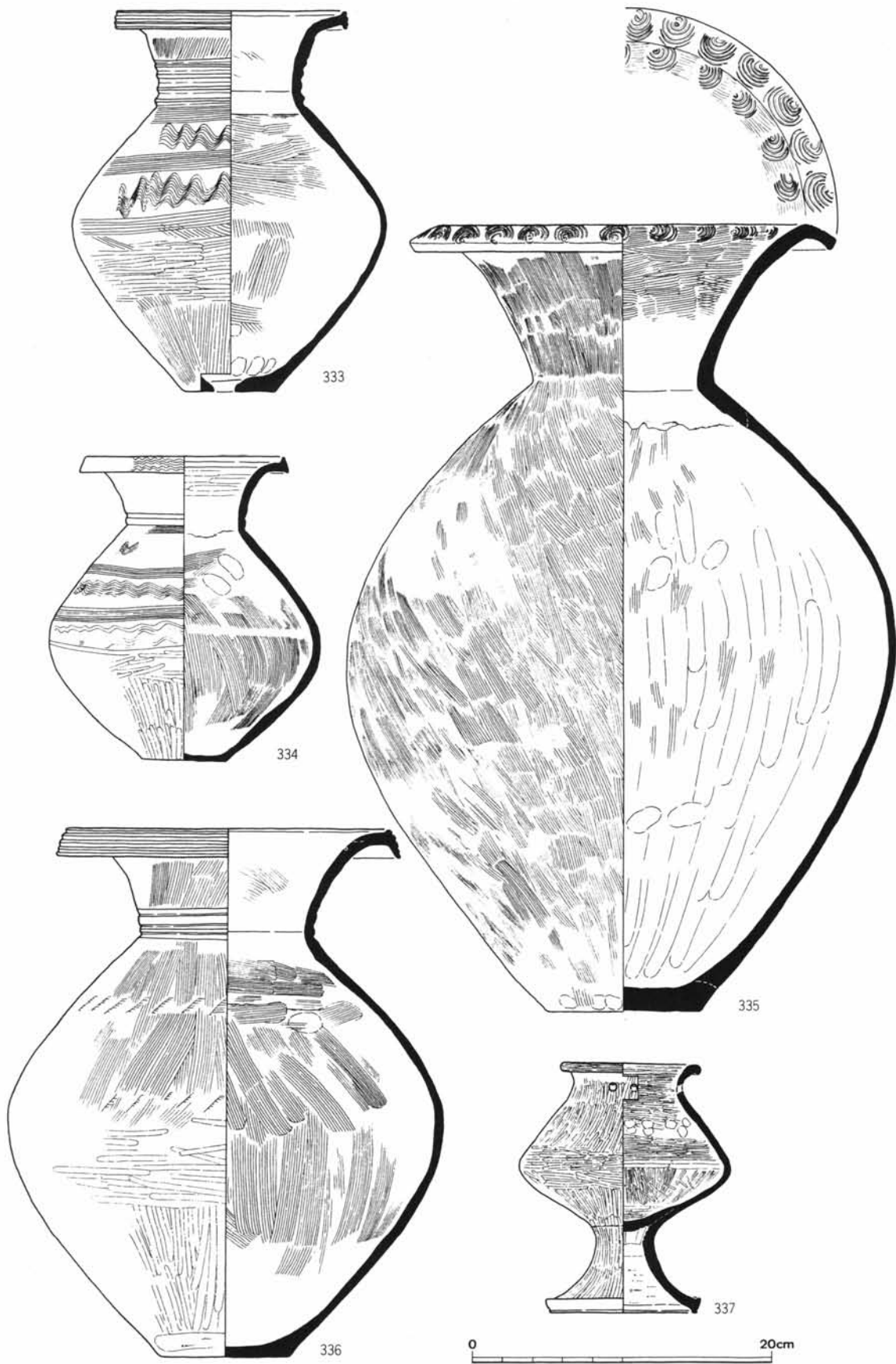
336は広口壺である。口縁部は外反しつつ大きく開き、端部を拡張させ4条の凹線文が施される。口縁部の調整は外面ハケ、内面はハケ後ナデ。体部との境に3条の凹線文がある。体部の最大径は中間部にあり、上位および中間に櫛先列点文がみられる。底部は径9cmと広く薄い。

337は台付無頸壺で、内外面とも精緻なミガキが施され、胎土も良精である。

甕は、「く」の字状口縁の端部を丸く収める甕A1(338・342)、端部に面をもつ甕A2(341)、端部を明瞭に跳ね上げる甕B(339)、さらに口縁端部を拡張し外傾させる甕C(340)がある。

石器(353)は、背面下端に表皮をのこす横長剥片である。粘板岩製で、長軸9.1cm、短軸3cm、厚さ9mmを測る。石器製作時に生じるものである。

方形周溝遺構 2 方形周溝墓 1 の北東隅と接続して設けられている。南北6.5m、東西8mを



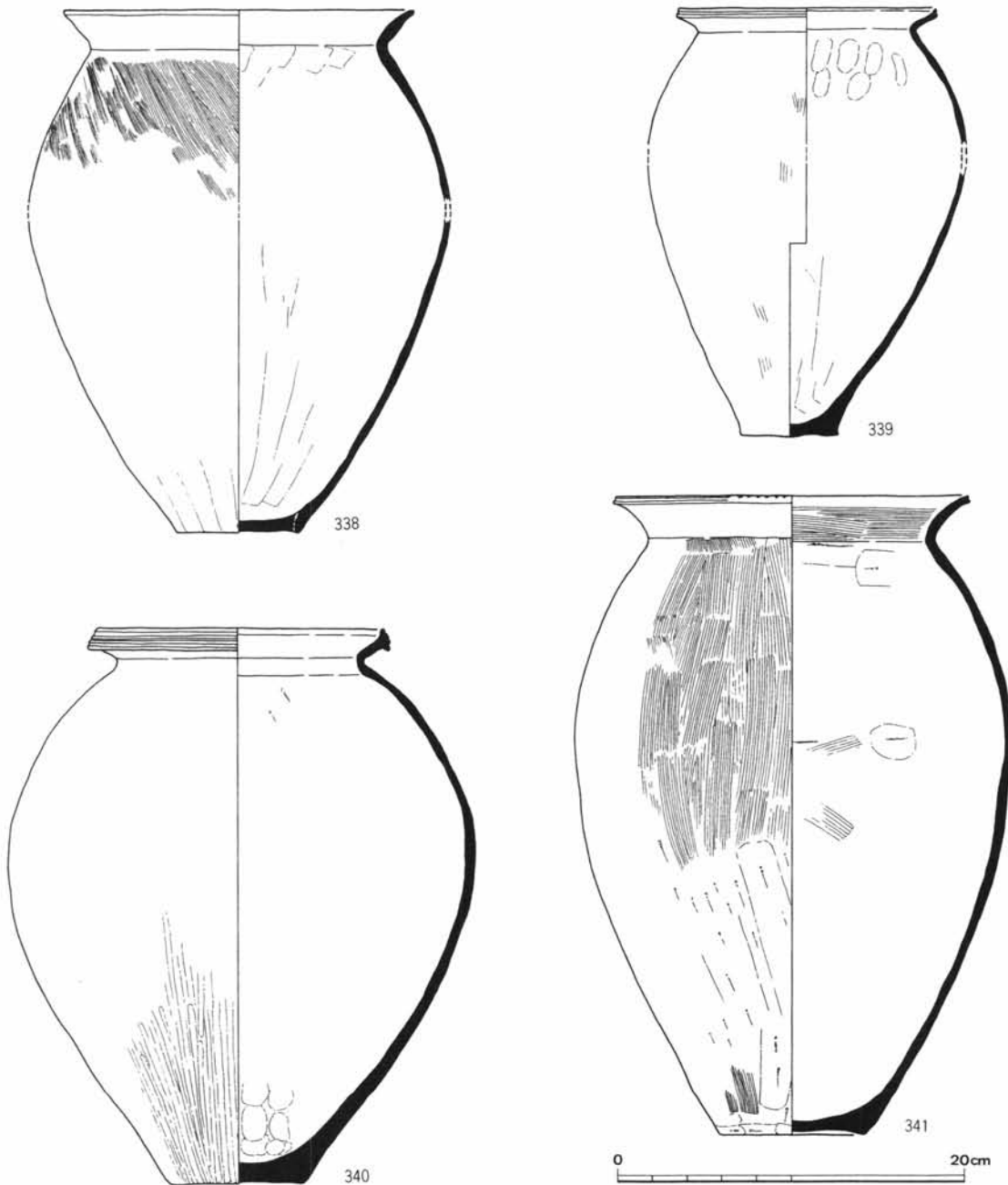
第87図 方形周溝遺構 1 出土土器実測図 1 (弥生時代中期)

測る。深さは底が凸凹しているので一定ではないが、平均約20～60cmを測る。埋土から弥生土器の細片数点が出土した。甕や壺などの体部片とみられる。

方形周溝遺構 3 方形周溝遺構 1 の南西部に取り付くもので、南北・東西辺とも溝外縁部で約 4.8m を測る小さなものである。削平がすすんでいるため、南北辺が途切れる。深さは 5～30cm を測り、一定していない。出土遺物はみられなかった。

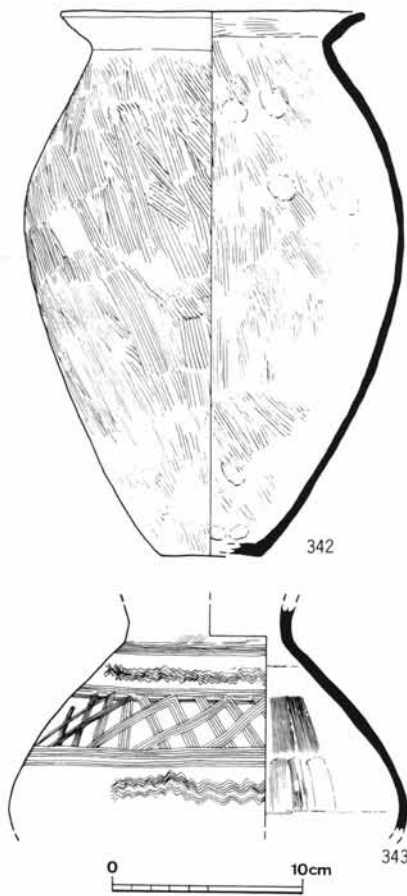
溝 S D 03108 (第82図) 方形周溝遺構 1 の西側に平行して掘られている。掘形ラインの曲折など、方形周溝遺構の溝との共通点がある。出土遺物は少ないが、343の壺体部上半や、粘板岩の剥片が出土した。343は外面に櫛描による直線文・斜交直線文・波状文がみられる。赤褐色の色調である。

土坑



第88図 方形周溝遺構 1 出土土器実測図 2 (弥生時代中期)

土坑は4基ある。楕円形が中心で比較的形が整い、切りあい関係をもたず、土器は底から出土している。底の状態は、「U」字形および平坦面をもつもので、傾斜や凹凸面はみられない。また、出土した土器の完形率は方形周溝遺構と同様、非常に高い。A地区における土坑との明らかな相違点で、土器を供献する土坑である。以下、個別にみていく。



第89図 方形周溝遺構・溝出土土器
実測図(弥生時代中期)
(342: 方形周溝遺構 1
343: 溝 S D03108)

また、出土した土器の完形率は方形周溝遺構と同様、非常に高い。A地区における土坑との明らかな相違点で、土器を供献する土坑である。以下、個別にみていく。

土坑 S K 03084(第91図) 大型の不定形土坑である。深さは北半側が深く掘られ、48cmを測る。底面は平坦である。

(出土遺物)

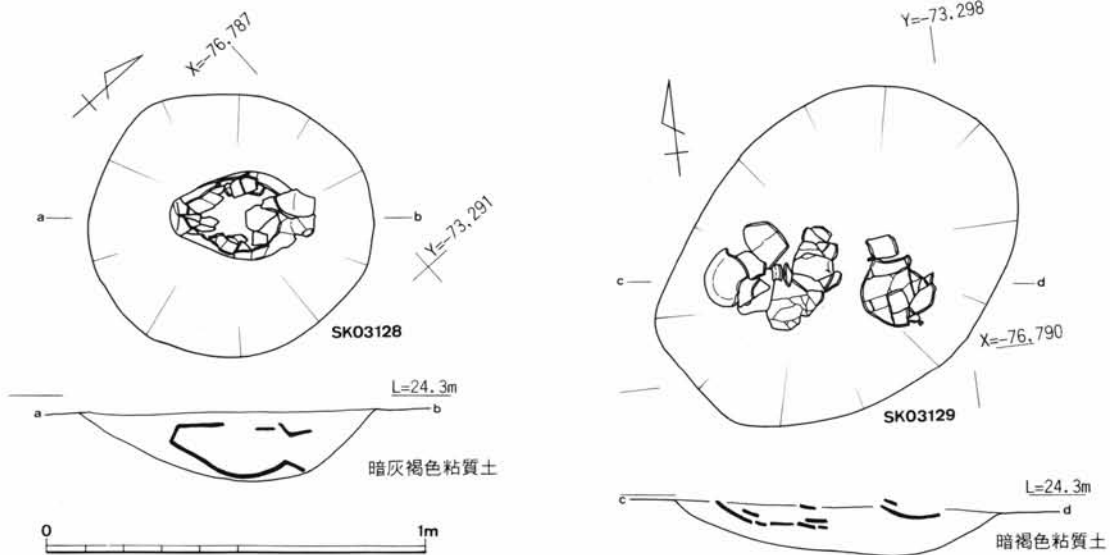
344~347がある。344・345は広口壺である。345の口縁部は短い頸部から滑らかに外反して開く。最大径が中間より上位にくる偏球形の体部をもち、頸部の境に櫛描列点文、体部に3条の櫛描波状文が施される。底部は径7cmと広く、薄く作られている。346は台付無頸壺である。347は水差形土器(壺D)である。

土坑 S K 03109(図版第26-(3)、第82図) 部分的な残存状態で全体形は不明である。深さは30cmを測る。弥生時代中期の壺形土器1点(351)が出土した。底部の状況は「U」字形からやや平坦面をもつ。淡褐色粘質土の埋土である。

(出土遺物)

351は壺で口縁部を欠く。上半の頸部に近い部分に、上から左下がりな線條が引かれている。

土坑 S K 03128(第90図左) 0.75×0.70mの円形に近い平



第90図 土坑 S K 03128・03129平・断面図(弥生時代中期)

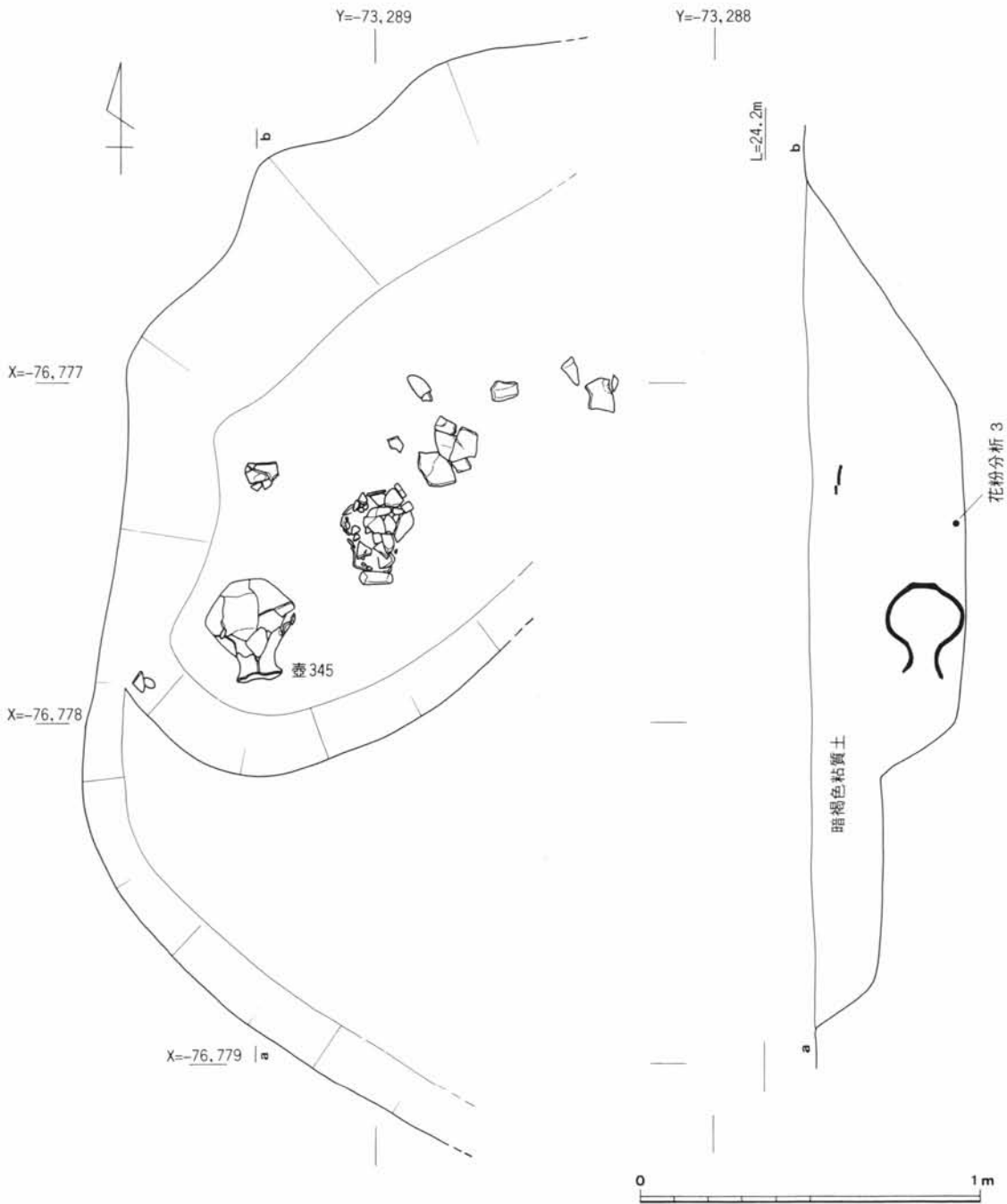
面形である。深さは20cmを測り、断面は「U」字形である。遺物は、348の水差形土器(壺D) 1個体のみである。完形品で横に寝かされた状態で出土した。

(出土遺物)

348は、やや内湾しつつ立ち上がる口縁部の外面に3条の凹線文がある。薄い器壁の体部は長胴で、中間より上位に列点文がみられる。また底部中心部に径2.3cmの孔が開けられている。

土坑S K 03129(第90図右) 整った楕円形で長軸1.05m、短軸0.75m、深さ15cm弱を測る。底形状は滑らかな「U」字形である。

(出土遺物)



第91図 土坑S K 03084平・断面図



第92図 土坑出土土器実測図(弥生時代中期)

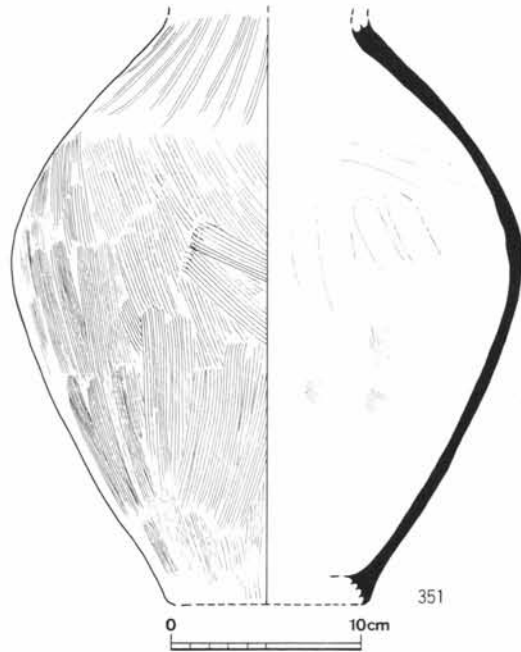
広口壺A2(350)と水差形土器(壺D)(349)の2個体ある。350は、口縁部が短い頸部から外反し、端部を拡張させている広口壺である。口縁部の端面に櫛先原体による3～4個以上一対の列点文、体部に櫛先による列点文がみられる。

349は、直立して立ち上がる口縁部外面に凹線文、偏球形の体部は外面ミガキ、内面はハケ後ナデにて調整される。色調は暗赤色である。

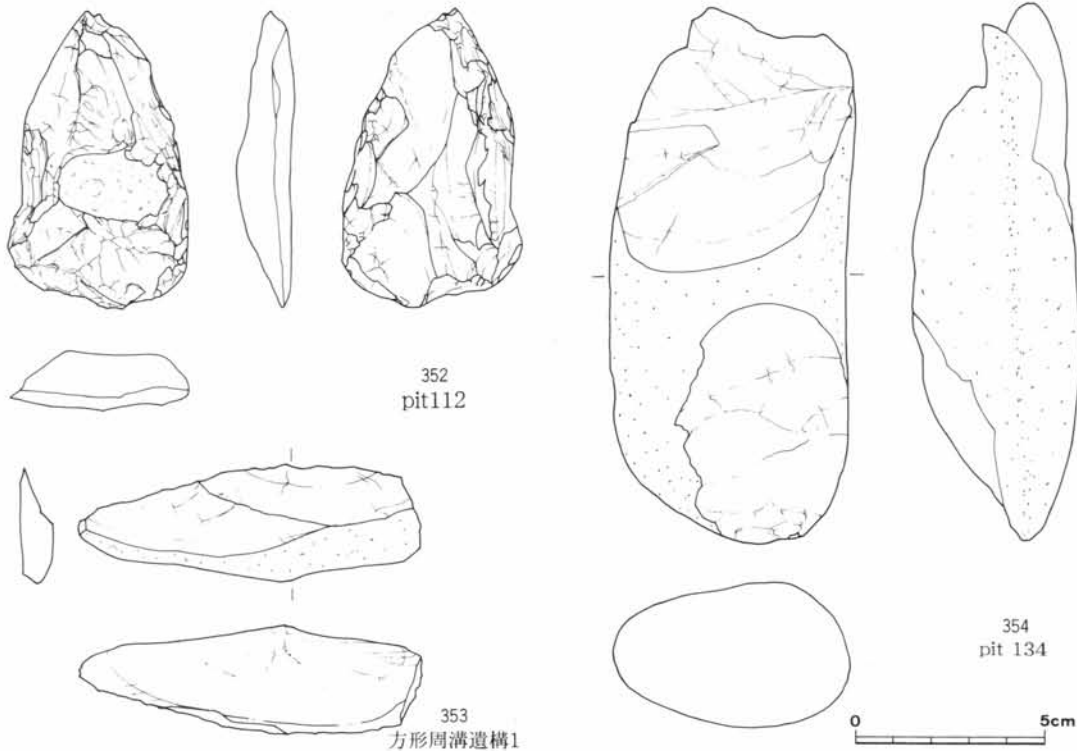
柱穴状遺構 直径約25cmの小土坑(P)がいくつかある。埋土は暗褐色粘質土で、中世のものとは相違する。それらの内の2基(P-112・134)から石器が出土した。

(出土遺物)

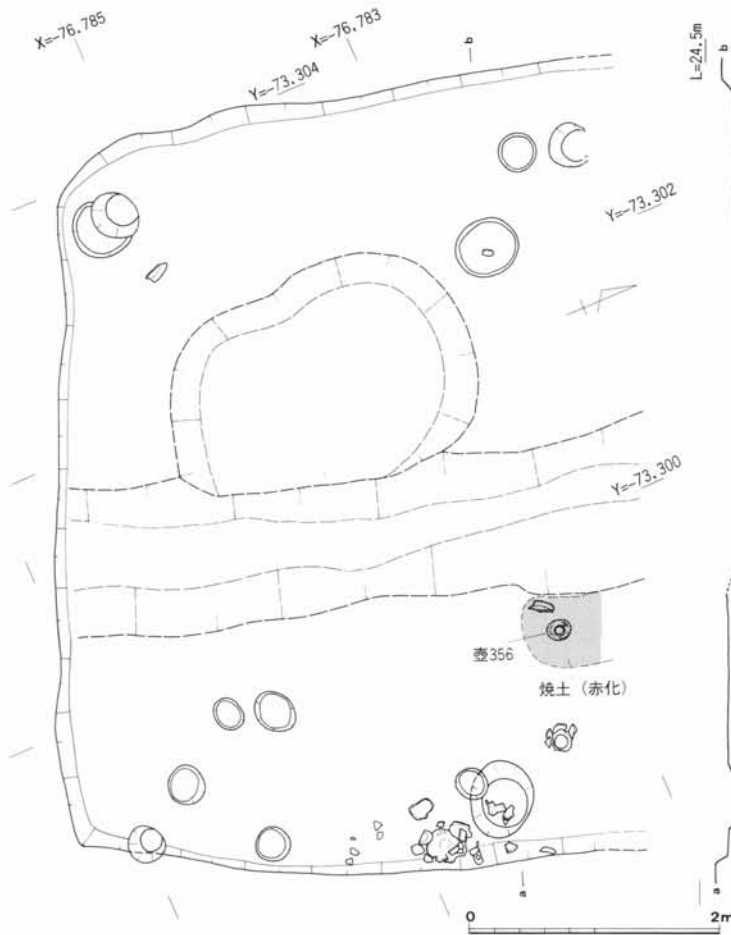
P-112出土の扁平磨製石斧、P-134出土の敲石である(第94図)。扁平磨製石斧(352)は破損が著しく、本来の磨面はほとんど残っていない。長さ7.8cm、幅4.7cm、厚さ1.4cm、重さ50gを測る。敲石(354)は両先端が著しい打撃により剥離しているものである。石器制作時の荒割りに用いられたものであろう。長さ14.2cm、幅6.2cm、厚さ4.4cm、重さ490gである。方形周溝遺構と同時期で、中期のものと思われる。



第93図 土坑S K03109出土土器実測図
(弥生時代中期)



第94図 石器実測図3(弥生時代中期)



第95図 竪穴式住居跡 S H 03120平・断面図

2) 古墳時代後期末(第95図)

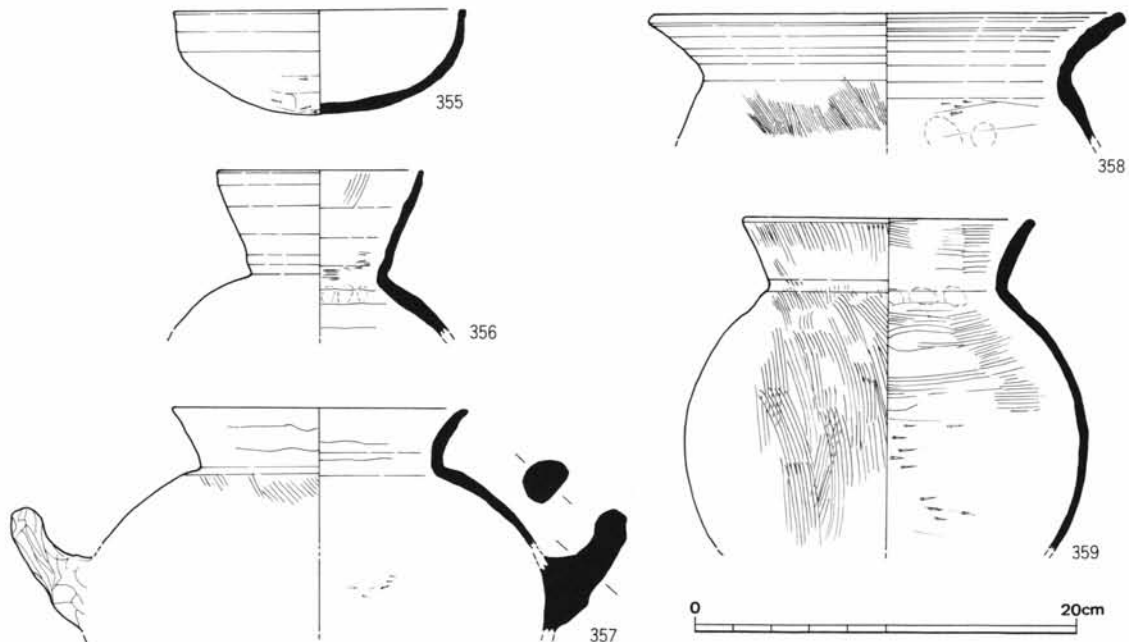
竪穴式住居跡 S H 03120 長辺6.3m、短辺4.6m(推定)を測る方形である。全体に残存状況は悪く、壁面のたちあがりは10cmほどであった。北辺中央部に赤い焼け土がみられ、本来竈があったものと推定される。なお、中央部の土坑はこの住居より古い時期のものである。

(出土遺物)

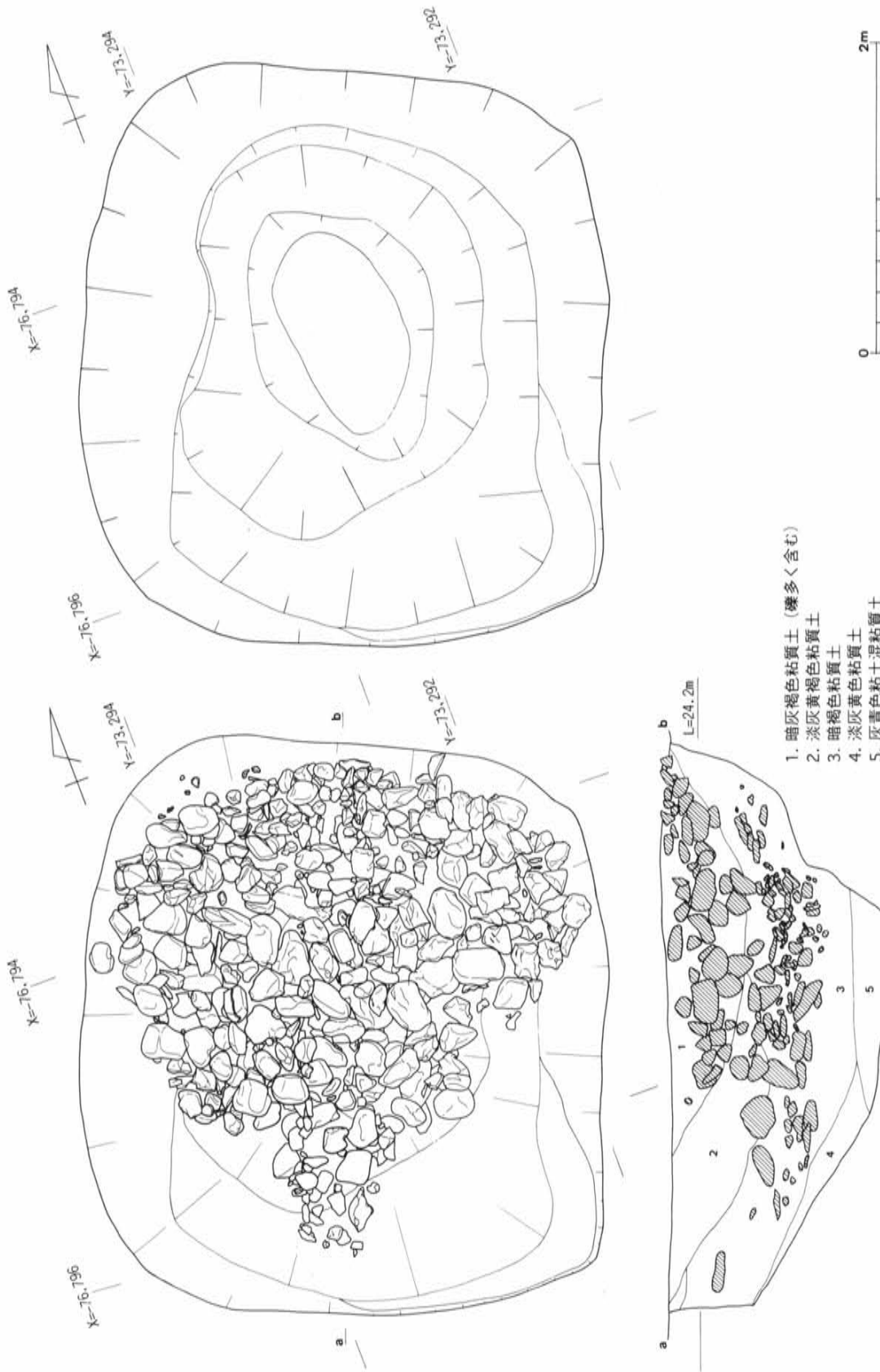
土器はすべて土師器である。355は杯である。外面にヘラ削り痕がある。356は直口壺である。357~359は甕である。358の口縁部内面に段々がみられる。7世紀代のものである。

3) 平安時代末~室町時代前半

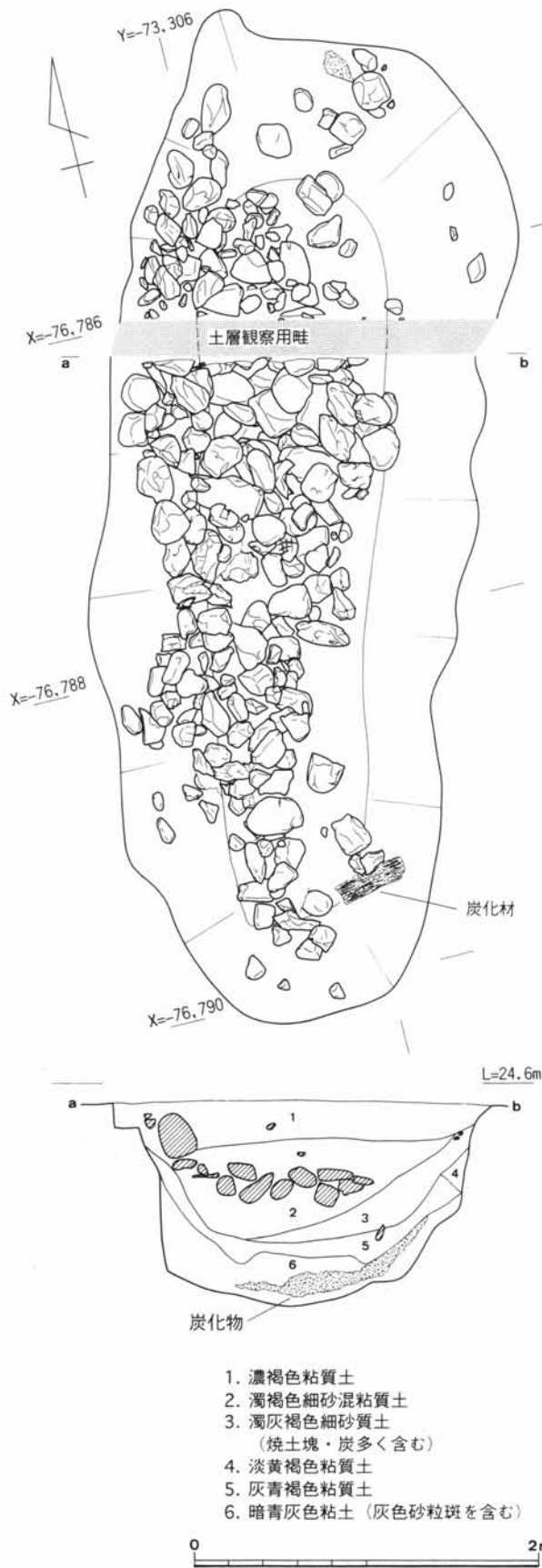
土坑 S K 03003(第97図) 大



第96図 竪穴式住居跡 S H 03120出土土器実測図(古墳時代後期)



第97図 土坑 S K 03003平・断面図



第98図 土坑 S K 03004 平・断面図

型の土坑で長軸3.7m、短軸3.3mを測る。隅丸方形である。深さは1.4mを測る。掘形は段階的に狭くなり底すぼまりの形となっている。底面は平坦に近い。埋土は細砂混じりの粘質土である。炭、焼土などの自然遺物は含まない。拳大から人頭大までの自然礫を北半部から投棄し、溜め水の浄化を図ったのであろう。底に堆積していた灰青色粘土および粘質土によって、溜まった雨水が抜けることはなく、溜め井戸のようなものと考え。

(黒坪一樹)

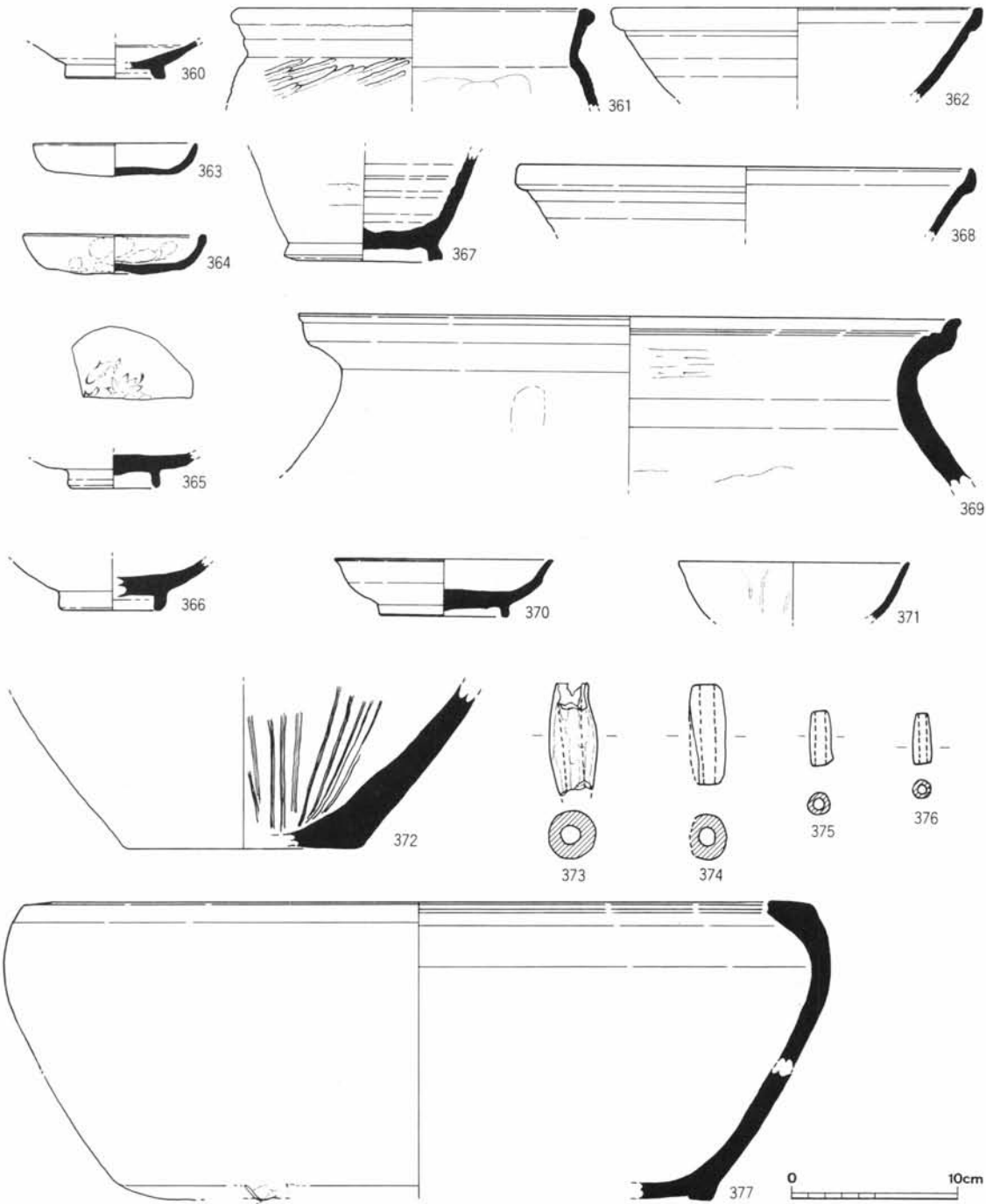
(出土遺物)

第99図360～362がある。まず、須恵器鉢(362)は灰色で、口縁部のみやや黒変している。口縁部は外側に肥厚しており、鎌倉時代後期から室町時代のものである。土師器鍋(361)は淡褐色で、外面には煤が付着している。口縁部はヨコナデ、体部は斜め方向のタタキを施す。鎌倉時代である。白磁碗(360)は内外面とも施釉しているが、高台は露胎である。削りだし高台である。平安時代末期から鎌倉時代初期である。

土坑 S K 03004 (第98図) 表面形態は長楕円で長軸6.5m、短軸2.1m、深さ1.2mの規模である。中層に拳大から人頭大の礫が多量に投棄されていた。褐色系の粘質土を埋土とし、横断面形は「U」字形である。両側面の下半は軽微ながらも被熱しており、焼けしまっている。焼却などを目的とする廃棄土坑か、墓であった可能性もある。

(出土遺物)

出土遺物は363～377(第99図)である。



第99図 土坑S K03003・03004出土遺物実測図

土師器皿(363・364)は暗赤褐色で、胎土は砂粒が多く、ザラザラとしている。内面はナデ、外面はユビオサエを施す。青磁碗(365・366)は内外面とも施釉しており、色調は灰緑色である。365は見込みにヘラによる花文を施している。削り出し高台で、高台内側は露胎である。中国竜泉窯系である。須恵器壺(367)は内外面ともロクロナデで調整している。底部は貼り付け高台である。須恵器鉢(368)は口縁部を肥厚させたもので、全体的には青灰色であるが、口縁部は黒変している。東播系である。陶器甕(369)は暗赤褐色で、胎土は白砂が多く混じるのは、越前焼きのようなのであるが、焼成はあまり堅くないので丹波焼きと思われる。青磁皿(370)は内外面とも施釉して

おり、色調は灰緑色である。削り出し高台で、高台内側は露胎である。中国竜泉窯系である。青磁碗(371)は外面にヘラにより連弁を描いたものである。鏝は施さない。内外面とも施釉しており、色調は灰緑色である。陶器鉢(372)は淡褐色で軟質である。内面には1本ずつ摺り目を刻んでいる。外面はナデ調整。底部外面は不調整である。丹波焼きの播鉢である。土鍾は黒色のもの(373・374)と、赤褐色のもの(375・376)の2種がある。いずれも中央部に円孔をあける。土師器鉢(377)は外面明褐色、内面赤褐色である。下半部はやや灰色がかかる。調整は内外面ともナデを

施す。火鉢である。これらは鎌倉～室町時代前半に属する。

溝 S D 02002(第23・80図) A地区から続く溝で、本地区にも同規模で掘られている。鎌倉・室町時代の集落範囲の広がり示すものである。

田畑の区画 S X 03137(図版第28-(1)) 調査地の北半部でみつかった直線的な区画である。暗灰色砂混じり粘質土を埋土とし、弥生時代から中世までの土器が出土した。瓦器碗・須恵器・土師器などが多い。中世における田畑の区画と考える。

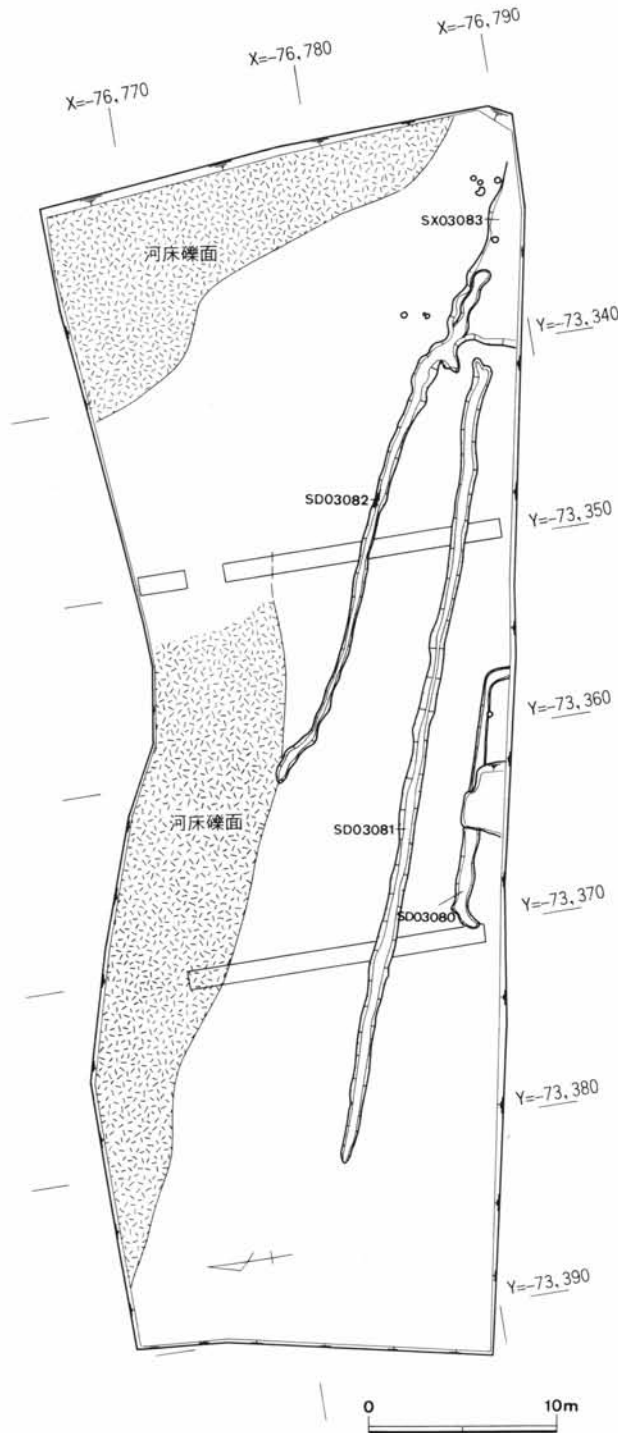
(伊野近富・黒坪一樹)

(3) C地区の調査

平成14年度の調査で、溝などが確認され、弥生時代の遺構の広がりを念頭に掘削した。

その結果、調査区の北西から南東にかけては、広く洪水による粗礫や砂粒の層が覆っており、その部分からは遺構・遺物を検出することはできなかった。

一方、洪水による砂礫面以外の部分は、粘質土の面となり、溝や沼状遺構がみつかった。溝は、弥生時代後期、沼状遺構は古墳時代後期に属する。弥生時代中期の集落の広がりは不明であるが、遺物の出土がみられないことから、洪水の影響もあり、このあたりまでは集落利用を広げていなかったと思われる。



第100図 C地区遺構平面図

①層位

東壁北端にみられる第1～3層は、B地区における第1～3層に近似し、鉄分の沈殿層の直下に溝あるいは土坑状の掘り込みが認められる。中世における遺構が残存している。しかしながら、南側にいくにつれて粗砂礫層(第12～14・17・18層)の堆積が厚くなり、安定した遺構面はみられなくなる。さらに南端では、粘質土・砂質土の層(第21～27層)となるが、洪水による攪拌や流れ込みを示すような状況で、ここでも安定した遺構面はなかった。

②遺構・遺物

C地区は昨年度の試掘調査で、溝S D03080が検出されており、今年度の調査においても、遺構・遺物の検出に努めた。

重機による掘削をすすめた結果、安定した遺構面は検出されず、溝をS D03080をふくめ合計3条検出した。さらに、溝S D03082を壊して広がる浅い沼状遺構S X 03083を確認した。ここからは古墳時代後期の土器が出土している。

1) 弥生時代後期

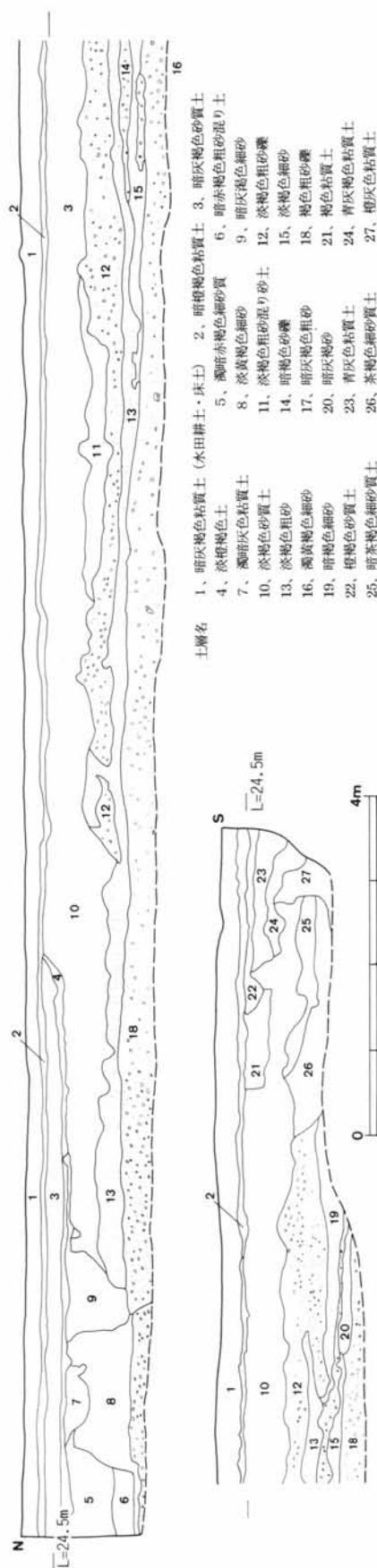
溝S D03081 長さ約42m分を検出した。深さは約20cmを測る。埋土は灰褐色粘質土である。溝の断面形は「U」字形である。

(出土遺物)

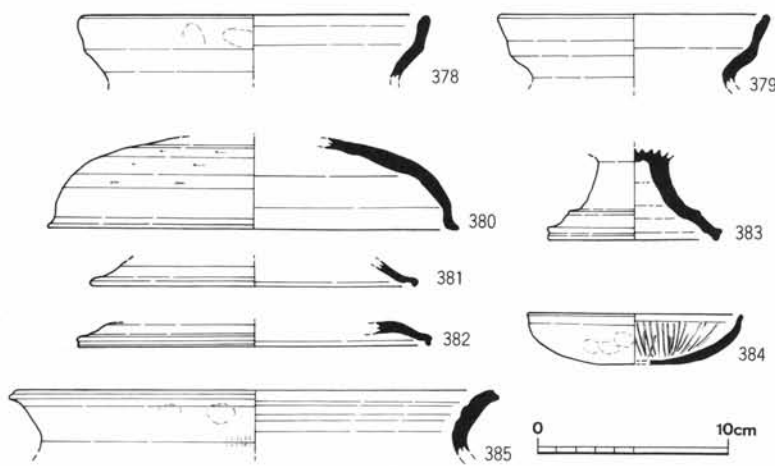
土器の細片がわずかに出土した。弥生時代後期の壺口縁部(378)がある。二段口縁をもち、内外面はナデ調整される。

溝S D03080 長さ約14m分を検出している。東端は直角に屈曲し、西端もやや屈曲ぎみになっている。深さは数cm～15cmを測る。埋土は暗紫褐色粘質土である。断面形は皿形である。

溝S D03082 長さ約29m分を検出している。深さは中間部の深い所で約25cm、東端は浅くなりやや歪な形状である。埋土は褐色砂混じり粘質土である。断面形は中間部では壁面が垂直近くに立ち上がる「U」字形



第101図 C地区東壁土層断面実測図



第102図 C地区出土土器実測図

である。東側にいくほど皿状に浅くなっている。

(出土遺物)

379は二段口縁壺の断片である。内外面ともナデ調整される。弥生時代後期のものである。

2) 弥生時代後期～平安時代

沼状遺構 S X 03083 調査区南西部に部分的に検出

された。灰色粘質土の埋土をもつ不定形な浅い凹み状の遺構である。深さは15～20cmを測る。

(出土遺物)

古墳時代後期の須恵器脚(383)が出土した。そのほか、土師器片なども出土している。

河川氾濫跡(粗砂礫面) 調査区の北西部から南東部にかけて斜めに横断するように、粗礫・粗砂の堆積状況(網目部)が確認される。河川の旧流路の痕跡を示すものである。範囲内から遺物は出土していない。ただ、平成14年度の第8トレンチの試掘調査において、同質の粗砂礫中から平安時代の土師器片が出土している。したがって、少なくとも平安時代を上限とする時期、このあたりを洪水による土石流が覆ったのであろう。

遺構外の遺物 380～382・385の4点は重機掘削中に出土したものである。380は古墳時代の、381・382は奈良・平安時代の須恵器蓋の断片である。385は7世紀代にはいる段々口縁甕の断片である。384は南壁精査中に出土した土師器の杯である。外面にユビオサエ、内面に放射状のミガキ痕が認められる。平安時代のものであろう。

6. まとめ

今回の調査では、縄文時代晩期から室町時代の遺構・遺物が検出された。なかでも弥生時代中期後半の環濠がA地区からみつき、その東側では、竪穴式住居跡・溝・土坑などの集落内の居住域を示す遺構群が、さらに西側(B地区)では、墓域であることを示す方形周溝遺構・溝・土坑がみつかったことが最大の成果として挙げられる。土器の出土量も膨大なものである。一方、石器はごく少ないが、石鏃・剥片・敲石・石鋸の断片もあり、今後、石器・玉作りが行われた場所も明らかとなろう。

また、銅鐸形土製品・蟬形土製品、朱の利用に伴う弥生土器の片広口鉢や台形および多孔土器などの特殊な遺物からは、多彩な物質・精神文化がうかがえる。今回、他地域の土器を抽出し、組成などは明らかにできなかったが、以前から指摘されているように、中部瀬戸内・播磨・丹後地方との強い関連がうかがえる。多地域の影響は当然のことで、北丹波のみの閉鎖的な状況でこ

れほどの拠点集落が存続・発展し得ないことは言うまでもない。

弥生時代後期の資料群も中期に次ぐ豊富なものである。後期の前半からみられ、中期に引き続き集落が繁栄していったことを示している。落ち込みS X03070出土の体部片や土坑S K03103から出土した脚部に長い透かしを有する器台(297)などは搬入品として注目される。

次の古墳時代前期から中期・後期についても竪穴式住居跡や土坑、さらに奈良時代から中世にいたっても、墓・井戸や掘立柱建物跡と思われる柱穴などもみつきり、長い期間にわたる集落の営みが明らかとなった。しかし、13世紀後半以降、当地は洪水などの影響が強くなって田畑などの生産地が広がり、大規模集落の中心としての役割を終えたと考える。

(黒坪一樹)

- 注1 梅原末治「天田郡 第二十六 西中筋村石剣発見ノ遺跡」(『京都府史蹟勝地調査会報告』第3冊) 1922、「西中筋村大字観音寺小字大木巻ノ内堂屋敷ニアリ。大正三年五月廿六日土地所有者ガ畑地ヲ掘リ下ゲテ田トナサント土木ニ従事セル際偶然石剣ヲ発見シテ、遺跡ノ存在ヲ知レルモノナリ」
- 注2 調査参加者(順不同・敬称略)
調査補助員 小瀧悠平・小島健之助・岩田典子・八瀬由香里・岡崎志保・平井耕平
整理員 岡崎志保・八瀬由香里・村井裕香・野崎素子・四方博子・稲田令子・堀直子・堀くみ子・春日満子・清水友佳子・村上優美子・山中道代・森川敦子・内藤チエ・兵頭真千
- 注3 渡辺誠・鈴木忠司編『京都府福知山市 武者ヶ谷遺跡発掘調査報告書』福知山市教育委員会 1977
- 注4 綾部市資料館・福知山市郷土資料館・日本の鬼の交流博物館編「1章 ②標高0mの遺跡、④由良川筋の弥生ムラ」(『由良川歴史散歩』遺跡・水運・伝説) 2002
- 注5 崎山正人『興・観音寺遺跡』福知山市教育委員会 1995
- 注6 八瀬正雄「I. 石原遺跡」(『福知山市文化財調査報告』第45集) 2003
- 注7 崎山正人編『駅南地区発掘調査報告書—寺ノ段古墳群—広峯古墳群—広峯遺跡—』(『福知山市文化財調査報告書』第16集) 福知山市教育委員会 1989
- 注8 鍋田勇・石崎善久ほか「近畿自動車道敦賀線関係遺跡(1)私市円山古墳」(『京都府遺跡調査概報第36冊』(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1989
- 注9 八瀬正雄『牧正一古墳』(『福知山市文化財調査報告書』第34集 福知山市教育委員会) 1997
- 注10 中村孝行『青野南遺跡発掘調査概報』(『綾部市文化財調査報告』第9集) 綾部市教育委員会 1982
- 注11 注4・5の文献による。
- 注12 注1に同じ
- 注13 久保哲正・堤圭三郎「8. 観音寺遺跡発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1980
- 注14 水谷壽克・田代弘ほか「近畿自動車道敦賀線関係遺跡(第8次区間)」(『京都府遺跡調査報告書』第17冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1992
- 注15 注5に同じ
- 注16 森正「[1]観音寺遺跡 府営農業基盤整備事業関係遺跡」(『埋蔵文化財発掘調査概報』京都府教育委員会) 1995
- 注17 黒坪一樹・伊野近富「5. 観音寺遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第107冊 (財)京都府埋蔵文化財

調査研究センター) 2003

- 注18 遺構番号は、平成14・15年度それぞれ1からの通し番号を付し、平成14年度分は2002年の02に続けて3桁の遺構番号で、平成15年度分についても03に続けて同じく3桁の遺構番号で表記した。
- 注19 家根祥多「近畿地方の土器」(『縄文文化の研究』4 縄文土器Ⅱ 雄山閣) 1981
- 注20 南博史・中村健二「Ⅳ. 寺界道遺跡発掘調査概要」(『宇治市埋蔵文化財発掘調査概報』第10集 宇治市教育委員会) 1987
- 注21 田代弘「由良川中・下流域の第Ⅲ様式土器について・後編—凹線文出現以前の資料を中心に—」(『京都府埋蔵文化財情報』第53号 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994
- 注22 田代弘「国営農地(丹後東部・西部地区)関係遺跡(4)奈良谷遺跡」(『京都府遺跡調査概報』第60冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1994、160頁
- 注23 原秀樹「第4章長岡京市右京第805次(7ANMDB-15地区)調査概要」(『長岡京市埋蔵文化財調査報告書』第40集 (財)長岡京市埋蔵文化財センター) 2004、53~54頁
- 注24 大和弥生文化の会編「2. 特殊土器・異形土器(1)特殊土器」(『奈良県の弥生土器集成本文編』大和の弥生遺跡 基礎資料Ⅱ) 2003、131~133頁
- 注25 中川和哉「1. 池上遺跡第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第91冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2000、41頁
- 注26 佐伯博光「098 把頭飾(土製品)東奈良遺跡 弥生時代中期」(『摂河泉発掘資料精選』Ⅱ (財)大阪府文化財センター) 2002、40頁
- 注27 注17に掲載、87頁第75図
- 注28 注14に掲載、152頁第117図
- 注29 注17に遺構図と実測図がある。これは土坑S K46の間違いである。訂正しておきたい。
- 注30 方形区画の内側において埋葬主体部の痕跡をとどめていなかったことから、方形周溝墓とせず、方形周溝遺構と称する。しかし、A地区における同時期の環濠の外側に造られていることや、また、溝内における完形度の高い土器の出土状況などからみて、当地が墓域であり、これらは方形周溝墓と同じ性格のものであろう。主体部は、削平により消滅した可能性がある。
- 注31 辻本和美・竹原一彦「石本遺跡」(『京都府遺跡調査報告書』第8冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1987と、近澤豊明「4. 青野西遺跡第5次発掘調査概報」(『綾部市文化財調査報告』第19集 綾部市教育委員会) 1993の報告例は、方形周溝墓の構造、土器出土状況が近似する。

(備考) 付表10の遺物観察表の凡例

- (1) 器種区分の説明は33~35頁参照。法量数値の括弧は残存値を示す。
- (2) 残存率の口は口縁部、底(底部)、体(体部)、脚(脚部)は高それぞれの部位における残存率を、%のみのものは全体の残存率を示す。
- (3) 胎土の長は長石、黒は雲母・角閃石など、チはチャート、赤はチャートのくされ礫、石は石英を肉眼観察で識別した。
- (4) 調整の凹は凹線文、擬凹は擬凹線文、列は列点文、刻は刻目文、波は波状文、指は指頭圧痕を示す。

付表10 遺物観察表

図番号	遺構	器種	法量 (cm)			残存率	胎土	色調・外面	口縁部調整		体部調整		備考
			口縁径	体部径	器高				底径	表面	裏面	表面	
12	SD03071	壺A2	(21)	30.7	(35.5)	50%	やや粗赤・黒・灰・白	明淡橙褐色	口後行・擬凹・波	行	行・ミガキ・直・波	行・ハチ・ケスリ	
13	SD03071	壺A2	20.6	(27.7)	(21.5)	50%	密長・赤・黒	淡黄褐色	行	行	行・ハチ	行・ハチ・ケスリ	
14	SD03071	壺B	(14.0)		(5.3)	口-25%	密長・赤・黒	赤橙褐色	行・ハチ・凹	行・ハチ			
15	SD03071	壺B	(16.0)		(10.3)	口-33%	密	赤褐色	行・凹	行			
16	SD03071	壺A2	(24.8)		(13.5)	口-5%	密長・赤	黄茶褐色	行・ミガキ・凹・列	行	行・直・波	行・波	
17	SD03071	壺A		29.4	(28.0)	不明	やや粗長・黒	明茶褐色			行・ハチ・ミガキ・直・波	行・ケスリ	
18	SD03071	高杯B1	(17.1) (28.8)		(7.5)	口-20%	密長・赤・石	淡濁褐色	行・ケスリ・ハチ・ミガキ・指	行・ミガキ・指・ハチ			口縁蓋受部-ハチ
19	SD03071	蓋	18.6		(5.8)	75%	密	赤褐色			行・ハチ	行・ハチ	
20	SD03071	蓋	(17.2)		(2.75)	口-33%	やや粗長・赤・黒	明茶褐色			行・ケスリ・ハチ・凹	行・ハチ	
21	SD03071	台形土器	(23.0)		(2.6)	径8%	やや粗長・赤	明茶褐色			行・ミガキ・ケスリ	行・ハチ	
22	SD03071	台形土器	(24.4)		(3.6)	不明	粗赤・長・赤	明淡茶褐色			行・ハチ	行・指	
23	SD03071	壺E1	(24.5)		(3.7)	口-8.3%	密	淡褐色	行	行			
24	SD03071	甕A2	(16.5)	(20.4)	(11.4)	口-45%	やや粗長・赤・黒	明褐色	行・刻	行・ハチ	行・ハチ	行・ハチ	黒斑有り・スス付着
25	SD03071	甕C	(33.1)	(42.7)	(20.0)	口-40%	やや粗赤・長	明茶褐色	行・刻	行	行・ハチ・列	行・指・ハチ	刻み目は単位で数か所・黒斑有り
26	SD03071	甕B	(12.6)	(16.0)	(10.3)	口-41%	密	淡褐色	行	行	行・ハチ・列	行・ハチ	黒斑有り
27	SD03071	甕A1	(15.7)		(4.5)	口-14%	密長・赤・黒	明茶褐色	行・ハチ	行・ミガキ	行・ハチ	行・ケスリ	
28	SD03071	甕A3	(13.9)		(6.1)	口-6%	密長・赤	淡黄褐色	行	行	行・ハチ	行・ケスリ	
29	SD03071	甕A3	(15.3)		(5.4)	口-16%	密赤・長	淡茶褐色	行	行・ミガキ	行・ハチ	行・ハチ	
30	SD03071	甕B	(15.2)	(16.0)	(8.2)	口-45%	やや粗赤・長	淡褐色	行・ハチ	行	行・ハチ	行・ハチ	

31	SD03071	鉢B	16.8	(17.9)	(13.6)		20%	やや粗長・茶・石・灰	赤茶褐色	打 [°]	打 [°]	打 [°] ・ハ [°]	打 [°] ・ハ [°] ・指	
32	SD03071	短頸壺	11.4	20.1	21.9	7.1	70%	やや粗赤茶・黒・灰・白	淡明褐色	打 [°]	打 [°]	打 [°] ・ハ [°]	打 [°] ・ハ [°]	黒斑有り
33	SD03071	壺A5	21.6	33.1	40.4	8.4	70%	密灰・茶・白	黄茶褐色	磨減・直・列	磨減・不明	磨減・直	磨減・指	黒斑有り
34	SD03071	壺A5	(23.0)		(6.1)		口-20%	やや粗長・赤・灰・黒・雲母	明橙褐色	打 [°] ・ハ [°] ・擬凹・浮	打 [°] ・列			口縁端部-円形浮文2か所1組・生駒西麓形?
35	SD03071	壺B	(10.4)		(6.7)		口-30%	やや粗長・赤・黒	淡褐色	打 [°] ・凹・列	打 [°] ・ハ [°]			
36	SD03071	壺E1			(4.0)		口-95%	密長・赤・灰・赤	淡明橙白褐色	打 [°]	打 [°] ・指	打 [°]	打 [°]	頸部-孔2か所1対
37	SD03071	壺E2	(14.6)		(6.5)		口-12%	やや粗長・赤	明褐色	打 [°] ・凹	打 [°] ・ヨコハ [°]			
38	SD03071	高杯A1	(18.6)		(3.9)		口-10%	密長・赤・黒・赤	濁灰褐色	打 [°] ・凹	打 [°] ・ヨコハ [°] ・ガキ			
39	SD03071	壺E2	(16.0)	(19.4)	(6.3)		口-4%	密赤・長	淡褐色	打 [°] ・凹・シキ	打 [°] ・ハ [°]			
40	SD03071	高杯A1	(27.7)		(4.25)		口-25%	やや粗赤・長	橙褐色	打 [°] ・沈線・ミガキ	打 [°]			
41	SD03071	壺E2		(23.5)	(19.6)	12.2	60%	やや粗長・茶	赤灰褐色	打 [°] ・列	打 [°] ・ハ [°]	脚部:打 [°] ・ハ [°]	打 [°] ・ハ [°] ・スリ	脚部-孔6か所・口縁欠損
42	SD03071	脚			(17.5)	12.2	脚-95%	やや粗赤・黒・長	黄土褐色			打 [°] ・ミガキ	打 [°] ・ハ [°] ・スリ	黒斑有り
43	SD03071	脚			(8.2)	10.7	底-完形	密長・赤・石・黒	淡濁褐色			打 [°] ・ミガキ	打 [°] ・ミガキ	
44	SD03071	脚			(5.9)	(10.8)	底-30%	やや粗長・赤	淡褐色			打 [°] ・ミガキ・凹	打 [°] ・ハ [°] ・スリ	
45	SH02084	甕B	(23.8)		(13.5)		口-28%	密	明淡褐色	打 [°] ・刻	打 [°]	打 [°] ・ハ [°] ・指	打 [°] ・ハ [°] ・指	二重口縁
46	SH02084	甕B	(23.8)		(3.5)		口-25%	密黒・長・赤	淡褐色	打 [°] ・ハ [°] ・突帯文・刻	打 [°] ・ヨコハ [°] ・指			
47	SH02084	壺B	(19.4)		(5.0)		口-15%	やや粗	明淡橙褐色	打 [°] ・凹・ハ [°]	打 [°] ・指			
48	SH02084	甕B	(16.8)		(1.3)		口-10%	密	茶褐色	打 [°]	打 [°]			

76	SD02088	壺E2	(15.4)	(7.5)		口-20%	密	明赤茶褐色	打 [°] ・凹 [°] ・打 [°]	打 [°] ・打 [°]		黒斑有り・孔 2か所1対
77	SD02088	鉢	(8.0)	(5.9)		口-26%	密	明淡褐色	打 [°]	打 [°] ・打 [°]		内面に漆
78	SD02088	甕B	(17.5)	(5.1)		口-30%	やや粗	淡赤褐色	打 [°]	打 [°] ・打 [°]		
79	SD02088	甕A2	14.3	(7.2)		口-完形	やや粗	明茶褐色	打 [°] ・刻	打 [°] ・打 [°]		
80	SD02088	脚		(5.6)	頸径 (11.0)	不明	やや粗 赤	濁淡褐色		打 [°]		透し穴3か 所確認
81	SD02088	底		(4.7)	6.0	底-60%	やや密	淡赤褐色		打 [°] ・打 [°]		底部-打 [°]
82	SK02013	高杯B1	(27.0)	(8.7)		杯-30%	やや粗	明茶赤褐色	打 [°]			
83	SK02066	壺A4	(21.0)	(9.4)		口-30%	密	淡黄褐色	打 [°] ・打 [°] ・波			
84	SK02066	壺B	(9.8)	(10.0)		口-35%	密長	橙茶灰褐色	打 [°] ・不明			
85	SK02066	底		(5.3)	5.2	底-完形	密長	桃白灰褐色		打 [°] ・打 [°]		
86	SK02066	鉢B	(31.6)	24.5	(9.5)	30%	やや粗	淡赤褐色	打 [°]	打 [°] ・打 [°] ・打 [°]		
87	SK02066	甕C	(30.4)	(10.5)		口-15%	密長・黒	淡茶褐色	打 [°] ・凹	打 [°] ・打 [°]		
88	SK02075	甕C	(30.9)	(4.5)		口-15%	やや粗	淡褐色	打 [°]	打 [°] ・打 [°]		
89	SK02091	壺A2	(19.6)	(8.4)		口-24%	やや粗	淡褐色	打 [°] ・波 [°] ・打 [°]	打 [°] ・打 [°]		
90	SK02091	壺B	10.0	16.6	(16.3)	90%	やや粗	淡赤褐色	打 [°] ・打 [°] ・指	打 [°] ・打 [°]		底部-欠損
91	SK02091	甕B	(13.0)	(14.6)	(15.8)	口-40%	密	淡茶褐色	打 [°]	打 [°] ・打 [°]		
92	SK02091	甕		(15.4)	(9.9)	底-70%	密	淡茶褐色		打 [°] ・打 [°]		
93	SK02091	脚		(8.3)	(11.2)	脚-80%	やや粗	淡褐色		脚部:打 [°]		
94	SK02091	甕		(9.8)	(5.4)	底-50%	密長・黒・打	暗茶灰褐色		打 [°] ・打 [°]		
95	SK02091	壺		(13.4)	(6.0)	底-30%	やや粗	淡褐色		打 [°] ・打 [°]		
96	SK02091	高杯A1	14.0	13.9	8.1	70%	密	淡茶褐色	打 [°] ・凹 [°] ・打 [°] 打 [°] ・打 [°]	脚部:打 [°] ・打 [°] ・打 [°]		把手付き
97	SK02091	壺A2	(17.8)	(3.3)		口-40%	密	淡茶褐色	打 [°] ・凹	打 [°] ・打 [°] ・打 [°]		
98	SK02091	高杯	(13.6)	6.25	6.25	口-25%脚- 完形	密 礫	淡茶褐色	打 [°] ・打 [°] ・打 [°]	脚部:打 [°] ・打 [°] ・打 [°]		
99	SK02096	壺A5	(14.0)	(5.2)		口-20%	密	明赤褐色	打 [°] ・打 [°] ・刻	打 [°]		
100	SK02096	高杯A1	(26.0)	(6.3)		口-6%	密	淡灰褐色	打 [°] ・打 [°] ・打 [°]	打 [°] ・打 [°] ・打 [°]		
101	SK02096	壺A3	(28.0)	(3.35)		口-12%	密	淡黄褐色	打 [°] ・凹 [°] ・浮 [°] 指	打 [°]		棒状浮文
102	SK02096	脚		(10.0)	8.3	脚-60%	やや粗	淡褐色		脚部:打 [°] ・打 [°] ・打 [°]		孔4か所
103	SK02096	鉢	36.4	19.5	(13.0)	口-75%	やや粗 赤	淡褐色	打 [°]	打 [°] ・打 [°] ・打 [°]		
104	SK02102	高杯A2	(18.4)	(5.0)		杯-40%	粗	暗赤褐色	打 [°] ・凹	打 [°]		

132	SK02115	蓋	(16.2)		(2.0)					淡褐色				拵・灰リ	拵・不明	スス付着
133	SK02115	壺A3	(28.7)		(2.2)					明褐色	拵・凹	拵・扇				
134	SK02115	壺E1	(15.2)		(6.5)					明淡茶褐色	拵	拵		拵・シガキ	拵・シガキ・灰	黒斑有り
135	SK02115	壺E1	(30.8)		(5.0)					明褐色	拵・凹	拵・シガキ・ケ スリ				
136	SK02115	甕B	(14.6)		(6.8)					明茶褐色	拵	拵		拵・灰	拵・灰	
137	SK02115	底			(4.3)	(6.4)				明淡褐色				拵・灰	拵・灰リ	
138	SK02115	底			(5.6)	7.2				黄茶褐色				拵・灰リ・灰	拵・灰リ・指	
139	SK02115	脚			(9.0)	10.3				黄茶褐色				拵・凹・シガキ	拵・灰リ	
140	SK02115	台形土器	(23.4)		(2.4)					明淡茶褐色				不明	不明	
141	SK02119	甕A3	13.9	(19.1)	26.1	5.6				明乳褐色	拵	拵		拵・灰	拵・灰	
142	SK02119	甕B	(12.8)		(4.8)					橙茶褐色	拵	拵		拵・灰	拵	
143	SK02119	甕B	(15.4)		(7.1)					淡灰褐色	拵	拵		拵・灰	拵・灰	
144	SK02119	甕A3	(16.0)		(9.6)					淡白褐色	拵	拵		拵・不明	拵・不明	
145	SK02119	甕B	(12.6)	(13.0)	(16.0)					赤茶褐色	拵	拵		拵・灰リ・灰	拵・灰リ	
146	SK02119	壺E1	(10.2)		16.65	(6.0)				明淡褐色	拵・凹	拵		拵・灰	拵・灰・灰リ	
147	SK02119	甕B	(24.8)		(10.8)					淡褐色	拵	拵		拵・不明	拵・灰	
148	SK02119	壺		24.45	(25.0)	9.0				淡灰褐色				拵・不明	拵・灰リ・指	口縁欠損
149	SK02119	甕		(17.5)	(15.9)	4.6				淡褐色				拵・灰	拵・灰・灰リ	
150	SK02119	底			(3.1)	(12.8)				淡茶褐色				拵	拵	
151	SK02119	壺A3	(31.8)		(2.25)					暗黄褐色	拵・凹	拵・波・扇				
152	SK02119	壺E1	14.0	(18.0)	(11.4)					淡白褐色	拵・シガキ・ハ ケ	拵				
153	SK02119	高杯A1	(29.8)		(5.6)					暗褐色	拵・凹	拵				
154	SK02119	脚			13.0	(13.0)				暗淡褐色				拵・竹	拵・灰リ	
155	SK02146	台形土器	(26.4)		(6.2)					淡茶褐色				拵・灰	拵・灰リ	
156	SK03065	高杯B1	(24.4)		(5.2)					黄茶褐色	拵・凹・シガ キ	拵・灰リ・ミ ガキ				
157	SK03065	高杯A1	(26.4)		(8.6)					黄茶褐色	拵・凹・シガ キ	拵・シガキ				黒斑有り
158	SK03087	甕A1	15.6	(18.4)	(15.8)					橙茶褐色	拵・凹	拵・コノハ		拵・灰	拵・灰	

159	SK03087	甕A3	(13.8)		(8.2)			□-30%	粗	茶褐色	行 [°]	行 [°] ・列	行 [°] ・指	
160	SK03087	鉢B	(15.2)	(15.0)	(6.8)		□-10%	粗	粗	淡褐色	行 [°]	行 [°] ・シガキ	行 [°] ・シガキ	
161	SK03090	壺D	(11.3)	(12.0)	(17.0)		□-40%	密	密	明褐色	行 [°] ・凹・列	行 [°] ・凹・指	行 [°] ・凹	
162	SK03090	甕A2	14.8	17.5	(17.0)		□-63%	やや粗	やや粗	赤褐色	行 [°]	行 [°] ・凹	行 [°]	
163	SK03090	甕B	(15.0)		(8.1)		□-30%	やや粗	やや粗	明茶褐色	行 [°] ・刻	行 [°] ・凹	行 [°] ・凹	
164	SK03090	甕A2	(13.9)		(6.3)		□-13%	密	密	淡茶褐色	行 [°]	行 [°] ・凹	行 [°] ・凹	
165	SK03090	甕C	40.0		(8.5)		□-25%	やや粗	やや粗・ 子	橙赤褐色	行 [°] ・凹・列	行 [°] ・凹	行 [°] ・凹	磨減大・刻み 日は一定で ない
166	SK03090	底			(4.2)	6.2	底-完形	密	密	明褐色		行 [°] ・凹	行 [°] ・凹	底部-凹・黒 斑有り
167	SK03090	鉢	(24.4)		(6.4)		□-12%	密	密	明淡褐色	行 [°] ・シガキ・ケ ズリ	行 [°] ・シガキ		
168	SK03090	脚			(7.4)	10.4	脚-完形	密	密	明茶褐色		行 [°] ・凹・列	行 [°] ・凹	刻み日は一 定でない
169	SK03093	壺A2	16.5		(8.0)		□-完形	密	密	明黄茶褐色	行 [°] ・凹・ 刻	行 [°] ・凹		
170	SK03093	高杯A2	(18.8)		(4.0)		□-13%	密	密	淡褐色	行 [°] ・凹	行 [°] ・シガキ		
171	SK03095	壺A2	(19.8)		(3.2)		□-16%	密	密長・子	淡茶褐色	行 [°]	行 [°]		刻み日は単 位で何か所 かに入っ ている
172	SK03095	甕B	18.1	16.5	22.5	5.8	75%	密	密長・子・ 石	淡茶褐色	行 [°]	行 [°] ・凹・ケズリ	行 [°] ・凹・ケズリ	
173	SK03095	脚			(7.2)	10.8	底-完形	やや粗	やや粗長・ 赤・石・子	明淡褐色		行 [°] ・シガキ	行 [°] ・シガキ	底部-黒斑有 り
174	SK03095S K03096	蓋	13.6		9.4	7.0	75%	やや粗	やや粗	淡褐色		行 [°] ・凹	行 [°]	
175	SK03096	壺E1	(11.2)		(8.2)		□-25%	密	密長・子・ 黒	淡黄褐色	行 [°]	行 [°] ・ケズリ・ミ ガキ	行 [°] ・凹・シガ キ・指	口縁-孔2か 所1対・黒斑 有り
176	SK03096	甕A2	(15.0)		(3.4)		□-12%	やや粗	やや粗長・ 子	明淡茶褐色	行 [°] ・凹	行 [°] ・凹		
177	SK03096	甕B	(15.3)		(5.2)		□-12%	やや粗	やや粗長・ 子・黒	明褐色	行 [°]	行 [°] ・凹	行 [°]	
178	SK03096	甕B	(15.4)	(19.2)	(8.3)		□-20%	密	密長	黄褐色	行 [°] ・刻	行 [°] ・凹	行 [°]	黒斑有り
179	SK03096	甕B	(26.0)		(7.8)		□-20%	密	密	淡褐色	行 [°]	行 [°] ・凹	行 [°] ・凹	
180	SK03096	壺		(21.2)	(16.3)	(6.0)	底-25%	やや粗	やや粗長・ 赤	淡褐色	行 [°]	行 [°] ・凹	行 [°] ・凹	内外面-黒斑 有り

181	SK03096	多孔土器																					透かし穴6 か所確認		
182	SK03096	壺																							
183	SK03096	鉢B	19.6 (18.1)		6.3 6.5	底-50% 底-完形 40%	粗 粗	明褐色 明褐色																黒斑有り・ス ス付着	
184	SK03100	壺A2	(35.3)		(4.7)	口-11%	密長・チ・ 赤・黒	淡黄褐色																棒状浮文	
185	SK03100	壺A2	(16.7)		(4.0)	口-16%	やや粗長・ 黒・チ	黒褐色																	
186	SK03100	壺B	18.1		(11.5)	口-75%	やや粗長・ チ・黒	明黄橙褐色																	
187	SK03100	甕B	(13.3)		(5.6)	口-13%	密	淡褐色																	
188	SK03100	甕B	14.4 (20.0)		(17.0)	60%	密長・チ	淡橙赤褐色																	
189	SK03100	甕B	15.1 (20.8)		(18.4)	口-65%	やや密赤・ 石・長・チ	明褐色																黒斑有り	
190	SK03100	底			(5.7)	底-完形	密	淡褐色																	
191	SK03100	底			(8.9)	底-52%	やや粗長・ 赤・黒	明黄褐色																	黒斑有り
192	SK03100	鉢B	(32.6)		(20.5)	口-20%	やや粗長・ チ・黒	明橙灰褐色																	
193	SK03100	蓋			(7.1)	7.4 径6.2 40%	密	褐色																	
194	SK03100	高杯A1	(33.2)		(7.5)	口-16%	密長	黄褐色																	黒斑有り
195	SK03100	高杯A2	(19.8)		(14.7)	口-13%	密	明褐色																	
196	SK03100	脚			(13.3)	底-完形	密	明淡褐色																	
197	SK03100	鉢B	(17.3)		15.2 19.7	80%	やや粗長・ 赤・灰	明淡褐色																	黒斑有り
198	SK03100	壺D	10.0 (20.0)		(26.8)	口-完形	密	淡黄褐色																	底部-シガキ、 穿孔有り
199	SK03105	甕A2	(13.2)		(6.9)	口-30%	やや粗長・ チ	明褐色																	
200	SK03105	蓋	13.8		3.95	90%	やや粗長・ チ・黒	明褐色																	内外口縁-ス ス付着
201	SK03105	高杯B1	(18.4)		(4.25)	口-25%	やや粗長・ チ・赤	赤橙褐色																	

202	SK03139	甕B	13.1	(16.0)	(9.0)		口-完形	やや粗赤・黒・長	明淡褐色	行°・凹・刻	行°	行°・ハヤ	行°・ハヤ	刻み目は単位で何か所かに入っている
203	SK03139	甕			(9.8)	5.5	底-95%	密	黄茶褐色			行°・ハヤ	行°・ハヤ	底部ハヤス、穿孔
204	P02051	多孔土器	(8.4)		9.1	(2.9)	40%	密	赤灰褐色	行°	行°・指	行°・ハヤ	行°・ハヤ	底部-穿孔・孔21個確認
230	SD03071	甕	23.3		(4.05)		口-6%	密長・チ	赤茶褐色	行°	行°			
231	SD03071	甕	21.8		(4.0)		口-8%	やや粗長・チ	橙褐色	行°	行°			
232	SD03071	甕	(26.0)		(4.8)		口-8.5%	やや粗	赤褐色	行°	行°			
233	SD03071	甕	(24.0)		(7.7)		口-12%	やや粗	赤褐色	行°	行°・指			
234	SD03071	壺	(16.5)		(5.2)		口-45%	密	赤褐色	行°	行°・ハヤ			
235	SD03071	壺			(2.6)		径25%	密	橙褐色	行°	行°			
236	SD03071	直口壺	10.8		(6.1)		口-完形	粗長・磔	明橙黄褐色	行°	行°			
237	SD03071	甕	8.6		7.1	2.3	80%	やや粗長・黒・赤	赤茶褐色	行°	行°	行°・ハヤ	行°	
238	SD03071	高杯	15.0		(3.5)		口-完形	粗長・赤	明茶褐色	行°	行°・ハヤ			
239	SD03071	脚			(3.0)		不明	粗長・チ	明茶褐色	行°	行°	行°	行°	
240	SD03071	高杯	(28.0)		(6.7)		口-25%	やや粗長・チ・赤	明褐色	行°	行°・ミガキ			
241	SD03071	脚			(5.7)	(14.0)	底-25%	密	橙褐色			行°・ミガキ・擬凹	行°・ハヤ	
242	SD03071	脚			(4.5)	(13.0)	底-12%	やや粗長・チ	赤褐色			行°	行°・ハヤ	
243	SD03071	脚			(4.0)	13.6	脚-50%	やや粗長・赤・黒	明茶褐色			行°・ミガキ	行°	
244	SD03071	台付鉢	(14.6)		6.8		口-25%	やや密長・黒	濃明茶褐色	行°	行°	行°・ハヤ	行°・ハヤ	
245	SD03071	台付鉢	(12.4)		9.0	7.0	口-20%脚-70%	粗長・赤	明茶褐色	行°	行°	脚部:行°・ミガキ	行°・指	
246	SD03071	台付鉢	8.9		6.9	6.3	95%	粗長・赤・黒	赤茶褐色	行°	行°	脚部:行°・指	行°・指	
247	SD03071	底			(4.3)	5.6	底-完形	密	灰褐色			行°・ハヤ	行°	
248	SD03071	底			(2.7)	4.9	底-完形	密	淡赤褐色			行°・ハヤ	行°・ハヤ	黒斑有り
249	SH02085	広口壺	(18.2)		(7.3)		口-30%	やや粗	明茶褐色	行°	行°	行°・ハヤ	行°	

250	SH02085	壺	(14.9)		(6.3)						淡褐色	行・凹・波	行			
251	SH02085	壺	(13.5)		(5.8)						淡赤褐色	行	行	行	行・スリ・ハ	
252	SH02085	壺	(13.9)		(5.7)						淡褐色	行	行	行	行	行・ハ
253	SH02085	壺	(9.1)	(18.8)	(11.8)						明赤褐色	行・シカキ	行	行	行	行・スリ
254	SH02085	壺	(10.0)	(9.0)	(5.8)						淡灰褐色	行	行	行	行	
255	SH02085	壺	(8.0)	(4.1)	(4.1)						赤褐色	行	行	行	行	
256	SH02085	鉢	10.0	9.5	7.8	3.5					濃茶褐色	行	行	行	行	行
257	SH02085	高杯	(13.0)		(3.5)						淡赤茶褐色	行	行	行	行	行
258	SH02085	脚			(10.4)	(14.4)					赤茶褐色	密長	密長	密長	密長	密長
259	SH02085	鉢	11.8		6.5	2.0					淡褐色	粗	粗	粗	粗	粗
260	SH02085	ミナツリ甕	5.4	4.9	5.4	2.1					明赤茶褐色	やや粗	やや粗	やや粗	やや粗	やや粗
261	SH02085	壺		10.1	(10.4)	4.6	70%				淡茶褐色	密	密	密	密	密
262	SH02085	台			(3.9)	7.6	底-90%				橙茶褐色	密長	密長	密長	密長	密長
263	SH02150	壺	14.5	(22.3)	(32.7)	(4.4)	70%				明乳褐色	密砂礫	密砂礫	密砂礫	密砂礫	密砂礫
264	SH02150	高杯	(20.9)		(5.5)						橙褐色	密長	密長	密長	密長	密長
265	SH02150	甕	(16.8)		(5.4)						茶褐色	やや粗砂礫	やや粗砂礫	やや粗砂礫	やや粗砂礫	やや粗砂礫
266	SH02150	壺	(12.2)		(6.0)						明赤茶褐色	やや粗	やや粗	やや粗	やや粗	やや粗
267	SH02150	鉢	(12.0)		(5.2)	(3.0)	70%				橙茶褐色	やや粗長赤	やや粗長赤	やや粗長赤	やや粗長赤	やや粗長赤
268	SH02150	鉢	(11.2)	(12.2)	7.1		80%				明淡褐色	密	密	密	密	密
269	SH02150	鉢	(13.1)		8.1	3.8	40%				淡褐色	密長・赤	密長・赤	密長・赤	密長・赤	密長・赤
270	SH02150	甕	(16.0)	(18.3)	(10.0)		35%				橙茶褐色	密黒長	密黒長	密黒長	密黒長	密黒長
271	SH02150	有孔鉢			(8.2)	1.0	底-完形				淡茶褐色	密長	密長	密長	密長	密長
272	SH02150	器台	(18.2)		(5.5)						橙灰褐色	密長・チ	密長・チ	密長・チ	密長・チ	密長・チ
273	SH02150	器台	9.6		7.35	9.7	95%				淡明褐色	密長・赤	密長・赤	密長・赤	密長・赤	密長・赤
277	SH03097	甕	(14.2)		(5.8)						明赤褐色	粗長・黒赤	粗長・黒赤	粗長・黒赤	粗長・黒赤	粗長・黒赤
278	SH03097	甕	(16.0)		(3.8)						黄土褐色	やや粗黒赤長	やや粗黒赤長	やや粗黒赤長	やや粗黒赤長	やや粗黒赤長
279	包含層	壺	(19.4)		(6.0)						明茶褐色	密	密	密	密	密

280	包含層	甕	(16.0)	(15.5)	15.0		40%		密	淡灰褐色	片 ^ナ	片 ^ナ ・片 ^ナ	片 ^ナ ・片 ^ナ ・ミカキ	片 ^ナ ・片 ^ナ	片 ^ナ ・片 ^ナ ・ミカキ	片 ^ナ ・片 ^ナ ・指	片 ^ナ ・片 ^ナ ・指	黒斑有り
281	包含層	把手付鉢		10.0	(6.5)	3.1	70%		やや粗	淡赤褐色	片 ^ナ	片 ^ナ	片 ^ナ	片 ^ナ	片 ^ナ	片 ^ナ	片 ^ナ	口縁-欠損
282	SK03079	器台	(20.8)		(3.0)		□-12%		密	濃褐色	片 ^ナ ・凹	片 ^ナ ・ミカキ						
283	SK03086	器台		(19.6)	(16.4)	4.7	底-完形		やや粗 長・ 磔	赤褐色								黒斑有り
284	SK03086	器台	(21.3)	脚部5.1	(19.3)		□-12%		やや粗 赤	橙褐色	片 ^ナ ・凹	片 ^ナ ・擬凹						透かし穴4 か所?
285	SK03086	器台	(20.2)		(3.8)		杯-20%		密砂・赤	明濃橙褐色	片 ^ナ ・片 ^ナ	片 ^ナ ・ヨコナ						
286	SK03098	壺	(14.0)	(22.0)	(16.1)		□-38%		密	茶褐色	片 ^ナ ・擬凹	片 ^ナ ・ヨコナ						
287	SK03098	甕	(17.0)		(5.1)		□-35%		密	赤褐色	片 ^ナ ・凹	片 ^ナ						
288	SK03098	壺	11.0		(5.9)		□-70%		密	淡褐色	片 ^ナ	片 ^ナ						黒斑有り
289	SK03098	甕	(15.7)		(4.3)		□-25%		やや粗	赤褐色	片 ^ナ ・凹	片 ^ナ ・片 ^ナ						
290	SK03098	底部			(7.7)	4.4	底-完形		やや粗	赤褐色	片 ^ナ	片 ^ナ						
291	SK03103	壺	(14.2)		(5.3)		□-25%		密	赤褐色	片 ^ナ	片 ^ナ						
292	SK03103	甕	20.3		(5.4)		□-66%		密	赤褐色	片 ^ナ	片 ^ナ						
293	SK03103	甕	(17.4)		(4.7)		□-13%		密	赤褐色	片 ^ナ ・凹	片 ^ナ						
294	SK03103	高杯		(28.6)	(11.0)		体-33%		密 子・磔	赤淡褐色	片 ^ナ ・ミカキ	片 ^ナ						
295	SK03103	器台	27.5		(4.7)		□-75%		密 子・長	赤褐色	片 ^ナ ・片 ^ナ ・ミカキ キ・凹	片 ^ナ						
296	SK03103	器台	(22.2)		(2.9)		□-12%		やや粗 長・ 子・赤・黒	白淡褐色	片 ^ナ ・凹	片 ^ナ						
297	SK03103	器台	24.1	脚径7.5	21.6	19.0	95%		密 長・子	赤褐色	片 ^ナ ・片 ^ナ ・凹	片 ^ナ ・ヨコナ						透かし窓3 か所
298	SK03103	高杯	25.6		(4.7)		□-33%		やや粗 子・ 長	赤褐色	片 ^ナ	片 ^ナ						黒斑有り
299	SK03103	脚柱		脚径4.5	(10.6)		不明		密	赤褐色								
300	SK03103	鉢	13.3		6.9	3.6	85%		密	赤褐色	片 ^ナ	片 ^ナ						
301	SK03103	底			(6.6)	3.0	底-完形		密	橙褐色	片 ^ナ	片 ^ナ						
304	SK02126	甕	16.0	19.0	(12.0)		□-70%		やや粗	暗桃褐色	片 ^ナ	片 ^ナ						
305	SK02126	壺	19.9	(27.0)	(24.2)		50%		やや粗	明淡茶褐色	片 ^ナ ・ミカキ	片 ^ナ ・片 ^ナ						
306	SK02126	壺	(12.6)	(23.3)	(14.5)		□-24%		密砂磔	明乳褐色	片 ^ナ ・不明	片 ^ナ ・不明						磨減大
333	方形周溝 遺構1	壺A2	15.2	21.1	25.2	6.0	70%		密 長・子・ 黒・赤	橙褐色	片 ^ナ ・片 ^ナ ・凹	片 ^ナ ・片 ^ナ						底部-穿孔有 り・内面底部 -円形くぼみ 有り

334	方形周溝遺構1	壺A4	13.3	18.2	20.4	5.7	80%	粗長・黒	明茶褐色	行 [・] 波・凹	行 [・] ヨコウ	行 [・] シガキ・波・直	行 [・] ウ・指	底部・黒斑有り
335	方形周溝遺構1	壺A	24.7	36.6	52.5	10.1	90%	やや粗長・赤	淡灰褐色	ウ・行 [・] 扇	ウ・行 [・]	ウ・行 [・] 指	ウ・行 [・]	
336	方形周溝遺構1	壺A3	21.5	29.2	35.6	8.5	60%	やや粗長・黒・茶	明茶褐色	行 [・] ウ・凹	行 [・] ウ	行 [・] ウ・シガキ・ウ・スリ・列	行 [・] ウ・指	
337	方形周溝遺構1	壺E1	9.4	15.1	16.95	9.65	80%	密長・チ・黒	明淡褐色	行 [・] シガキ	行 [・] シガキ・指	脚部・行 [・] ウ・スリ	行 [・] シガキ	頸部・孔2か所1対
338	方形周溝遺構1	甕A1	(20.3)	24.5	(30.0)	7.1	40%	やや粗長・チ	褐色	行 [・]	行 [・] ヨコウ	行 [・] ウ・ウ・スリ・列	行 [・] ウ・スリ	外面下部・熱による剥離大
339	方形周溝遺構1	甕B	(15.0)	18.5	(24.5)	5.6	70%	密長・チ・赤	暗赤灰褐色	行 [・]	行 [・]	行 [・] ウ	行 [・] ウ・スリ・指	
340	方形周溝遺構1	甕C	16.5	27.2	32.25	7.4	95%	粗長・チ	橙赤褐色	行 [・] 凹	行 [・]	行 [・] シガキ	行 [・] 指	磨減大
341	方形周溝遺構1	甕A2	20.3	25.4	27.0	8.2	50%	粗長・チ・石・赤	明淡茶褐色	行 [・] 刻	行 [・] ヨコウ	行 [・] ウ・ウ・スリ	行 [・] ウ・指・ウ	
342	方形周溝遺構1	甕A1	16	19.9	28.6	(5.2)	80%	密長・チ	淡褐色	行 [・]	行 [・] ヨコウ	行 [・] ウ	行 [・] ウ・指	コゲスス付着
343	SD03108	壺		(21.0)	(11.9)		不明	粗長・チ・黒	赤茶褐色			行 [・] 波・直・斜格子	行 [・] ウ・指	黒斑有り
344	SK03084	壺A2	(17.9)		(6.5)		口-25%	密長・チ・赤	淡黄赤褐色	行 [・] ウ・凹	行 [・]			
345	SK03084	壺A		25.2	(27.2)	7.6	90%	密長・チ・赤	明灰褐色			行 [・] ウ・列・波	行 [・] ウ・指	磨減大・口縁・欠損
346	SK03084	壺E2	(17.2)		(6.2)		口-16%	密長・チ・赤	灰赤褐色	行 [・] ウ・凹・シガキ	行 [・] シガキ			口縁・孔2か所1対
347	SK03084	壺D	9.5	18.6	20	6.6	90%	密長・チ・赤	明灰褐色	行 [・] ウ・行 [・] 凹	行 [・]	行 [・] ウ・スリ・ミガキ	行 [・] ウ・指・板状土塗布	内外面・赤色
348	SK03128	壺D	12.9	24.4	35.8	7.8	90%	密長・チ・赤	明淡褐色	行 [・] 凹	行 [・]	行 [・] ウ・ウ・スリ・列	行 [・] ウ・ウ・スリ	底部・穿孔有り
349	SK03129	壺D	11.6	23	(24.3)		40%	密長・チ・石・赤	赤褐色	行 [・] 凹	行 [・]	ウ・シガキ	行 [・]	
350	SK03129	壺A2	14.8	23.0	29.1	6.4	口-75%	やや粗長・茶	明淡茶褐色	行 [・] ウ・刻	行 [・] ヨコウ	行 [・] ウ・列	行 [・] ウ・ウ・スリ	底部・黒斑有り・刻み目は一定でない
351	SK03109	壺		(27.0)	(30.8)		体-40%	粗長・黒	赤褐色			行 [・] ウ・斜直	行 [・] ウ・指	

付 載 報 告

花粉分析・放射性炭素年代測定・土器胎土分析

1. 花粉分析

(1)花粉化石群集

土坑および溝内埋土を試料とし、縄文時代晩期および弥生時代中期の古植生等、遺跡周辺の環境を明らかにする一端として花粉化石群集の検討を行った。

検討は、試料1～3の合計3試料について行った。各試料の簡単な記載は、次の通りである。

試料1は、A地区土坑S K02042の第2層より採取され、試料は浅黄色シルト(第25図)。試料2は、B地区方形周溝遺構1の東辺中間セクション最下層より採取され、試料はオリーブ褐色砂混じり粘土(第84図)。試料3は、B地区土坑S K03084の下層より採取され、試料は黄灰色砂混じりシルト質粘質土(第91図)。なお、時代については、出土遺物から、試料1が縄文時代晩期後半、試料2・3が弥生時代中期(第IV様式後半)である。

(2)結 果

全試料で同定された分類群集は、樹木花粉2、草本花粉1、形態分類で示したシダ植物孢子1である。以下に、各試料の花粉化石群集を記載する。

試料1：シダ植物の単条型孢子のみが1点産出した。

試料2：樹木花粉はスギ属、アカガシ亜属、草本花粉は他のキク亜科(ヨモギ属、タンポポ亜科を除く)が各1点産出した。また、単条型孢子も1点産出した。

試料3：花粉・孢子化石は産出しなかった。

検討の結果、いずれの試料も十分な花粉・孢子化石が産出せず、当時の古植生などの復原は、花粉化石群集からは困難である。試料2(溝内)では、針葉樹のスギ属、常緑樹のアカガシ亜属、草本の他のキク亜科が僅かに産出したが、これらが弥生時代中期の植物相であったと言うに止めざるを得ない。なお、花粉化石は水成堆積物であれば、良好に保存されるが、土壌のような酸化条件下では、化学的風化により、分解・消失し、更にバクテリアによる蝕害も受ける。このことから、検討した試料は、少なくとも安定した滞水環境で堆積したものとは考え難い。試料は土坑および溝内埋土より採取されたが、これらの遺構は水付きではなく、乾燥した環境下であったか、水が溜まることがあっても頻繁に乾燥し、常時滞水している環境ではなかったと予想される。したがって十分な花粉化石が産出しなかったため、古植生などの復原はできなかった。試料採取がなされた土坑および溝内埋土は、水成堆積物の可能性が低いと考えられた。

今回の調査地は、遺構包含層が薄く、そこに中世から弥生時代までの遺構が切り合って存在しており、弥生時代面としての試料サンプリングが困難であったため、あえて遺構内の最下層のも

ので試みた。視覚的には暗褐色粘質土で有機質を多く含むとみられたが、花粉胞子については残存状況がよくなかった。

観音寺遺跡は、洪水の被害にたえず遭ってきた印象をもつが、遺構が残存している箇所に洪水砂礫はなく、非常に安定した砂質土の面が広がっている。常時滞水するような箇所を避け、良好な立地条件のところを選んでいたことが、花粉胞子の少なさから読み取れる。

2. 放射性年代測定

試料は、B地区方形周溝遺構1より採取した炭化材1点で、第86図で採取箇所を示している。

本試料を加速器質量分析計(AMS)にて測定した結果は、下表のとおりである。試料の同位体分別効果の補正值(基準値-25.0%)、同位体分別効果による測定誤差を補正した¹⁴C年代、¹⁴C年代を暦年代に較正した年代を示してある。

放射性炭素年代測定および暦年代較正の結果

測定番号 (測定法)	試料データ	$\delta^{13}\text{C}$ (‰)	¹⁴ C年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	¹⁴ C年代を暦年代に較正した年代	
				暦年代較正值	1 σ 暦年代範囲
PLD-3048 (AMS)	炭化木 B地区 東中間部 方形周溝遺構	-26.8	2,315 ± 35	cal BC 395	cal BC 405 - 365 (91.5%)

試料は、同位体分別効果の補正および暦年代較正を行った。暦年代較正した1 σ 暦年代範囲のうち、その確からしさの確率が最も高い年代範囲に注目すると、本炭化木の年代は、cal BC 405~365年が、より確かな年代値の範囲として示された。この年代は、共伴の弥生土器の考古学的年代である弥生時代中期第IV様式後半とすると、かなり古くなっている。IV様式後半であることから、BC 30・40年から古くとも70年あたりを予想していた。結果はおよそ300~350年も古くなっている。炭化材だけでなく隣接の土器(甕342)に炭化物(おこげ)などがあれば比較できたのであるが、それはなくかなわなかった。原因は不明であるが、ひとつのデータとして提示した。

3. 胎土分析

今回、土器片10点について胎土分析を行った。資料は次のもので、括弧内は挿図の遺物番号と試料番号を示す。

縄文時代晩期 土坑S K02042出土の深鉢2点(遺物番号9-試料①・同7-試料②)

弥生時代中期 台付無頸壺(同337-試料③)・土坑S K03095出土の甕形土器(同172-試料④)・土坑S K03096出土の鉢(同183-試料⑤)・土坑S K02115出土の台形土器(同140-試料⑥)・土坑S K02146 出土の台形土器(同155-試料⑦)・方形周溝遺構1出土の広口壺(同335-試料⑧)

弥生時代後期 土坑S K03103出土の器台(同297-試料⑩)、落ち込みS X03070出土の体部片

(図版第33左下-試料⑨)

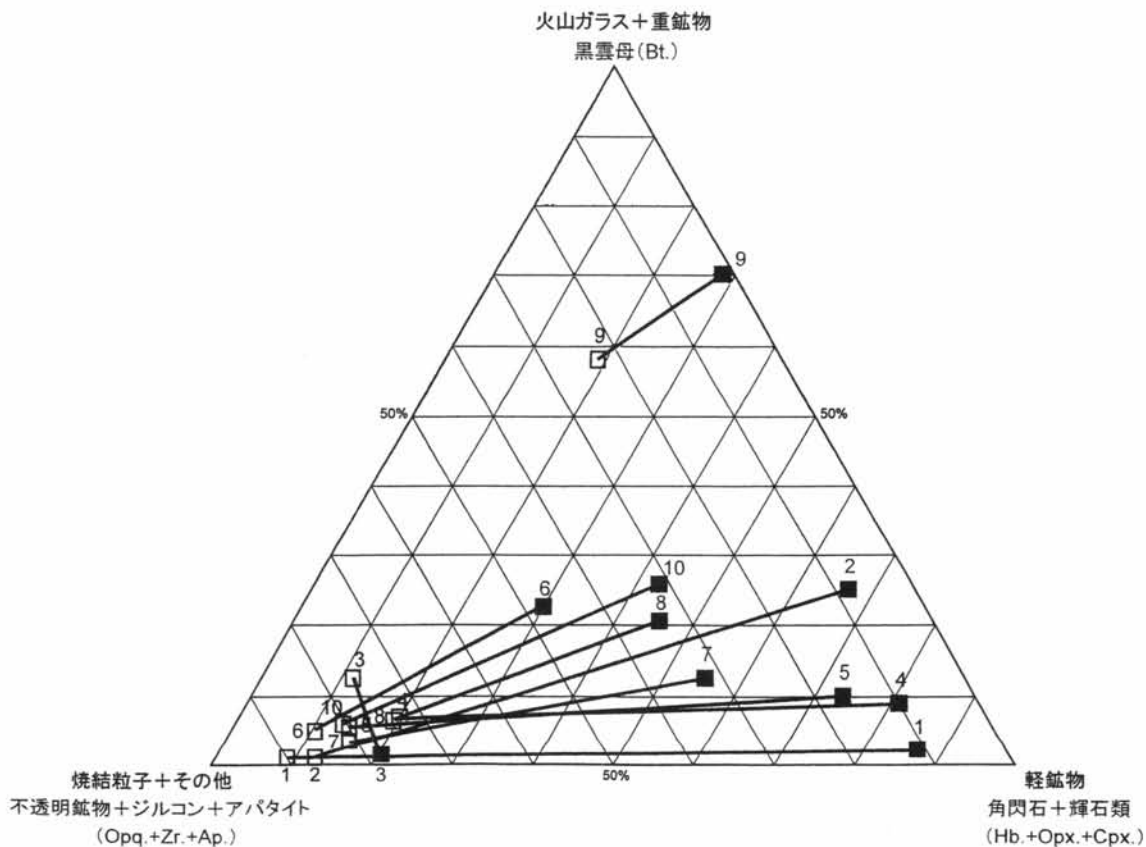
各々の胎土を、全鉱物3項目(火山ガラス+重鉱物・焼結粒子+その他・軽鉱物)と重鉱物3項目(黒雲母・不透明鉱物+ジルコン+アパタイト・角閃石+輝石類)の計6項目を組み込んだ三角ダイアグラムで示した(下図)。三角ダイアグラムからは、試料①・②・④・⑤を1グループ、試料⑥~⑧・⑩をもう1グループ、そして試料③・⑨は、まったく分布域を異にする単独のもの(搬入土器)と視覚的に読み取ることができる。

さて分析結果は、試料①~④は同一系胎土グループとみなされた。また試料⑤~⑧の胎土も、角閃石や不透明(鉄)の含有差を除けばよく似ている。また、試料③は、今回の10点中で最も不透明(鉄)鉱物の含有が高かったため、分布域を異にしてしまったが、同系胎土中の変動範囲に収まる可能性もある。試料⑨・⑩は、特異な胎土であるので次に特徴を記すが、試料①~⑧は、胎土分析において、肉眼観察で感じるほどの差異はないという結果である。

火山ガラスの含有は、試料①~⑧・⑩ではごく微量かまったく検出されなかった。

試料⑨は、胎土がテフラ起源である可能性が高く、ほとんど純粹の火山灰とみられる。火山灰・産地の特定はできないが、完全な搬入土器片である。視覚的にも特異である。

試料⑩は、火山ガラスは検出されず、鉱物6項目のダイアグラムにおいては突出した分布を示さなかったが、変成岩鉱物である重厚物のエピドート、ゾイサイトを多量に含み特異である。また角閃石は被熱を強く受ければ受けるほど、緑色から褐色化する。試料⑩に含有される角閃石は



胎土析三角ダイアグラム

褐色化があまり進んでおらず、被熱程度は比較的低いと推定される。胎土はもともと赤色であった可能性が高い。

なお、沖積地における粘土で土器を焼いた場合、プラント・オパールを含む場合が多い。しかし、今回の試料中には非常に少ない点も特記される。

(黒坪一樹)

備考 花粉分析・放射性年代測定については、(株)パレオ・ラボに、土器胎土分析は(株)京都フィッシュントラックに委託した。付載報告は、それらのレポートをもとに、黒坪が記した。

3. ^{もろはた}諸畑遺跡第3次発掘調査概要

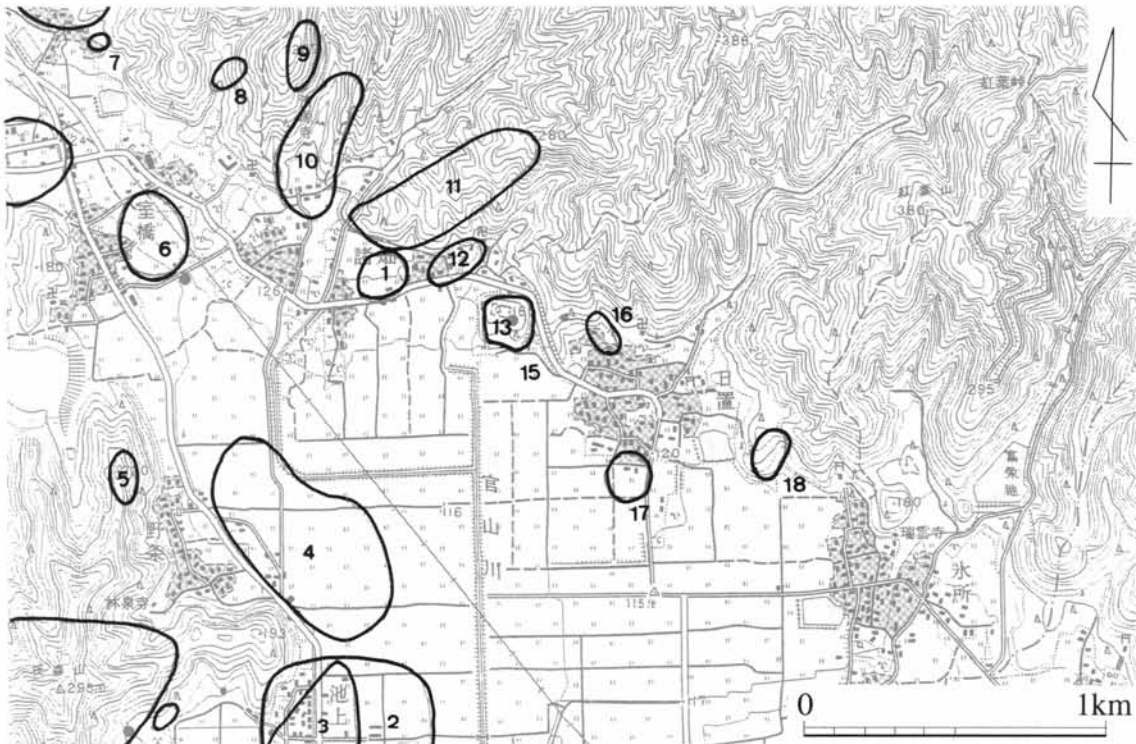
1. はじめに

諸畑遺跡は、京都府船井郡八木町諸畑小字松本に所在する。諸畑遺跡第3次発掘調査は、府営経営体育成基盤整備事業に伴い、京都府南丹土地改良事務所の依頼を受けて実施した。本調査は平成16年度に京都府教育委員会が実施した試掘調査(約240m²)の成果に基づき実施した。

調査期間は、平成16年9月6日～11月29日で、調査面積は約600m²である。現地調査は、当調査研究センター調査第2課調査第1係係長小池寛、同調査員福島孝行が担当した。本報告は主に福島が、竪穴式住居跡SH05の遺物は試掘調査を行った京都府教育委員会の松尾史子が執筆した。

諸畑遺跡は、平成6年度から平成8年度にかけて八木町教育委員会が実施した町内詳細遺跡分布調査によって確認され、その後、平成10年度に同町教育委員会が実施した試掘調査(約20m²)によって弥生時代および中世の集落遺跡であることが明らかになってきた。

諸畑遺跡は、亀岡盆地の北端に位置し、その北側に横たわる諸木山から流れ下る官山川が形成する扇状地上に立地する。諸畑遺跡の南西約1kmには弥生時代後期を中心とする野条遺跡、さらにその南約1kmには弥生時代中期を中心とする池上遺跡が存在し、弥生時代の集落が山塊の裾部



第103図 調査地位置図および周辺の遺跡(国土地理院1/25,000殿田)

- | | | | | | |
|--------------|-----------|-----------|------------|-----------|-----------|
| 1. 諸畑遺跡(調査地) | 2. 池上遺跡 | 3. 狐塚遺跡 | 4. 野条遺跡 | 5. 野条砦跡 | 6. 室橋遺跡 |
| 7. 舟枝館跡 | 8. 美津谷古墳群 | 9. 畑中城跡 | 10. 大谷口古墳群 | 11. 松本古墳群 | 12. 福本古墳群 |
| 13. 鎧塚古墳 | 14. 天皇古墳 | 15. 八木田遺跡 | 16. 西上里古墳群 | 17. 日置遺跡 | 18. 東山古墳群 |

に展開する扇状地や低位段丘上に存在することが明らかとなってきている。

調査および整理にあたっては、関係各機関・個人の方にさまざまな形で協力を得た。記して感謝致したい。^(注3)なお、発掘調査に係る経費は、全額、京都府南丹土地改良事務所が負担した。

2. 検出遺構

発掘調査地点は大きく3か所に分かれるため、西から順にA・B・C地区とした。

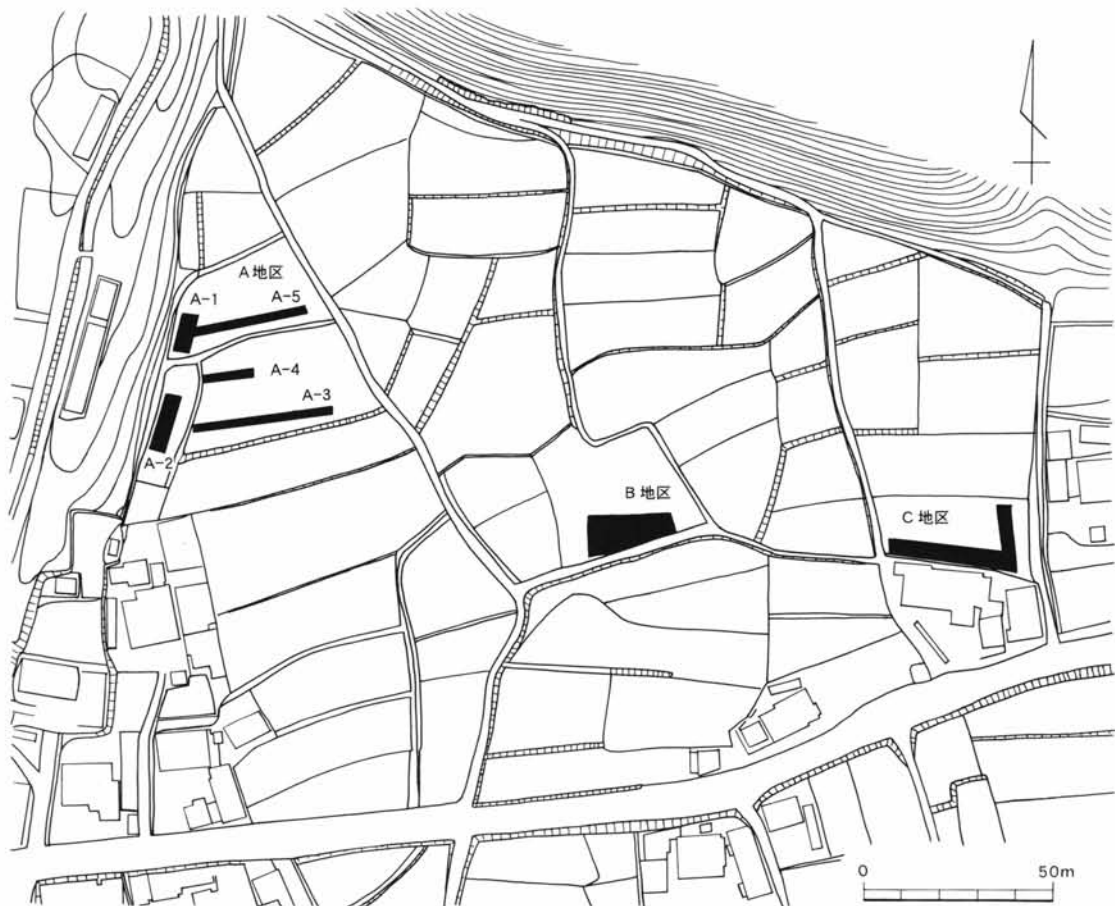
A地区は、基幹排水溝部分にトレンチを2か所に分割設定し、北からそれぞれA-1トレンチ(約40m²)、A-2トレンチ(約60m²)とした。また、試掘調査として、A-3～5トレンチ(合計130m²)を設定した。この内、A-3～5トレンチについては、次年度に面的調査が予定されているため、遺構検出に留めて遺構掘削は行わなかった。A地区の調査面積合計は約230m²である。

B地区は、当初設定したトレンチ(約100m²)での遺構検出が濃密であったため、北側および西側を拡張し、合計面積は約180m²となった。

C地区は、基幹排水溝部分に当初約100m²分のトレンチをL字に設定した。こちらも遺構密度が高かったため、北側に約40m²、西側に約50m²の拡張を行い、合計面積は約190m²となった。

(1) A地区

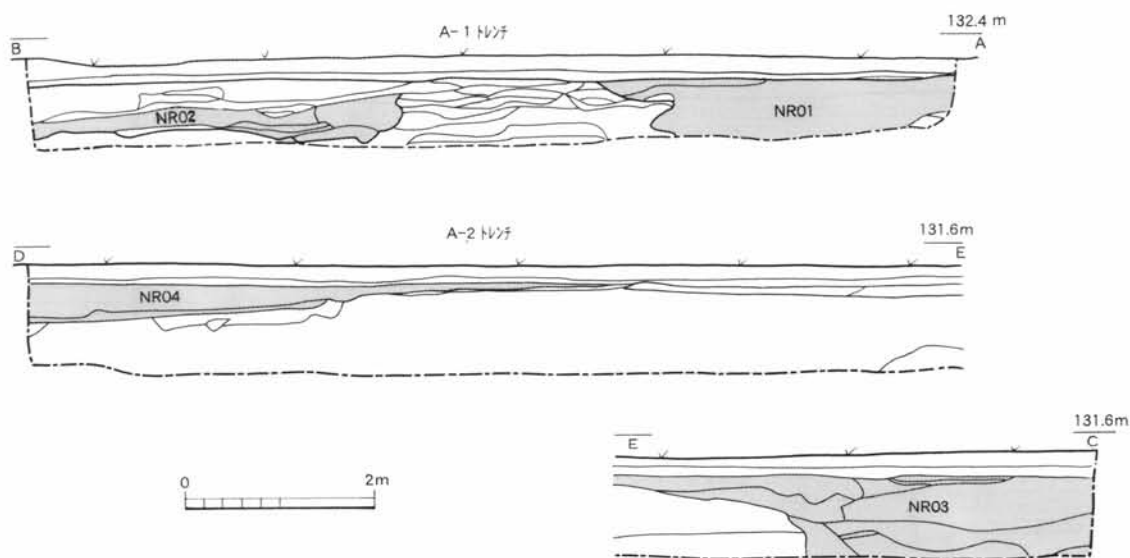
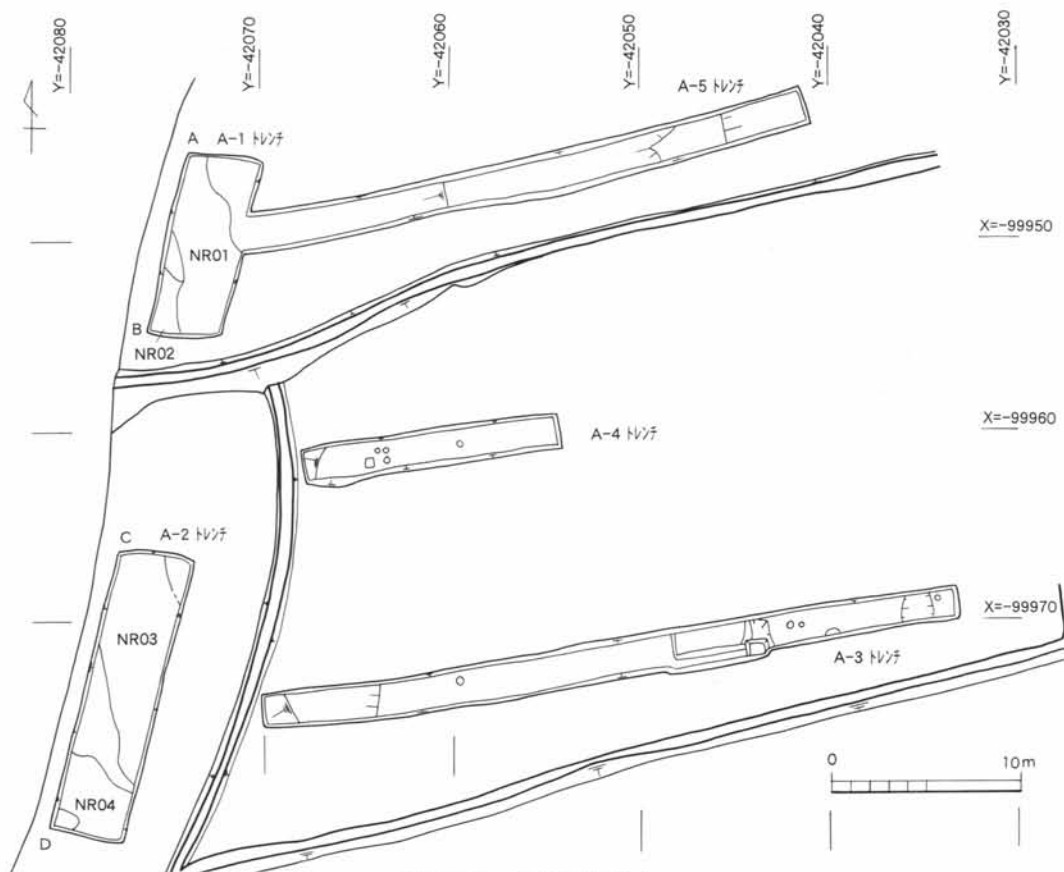
A-1・2トレンチのいずれのトレンチでも官山川の旧流路の内部にあたり、さらに小規模な



第104図 トレンチ配置図

流路(自然流路NR01~04)を重層的に検出した。両トレンチでは出土遺物はなかった。

A-3・5トレンチでは、A-3トレンチ西端で旧流路の東端と竪穴式住居跡状の落込みを検出した。また、トレンチ全面にわたって柱穴・土坑などを検出した。A-4トレンチでも西端で旧流路の東端を検出し、そのほかに柱穴・土坑を検出した。A-5トレンチでは、トレンチ中央部で旧流路の東端を検出し、トレンチ東端で竪穴式住居跡状の落込みなどを検出した。A-3～



5 トレンチでは、弥生土器および古式土師器が出土した。

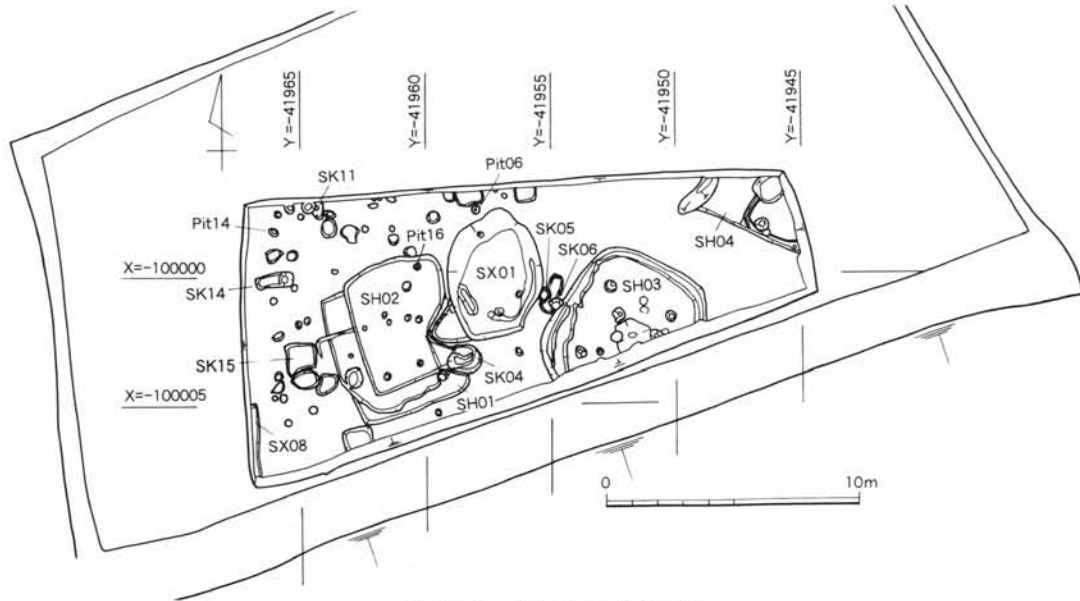
(2) B地区

B地区は、現耕作土の下層に旧耕作土が堆積し、この直下にマンガンの浮き出し層がある。この下層が何回かの土石流や洪水で形成された層となっており、多量の遺物を包含する層となっている。この下面が遺構検出面となっており、基盤土は、主に暗褐色砂質シルト層である。遺構面は北西から南東へかけて低く傾斜しており、トレンチ東半は薄い土石流の層で覆われていた。

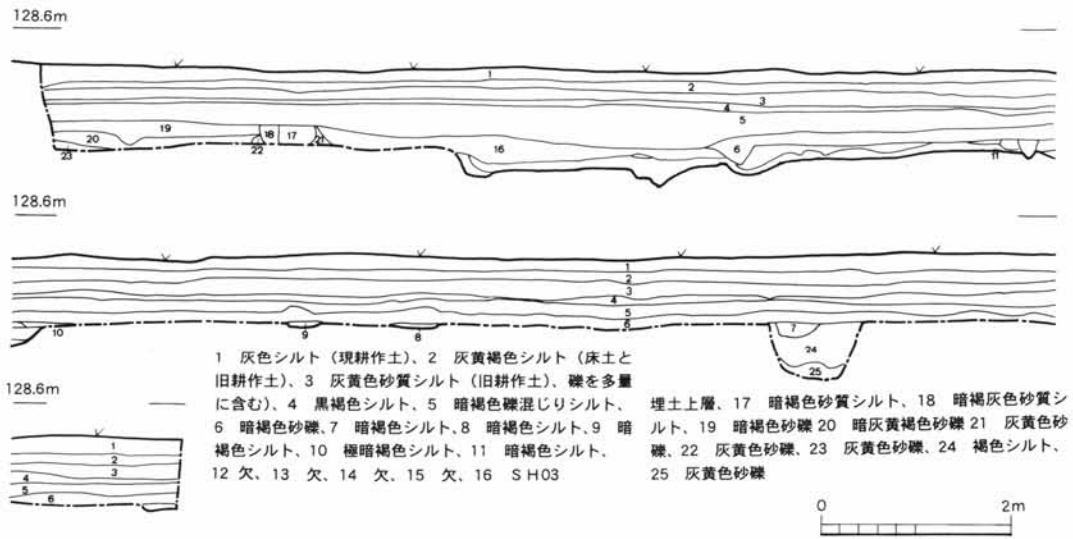
B地区では、弥生時代中期の長方形土坑1基、弥生時代後期から古墳時代後期にかけての竪穴式住居跡4基、鎌倉時代に属する性格不明の六角形の土坑1基、そのほか、奈良時代の柱穴1基、平安時代の柱穴1基、鎌倉時代の土坑・柱穴など多数を検出した。

①弥生～古墳時代の遺構

竪穴式住居跡 S H01(第109図) トレンチ西寄りで検出した方形の竪穴式住居跡である。後述



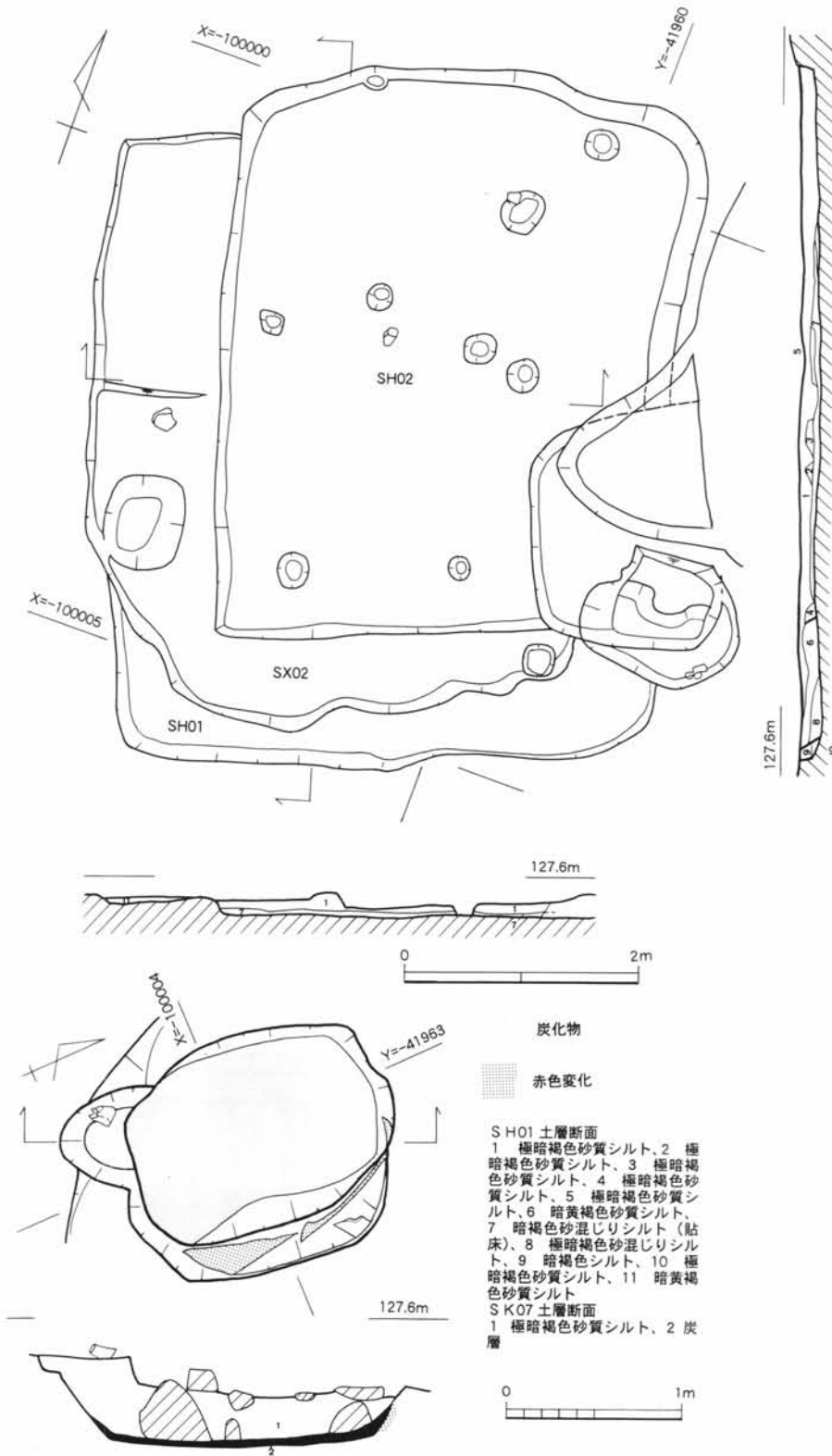
第107図 B地区遺構配置図



第108図 B地区南壁土層断面図

する竪穴式住居跡SH02と土坑SK04・18に切られている。また、竪穴式住居跡SH02とともに土石流SX02によって遺構の大半を破壊されている。竪穴式住居跡SH02との関係は建て替えるに伴うものか、竪穴式住居跡SH01の廃絶後に無関係に竪穴式住居跡SH02が建てられたのかは判然としない。規模

は、南北の一辺が5.3m、東西の一辺が5.0m検出面からの深さは7cmを測り、面積は26.5㎡である。主柱穴は3基の柱穴と、土坑SK18によって壊されている位置にあったと推定される1基によって構成される。土層断面の観察から貼床を行っているらしい。貼床は基盤土である暗褐色砂質シルトに小礫がわずかに混ざったもので、弥生土器小片も含まれている。遺構埋土の大半は土石流SX02で覆われていた。従って出土遺物の大半はこの土石流に伴うものである。土石流SX02に含まれる遺物は、弥生時代後期～終末期にかけての土器片と



第109図 竪穴式住居跡SH01・02、類竈SK07平面・断面図

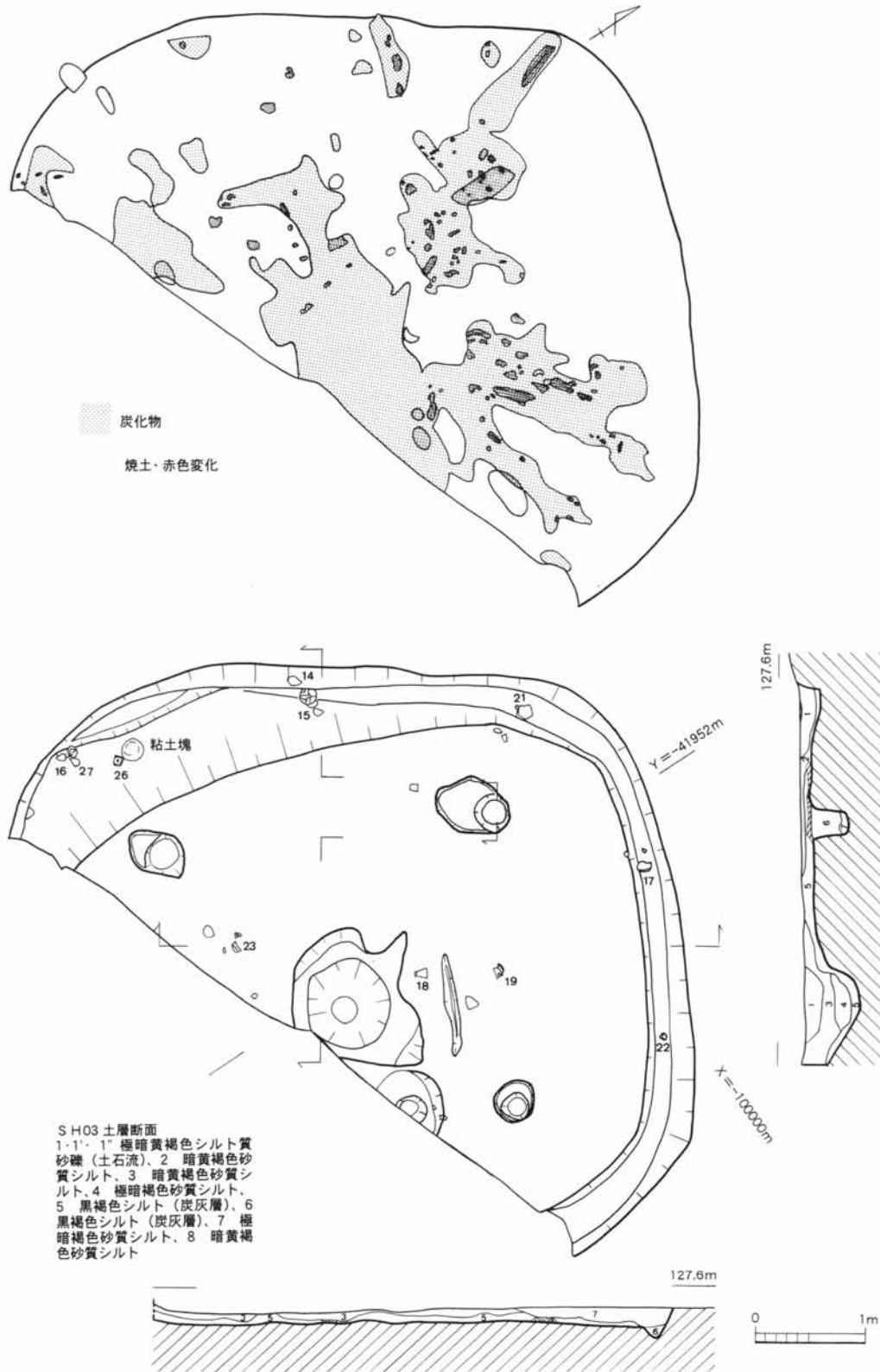
ともに少量の須恵器片を含む。床面上および貼床内部から出土した土器片は、小片であるため時期の特定は困難であるが、概ね弥生時代終末期であると考えられる。また、貼床内部の土器小片については、弥生時代後期を中心とするものであり、従って本住居跡の時期は、上限が弥生時代後期、下限が古墳時代後期である。本住居跡の西側に残る床面上で、類竈跡 S K07を検出した。類竈跡 S K07は、本住居跡の床面を隅丸方形に掘り窪め、南西の一角から煙道を設けている。規模は、南北0.80m、東西0.68m、検出面からの深さは0.15mを測る。底面には細かな炭化材が堆積し、厚さ約1cmの炭層を為している。また、壁面は被熱して赤変していた。遺構埋土から須恵器の口縁片、東側の遺構の壁に接して赤変した土師器甕片が出土した。これらの遺物からこの類竈跡 S K07は古墳時代後期のものである。この遺構は煙道をもつ以上は竈と機能を一にすると考えられるが、掘り込みによって構築されている点で古墳時代に通有の竈とは形態上の相違がある。また、燃料が灰化せず、炭化していることから酸素の供給が制限された形態であったと推定される。また、類竈跡 S K07は、竪穴式住居跡 S H01と同一面で検出しておりこの住居跡本来の埋土がほとんど存在しないため、本住居跡に伴うものかどうかについても不明と言わざるを得ない。本住居跡の西壁付近に存在し、煙道部が住居跡の上端にかかるように掘られているが、遺物の点では住居跡の下限と併行するのみで、機能時の同時性はあきらかでない。

竪穴式住居跡 S H02(第109図) 竪穴式住居跡 S H01を切り、土坑 S K18に切られる方形の竪穴式住居跡で、規模は南北の一辺が4.8m、東西の一辺が4.0m検出面からの深さは0.16mを測り、面積は19.2 m^2 である。基盤土と貼床の土質がほぼ同質であるため支柱穴を検出することはできなかった。竪穴式住居跡 S H01の床面を掘り窪め、貼床を貼っている。遺構埋土はほとんど土石流 S X02で覆われており、本住居跡に直接伴う遺物は少ない。貼床内部から出土した土器から上限は、弥生時代後期に押さえられるが、下限は竪穴式住居跡 S H01同様、古墳時代後期である。

竪穴式住居跡 S H03(第110図) トレンチ東寄りで見出した隅丸方形の竪穴式住居跡で、鎌倉時代の溝 S D01に切られる。規模は北東-南西の一辺6.2m、北西-南東の一辺5.5m、検出面から0.17mを測る。床面積は約34 m^2 である。住居の南側約1/3が調査区外へのびる。住居の床面には、特に南東部で貼床が見られたが、北西部には見られなかった。住居の周壁に沿って周壁溝が見られた。周壁溝は住居内側の床面からなだらかに深くなり、周壁で急に立ち上がる断面形態をとる。周壁溝の住居床面からの深さは0.13mである。支柱穴は4基の内の3基を検出し、残る1基は調査区外に存在すると考えられる。住居の床面中央部に上面ではいびつな方形、下部は円形の土坑を検出した。この土坑は住居の床面から掘り込まれおり、竪穴式住居跡 S H03の中央土坑である。上部の方形の掘り込みは、一辺1.1mを測り、本来板蓋をするための掘り込みであると推定される。中央土坑の南東に2段に掘りくぼめられた円形の土坑を検出した。上段の直径は0.68mを測る。これも住居の床面から掘られており、埋土に少量の炭化物を含むこと、遺構壁がわずかに赤変していることから住居内の炉であると判断される。また、中央土坑の北側に中央土坑の辺に平行して1条の細い溝を検出した。この内部は炭灰層が堆積しており、住居の施設であることは明らかである。屋内小溝あるいは間仕切り溝と呼ばれる溝であろう。この溝の幅・深さ

ともに5cm程度である。

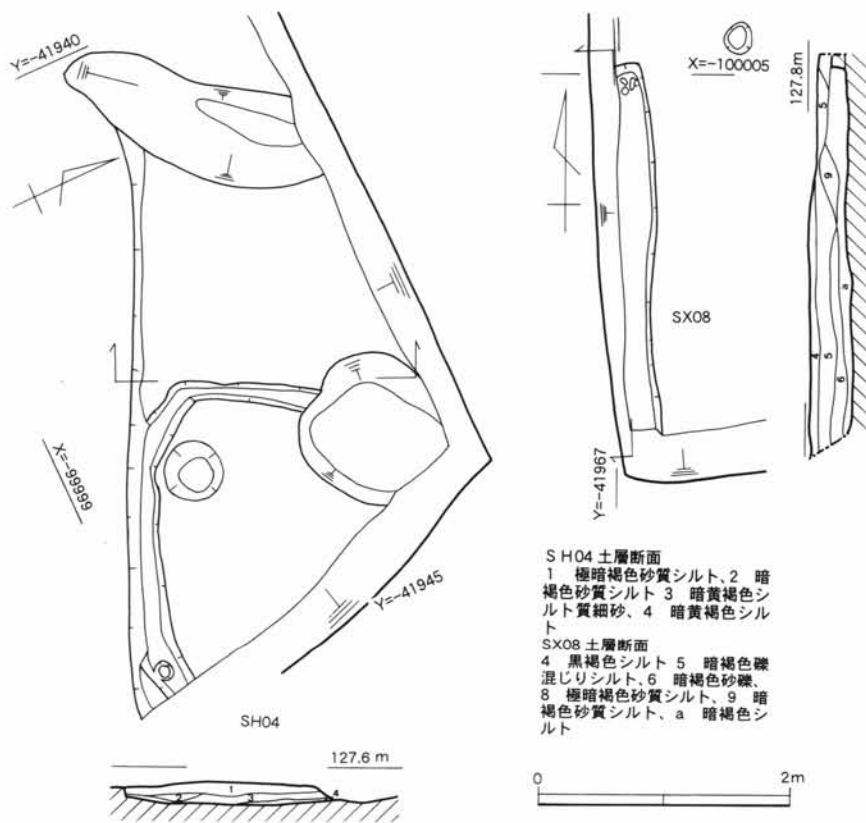
竪穴式住居跡SH03は、検出当初から多量の炭化物で覆われており、一見して「焼失住居」であることは明らかであった。埋土を掘削していく過程で炭化材が放射状に分布する状況を検出し、



第110図 竪穴式住居跡SH03平面・断面図

焼土・赤色変化が少量ずつ点在する状況も検出した(第110図)。焼失住居の埋土に特有の炭灰層は住居床面直上についており、中央土坑内、支柱穴内にも堆積していることが判明した。支柱穴内の炭灰層は柱穴の底部付近まで到達しており、焼失時に柱穴内に支柱が存在していなかったことがわかった。また周壁溝内部にも堆積しており、西側周壁溝底部で炭化材を確認した。出土遺物は弥生土器と粘土塊である。しかし、不意の失火や戦乱による焼き討ちとされる種類の焼失住居に特有の完形土器群は検出されず、ほとんどの土器が完形に復原できない破片である。粘土塊は住居の西部周壁溝内で1点(第110図)と東側床面上で1点を検出したが、調査上の手違いで東側の粘土塊は出土位置を記録することができなかった。以上の所見から、竪穴式住居跡SH03は住居の廃絶時に支柱を抜き取り、中央土坑の蓋を取り去り、周壁溝に建てられた壁板を取り外して、使用可能な土器を持ち去った後、何故か土器素材と見られる粘土塊のみ置き去りにして焼却処分した住居跡であると判断される。出土した炭化材から竪穴式住居跡の上屋構造を復原すると、屋根を放射状に配置した垂木で支えていたことが推定できる。屋根に土を被せた土屋根構造であったかどうかについては大塚昌彦氏の^(注4)論考がある。大塚氏によれば垂木の上に土屋根がなければ炭化材は生じないということである。これによれば今回検出した竪穴式住居跡SH03も土屋根構造である可能性はある。出土した遺物(第118図)から、竪穴式住居跡SH03の廃絶時期は、弥生時代後期、V様式末であると考えられる。

竪穴式住居跡SH04(第111図) トレンチ北東隅で検出した方形と見られる竪穴式住居跡である。



第111図 竪穴式住居跡SH04・不明遺構SX08平面・断面図

中世以降の風倒木痕で北西隅が破壊されているほか、北東側約2/3が調査区外へのびる。現存長で一辺4.6m以上を測り、検出面からの深さは0.18mを測る。床面周壁沿いに周壁溝が見られるほか、南西周壁溝から住居内中心部へ向かって屋内小溝(間仕切溝)が直線的にのびる。間仕切溝の幅は0.2m、深さ5cmを測る。

周壁溝内で小柱穴を1基検出した。直径は0.47mである。主柱穴と考えられるものは検出できなかった。住居跡の大半が調査区外にあることから、主柱穴は調査区外にあると見られる。本住居跡の埋土からは、弥生終末期の土器が出土した。

不明遺構 S X 08(第111図) トレンチ南西隅で検出した遺構である。トレンチの西壁に沿って幅0.3mで3mにわたって検出した。検出面からの深さは0.18mである。東側の上端が直線状であり、底面が平坦であるため竪穴式住居跡である可能性が高いが、検出部分が狭小であるため遺構性格の判断は保留した。来年度以降、町道部分の発掘が予定されているのでその時点での調査に判断は委ねることとする。不明遺構 S X 08の北東隅から土師器甕が出土した。

土坑 S K 14(図版第43-(3)) トレンチ西端で検出した隅丸長方形を呈する土坑である。土坑の北壁は部分的に赤変しており、火が焚かれていたことは確実である。埋土にも炭化物が含まれていた。また、西端から弥生時代中期末の弥生土器甕が2個体分土圧で潰れた状態で出土した。

②奈良・平安時代の遺構

柱穴 Pit16 S H 02の埋土を切って掘られた円形の柱穴である。直径30cmを測る。埋土から暗文のある土師皿が出土した。この土師皿の時期から奈良時代中期の柱穴と判断される。

③鎌倉時代の遺構

不明遺構 S X 01(第112図) トレンチ中央部で検出した六角形または紡錘形を呈する土坑状の遺構である。規模は南北の長軸が5.4m、東西の短軸が3.8m、検出面からの深さは断面図作成地点0.38mを測る。不明遺構 S X 01の東側の壁は1段テラスを設けているが、ほかは斜面になっている。床面に小柱穴を4基検出した。床面から完形率が2/3程で、二次的に火を受けた瓦器椀が口縁部を下にして出土した。また、西壁の中位から鉄製の刀子と思われる鉄製品が出土した。埋土からも瓦器椀、瓦質羽釜、蓮弁紋の青磁、土師皿などが出土した。この遺構は類例も少なく、性格は不明である。遺構の時期は、床面から出土した瓦器椀の年代から13世紀前半(鎌倉時代前半)と判断される。

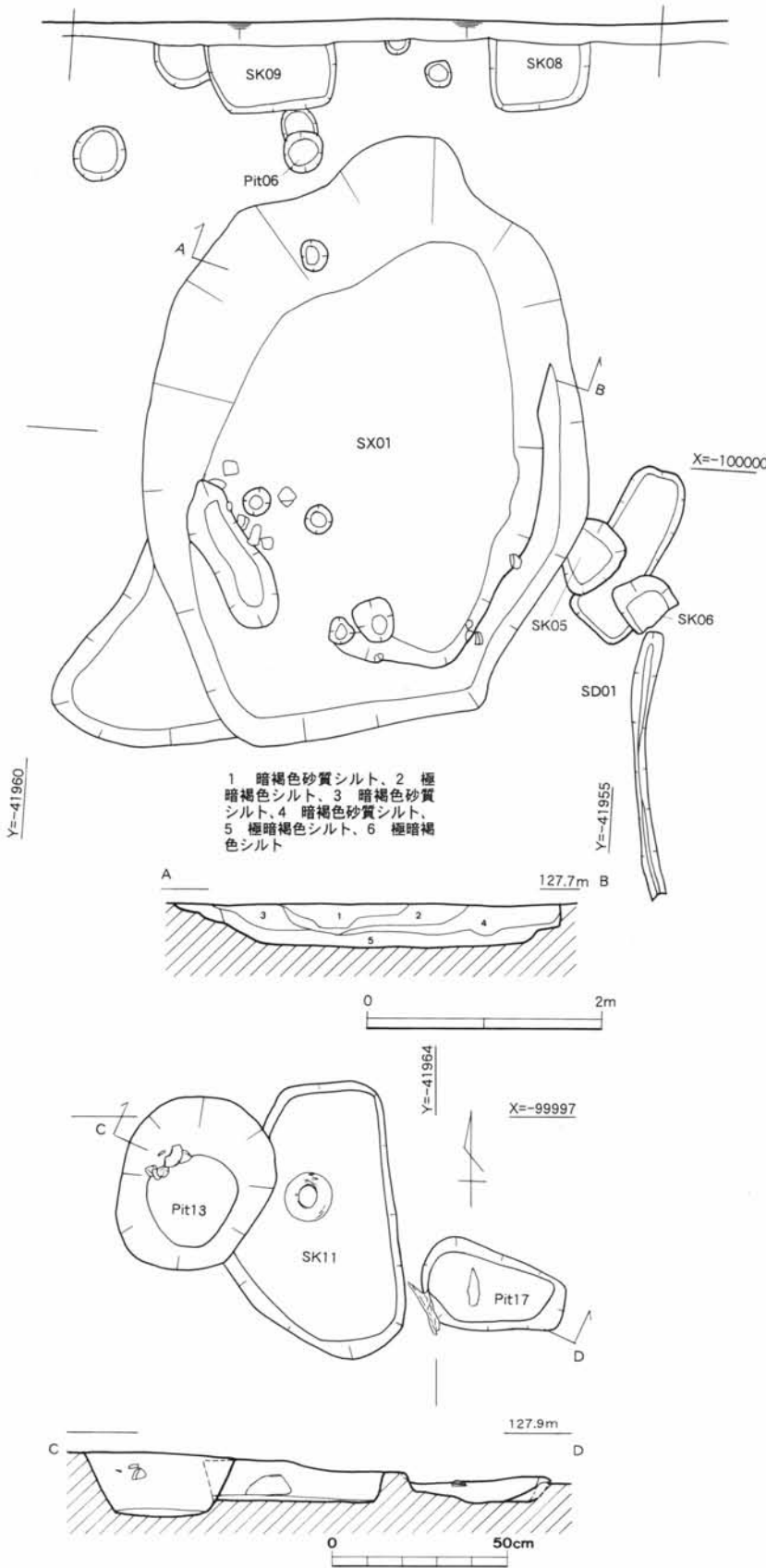
土坑 S K 11(第112図) トレンチ北西部で検出した隅丸長方形の土坑である。長軸0.79m、短軸0.5m、検出面からの深さ0.12mを測る。床面から口縁部を下に伏せた完形の瓦器椀1点が出土した。遺構の時期は、12世紀前半(平安時代末)と判断される。

土坑 S K 05(第112図) 不明遺構 S X 01の南東で検出した隅丸方形の土坑である。長軸0.6m、短軸0.5m、検出面からの深さ5cmを測る。埋土からは、瓦器椀と瓦質の羽釜が出土した。時期は、13世紀前半(鎌倉時代前半)と判断される。

溝 S D 01(第112図) 竪穴式住居跡 S H 03を切って南流する幅0.17m、検出面からの深さ0.2mの溝である。埋土から瓦器椀が出土しており、時期は13世紀前半(鎌倉時代前半)と判断される。

(3) C 地区

C地区は、B地区同様、現耕作土の下層に旧耕作土が堆積し、この直下にマンガンの浮き出し層がある。この下層が何回かの土石流や洪水で形成され層となっており、多量の遺物を包含する層となっている。この下面が遺構検出面となっており、基盤土は主に黄灰色砂礫層である。遺構



第112図 B地区鎌倉時代遺構平面・断面図

面は北西から南東へ低く傾斜しており、トレンチ東半は薄い土石流の層で覆われる。C地区では、弥生後期後半から古墳時代前半の竪穴式住居跡5基・土坑・柱穴を検出した。

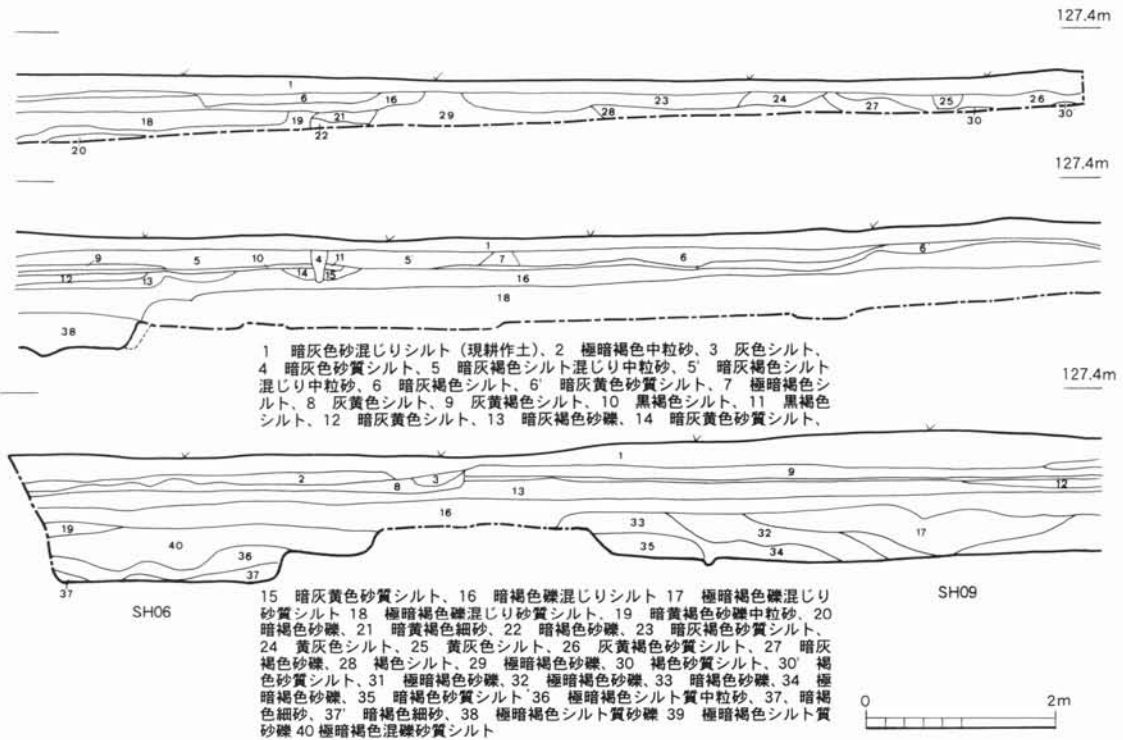
竪穴式住居跡SH05(第115図) 京都府教育委員会の試掘調査によって検出した六角形もしくは八角形の竪穴式住居跡である。一辺の長さは2m、住居跡の規模は、東西およそ4mほどと推測される。検出面からの深さは0.15mを測る。床面の南側は一段高くなっており、南辺が出入り口である可能性が高い。北側の低い床面には厚さ5cmの貼床が施されており、周壁溝はこの貼床面から掘り込まれている。周壁溝の幅は0.12m、深さは5cmを測る。貼床と遺構の基盤土が同色・同質であったため、支柱穴を検出することはできなかった。また、床面東寄りで赤変した部分があり、明確な炉ではないものの、火床であることが判明した。床面直上から弥生土器甕が出土し、この土器の時期から竪穴式住居跡SH05は、弥生時代後期後半～終末期で

あると考えられる。竪穴式住居跡SH05は土坑SK19に切られ、この土坑SK19は、竪穴式住居跡SH09に切られているため、SH09はSH05の廃絶後、一定期間が過ぎた後に建築されたことが分かる。

竪穴式住居跡SH06(第116図) トレンチ南東隅で検出した方形竪穴式住居跡である。この竪穴式住居跡はほぼ位置を変えずに2回、建て替えを行っている。最初に掘られたのは東側にわず



第113図 C地区遺構配置図

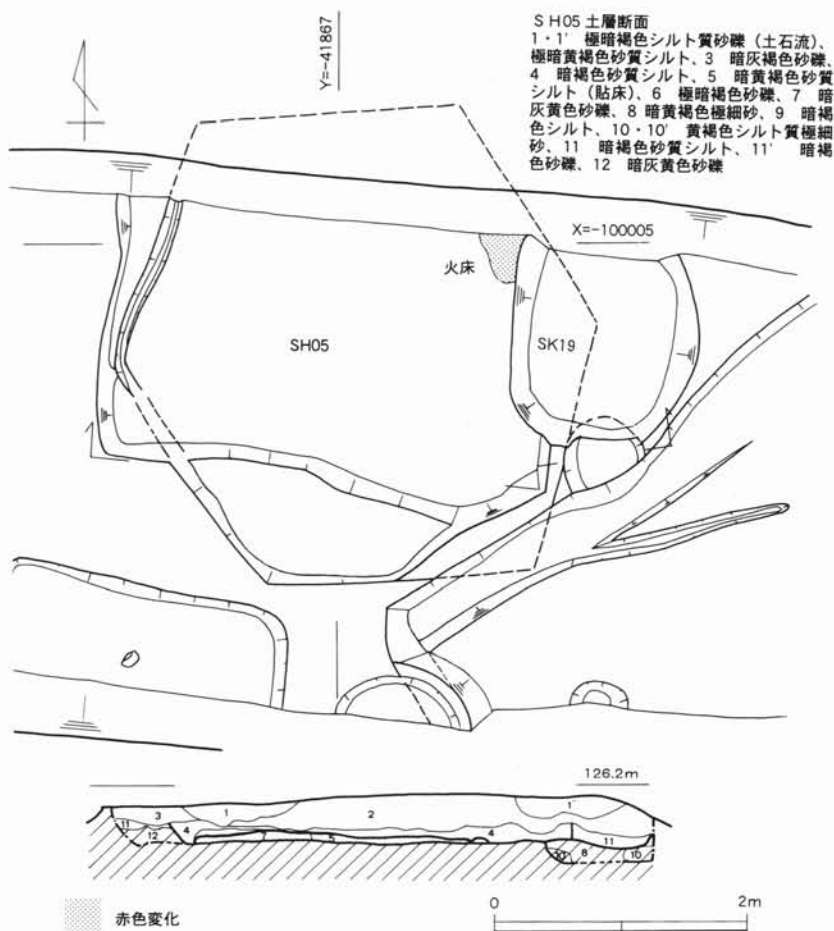


第114図 C地区南壁土層断面図

北がやや西に傾いた周壁溝が残るSH06-Cである。いずれも西側の過半が調査区外に出るため、支柱穴・中央土坑・炉などは検出できなかった。上端の残りが最もよいSH06-bでは一辺が5.8m以上を測る。トレンチ南端で住居跡の南辺は調査区外に出るが、トレンチ南壁の最下部に住居の立ち上がりを認めたので、住居跡の一辺は6mを大きく上回ることはない。検出面からの深さは最大0.55mを測る。竪穴式住居跡SH06の埋土は、周辺部には小礫を含む極暗褐色の粗砂で、洪水による堆積であることを示すものもあるが、それ以外の大半は数度におよぶ土石流の堆積によって埋め尽くされている。また、この土石流は遺物を大量に含んでおり、竪穴式住居跡SH06の埋土からコンテナ4箱分の土器が出土した。これらの遺物には、弥生時代後期後半～古墳時代前期のものが含まれ、この集落の存続時期が窺われる。

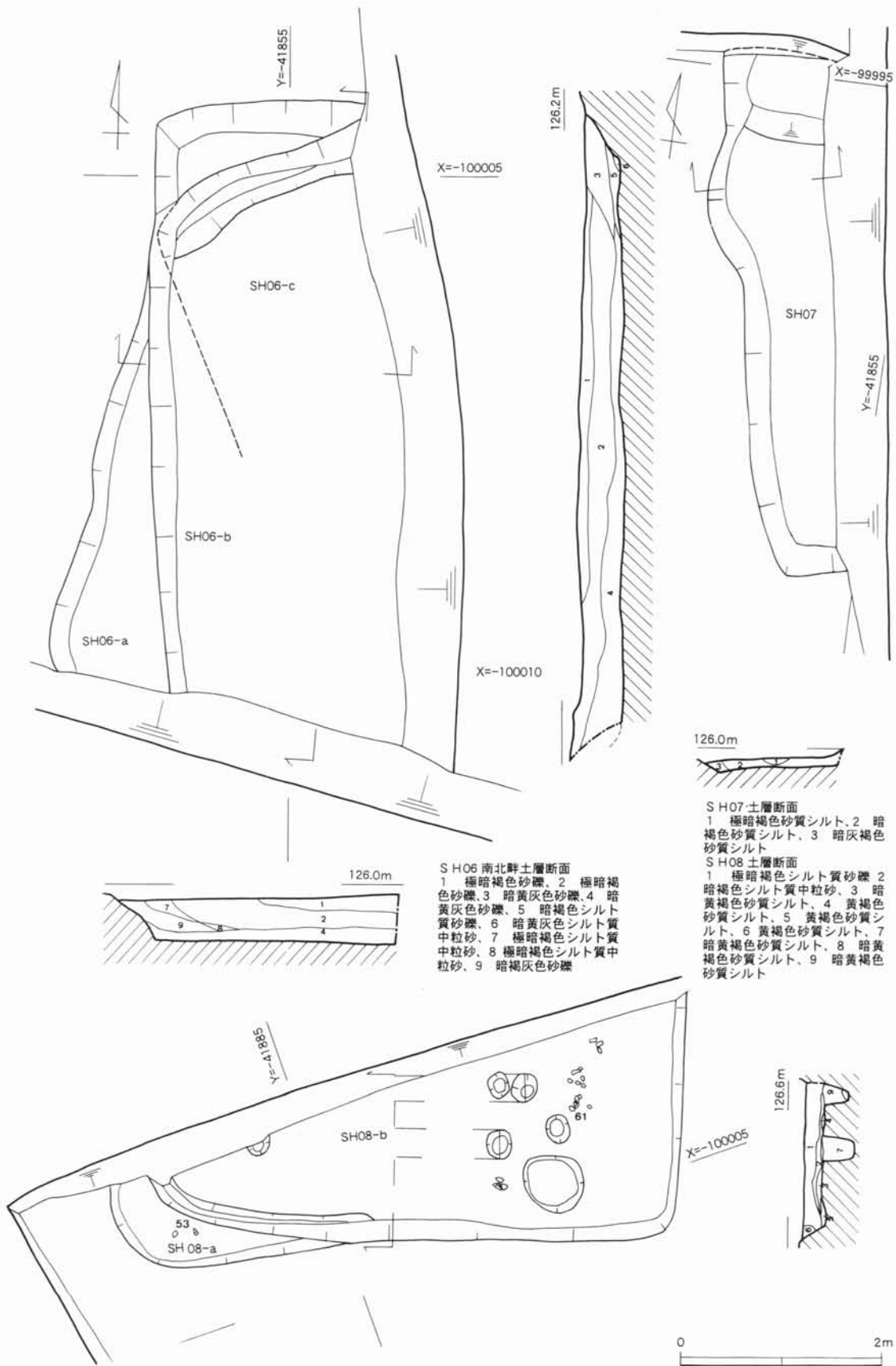
竪穴式住居跡SH07(第116図) トレンチの北側への拡張に伴い、トレンチ北端で検出した方形竪穴式住居跡である。住居跡の一辺は5.2m以上を測る。土石流などによる破壊と後世の削平によって遺構の残りは悪い。検出面からの深さは0.1mを測る。埋土からは、弥生土器高杯・壺が出土した。住居の時期は、弥生時代末と判断される。

竪穴式住居跡SH08(第116図) 追加調査によって西側に拡張したトレンチ西端で検出した方形竪穴式住居跡である。この住居跡は北側の2/3が調査区外へのび、ほぼ同じ場所で2回建て替

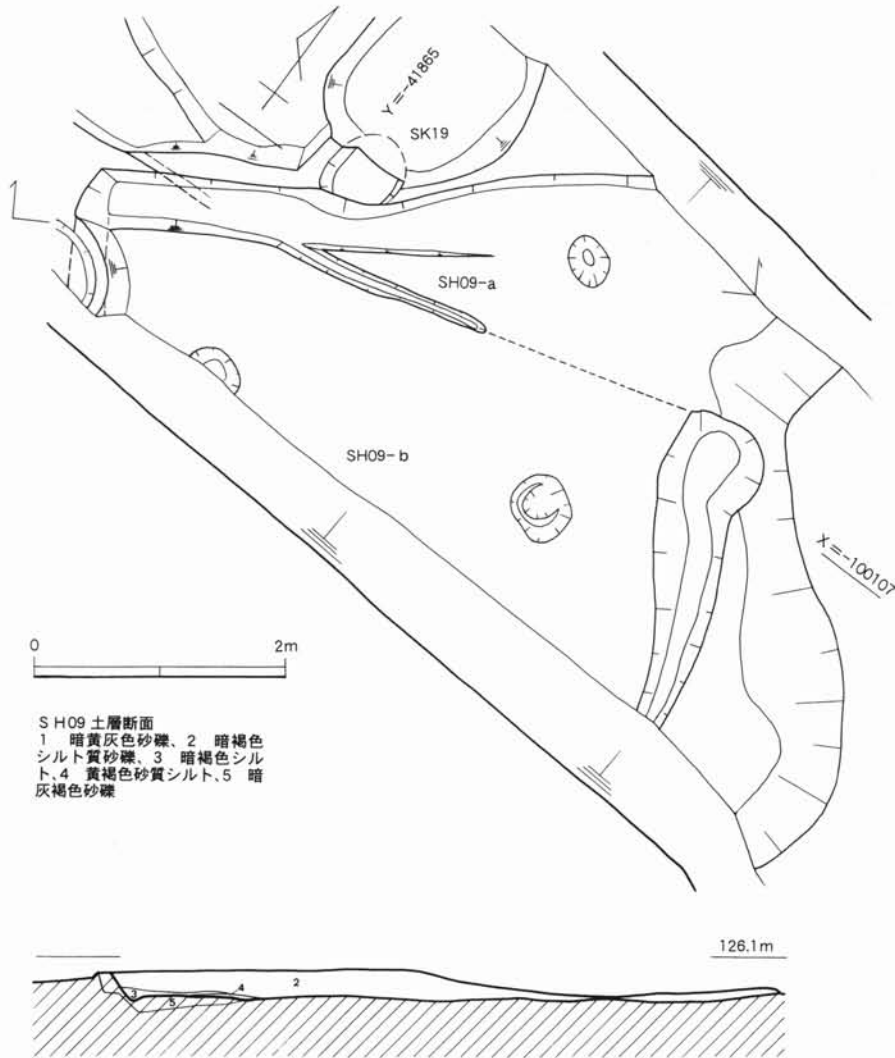


第115図 竪穴式住居跡SH05平面・断面図

えを行っている。南西側で僅かに床面が残る方が古い住居跡でSH08-a、残りの大部分が建て替後のSH08-bである。SH08-bは更に検出した炉跡が支柱穴の再利用と見られることから、同じ場所、同じ方位で1回建て替えを行っている。ちなみにSH08-aの支柱穴は、SH08-bの一辺は5.3mを測り、検出面からの深さは0.22mを測る。SH08-aの床面および周壁沿いから弥生土器甕、ミニチュアの甕が出土し、これらからSH08-aは弥生後期後半～終末期に廃絶したもの



第116図 竪穴式住居跡SH06・07・08平面・断面図



第117図 竪穴式住居跡SH09平面・断面図

と考えられる。SH08-bは床面から僅かに浮いた状態で布留2式の小型丸底鉢が出土したため、古墳時代前期後半には廃絶したと考えられる。床面では南西側で支柱穴1基、南東側で支柱穴2基と炉跡、西辺から南辺の中央の周壁際では幅0.2m、深さ6cmの周壁溝を検出した。2基の南東側支柱穴の内いずれかはSH08-aのものであると考えられる。また、床面で検出した炉跡は直径

0.28m、深さ0.24mの深い円形の柱穴状を呈するもので、底部には炭化物が堆積し、上部の壁面は赤変し、火を受けていることが明らかである。特異な炉の形態は住居の建て替えに伴い、引き抜いた支柱穴を再利用したものであると考えられる。

竪穴式住居跡SH09(第117図) トレンチ中央部を北西から南東方向に流れる土石流にそのほとんどを破壊された竪穴式住居跡である。平面形態は方形である。この住居跡も同一地点で少なくとも1回は建て替えを行っている。東側の周壁溝から外側にはみ出す部分が古い方の住居跡でSH09-a、東と北側の周壁溝で囲まれる部分が新しい方の住居跡SH09-bである。SH09-bは一辺が5.8m、検出面からの深さは0.2mを測る。SH09-aには貼床が見られ、SH09-bの周壁溝や支柱穴はこの貼床上から切り込まれている。トレンチ南壁際では床面が赤変する部分があり、ここが火床となっている。竪穴式住居跡SH09は、その埋土・周壁を土石流が破壊しており、床面に貼られた貼床も抉り取られている。またこの土石流にも土器が大量に包含されている。

3. 出土遺物

(1) 弥生～古墳時代の遺物

竪穴式住居跡 S H02出土遺物(第118図1・2・5～13) 竪穴式住居跡 S H02から出土した遺物には受口状口縁の壺(1)、器台(2)、甕(5・6)、底部(8～10)、蓋(11)、須恵器甕(12・13)などがある。竪穴式住居跡 S H02は土石流 S X02によって埋土を破壊されているため、確実に竪穴式住居跡 S H02に伴うものがどれかを確定することができない。遺物には1・2のように弥生時代後期後半に属するものから7のように布留1式の布留甕、12・13のように古墳時代中期～後期にかけての須恵器甕などが含まれており、貼床に混入している住居築造以前の土器が弥生後期後半であることから、住居の時期は、上限が庄内式併行期、下限は古墳時代後期となる。

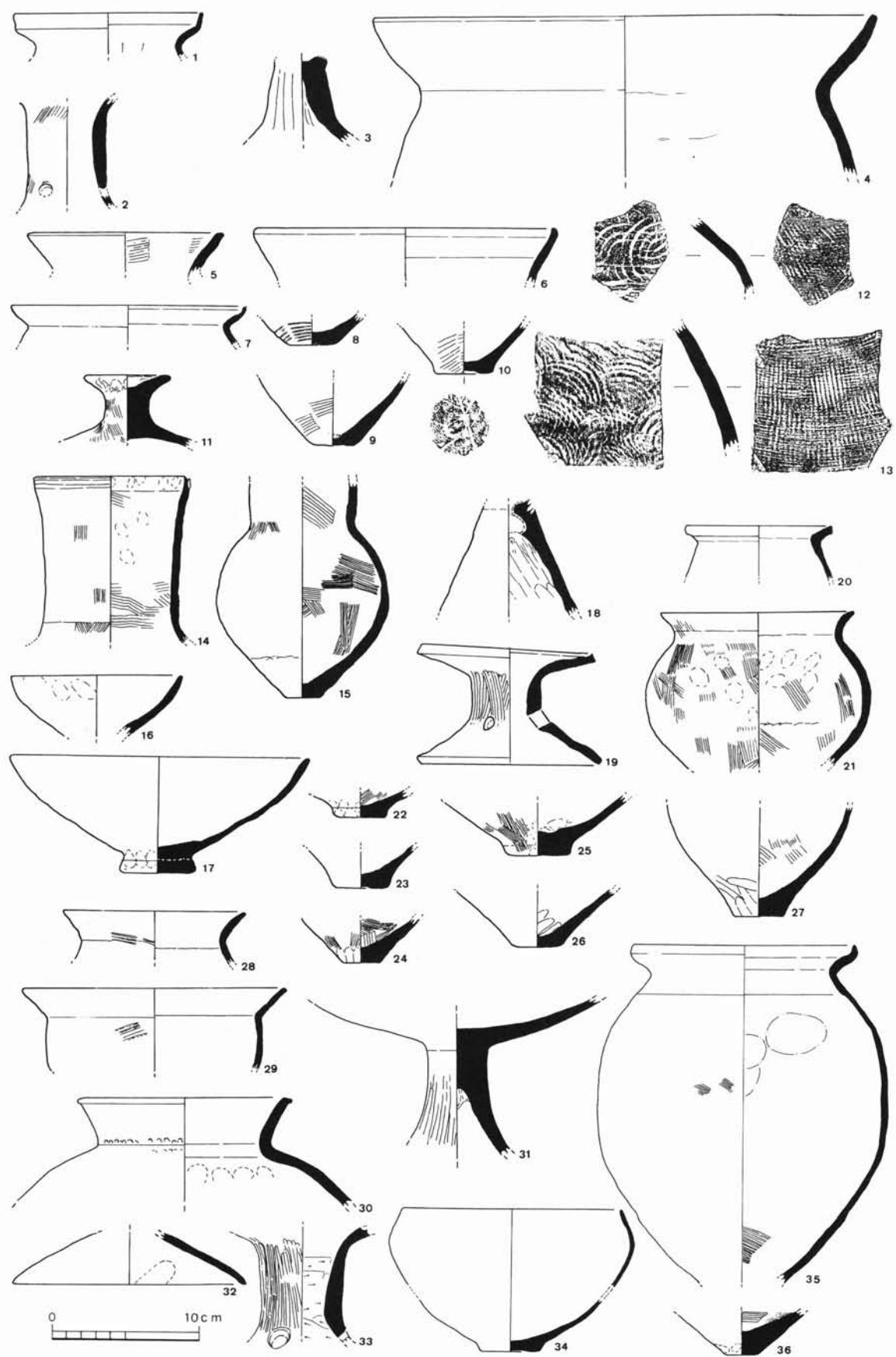
類竈跡 S K07出土遺物(第118図3・4) 類竈遺構 S K07からは高杯(3)、長胴甕(4)のほか、須恵器口縁片、弥生土器片などがある。4は古墳時代後期以降の形態であり、二次焼成を受けて赤変していることから類竈跡 S K07に共伴するものと思われる。

竪穴式住居跡 S H03出土遺物(第118図14～27、第120図69) 竪穴式住居跡 S H03からは長頸壺(14・15)、鉢(16・17)、高杯(18)、器台(19)、甕(20・21・27)、底部(22～26)、板状鉄器(第120図69)、粘土塊2点などが出土した。この内14～19・21～23・25～27は、床面上または周壁溝内から出土した。ただし、18はやや床面から遊離した状態で出土したが、二次焼成を受けて赤変しているため、竪穴式住居跡 S H03を焼却処分している最中に火中に投げられたものと判断し、上記のグループに含めた。この土器群の編年的位置は、太田遺跡第15次 S H4に類似し、長頸壺を残すところにV様式的様相は残すものの、器台の小型化が進行し、庄内式への指向をもっている。従って現状の資料による限り、V様式の末と庄内式の過渡期的様相として、南丹波の平山4式と北金岐式の境界線上にこの土器群を置き、資料の増加を待つこととする。なお板状鉄器(第120図69)は長さ5.3cm、幅3.0cm、厚さ5mmの隅丸方形を呈する。器種は不明である。

竪穴式住居跡 S H04出土遺物(第118図28・29) 竪穴式住居跡 S H04からは甕(28・29)が出土した。弥生時代後期末(平山4式)から庄内式併行期(北金岐式)であろう。(福島孝行)

竪穴式住居跡 S H05出土遺物(第118図30～36) 34～36は住居床面直上から、そのほかは住居に切り込む土石流から出土した。36は甕もしくは鉢の底部である。内面調整はハケメである。34は鉢である。磨滅が激しく調整は不明である。35は受口状口縁の甕で、底部は欠損している。口径15cm、残存高18cmである。体部内外面ともわずかであるがハケメが残る。32は高杯の底部、31は高杯の体部から底部である。33は器台の脚部で3方に透かし穴がある。30は壺の口縁部である。(松尾史子)

竪穴式住居跡 S H06出土遺物(第119図37～49) 竪穴式住居跡 S H06の埋土は度重なる土石流によって占められており、本来の埋土は失われているため、S H06-cに確実に伴うと断定できる遺物はない。しかし、下層の床面付近で検出した37～44は時期的なまとまりが見られるため、S H06-cの時期に近いと考えられる。叩き目を残す壺(37)や庄内式典型の高杯(40)、搬入の庄内甕(42)などから庄内式併行期の中でも盛行期の曾我谷式であると考えられる。なお、45は布留

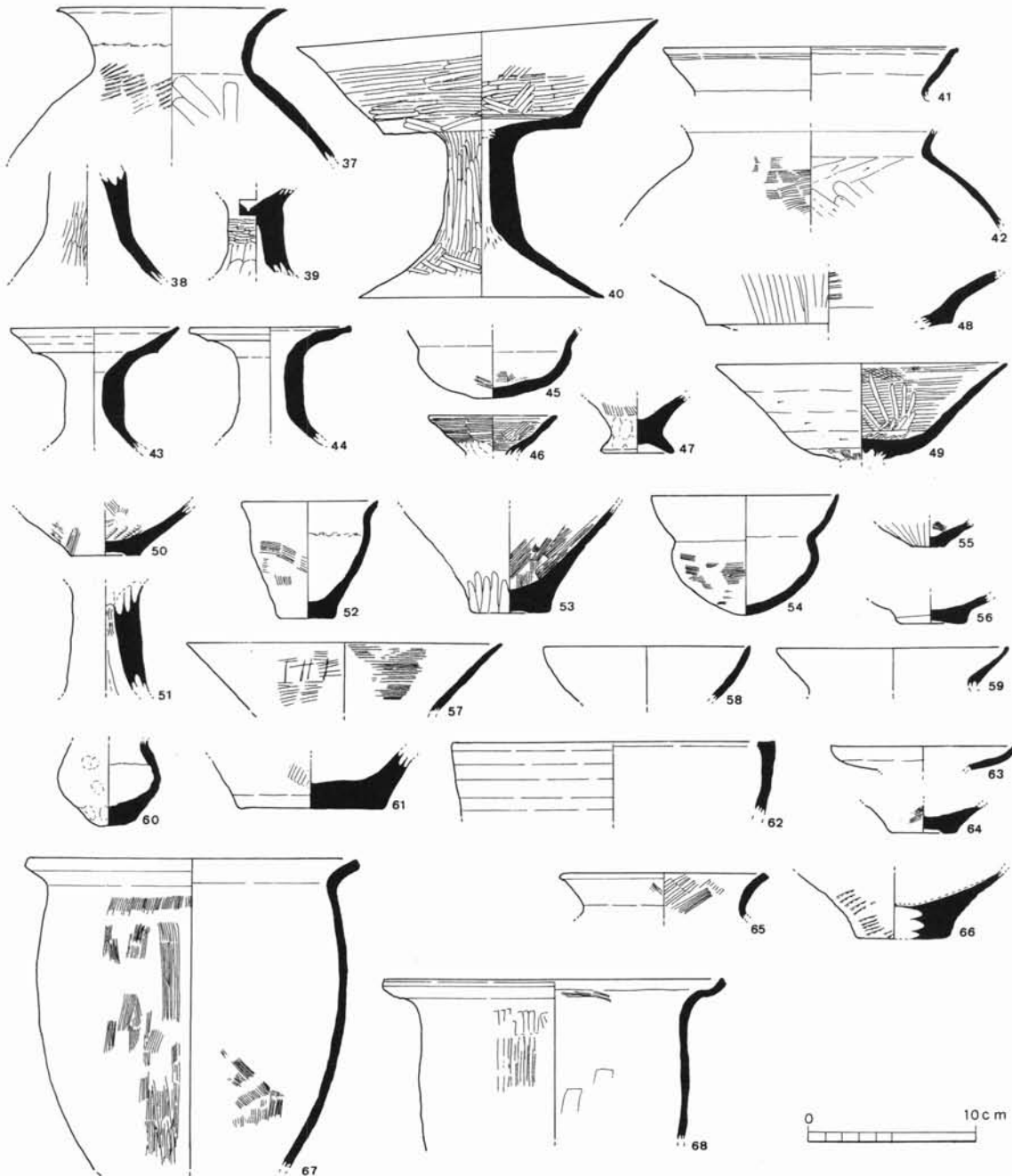


第118図 出土遺物実測図(1)

1式、48は平山4式、49は布留2式である。このことから諸畑遺跡は少なくとも平山4式から庄内式併行期を経て布留2式まで継続的に営まれた集落であったことが窺える。なお、第120図70は住居の埋土上層から出土した土錘である。

竪穴式住居跡SH07出土遺物(第119図50・51) 竪穴式住居跡SH07から出土した遺物は少なく、図化できたものは2点に過ぎない。比較的ていねいな底部輪台技法や底部内面に蜘蛛の巣状ハケをもつ壺底部、一体成形の高杯という特徴からして弥生時代後期末(平山4式)であろう。

竪穴式住居跡SH08出土遺物(第119図52~62) SH08-aに伴うのは甕(52・53)のみで、52はミニチュアである。SH08-bに伴うのは(55・58・59)である。床面から少し浮いた(54)、その

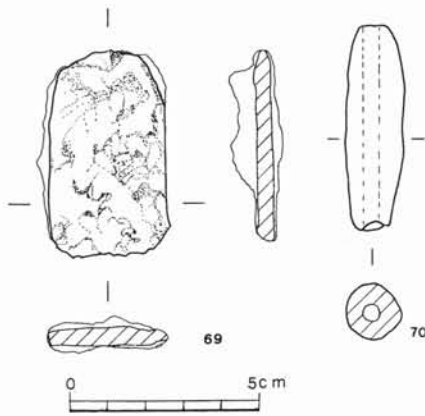


第119図 出土遺物実測図(2)

ほかは混入遺物である。この中には61・62のような弥生時代中期のものが含まれる。59は布留1式の搬入された布留甕、54は布留2式の小型丸底鉢であるが、厚手で粗製である。57は内外面横方向のミガキを施す高杯の口縁部である。

竪穴式住居跡 S H09出土遺物(第119図63~66) 竪穴式住居跡 S H09は土石流で覆われており、住居に伴う土器は特定できない。図示した壺・甕は弥生後期末のものである。

土坑 S K14出土遺物(第119図67・68) 67はIV様式末の甕、68は近江の影響を受けたやや受口状を呈する甕である。



第120図 出土遺物実測図(3)

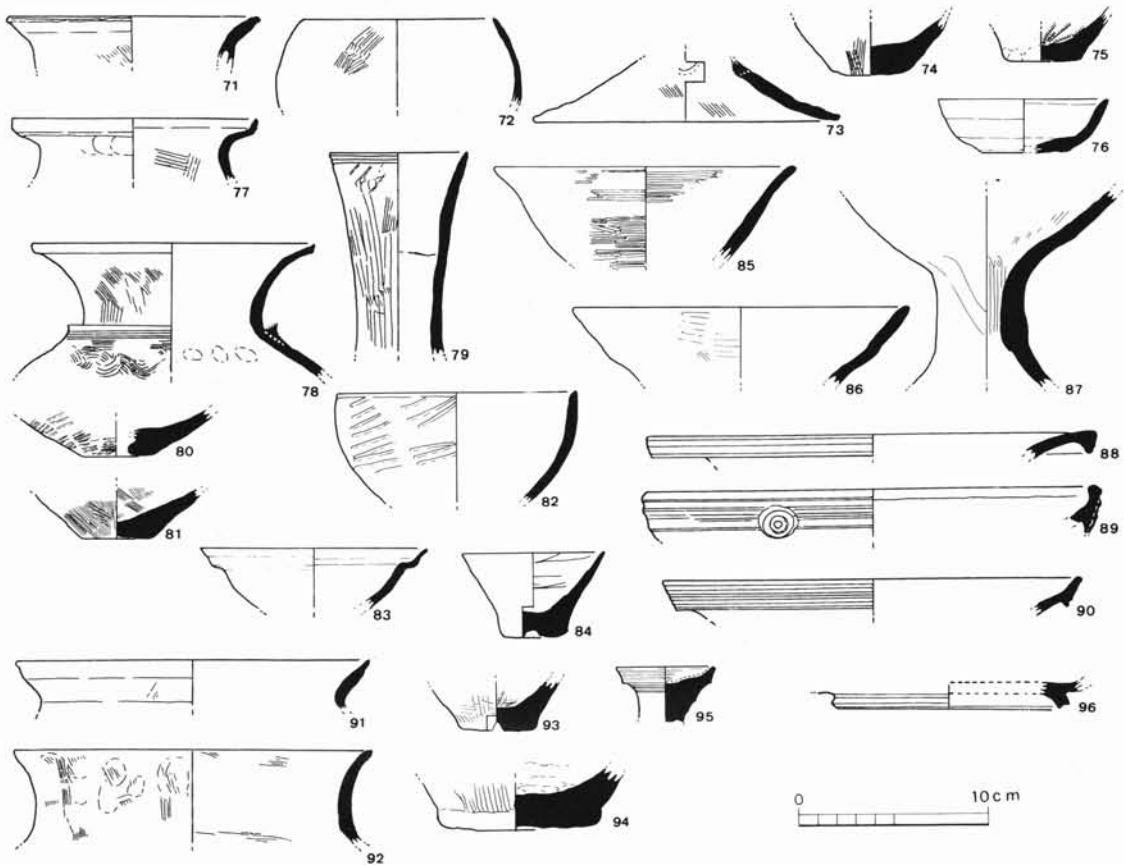
そのほかの遺物(第121図)

71~76はB地区、77~94はC地区出土。弥生中期末・後期後半・終末期、古墳時代前期・終末期、奈良時代、鎌倉時代の遺物が出土した。

(2) 奈良~鎌倉時代の遺物

Pit16出土遺物(第122図97) 見込みに放射状暗文と連弧状暗文を施した奈良時代(平城II期)の土師器皿Aである。口径22.6cm、器高2.7cm。

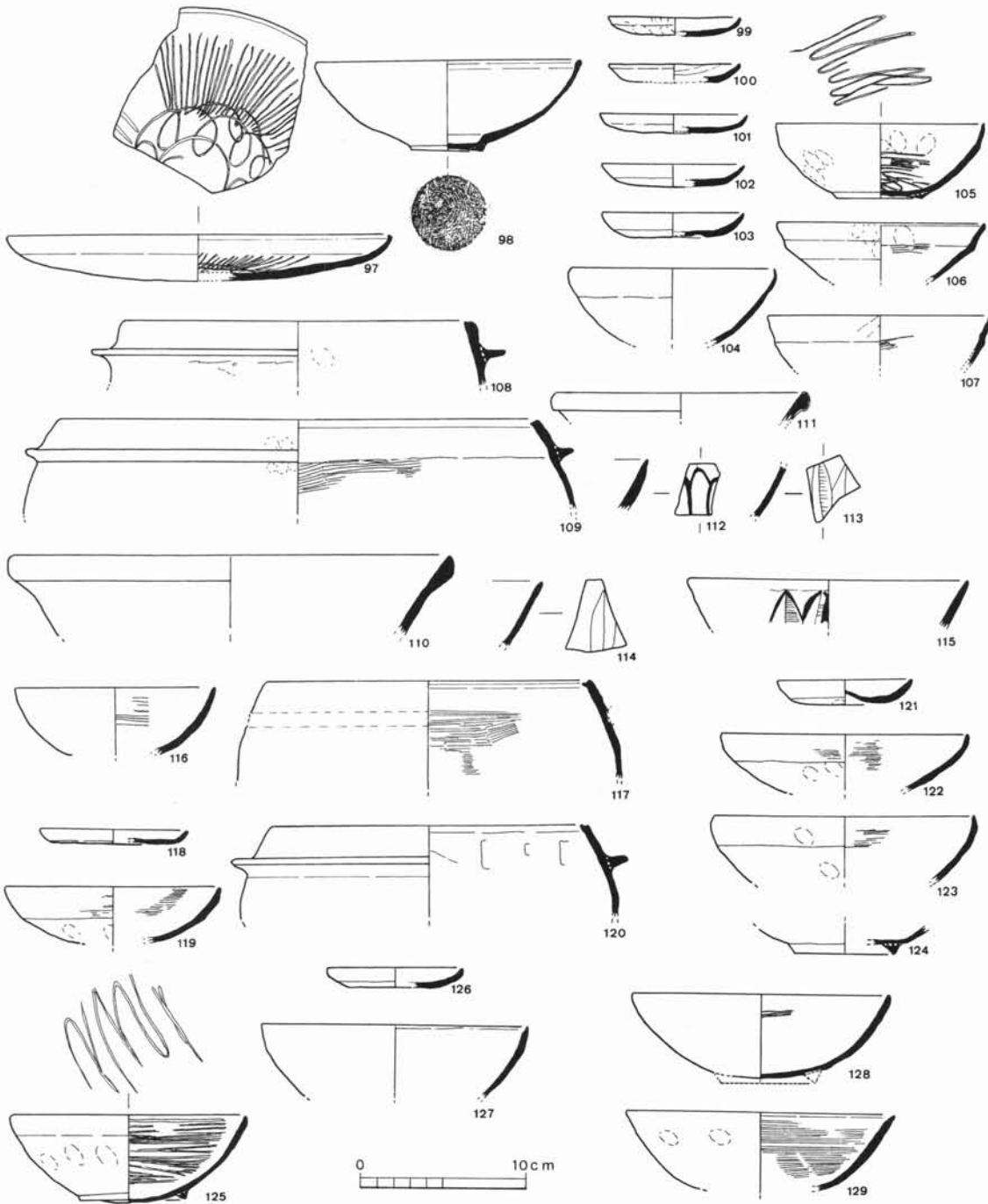
Pit14出土遺物(第122図98) 底部糸切りの須恵器椀である。石井編年の第III期に属し、10世紀第3四半期のも



第121図 出土遺物実測図(4)

のである。

不明遺構 S X 01 出土遺物(第122図99~115) 土師皿(99~103)、瓦器椀(104~107)、土師質の羽釜(108)、瓦質の羽釜(109)、東播系須恵器捏鉢(110)、白磁椀(111)、青磁椀(112~115)などがある。このほかに、取り上げ時に崩壊したため実測できなかった刀子片がある。床面から出土した瓦器椀105は見込みにジグザグの暗文を施し、内面の暗文の状況や、高台の形状から13世紀前半の時期が与えられる。龍泉窯系青磁には椀Ⅰ(114・115)、椀Ⅲ(112・113)があり、13世紀の中でも時期幅が見られる。



第122図 出土遺物実測図(5)

土坑S K 05出土遺物(第122図116・117) 図示したのは瓦器椀と瓦質の羽釜である。13世紀前半代のものであろう。

土坑S K 08出土遺物(第122図118～120) 土師皿(118)、瓦器椀(119)、瓦質の羽釜(120)を図化した。瓦器椀がやや浅くなっていることなどから13世紀後半であらう。

土坑S K 11出土遺物(第122図125) 完形品で、土坑底から口縁を下に向けて出土した。見込みにジグザグの暗文を施す瓦器椀で、12世紀第3四半期頃のものである。

土坑S K 15出土遺物(第122図121～124) 土師皿(121)、瓦器椀(122～124)を 図示した。12世紀後半～13世紀前半までやや時期幅のある遺物が出土している。

Pit06出土遺物(第122図128) 不明遺構S X 01の北に位置する柱穴内で口縁を上に向けて出土した瓦器椀である。高台を欠くほかは完形である。器形や調整から12世紀後半のものである。

Pit10出土遺物(第122図129) 本遺跡で出土した瓦器の中では最も古いものである。内面の暗文が非常に密に施されており、11世紀末～12世紀初頭のものである。

Pit13出土遺物(第122図126) 土坑S K 11を切る柱穴から出土した土師皿である。13世紀代のものである。

4. まとめ

今回の発掘調査によって弥生時代後期末から古墳時代前期にかけての集落跡を検出することができた。時期的に野条遺跡に後続し、野条遺跡よりは住居の密度が高いことが指摘できる。また池上遺跡の時期にも短期間集落が営まれていたであろうことが今回遺構に伴わずに出土した弥生時代中期末の土器から推測できる。

中世の集落は平安後期から継続して営まれ、13世紀代に最盛期を迎え、14世紀には廃絶している状況が窺えるが、廃絶の原因は不明である。

(福島孝行)

注1 谷口悌『八木町遺跡地図 町内遺跡詳細分布調査報告書』(八木町文化財調査報告書第3集 八木町教育委員会) 1997

注2 谷口悌『町内遺跡発掘調査概要 野条・室橋・新庄・諸畑遺跡』(八木町文化財調査報告書第5集 八木町教育委員会) 1999

注3 調査補助員：天池佐栄子・井上亮・竹中慎詞・谷秀平・蜂谷友佳子・平井耕平・山口由希子
整理員：柿谷悦子・中川由美子・俣野明子 作業員：麻田あさの・麻田節子・井尻修・西垣久江・羽野博文・松本孝子・松本敏子・松本安治・三髯均・山本千代子(順不同)

注4 大塚昌彦「土屋根をもつ竪穴式住居跡 —焼失家屋の語るもの—」(奈良国立文化財研究所シンポジウム報告『先史日本の住居とその周辺』 浅川滋男編 同成社) 1998

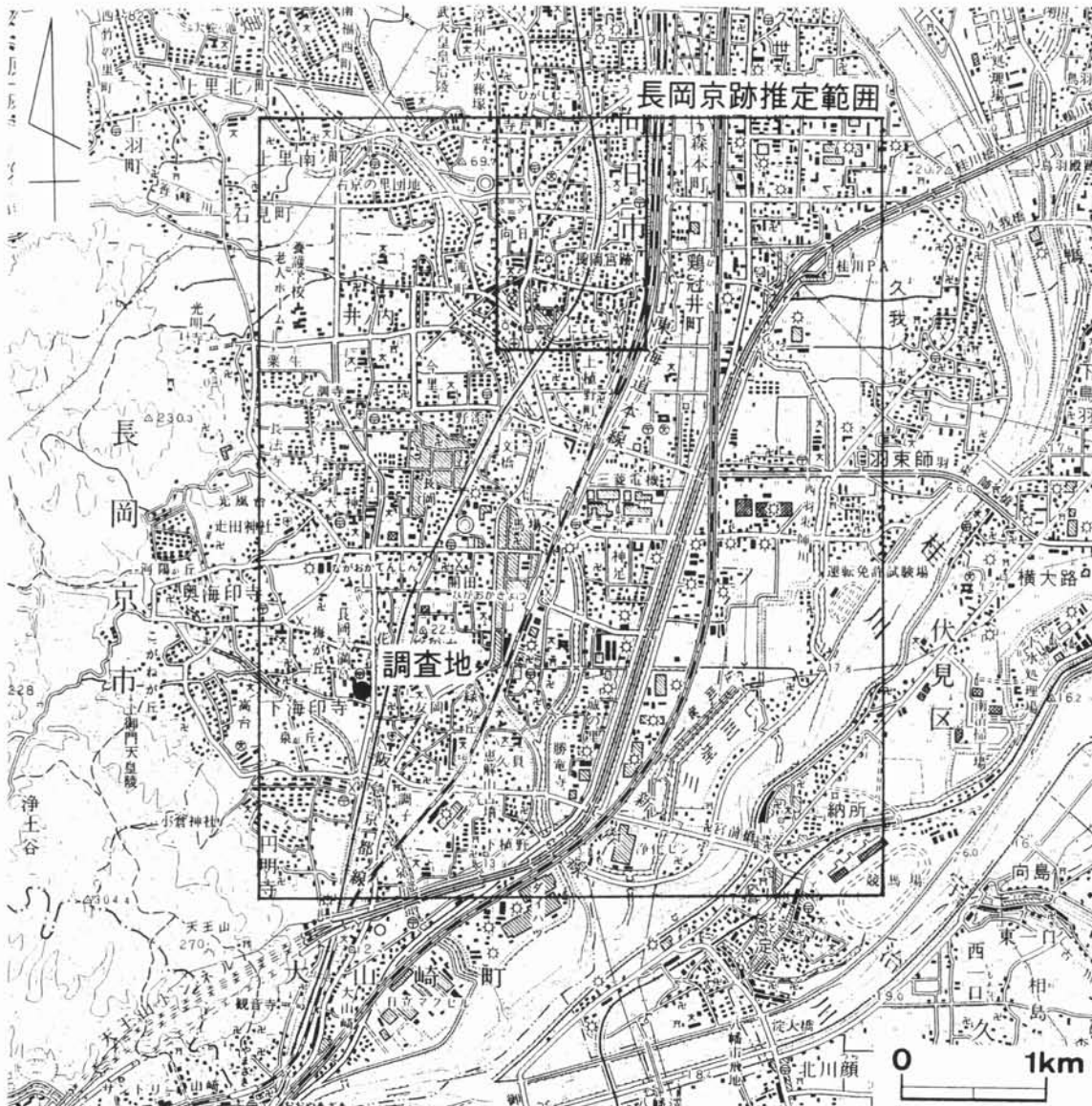
注5 福島孝行「弥生後期の南丹波地域の土器変遷」(『京都府遺跡調査概報』第97冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001

ながおかきょう
 4. 長岡京跡右京第829次(7ANNM-5地区)・
 ともおか
 友岡遺跡発掘調査概要

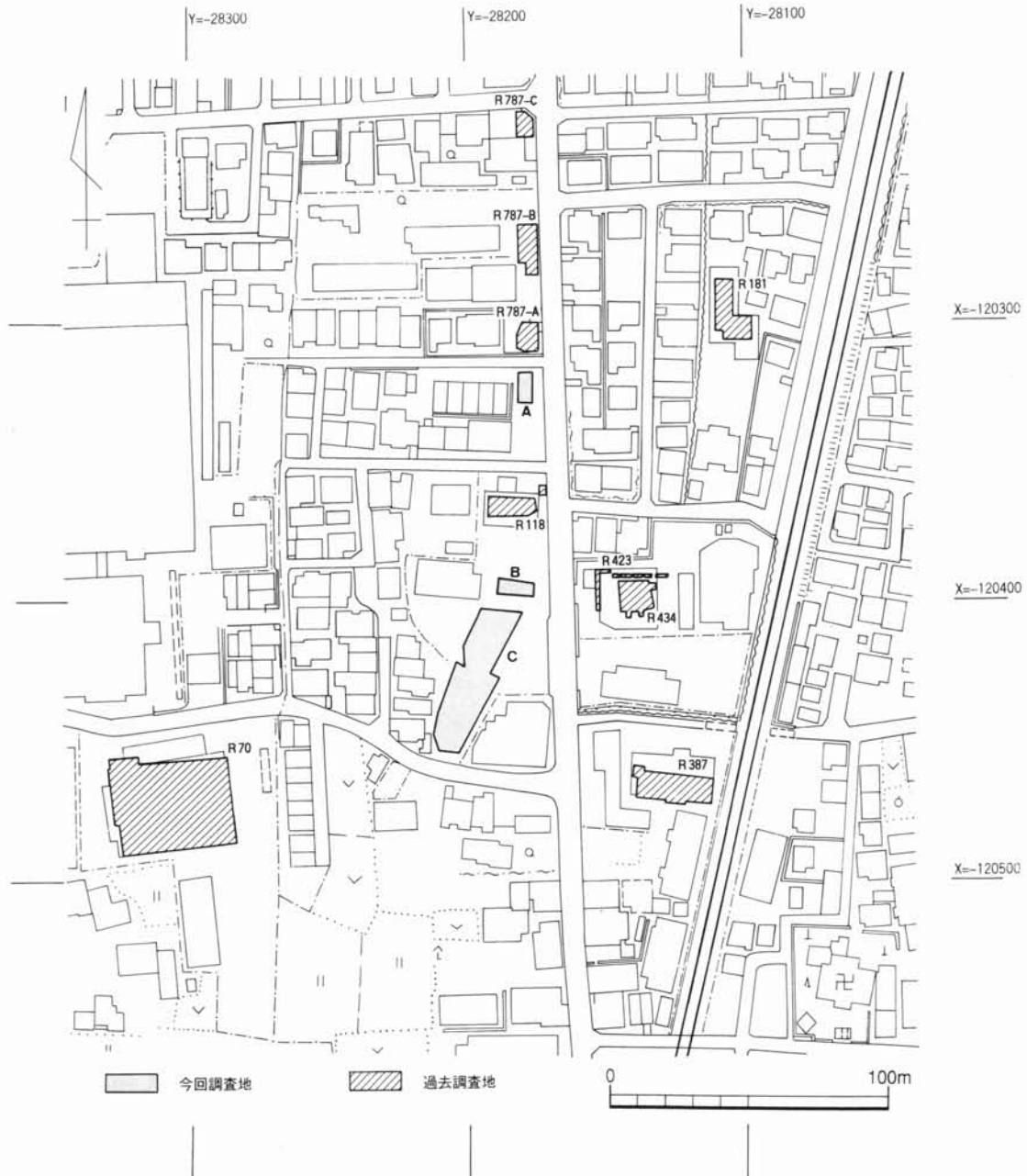
1. はじめに

今回の発掘調査は、府道石見下海印寺重要幹線街路事業および緊急街路整備事業に伴う事前調査であり、京都府乙訓土木事務所の依頼を受け、当調査研究センターが実施した。調査対象地は、京都府長岡京市友岡小字西山16-1ほかに所在する。

当地は山城盆地の西端部、桂川の支流である小泉川左岸に形成された低位段丘上に位置し、標



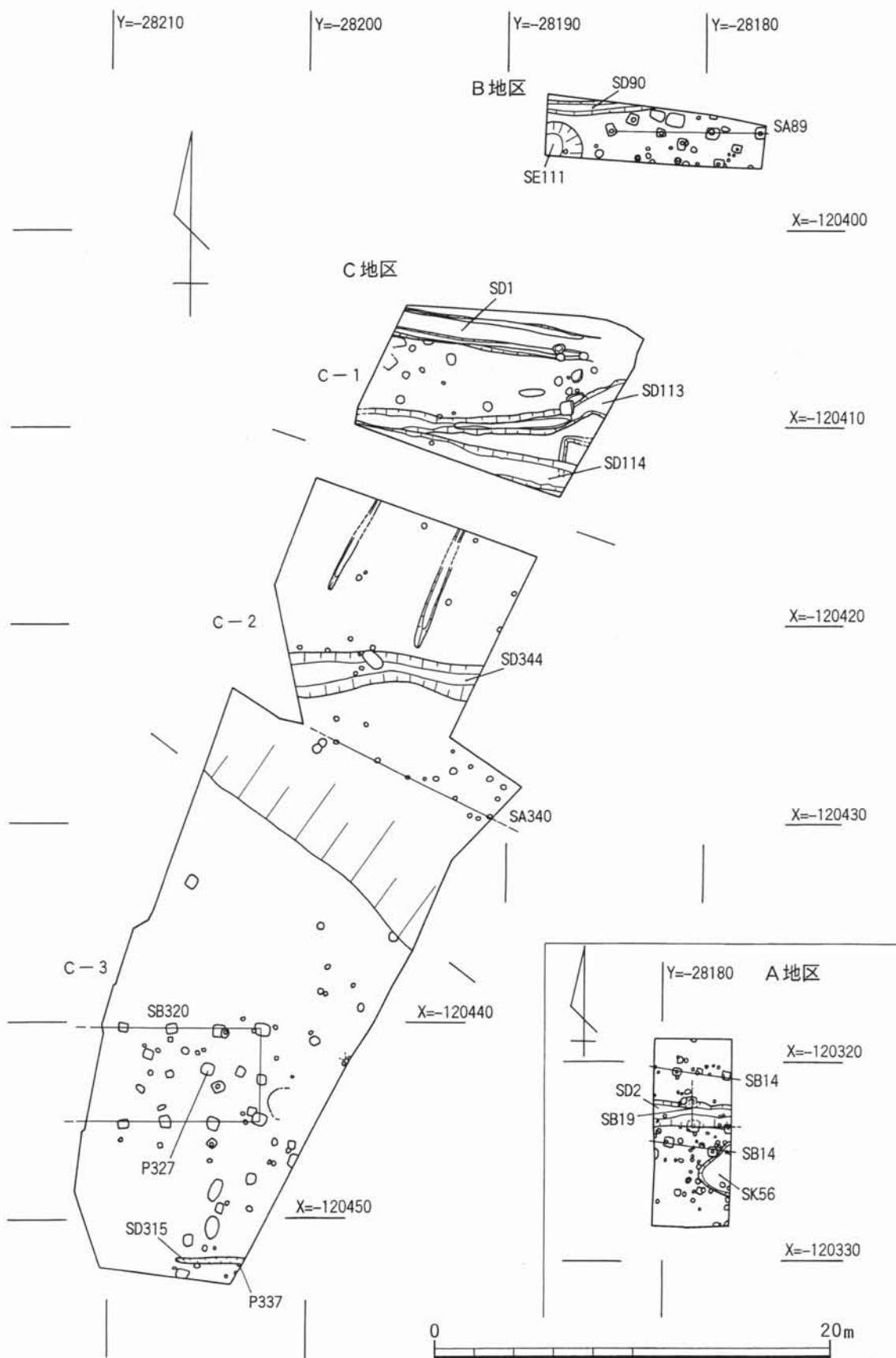
第123図 調査地位置図(国土地理院1/50,000京都西南部)



第124図 今回調査地および周辺調査地位置図

高は約30m付近にあたる。調査対象地は、長岡京跡の条坊復原によると、長岡京右京七条三坊十町(新条坊呼称では、長岡京右京七条三坊十二町)にあたる。調査地の東側を南北にのびる府道(大山崎大枝線)は、長岡京の西三坊坊間小路の痕跡ではないかと推定されている。また、当地は縄文時代から中世の集落跡である、友岡遺跡の西北端部にもあたっている。

近隣地では、長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センター・当調査研究センターにより、数次の発掘調査が実施されている。右京第118次調査では、中世の柱穴群や土坑が検出された。右京第387次調査では、平安時代前期の掘立柱建物跡2棟、中世の土坑・柵が検出されている。緑釉火舎の出土もあり、位の高い人物が居住していたか、寺院関連の施設と推測されている。右京第423・434次調査では、遺構面形成以前から存在した東西方向の開析谷が確認された。



第125図 遺構平面図

谷部の遺構面では中世の耕作溝や柵を検出するとともに、古墳時代から中世の遺物の出土をみている。右京第787次調査では、平安時代前期の掘立柱建物跡5棟、柵・土坑が検出されている。

周辺地域の遺跡として、当地の西隣には旧石器時代から中世の集落遺跡である伊賀寺遺跡がある。東約1kmには5世紀中葉の乙訓地域の盟主墳である恵解山古墳が存在する。南約200mには鞍岡廃寺(飛鳥～平安時代)など、多くの古代遺跡が周知されている。

現地の発掘調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長石井清司、同主任調査員竹原一彦、同調査員高野陽子が担当した。発掘調査は、平成16年7月26日～平成17年1月21日までの期間で実施した。調査面積は、900m²である。

今回の調査対象地は南北に長く、横断する道路や水路の関係から、調査地は大きく3か所(A・B・C地区)に分かれた。このうち南のC地区は、民間駐車場との関係などから、さらに細分割(C-1～3地区)し、時期を調整しながら調査を実施した^(注)。

調査にあたっては、京都府教育委員会をはじめ、長岡京市教育委員会・(財)長岡京市埋蔵文化財センターなどの関係諸機関、地元自治会や地元の方々の協力を得た。

なお、発掘調査に係る経費は、全額、京都府乙訓土木事務所が負担した。

2. 調査概要

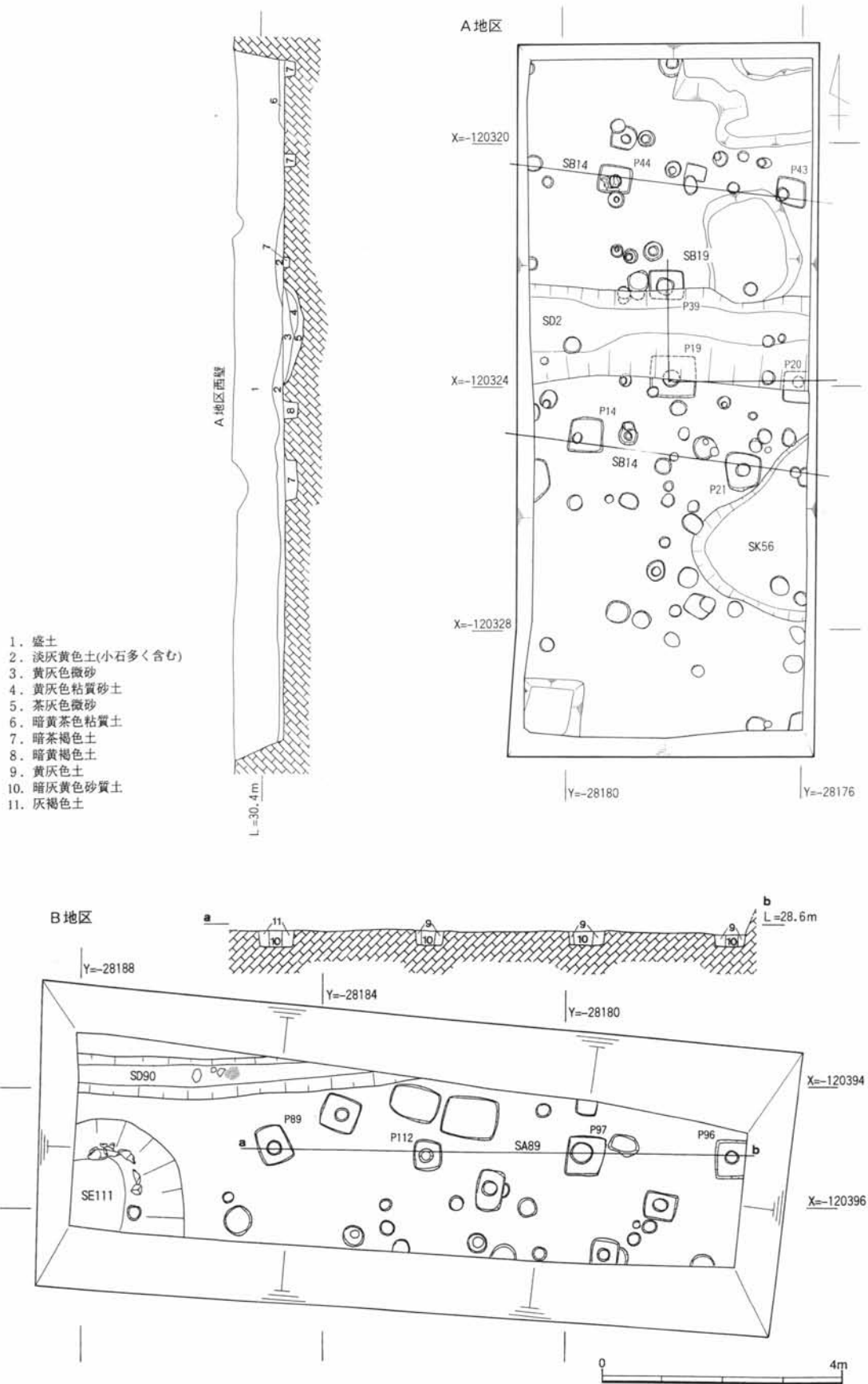
(1) 検出遺構

1) A地区

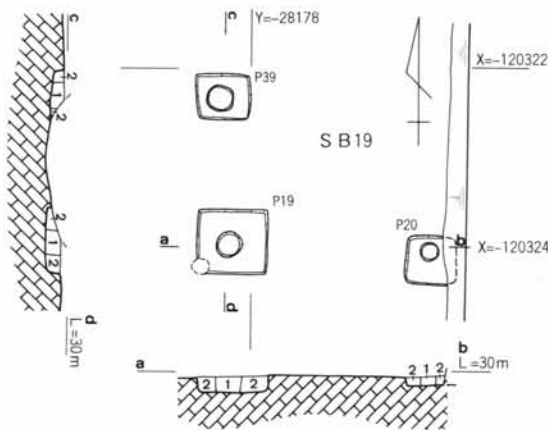
調査対象地の北端に設けた調査地である。府道の拡幅部にあたることから、南北約12m、東西5mの細長いトレンチである。今回調査のA地区は、前年度に当調査研究センターが実施した右京第787次調査A地区から、市道を挟んで南に約15m離れた位置関係にある。右京第787次-A地区では、掘立柱建物跡3棟(平安時代前期)や多数の柱穴が検出されている。今回の調査では、地表下約1.2mまで宅地開発による攪乱を受けていることが判明し、攪乱層の直下、標高28.8m付近で地山面(黄茶褐色礫混じり土)を検出した。この地山面で人力による精査を実施したところ、掘立柱建物跡2棟・溝・土坑、多数の柱穴の検出をみた。柱穴には掘形が方形と円形の2種に分かれる。また、総じて方形掘形の柱穴が規模的に大型の傾向を示す。円形掘形の柱穴は直径が0.2～0.3mを測るものが多数を占める。

掘立柱建物跡S B14 調査地中央から検出した東西棟の建物跡である。建物の方位は、北から東へ約8°振る。検出範囲は建物中央部とみられ、東西桁行1間(約2.7m)以上×南北梁間2間(約4.2m)の規模を測る。建物跡の東西辺は調査地外となることから、建物規模は不明である。2本の並行する柵列の可能性もあるが、南北の柱位置が東西方向に対し直交関係にある状況から、掘立柱建物跡と判断した。

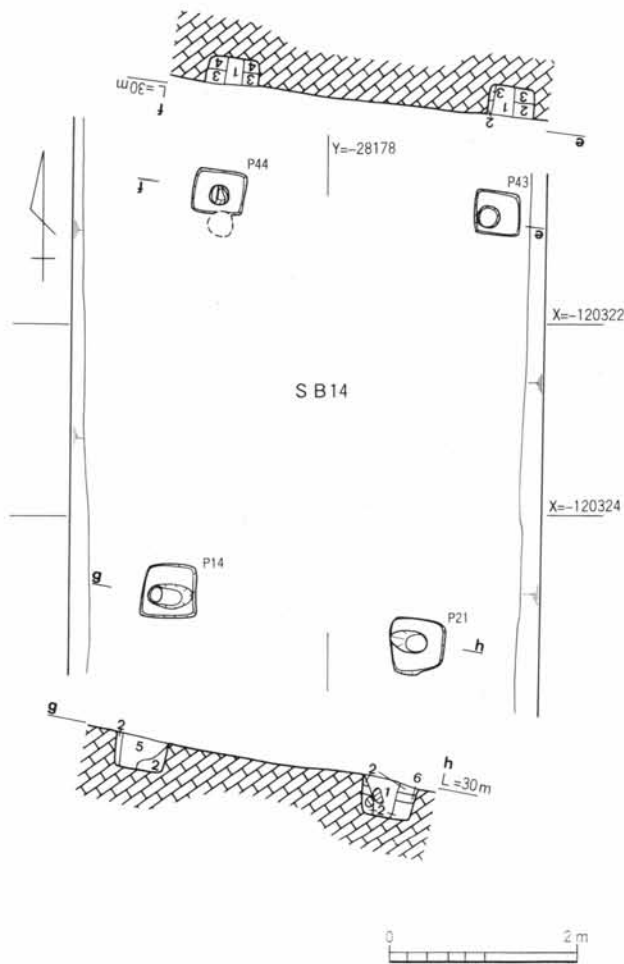
柱穴掘形は方形であり、一辺約0.6m、深さ約0.3mの規模を測る。柱穴掘形の精査を行ったところ、柱穴P14・21で柱抜き取り穴を確認した。抜き取り穴の観察からP14では東方向、P21は西方向へ柱が倒された状況が確認できた。柱穴P43・44では、ほぼ整円形の柱痕を検出した。柱



第126図 A・B地区遺構図



1. 茶褐色土
2. 暗茶褐色土
3. 黄茶褐色土
4. 暗灰褐色土
5. 黒灰色微砂
6. 淡灰色土



第127図 掘立柱建物跡 S B 14・19実測図

痕の直径は0.4mを測る。柱穴P44では、柱痕検出面上から加工痕を残す石材(第135図54、図版第52-(2))が出土した。また、柱穴P43掘形埋土から丸瓦の出土をみている。そのほか、柱穴に伴う遺物として土師器・須恵器の破片がみられたが、多くが細片である。瓦器は含まれていない。

掘立柱建物跡 S B 19 調査地中央部、掘立柱建物跡 S B 14と重複して検出した掘立柱建物跡である。建物跡の軸線はほぼ座標軸に合致する。検出範囲は建物の南西隅と判断するが、建物の方向性は不明である。検出範囲での建物規模は、東西1間(2.1m)以上×南北1間(1.5m)以上を測る。柱穴P39の北側延長部で精査を実施したが、新たな柱穴は検出できなかった。柱穴P19から柱穴P39にかけて、掘形底面レベルが上がる状況から、柱穴P39以北の柱穴は後世の削平で消滅したと判断する。少量ながら、各柱穴の掘形内から、瓦器椀・土師器・須恵器・緑釉椀の破片が出土している。

土坑 S K 56 調査地南東付近から検出した土坑である。部分検出であり、土坑東部は調査地外に含まれる。検出範囲にみる土坑の形状から、楕円形を呈する土坑と推測される。調査地東壁では全長2.6m、深さ0.4mを測る。土坑底は平坦ではなく、なだらかな起伏が認められる。壁の立ち上がりは、南部側がゆるやかな傾斜をもって立ち上がる。土坑の中央

部から北側にかけて、拳大から人頭大の川原石が多量に存在した。川原石は、土坑底に敷き詰めたものではなく、乱雑な出土状況を示す。土坑埋土中から土師器・須恵器・瓦器の出土をみたほか、一部に薄い炭・灰層がみられた。土坑は、壁面や底面に被熱痕跡が認められず、骨片の出土もみられないが、火葬墓の可能性が高い。

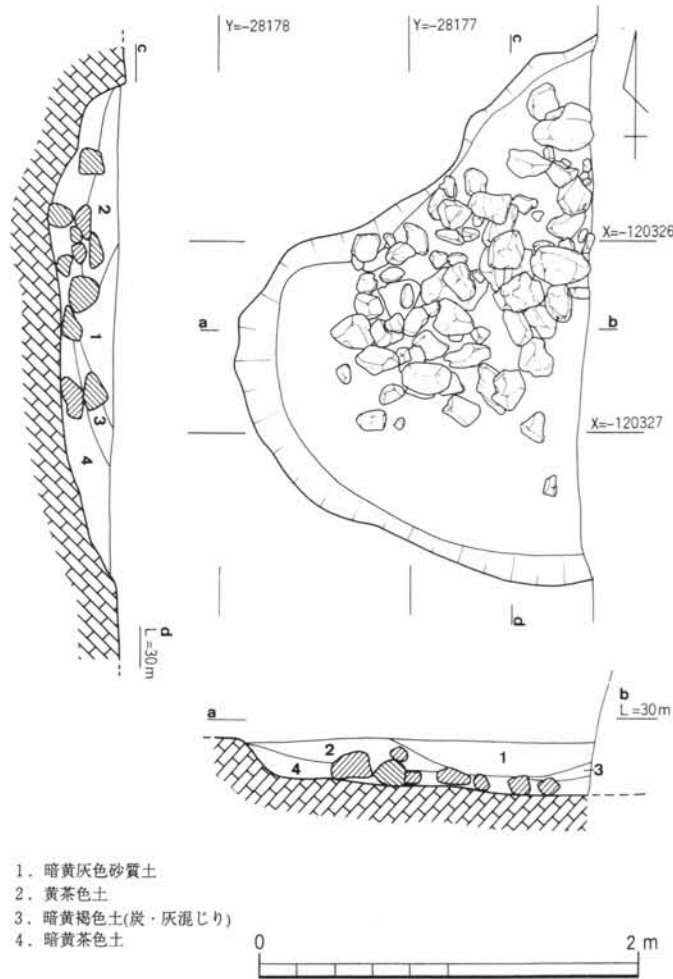
溝SD2 調査地中央を東西に横断する素掘り溝である。軸線は座標軸に合致する。幅1.7m(西壁面)、深さ0.3mで、浅い皿状の断面形を呈する。掘立柱建物跡SB19の柱穴に切り勝つ。埋土中から瓦器碗の破片の出土をみた。

2) B地区

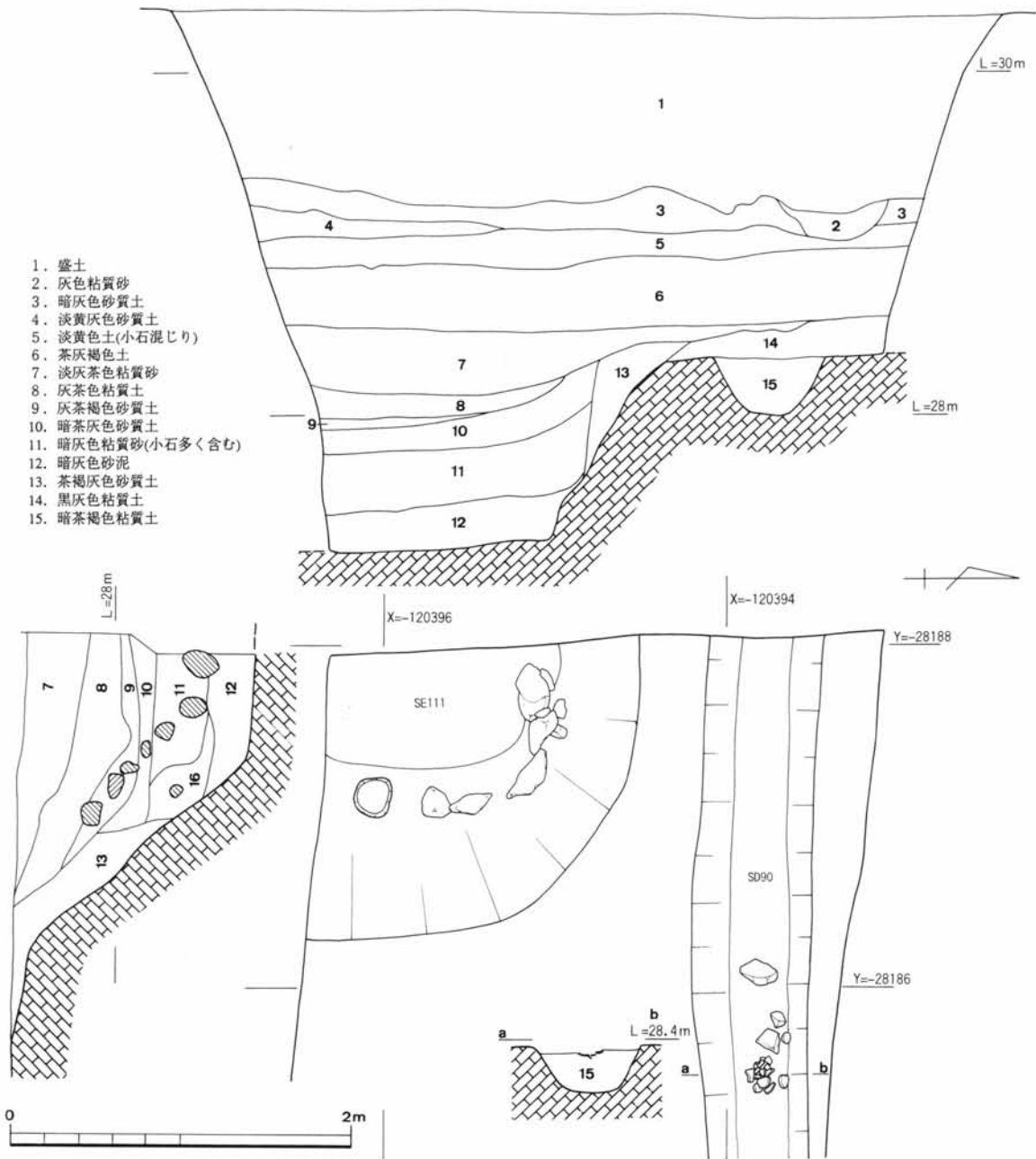
調査地は府道の拡幅部にあたり、水路と住宅通路に挟まれた敷地の状況から、南北5m、東西12mの細長いトレンチとなった。地表下約1.1mまで厚い盛土層がみられ、地山面(茶灰色粘質土層)はさらに0.9m下がった標高28.3m付近に位置する。北隣で実施された右京第118次調査の地山面(高所側)との比高差は約1mを測り、右京第423・434次調査で検出された開析谷部に続く旧地形が当地でも確認できた。地山面から柵・井戸・溝・柱穴を検出した。

柵SA89 東西にのびる柱穴列であり、ほぼ座標軸に合致している。検出全長は3間分約7.5mを測る。柵列は柱穴P89からさらに西にのびる状況にはない。狭い調査地範囲内でもあり、東西棟の掘立柱建物跡の可能性もある遺構である。柱穴掘形はやや丸みをもった方形を呈し、一辺は0.4~0.6mの規模を測る。柱穴内から僅かではあるが、土器の破片が出土した。遺物には、土師器・須恵器に混じって、黒色土器A・白磁の小破片が含まれていた。

井戸SE111 調査地南西隅から検出した井戸である。検出範囲は、円形掘形の北東部約1/4である。調査地壁面の観察から、井戸掘形は地山上に堆積した黒灰色粘質土層(第14層)から掘り込まれたことが確認できた。掘形のカーブから、掘形の直径は約3m程度と推定される。井戸底面は掘形上端から1.3m下がり、現在も強い湧水がみられた。井戸底の周囲には、据えられた状態の大型川原石が僅かに存在し、埋土内にも多数の石が含まれる状況から、元々の井戸は石組みと



第128図 土坑SK56実測図

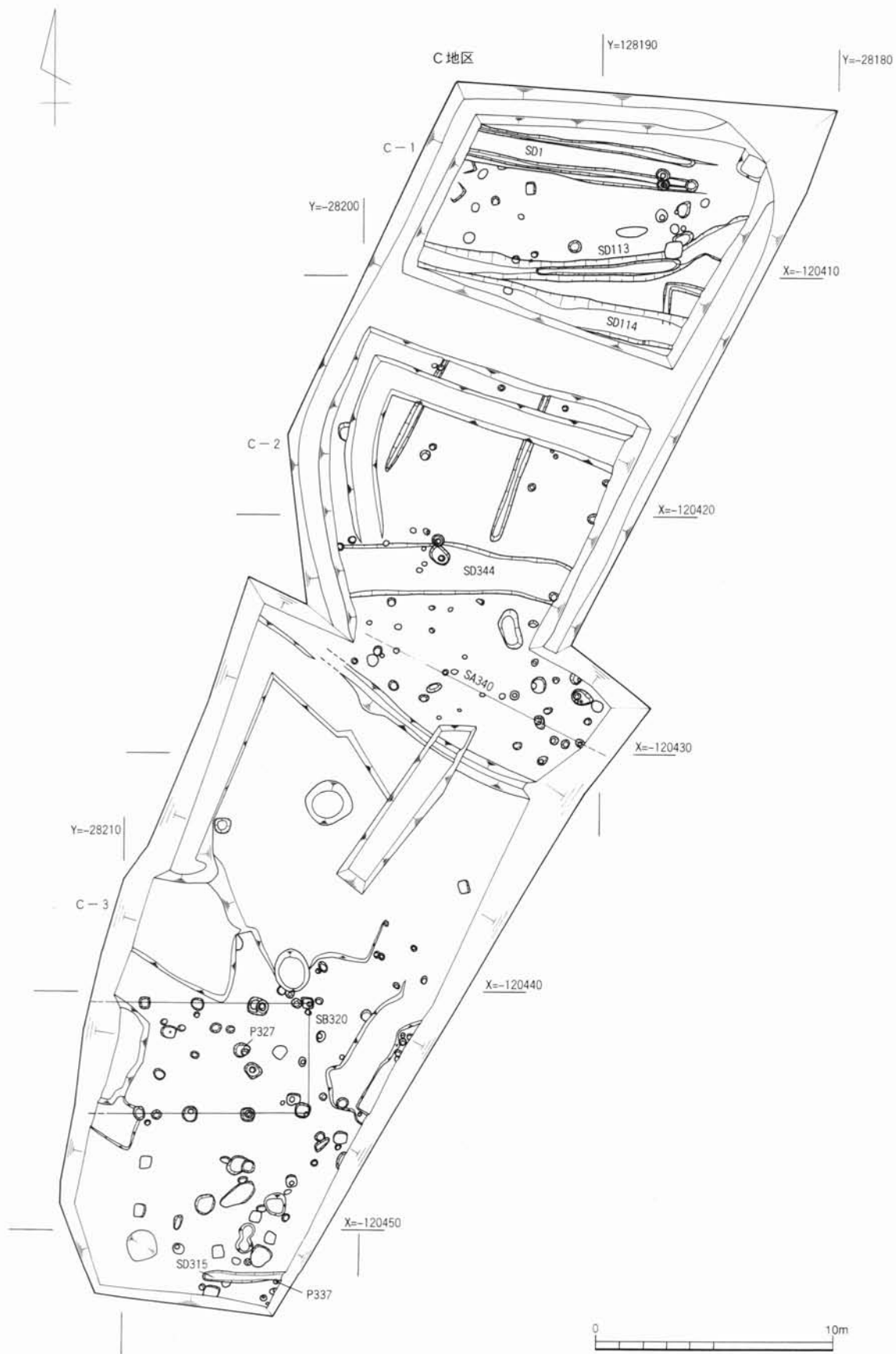


考えられる。井戸内の埋土中から、完形の瓦器椀、瓦質三足付羽釜やミニチュア三足付羽釜・土師皿など、良好な土器の出土をみた。

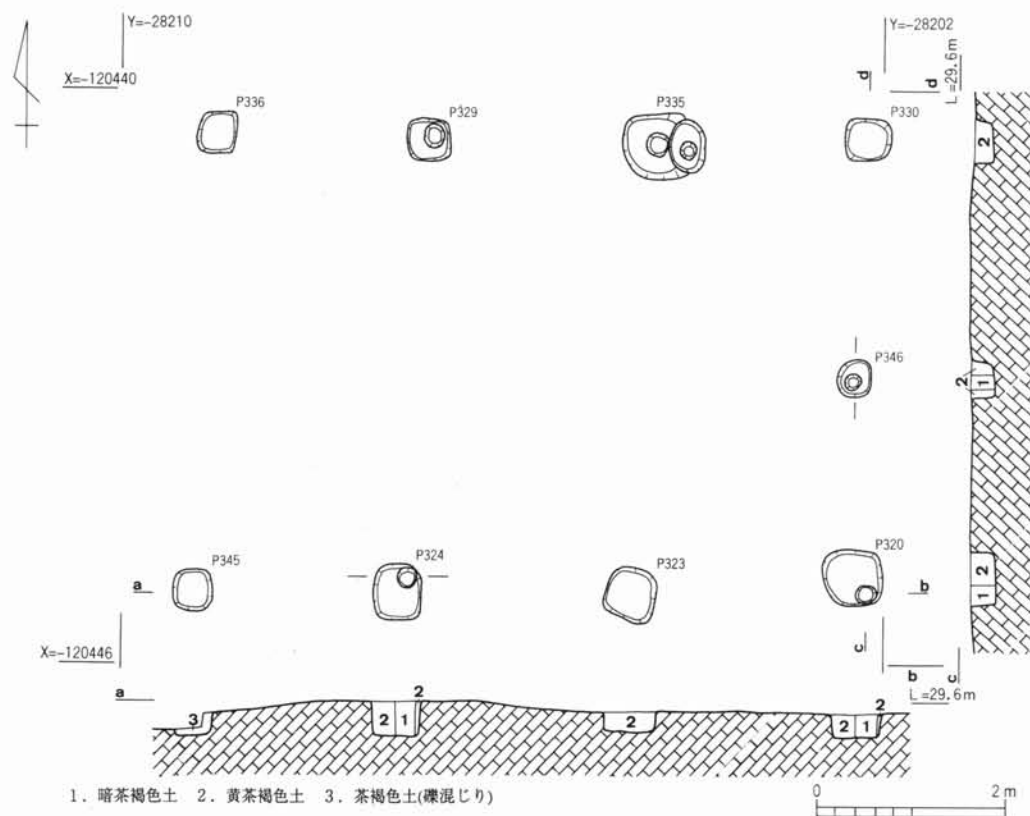
溝 S D90 井戸の北側で検出した東西方向の素掘り溝である。溝の主軸は、ほぼ座標軸に合致する。溝幅0.7m、検出全長は5.6mを測る。溝底から大きく遊離した埋土中から須恵器杯蓋・土師器甕の出土をみた。

3) C地区

府道が大きく西に迂回し、新たな道路が施設される地点に設定した調査地である。調査地は全長約55m、幅11~18mである。調査は3期に分けて実施した。C-1・2地区は、ほぼB地区から続く開析谷部である。C-3地区は段丘部にあたる。C-1地区を中心として溝群と柵、C-



第130図 C地区遺構平面図



3 地区では掘立柱建物跡・溝のほか多くの柱穴を検出した。

掘立柱建物跡 S B 320 C-3 地区中央で検出した、東西棟の掘立柱建物跡である。建物跡の軸線はほぼ座標に合致する。建物跡は、東西3間(7.2m)以上×南北2間(4.7m)の規模を測る。建物跡の西部は調査地外に位置することから、全体規模は不明である。柱穴掘形はやや丸みの強い方形掘形で、一辺0.4~0.7mの規模を測る。柱穴内から、土師器・須恵器・黒色土器の小破片が出土している。

柵 S A 340 C-2 地区南部、谷部南端の傾斜面で検出した柵列であり、等高線にほぼ沿って設けられている。柱穴は直径約0.2~0.3m、深さは平均0.2mである。柱間隔は、1.8~2.5mを測る。柱穴埋土内から瓦器碗の破片が出土した。

溝 S D 315 C-3 地区南端で検出した、東西方向の素掘り溝である。中軸線はほぼ座標に合致する。検出面での溝幅0.4m、検出全長は3.5mを測る。溝の西端は、溝底がゆるやかに西方に向かって上がる状況から、検出範囲以西の溝は削平を受け消滅したとみられる。埋土は暗茶褐色土であり、長岡京期の土器が出土した。

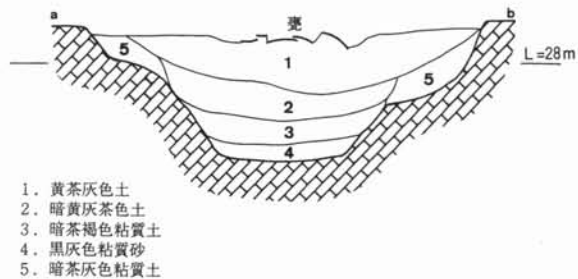
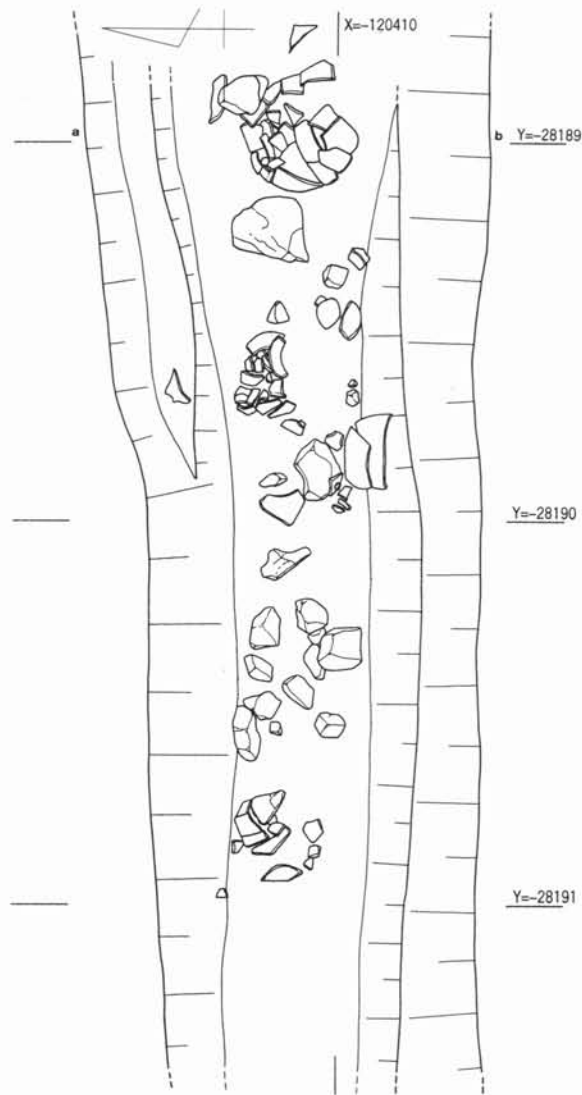
柱穴 P 327 C-3 地区中央部、掘立柱建物跡 S B 320の内側から検出した柱穴跡である。この柱穴に関連する建物跡は復原できない。掘形はほぼ方形で、一辺0.6m、深さ0.1mを測る。明確な柱痕は確認できないが、掘形の中央部付近の埋土中から、完形品を含む土師器皿4点(第134図26~29)が出土した。柱穴の掘削中に土器片が出土したが、最下部(底面上)の皿1点(第134図27、図版第59-(1))を残し、多くの皿は原位置を動いていた。皿は、柱抜き取り穴に重ねて納められ

ていた可能性が高く、地鎮に関連した祭祀遺物と判断される。

溝SD1 C-1地区の谷部で検出した素掘り溝である。溝の主軸は東から南に約8°振る。溝幅約1.5m、深さ約0.2mの規模を測る。横断面は浅い皿状を呈し、溝底は東から西にゆるやかに下がる。溝完掘後の精査で、溝SD1の下部から、並行する小規模な2本の溝を検出した。溝SD1の両肩部直下にあつて、ともに溝幅0.25m、深さ約0.2mを測る。溝内に設けた畦断面の観察から、2本の溝は溝SD1に先行する溝であることが判明した。この2本の溝の心々間距離は約1.2mを測る。溝SD1の出土遺物として、土師器・須恵器・瓦器に混じって打製石鏃(第135図55)が出土した。

溝SD113 溝SD1の南で検出した素掘り溝である。溝の中央より以西部分は座標軸にはほぼ合致するが、東部側は北に大きく振っている。溝は幅0.9~1.1m、深さ約0.2mで、横断面形が浅い皿状を呈する。溝の中央付近は、土砂の堆積が進んだ第5層を切り込んで、全長約6.0m、幅約0.6m、深さ0.15mの範囲で、直線的に一段深く下がる。この深い溝状部分には粘質土が堆積するが、無遺物である。溝SD113がほぼ埋没した第1層の上部から、須恵器甕が出土した。甕は、ほぼ1個体分が破片化し、長さ約2.3mの範囲内で、大きく3か所に分かれて出土した。また、同範囲内には拳大から人頭大の石が存在した。甕は、人為的に破碎・遺棄された出土状況を示すことから、祭祀に関連した遺物と考えられる。

溝SD114 C-1地区南端、溝SD113の南に位置する素掘り溝である。溝の主軸は東から南に約8°振る。溝幅1.4m、深さ0.2mの規模を測る。溝SD114は、調査地西端部で溝SD113を



第132図 溝SD113須恵器甕出土状況図

切っている。溝の横断面形は、浅い皿状を呈する。埋土内から飛鳥時代の須恵器杯A(第134図49)の出土をみたが、共伴遺物は僅かで、時代の判かる良好な土器はみられない。溝SD114は、規模および主軸の方向が揃う溝SD1と同時期の可能性が高いとみており、須恵器杯Aは混入品の可能性が高いと判断する。溝SD1と溝SD114の溝心々間の距離は、約6.5mを測る。

溝SD344 C-2地区谷斜面の下端付近から検出した素掘り溝である。溝の主軸はほぼ座標に合致するが、溝東端付近はやや南に振る状況にある。溝幅は1.5~2.3m、深さ0.1mの規模を測る。溝の横断面形は、浅い皿状を呈する。溝埋土は無遺物であり、時期を確定できない。

その他の遺構 C-1~2地区北部(谷部)では、僅かであるが柱穴の検出をみた。遺構の性格に関して不明な点が多い。C-2地区谷部では幅の狭い2本の南北溝が存在した。溝SD344と溝SD114に直交することもあり、耕作関連の溝と考えられる。

C-3地区では、掘立柱建物跡SB320周辺部で多数の柱穴を検出した。建物跡の復原には至らないが、掘立柱建物跡SB320の建て替えなど、さらに数棟の建物跡が存在した可能性がある。

3. 出土遺物(第133~135図)

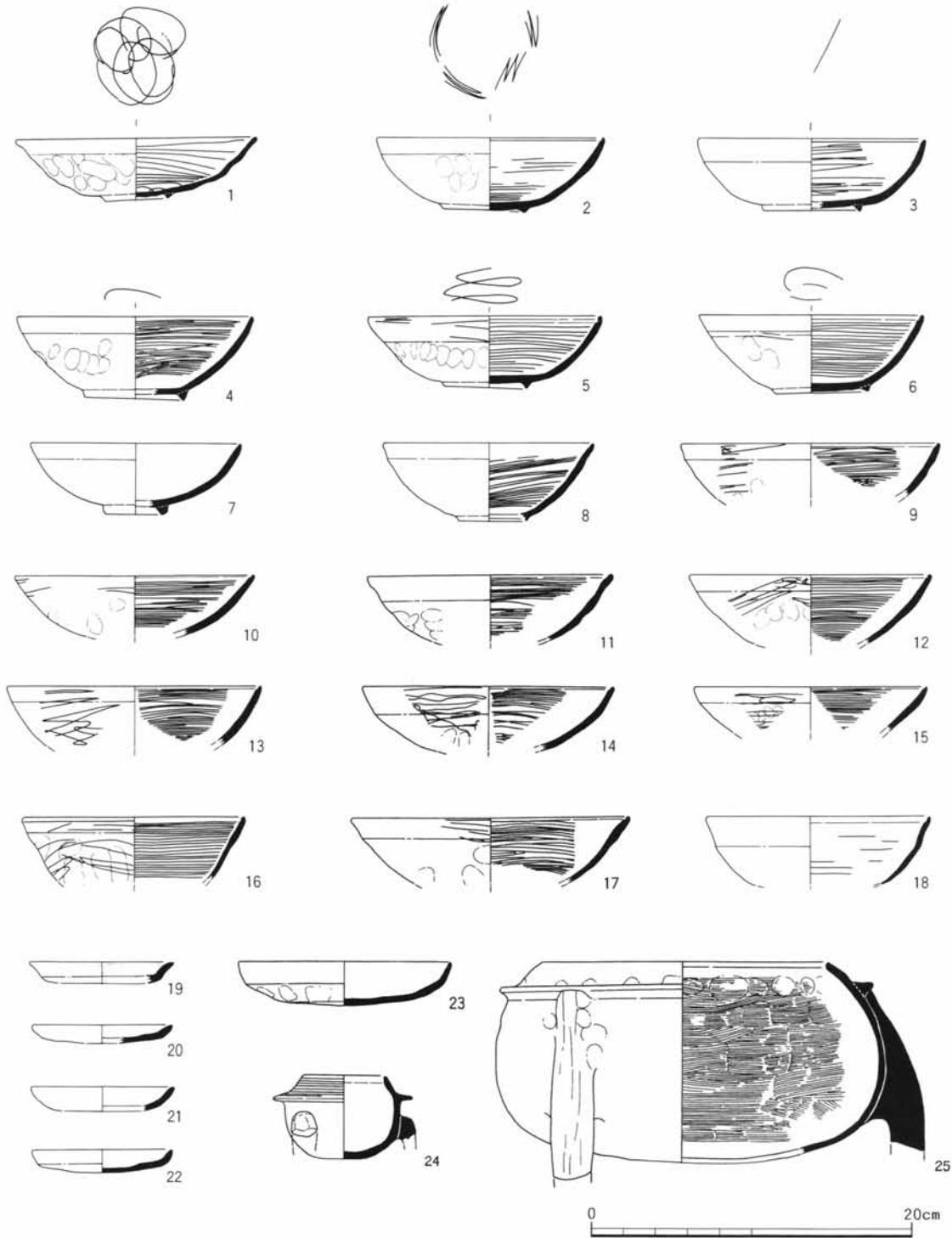
今回の調査では、整理コンテナ8箱分の遺物の出土をみた。遺物の多くは、井戸や土坑・溝に伴うものである。柱穴や包含層出土遺物は総体的に少なく、土器の多くは細片である。遺物の大多数は中世の瓦器や土師器であり、飛鳥時代・長岡京期~平安時代の遺物は少ない。以下、主要な出土遺物について述べる。

1~25は、井戸SE111の出土である。土器は12世紀中葉~13世紀の年代観を示し、その中心は13世紀前半にある。1~18は樟葉型の瓦器椀である。およそ口径は13~15cm、器高は3.5~5.0cmの範囲にある。多くの瓦器椀には、口縁端部内面に沈線が認められる。体部外面には指頭圧痕を顕著に残し、口縁部はヨコナデする。口径に対して器高の高い4~6は、底面の三角形貼り付け高台がシャープで、内面の暗文も密に施される。19は瓦器皿である。口径9cm、器高1.3cmを測る。口縁部は、外上方へ外反気味に立ち上がる。20~22は手捏ねの土師器皿である。口径は8.8cm、器高は11.5cmを測る。23は、土師器の大皿である。口径は13.3cm、器高2.7cmを測る。外底面には指頭圧痕を顕著に残す。口縁部外面と内面はヨコナデする。24はミニチュアの三足付羽釜であり、土師質焼成である。口径は5.1cm、釜部の器高は5.3cmを測る。足は3本とも失われているが、上端の接合部が辛うじて残っている。胴の張った釜の外面には、口縁端部から鐶上面にかけて、幅・深さとも1mm程度の沈線(9本)をめぐらす。ミニチュアではあるが実用品で、外表面全体には煤が付着し、釜の内面に焦げ痕を残す。25は瓦質の三足付羽釜である。釜部の口径は16.7cm、器高は12.4cmを測る。体部は丸みが強く、胴が大きく張っている。体部外面上方に、丈の短い鐶が張り付く。三足は、鐶の下面から体部下半にかけて張り付く。体部内面ははいねいにヨコハケする。

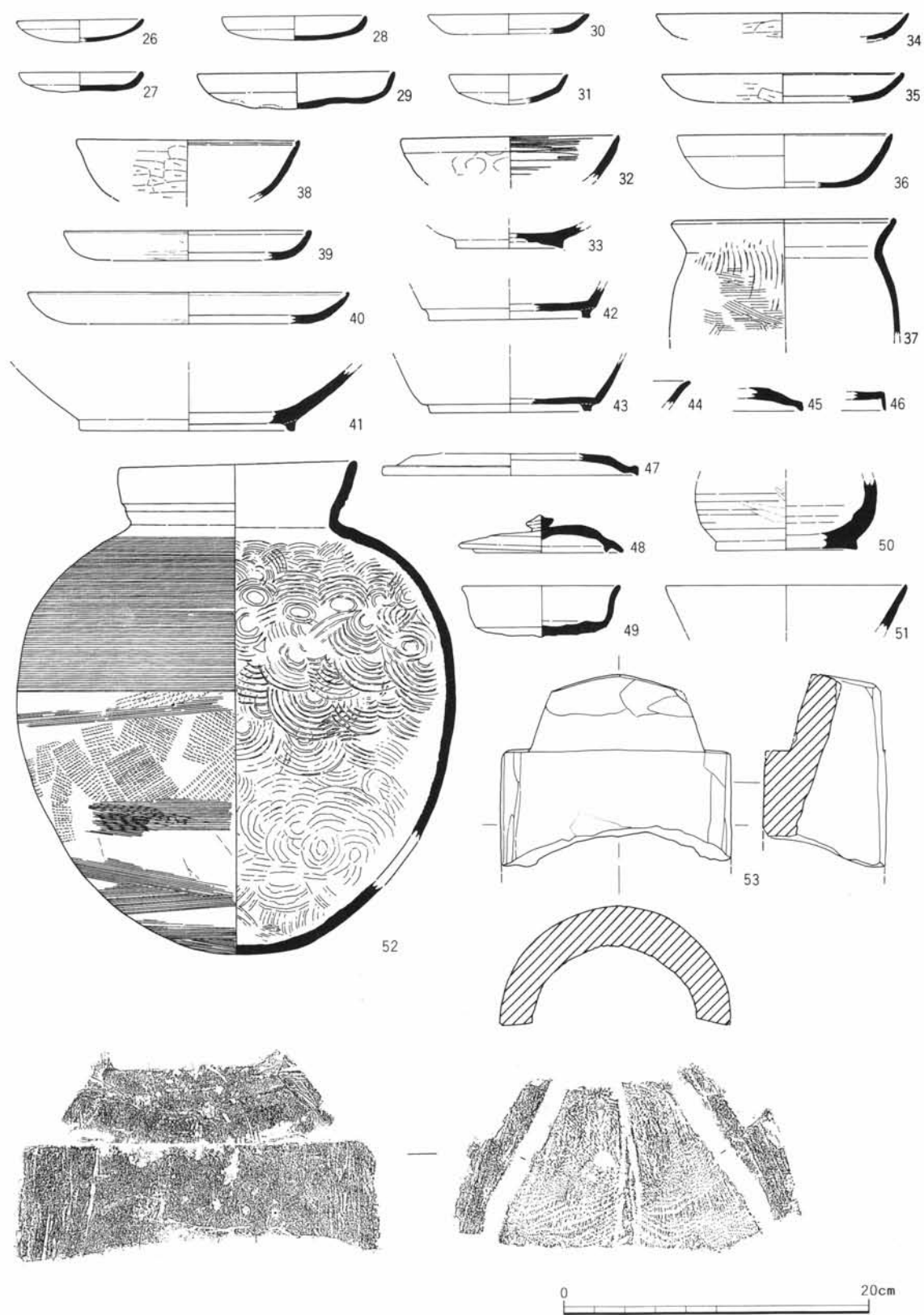
26~29は、柱穴P327出土の土師器皿である。26~28は口径8.4~9.5cm、器高は1.3~1.6cmを測る。29は土師器の大皿である。口径は12.8cm、器高は2.3cmを測る。いずれも13世紀前半の年

代観を示す。

30~33・50は、土坑S K56の出土である。30・31は土師器皿である。30は口径10.6cm、器高1.3cmを測る。31は口径7.7cmを測る。32は瓦器碗である。口径14.3cmを測る。33は無釉陶器の底部である。底部は蛇の目高台を削り出す。50は須恵器壺である。平安時代前期の無釉陶器と壺以外は、13世紀の年代観を示す。



第133図 出土遺物実測図1 (1~25: S E111)

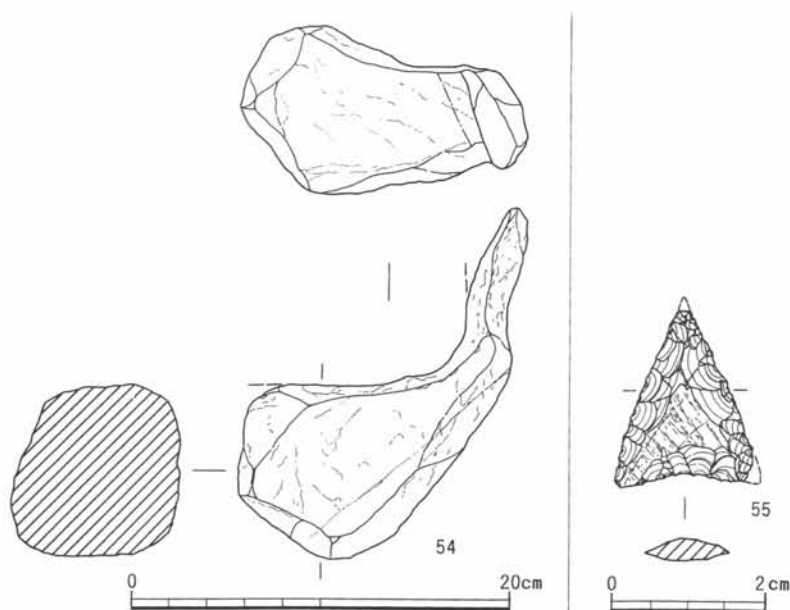


第134図 出土遺物実測図 2

(26~29 : P 327 30~33・50 : S K 56 34・35 : S D 315 36・37・46・51・53 : S B 14
 38~43 : C-3 包含層 44・45 : S A 89 47 : P 337 48 : S D 90 49 : S D 114
 50・53 : S P 43 52 : S D 113)

34・35は、溝SD315出土の土師器皿である。口径は16cm前後、器高は1.8cmを測る。体部外面は口縁端部を除きヘラケズリする。時期は長岡京期である。

36・37・46・51・53は、掘立柱建物跡SB14の柱穴から出土した。36・37・46は柱穴P44から出土した。36は土師器の杯Aであり、口縁端内面に沈線をめぐらす。口径13.9cm、深さ3.4cmを測る。37は土師器



第135図 出土遺物実測図3
(54: SB14P44 55: SD1)

甕である。口縁端部は内側に小さく肥厚して丸く終わる。頸部外面は粗いタテハケ、体部外面は細かいヨコハケである。口径は14.2cmを測る。46は須恵器の蓋である。51・53は、柱穴P43から出土した。51は須恵器杯の口縁部である。口径は15.5cmを測る。53は丸瓦の玉縁部分である。内面には袋綴じ勝り痕を残す布目がみられる。これらの遺物は、平安時代中期頃の年代観を示す。

38~43は、C-3地区包含層(掘立柱建物跡SB320周辺)から出土した、長岡京期の土器である。38は土師器の杯Aである。口縁端部は内側に小さく丸く肥厚する。外面はヘラケズリする。口径は14.4cmを測る。39・40は土師器皿であり、口縁端部は内側に小さく丸く肥厚する。外面はヘラケズリする。39は口径16.1cm、器高1.9cmを測る。40は口径20.9cm、器高2.1cmを測る。41は土師器の杯Bである。42・43は須恵器の杯Bである。

44・45は、柵SA89の柱穴から出土した。44は、柱穴P96出土の白磁碗の口縁部である。45は、柱穴P97出土の須恵器蓋である。2点とも小破片であり、口径・器高は不明である。

47は、溝SD315に切られた、柱穴P337出土の須恵器蓋である。口径は16.7cmを測る。

48は、溝SD90から出土した完形の須恵器杯蓋Bである。内面にかえりを有し、宝珠つまみをもつ。口径は10.8cm、器高は2.2cmを測る。

49は、溝SD114出土の完形の須恵器杯Bである。口径は10.3cm、器高は3.3cmを測る。

52は、溝SD113出土の須恵器甕である。口径は15.4cm、器高は32.1cmを測る。体部は球形に近く、内湾気味の口縁部外面に太い沈線を1条めぐらす。体部外面はタタキの後、カキメ調整する。時期は飛鳥時代である。

54は、掘立柱建物跡SB14の柱穴P44(図版第52-(2))出土の、加工痕跡のある石製品破片である。石材は不明であるが白色を呈し軟質である。また、石材には細く硬質の石脈が不定方向に縦横に走る。石材の上面(図面上)は平坦で、側面はほぼ垂直に立ち上がる。磨滅が進行しており、

工具の加工痕は確認できないが、水平面・垂直面が平坦である状況を加工の痕跡と判断した。本来の形状や用途など、詳細は不明である。

55は、溝SD1から出土したサヌカイト製の打製石鏃であるが、二次堆積遺物である。石鏃は凹基式で、エッジ部分は押圧剥離による細かい調整が施される。

3. まとめ

今回の調査では、飛鳥時代・長岡京期・平安時代中期～鎌倉時代の3時期の遺構を確認した。

飛鳥時代では、溝SD90・113がある。周辺一帯では、長岡京造営以前から、連綿と人々が生活した痕跡が確認されている。特に、長岡京市教育委員会が実施した右京第70次調査では、古墳時代後期～飛鳥時代の竪穴式住居跡群の検出をみている。今回検出の溝SD90・113も、関連遺構のひとつと考えられる。今後、周辺の調査が進めば、友岡遺跡・伊賀寺遺跡の様相がさらに明らかとなるであろう。

長岡京期では、C地区検出の溝SD315と柱穴P337がある。C地区の西方約110m地点の右京第70次調査で検出された東西溝SD7005(幅約0.8m)は、七条坊門小路北側溝の可能性が指摘されている。今回検出した溝SD315は、溝心々間距離で溝SD7005の北35.5m(120尺一小尺)の位置にあたる。溝SD315は、条坊側溝とみるには規模が小さいことから、条坊内の宅地を細分する区画溝の可能性が高い。なお、溝SD315の中軸線は、国土座標のX座標-120452.005である。

平安時代では、掘立柱建物跡と柵を検出している。前期～中期の遺構として、掘立柱建物跡2棟(SB14・320)と柵SA89がある。2棟の建物跡は正方位(SB320)と東に傾く方位(SB14)に分かれる。異なる方位は時期差を示す可能性が高い。近隣での調査例では、平安時代前期の建物跡の方位は、正方位もしくは東に3～4°振る傾向にある。掘立柱建物跡SB14はやや振り角が大きい、斜行方位の一群との共通性をもつものであろう。後期の遺構では、掘立柱建物跡SB19がある。掘立柱建物跡SB14の建て替えとも考えられ、後期段階で建物方位が正方位に戻る状況が確認できる。

鎌倉時代では、井戸や溝、多数の柱穴を検出した。建物の復原はできなかったが、A地区とC-3地区を中心として建物群が存在した可能性が高い。

これまでの周辺部での調査成果をあわせてみていくと、平安～鎌倉時代の遺構検出例が各所で確認されている。今回の調査も同様な傾向を示す成果を得ることができた。長岡京期には希薄であった当地域の人々の生活も、平安～鎌倉時代にピークを迎えた状況が窺える。

(竹原一彦)

注 挿図および本文中の方位は、国土座標(第6座標系)によるものである。また、座標数値は旧国土座標を使用している。

5. ^{むくのき} 棕ノ木遺跡第7次発掘調査概要

1. はじめに

棕ノ木遺跡は、相楽郡精華町大字下狛小字棕ノ木に所在する。木津川左岸の自然堤防上に位置する縄文時代～中世にかけての複合集落遺跡である。平成7年度以来、6次にわたる^(注1)調査によって、縄文時代後期の土坑、弥生時代後期の大溝、古墳時代前期の竪穴式住居跡、後期古墳、平安時代末～鎌倉時代の建物跡群や墓などのほか、条里制地割に由来する坪境溝や、耕作溝群が検出されている。なかでも平安時代末～鎌倉時代の遺構や遺物は、いずれの調査地区でも多数見つかかり、当遺跡は木津川の舟運に関連する中世の大規模集落と考えられている。

今回の調査は、木津川上流浄化センター内の浄化槽建設に伴い、京都府流域下水道建設事務所の依頼を受けて実施した。現地調査は、平成16年8月18日～10月1日の期間で、調査面積は約300m²である。調査は、当調査研究センター調査第2課調査第3係長石井清司、同調査員高野陽子が担当した。また、整理報告にあたって、龍谷大学大学院卒業生生駒昌史氏の協力を得た。

調査を通じて、京都府下水道公社・京都府教育委員会ならびに精華町教育委員会には、多くの指導・助言をいただき、調査および整理作業には多くの^(注2)方々に従事していただいた。記して感謝したい。なお、発掘調査に係る経費は、全額、京都府流域下水道建設事務所が負担した。

(高野陽子)

2. 周辺の遺跡

南山城南部では、縄文時代の遺跡としては、加茂町恭仁京下層遺構などで前期の遺構が検出されているほか、木津川の東岸に位置する山城町椿井大塚山古墳下層や、山城町湧出宮遺跡などの丘陵部では後・晩期の縄文土器の出土が知られている。こうした丘陵部の遺跡に対して、棕ノ木遺跡は低地部の遺跡としてはじめて調査されたものであり、硬玉大珠をはじめ、中期～晩期の遺物が出土した。木津川の氾濫原に縄文遺跡が立地する例として注目される。木津川流域では、近年、京田辺市の薪遺跡においても中期後半～後期の竪穴式住居跡や土坑群が検出され、縄文遺跡の実態が明らかになりつつある。

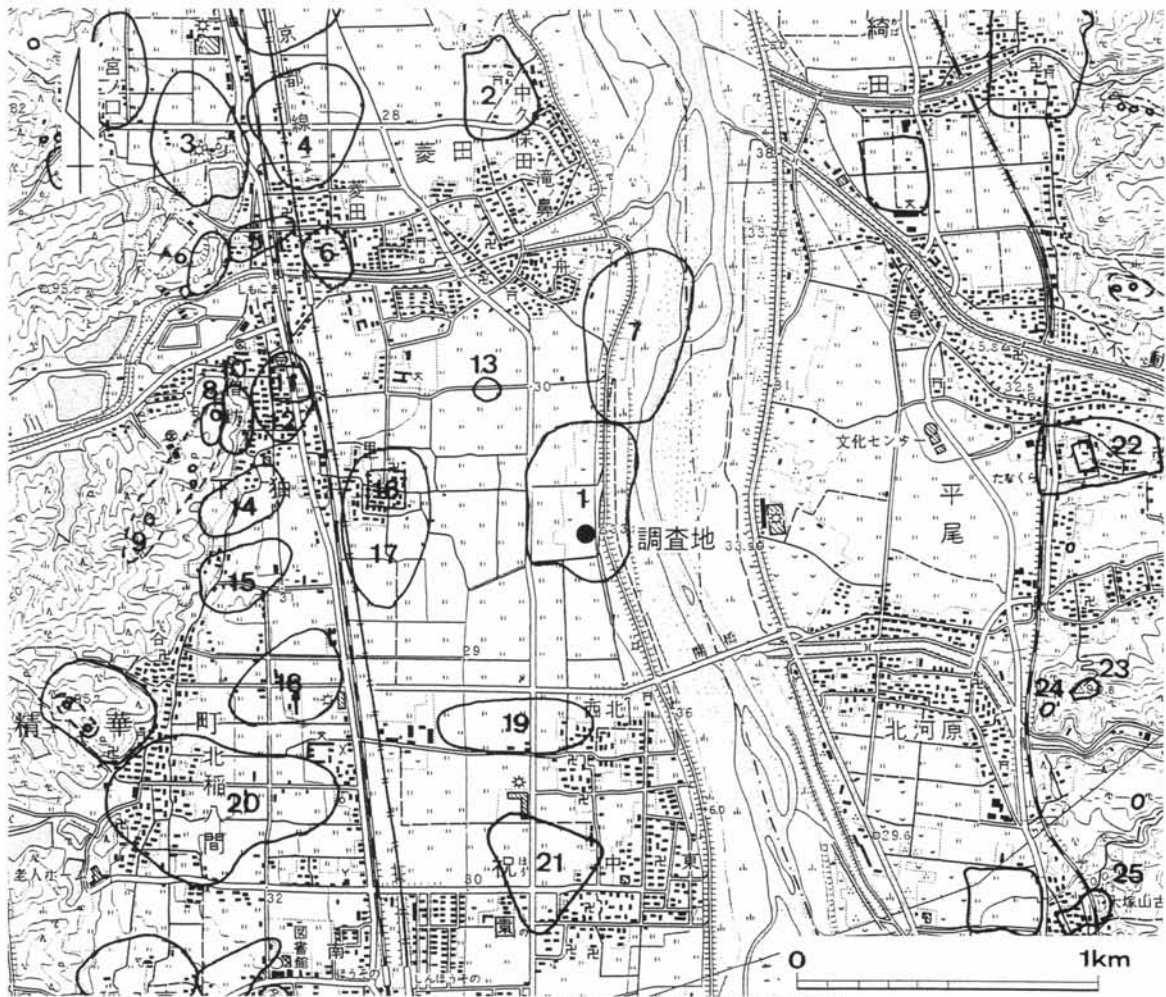
弥生時代の遺跡では、精華町百久保地先遺跡で前期末の壺片が採集されているほか、精華町畑ノ前遺跡で中期後半の方形周溝墓群が検出されている。後期の遺構としては、棕ノ木遺跡で、後期の大溝が検出されているほか、木津川東岸では、山城町上狛西遺跡で竪穴式住居跡群が検出され、丘陵上に立地する椿井遺跡では後期の高地性集落であることが明らかとなっている。

古墳時代には、木津川東岸に位置する、全長175mの椿井大塚山古墳のほか、全長110mを測る平尾城山古墳など大形前期前方後円墳が相次いで築造される。西岸においても、煤谷川の南岸に

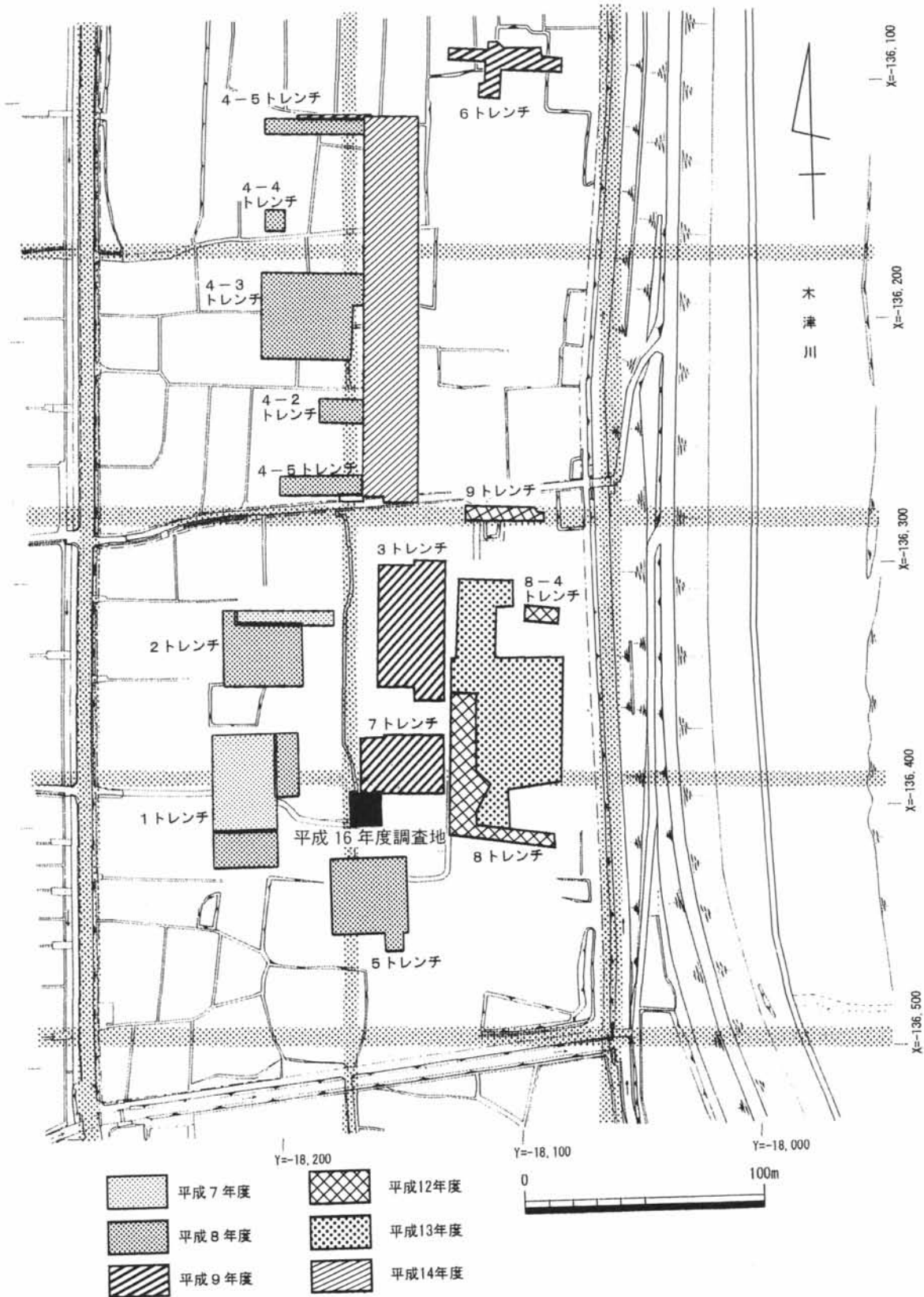
ある鞍岡山古墳群で、大形円墳である3号墳が調査され、埴輪などの出土遺物から前期末に築造されたことが判明した。鞍岡山古墳群は前期から中期に至るこの地域の首長墓とみられる。また、中期後葉～末には、棕ノ木遺跡でも古墳の存在が明らかとなっているが、同時期の大規模集落としては、周辺では精華町南部の森垣外遺跡があげられる。森垣外遺跡では、大壁住居や陶質土器など朝鮮半島系の遺構や遺物が出土している。

古代の遺跡としては、西方約500mの地点に里廃寺があり、版築瓦積基壇が検出された。高麗寺式軒丸瓦が出土しており、渡来系氏族の貊氏によって建立された可能性が高いとされる。

中世になると、低地部の棕ノ木遺跡への居住が始まるが、過去の調査では、12世紀中葉以降、大型建物が構築されるようになり、大規模集落として発展することが明らかとなっている。本遺跡の北には、前述した弥生前期から中世にかけての遺跡である百久保地先遺跡があり、石仏・五輪塔・宝篋印塔が出土しており、棕ノ木遺跡の集落の墓域と考えられている。中世前期には、この地域でも荘園開発が続々と実施され、荘園などをめぐって石清水八幡宮・興福寺・東大寺など



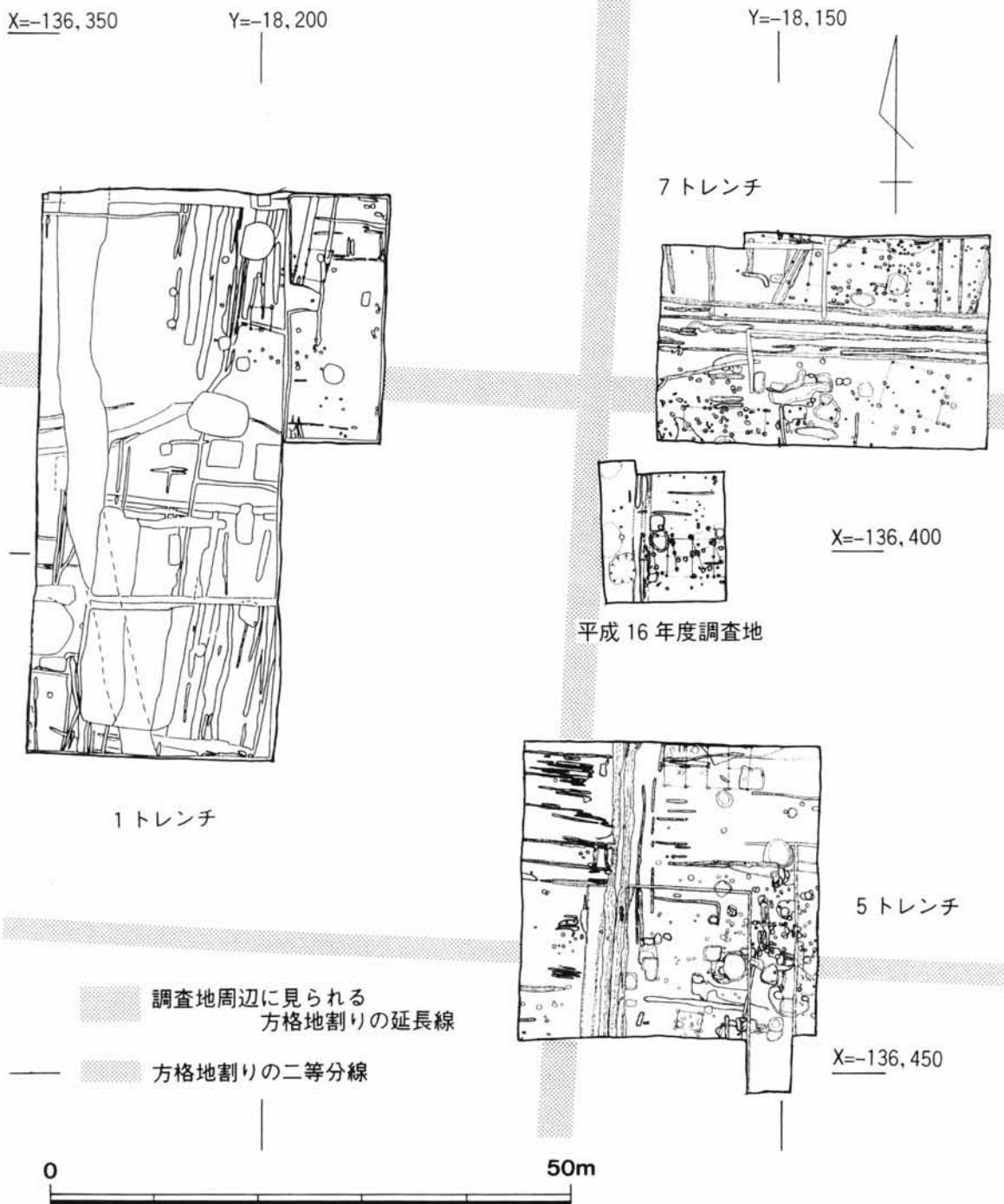
- | | | | | |
|-----------|------------|------------|-----------|-------------|
| 1. 棕ノ木遺跡 | 2. 元屋敷遺跡 | 3. 宮の口遺跡 | 4. 山路遺跡 | 5. 西ノ口遺跡 |
| 6. 前川原遺跡 | 7. 百久保地先遺跡 | 8. 鞍岡神社遺跡 | 9. 鞍岡山古墳群 | 10. 鞍岡山遺跡 |
| 11. 下貊廃寺 | 12. 拝殿遺跡 | 13. 石ヶ町遺跡 | 14. 下馬遺跡 | 15. 片山遺跡 |
| 16. 里廃寺 | 17. 里遺跡 | 18. 柿添遺跡 | 19. 西垣外遺跡 | 20. 北稲遺跡 |
| 21. 中垣外遺跡 | 22. 涌出宮遺跡 | 23. 平尾城山古墳 | 24. 稲荷山古墳 | 25. 椿井大塚山古墳 |



第137図 調査区位置図(注1-⑤文献第135図に加筆)

寺社権門が抗争を始めるようになる。中世後期に至って、椋ノ木遺跡で中枢地区が南へ移動する背景に、これら諸権門の抗争が遺跡構造に大きな変化を与えたと考えられている。

(生駒昌史・高野陽子)

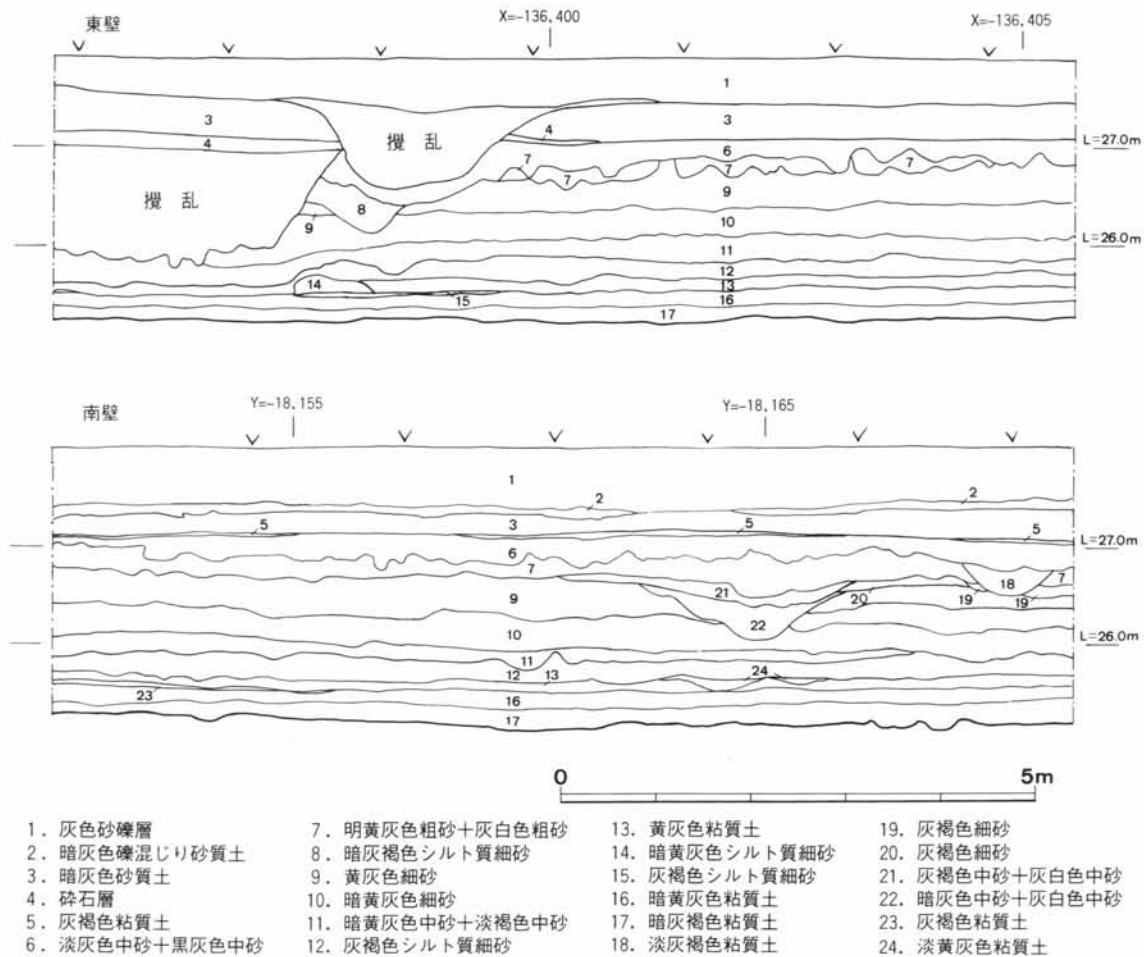


第138図 周辺調査区遺構配置図

3. 調査概要

(1) 基本層序

最上層の標高約27.0m以上は、下水道処理施設建設時の盛土である。旧表土は、この下の第6層(第139図)にあたる。標高約26.8m付近では、洪水砂とみられる白色粗砂を含む砂層を検出した。過去の調査でも検出されている江戸時代後期の洪水砂層と考えられる。標高約25.4~25.7mにあたる層位では、近世の遺物は含まず、瓦器碗などの中世の遺物を多く含むことから中世の堆積層と考えられる。中世堆積層の下層では、幅約0.2~0.3mの厚さで暗褐色粘質土層を検出した。



第139図 土層実測図

標高約25.1~25.3mのこの層位では、包含層中からわずかな縄文土器片を出土している。過去の調査から、縄文時代から古墳時代の堆積層と推定されるが、時期は確定できない。

(2) 検出遺構

現在の地表面を重機掘削により、約3.5m掘り下げた標高約25.5mの付近で、中世の遺構群を検出した。中世遺構面の調査の後、さらに約0.3~0.4m掘り下げ、下層調査を行ったが、下層では土坑ないし土坑状の浅い落ち込みを検出したにとどまる。

今回の調査で検出した主な遺構は、縄文時代の可能性がある土坑ないし落ち込み4基、平安時代末~鎌倉時代後期の掘立柱建物跡3棟以上を含む柱穴群、土坑2、条里制地割に由来するとみられる坪境溝および素掘り溝などである。

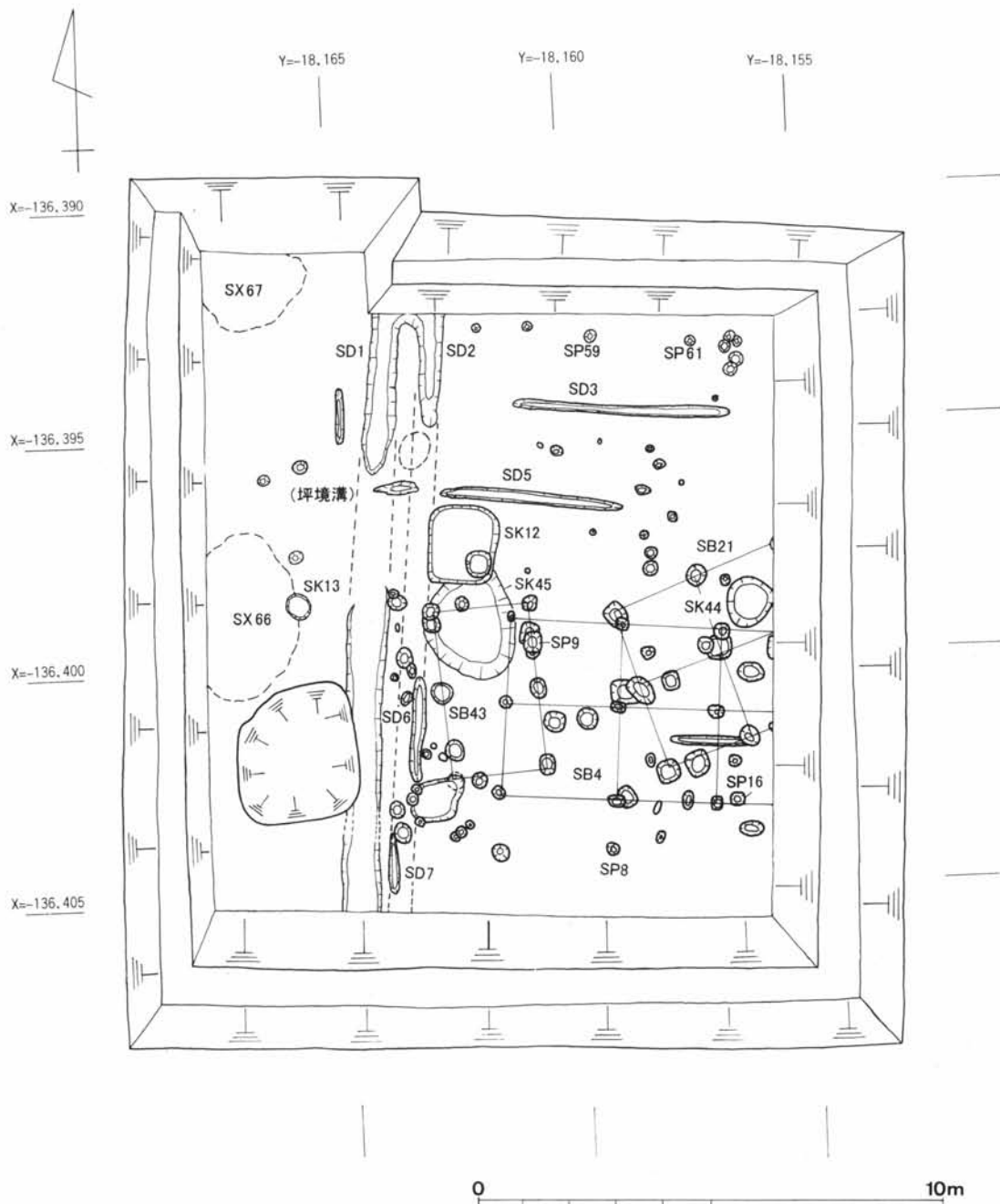
掘立柱建物跡SB4 調査区東側で検出した建物跡である。南北2間、東西2間以上の規模で、建物東端は調査区外へのびる。建物の主軸は座標北から東に7°振る。規模は南北約4.1m、東西約4.7m以上を測り、柱間寸法は南北約1.9~2.0m、東西約2.1~2.5mを測る。埋土は、灰褐色粘質土を基調とする。土師器細片を出土したが、時期を確定することは困難である。

掘立柱建物跡SB21 調査区東側で、掘立柱建物跡SB4と重複して検出した建物跡である。

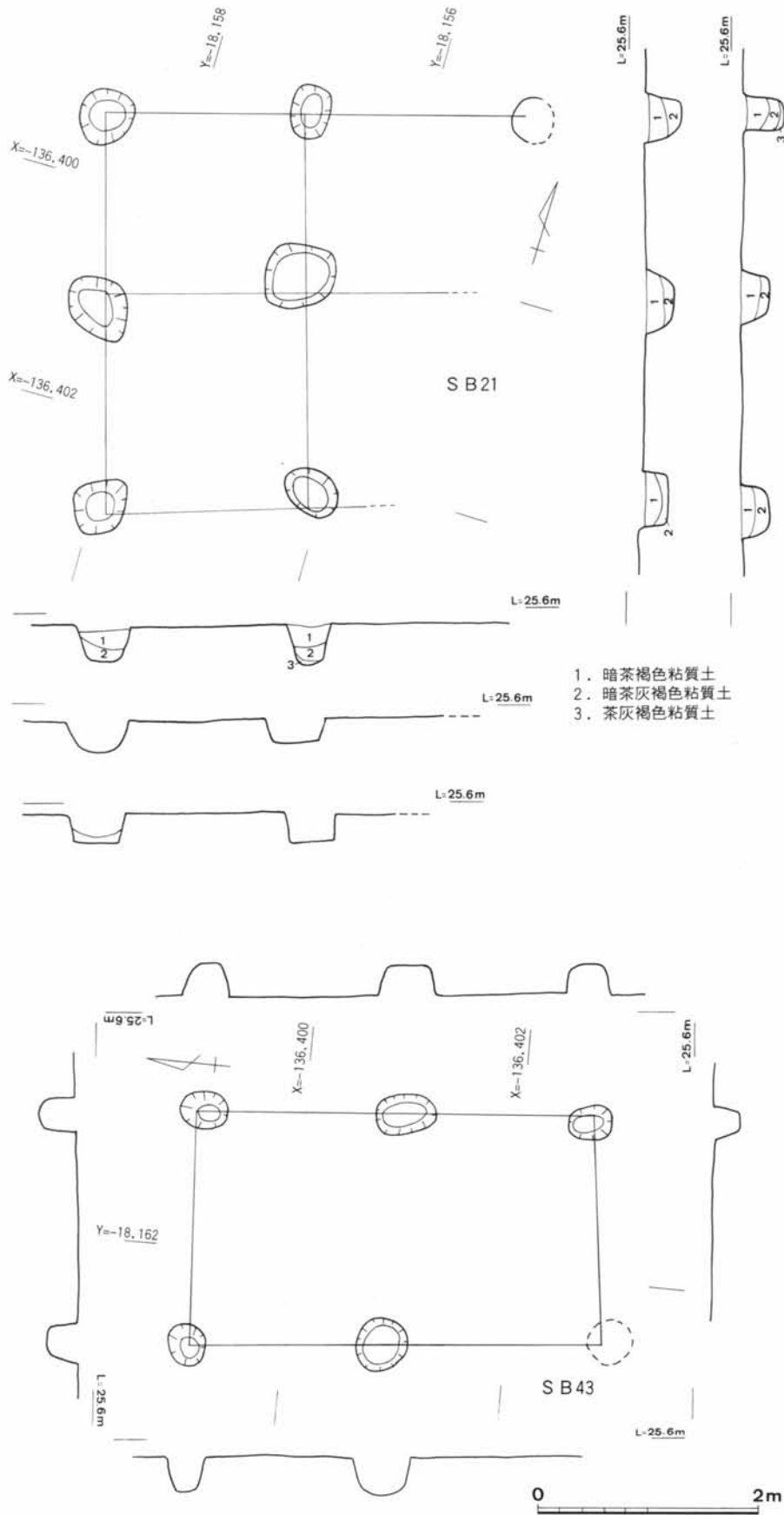
南北2間以上、東西1間以上の規模を有し、柱間の寸法は1.7~1.9mを測る。掘立柱建物跡SB4よりも古く、掘立柱建物跡SB4を建てる際に柱跡の一部が削平される。建物の主軸は、座標北から16°大きく西へ振る。

掘立柱建物跡SB43 調査区中央で、検出した建物跡である。南北2間、東西1間の規模を有する。建物の主軸は座標北から西に5°振る。規模は、南北約3.7m、東西約2.4mを測る。柱穴のなかから、瓦器碗や土師皿の小片が出土した。

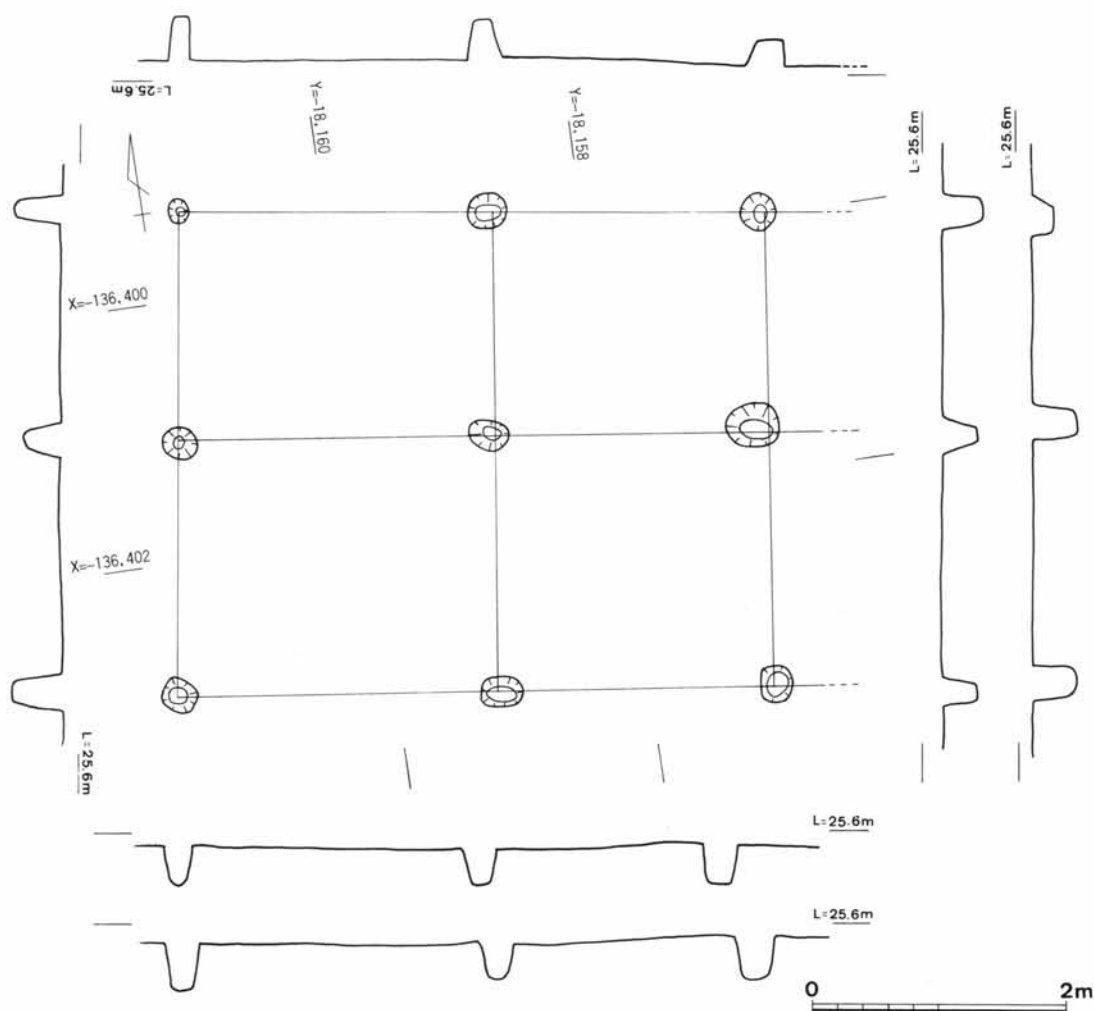
東部柱穴群 調査区東側では、上記の建物跡に伴う柱穴のほかにも多くの柱穴を検出した。これらのなかには、柱の中に石材を置き、柱の根石としたものや、瓦器碗や土師器皿が出土したも



第140図 遺構平面図



第141図 掘立柱建物跡 S B21・S B43実測図



第142図 掘立柱建物跡S B 4 実測図

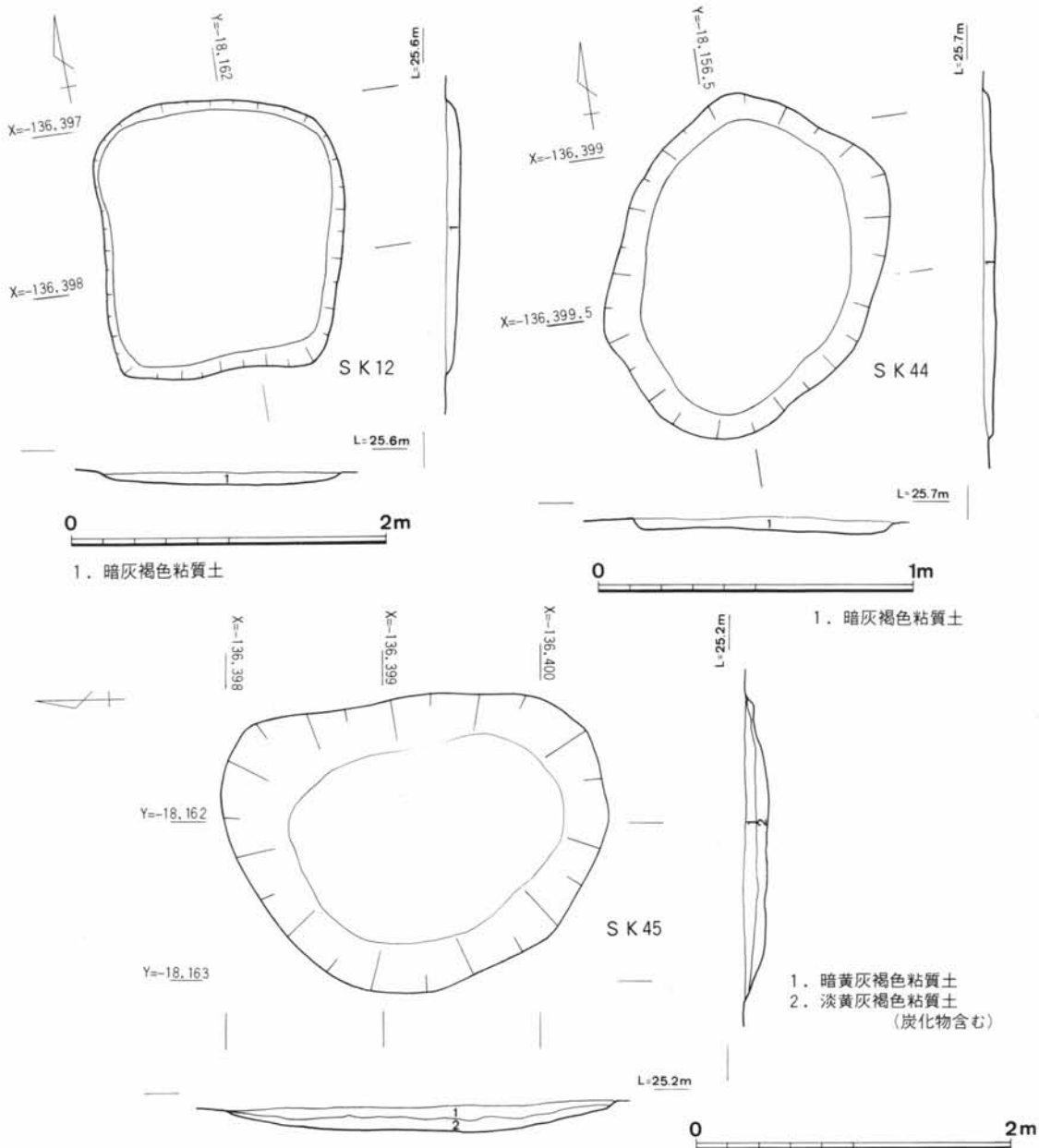
のがあり(柱穴S P 8・9)、多くは12世紀後半～13世紀前半にかけての柱穴であることが判明した。また、柱穴S P 59・60は平成9年度調査の第7トレンチ(第138図)の掘立柱建物跡S B 4の南西隅の柱列となる可能性が高く、これにより柱間約2.1m、3間×4間の建物跡に復原できる。

土坑S K 12 調査区中央北寄りで検出した方形の土坑である。長さ約1.5m、深さ約0.2mを測る。12世紀後葉の瓦器碗が出土している。

土坑S K 44 調査区中央東端で検出した。規模は長径約1.1m、短径0.8mの楕円形状の土坑である。深さ約0.15mを測る。土坑のなかから、輸入陶磁器である白磁壺や瓦器碗、砥石などが出土した。出土遺物から、土坑の時期は12世紀中～後半頃であることが判明した。

落ち込みS X 13 調査区西端で検出した浅い楕円形状の落ち込みである。直径約0.4×0.5m、深さ約5cmを測る。12世紀後葉の瓦器碗が出土した。

坪境溝 調査区北西部で検出した南北方向の平行する溝である。溝S D 1は幅0.7～1.1m、深さ約5～15cmを測り、また、溝S D 2は幅約0.5～0.8m、深さ約5～10cmを測る。検出地点は、久世郡条里のおおよそ坪境にあたり、坪境溝と推定される。溝S D 1の中央部は一部削平されている。また、溝S D 2も中央および南部では削平され、南部で検出した溝S D 6や溝S D 7が、



第143図 土坑S K12・44・45実測図

溝S D 2の深く掘削された一部である可能性が高い。調査地の南に隣接する平成8年度調査の第5トレンチで検出された坪境溝S D108の溝とは、ほぼ直線上に繋がり、同一の溝と推定される。

溝S D 3・5 いずれも幅約20cm、深さ約5～10cmの東西方向の素掘り溝である。溝内から出土した遺物はわずかであるが、溝S D 5からは土師皿や瓦器碗片が出土しており、時期は12世紀後半と推定される。

土坑S K 45 中世遺構面から、約0.4m掘り下げた遺構面で検出した楕円形状の土坑である。長径約2.5m、短径約1.8mを測る。土坑内からは、遺物は出土しておらず、時期は不明であるが、周辺の包含層から数片の縄文土器片を出土していることから、縄文時代の土坑の可能性はある。

落ち込みS X 66・67 調査地西側で検出した下層遺構面の浅い落ち込みである。若干の炭化物を含むが、遺物は出土せず、時期は不明である。

3. 出土遺物(第144図)

1～6・41は、土坑SK44から出土した。1～5は瓦器碗である。1は内面に緻密なヘラミガキが施され、見込みに連結状暗文が施される「大和型」の瓦器碗である。口径14.2cm、器高5.2cmを測る。時期は12世紀中～後葉と推定される。2～5は、いずれも底部を欠くが、内面のヘラミガキは緻密で、外面にも横方向のヘラミガキを施す。口径は14.0～14.5cmを測る。6は白磁双耳壺である。外面肩部に一条の沈線を施し、体部下半に印花文を施す。40は、側面の一面に研磨面をもつホルンフェルス製の砥石である。

7～13は、土坑SK12から出土した。7～9は瓦器碗である。口縁端部に沈線を施す「大和型」の瓦器碗である。10～13は土師器小皿である。外面に一段のナデ調整を施す。口径は8.8～9.0cmを測る。時期は、12世紀後半と推定される。

14～16は、柱穴群から出土した。14はSP56から、15はSP9から出土した瓦器碗である。また、16はSP16から出土した土師皿である。15は見込みに渦巻き状とみられる暗文が施される。口径15.0cm、器高4.0cmを測り、時期は12世紀後葉と推定される。

17は、溝SD2から出土した東播系須恵器壺の底部である。底径13.5cmを測る。

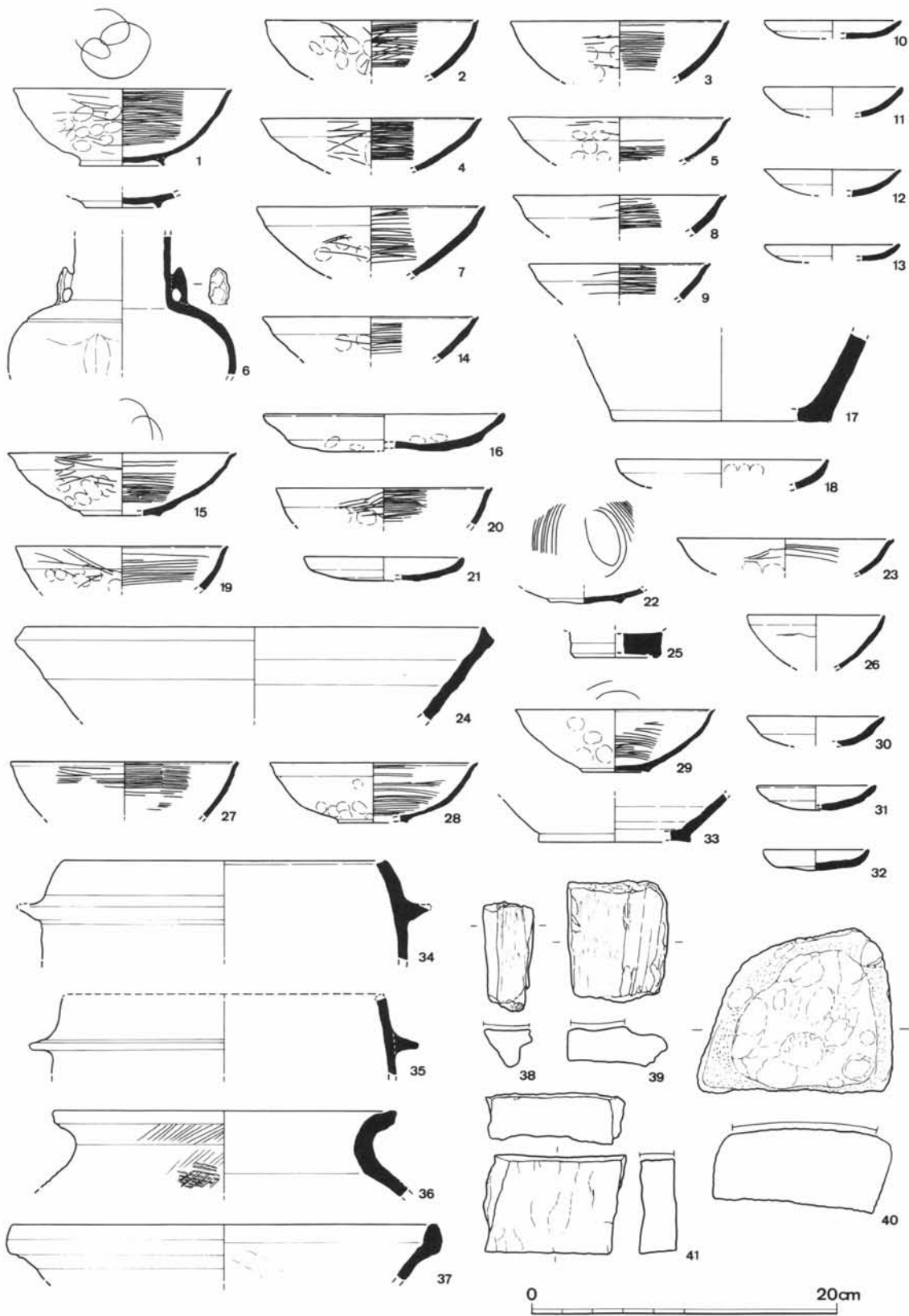
18は、溝SD7から出土した土師皿である。口縁部に面をなす。口径13.8cmを測る。

19・24は、溝SD10から出土した。19は口縁端部に沈線を施す瓦器碗である。内面には細かなヘラミガキを、また、外面上半に粗いヘラミガキを施す。24は東播系須恵器鉢である。口縁部外面に面をなし、上方に摘み上げるように拡張する。口径30.1cmを測る。

20・21は、溝SD5から出土した。20は「大和型」の瓦器碗である。内面のヘラミガキは緻密で、外面にも横方向のヘラミガキが施される。21は土師小皿である。口縁部外面に面をなす。

22・23は、落ち込みSX13から出土した瓦器碗である。22は見込みに渦巻き状とみられる暗文が施される。23は内面に粗いヘラミガキが施される。時期は13世紀前半とみられる。

25～40は、包含層中から出土したものである。25は龍泉窯青磁碗の底部である。全体に淡緑色を呈するが、外面下半の露胎がおよばない部分には、茶褐色の鉄分が細かな斑状に付着している。26～29は瓦器碗である。26は、口縁部内面に沈線は施されず、内外面のヘラミガキもすでに認められない。時期は、14世紀前半と推定される。27は口縁部内面に沈線もち、内面に緻密なヘラミガキが施される。28・29はいずれも「大和型」の瓦器碗である。内面に横方向のヘラミガキが施されるが、外面にはほとんどヘラミガキは認められない。28は口径13.6cm、器高3.9cmを、また、29は口径13.1cm、器高4.0cmを測る。30～32は土師器小皿である。端部は面をもたず、口縁部外面に一段のナデが施される。34・35は土師器羽釜である。口縁部は、内傾し、短い頸をもつ。内面はナデ調整によって平滑に仕上げられている。36は東播系須恵器甕である。口縁部に面をなし、外面は頸部まで細かいタタキによって成形されている。口径22.1cmを測る。37は、東播系鉢の口縁部である。口縁部は上方に拡張し、内面に段をもつ。また、口縁部外面には、面をなす。38～40は砥石である。38・39は一面に縦方向の研磨面をもつ。いずれも粘板岩製である。41は平坦面の片面に研磨面をもつ凝灰岩製の砥石である。長さ12.8cm、厚さ5.2cmを測る。



第144図 出土遺物実測図

- 1～6. 土坑SK44 7～13. 土坑SK12 14. 柱穴SP59 15. 柱穴SP9 16. 柱穴SP8
 17. 溝SD2 18. 溝SD7 19・24. 溝SD10 20・21. 溝SD5
 22・23. 落ち込みSX13 25～40. 包含層

4. ま と め

今回の調査では、平安時代末～鎌倉時代の掘立柱建物跡や土坑、坪境溝、素掘り溝などが検出され、集落構造と変遷を考えるうえで、貴重な資料を得ることができた。

調査区に西側で検出した坪境溝の東側は、3棟以上の掘立柱建物跡が検出され、古代末～中世には主に屋敷地として利用されていたことが判明した。これらの建物跡には、柱穴の切り合い関係や、柱穴の埋土の土色から、大きく分けて2時期の建物跡があると考えられる。新しい時期の建物跡(掘立柱建物跡S B 4)は、南北方向の主軸をもつ建物で、条里制地割に規制された建物跡である。調査区の北側と南側で行われた過去の調査でも、同じ主軸をもつ建物跡を検出したことから、坪内に条里制地割に規制された南北方向の主軸をもつ建物群が広がることが明らかとなった。一方、今回の調査では、これらと建物の主軸を違い西に振る建物跡(掘立柱建物跡S B 21・43)を検出したことは注目される成果である。当遺跡では、これまでの調査によって、条里制地割が12世紀後半頃まで遡ることが明らかであり、建物の多くは条里制地割に規制され、正方位に平行ないしは直交している。しかしながら、従来の調査でも、こうした方位にのらない建物跡もいくつか検出され、方格地割が12世紀後半からほとんど変わらずに維持されてきたのかどうか検討課題となっており、今回見つかった建物跡は、集落の構造と変遷を考える上で貴重な資料となった。なお、調査区西側で検出した南北方向の坪境溝では、同一部分に上層から打ち込まれた近代の杭列が認められたことから、周辺では近代まで条里制地割に由来した地割が残っていたと考えられる。

(高野陽子)

- 注1 ①森島康雄・伊賀高弘「椋ノ木遺跡平成7・8年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第81冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
- ②森島康雄「椋ノ木遺跡平成9年度発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第85冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 1998
- ③藤井整・松尾史子「椋ノ木第5次発掘調査概要」(『京都府遺跡調査概報』第101冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2001
- ④河野一隆・近藤奈央「椋ノ木遺跡第5次」(『京都府遺跡調査概報』第105冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2002
- ⑤森島康雄・石崎善久「椋ノ木遺跡第7次」(『京都府埋蔵文化財概報』第110冊 (財)京都府埋蔵文化財調査研究センター) 2004

注2 調査参加者は以下のとおりである(敬称略)。

補助員 渡辺理気・生駒昌史・神野祐也・大谷博則・藤原理恵・木村涼子

整理員 栃木道代・川端美恵・中島恵美子・荻野富紗子

圖

版

図版第1 三角古墳群第2次



(1)三角2号墳全景(上が北)



(2)三角3号墳全景(上が北)



(3)三角4号墳全景(東から)

図版第2 三角古墳群第2次



(1)三角3号墳主体部検出状況
(西から)



(2)1・4号経塚検出状況(東から)



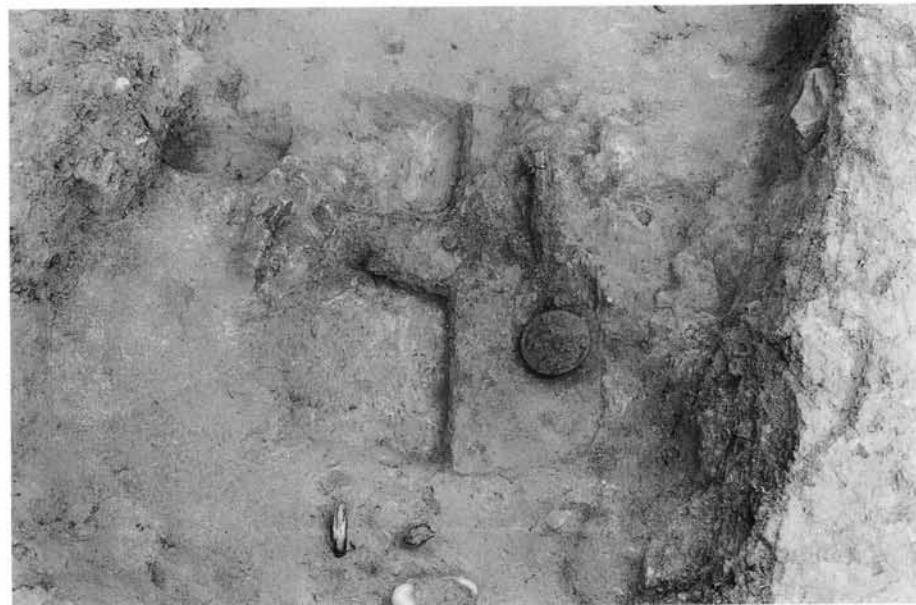
(3)2号経塚検出状況(南西から)



(1) 3号経塚検出状況(南西から)



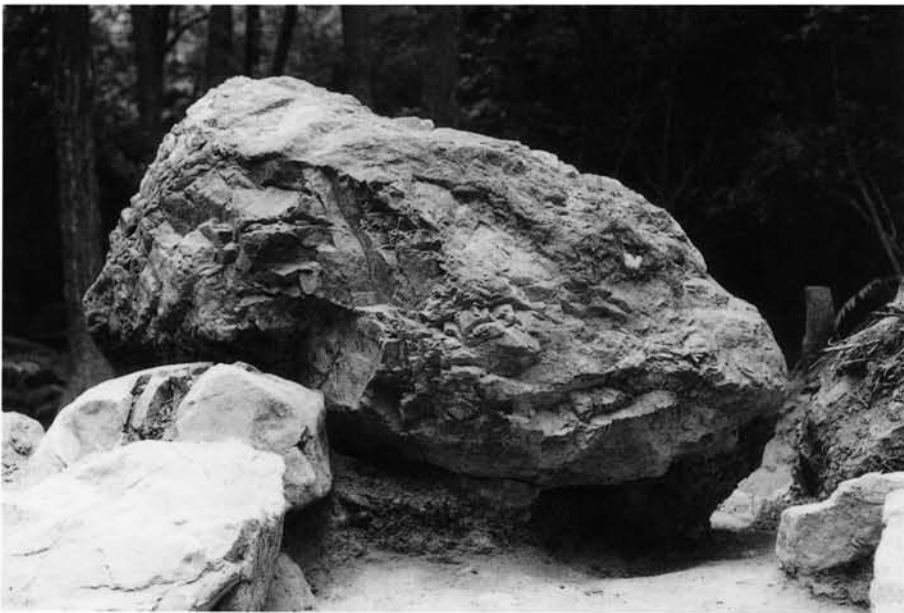
(2) 3号経塚北端部検出状況
(南東から)



(3) 4号経塚和鏡出土状況(東から)



(1)三角4号墳石室検出状況
(南から)



(2)三角4号墳羨道部の崩落した
天井石(北から)



(3)三角4号墳玄門部の崩落した
天井石(北から)



(1)三角4号墳墳丘全景(北から)



(2)三角4号墳石室全景(南から)



(3)三角4号墳石室全景(北から)



(1)三角4号墳奥壁(南から)



(2)三角4号墳奥壁と左側壁の関係
(南西から)



(3)三角4号墳左側壁の構築方法
(西から)



(1)三角4号墳右側壁の構築状況
(東から)



(2)三角4号墳左側壁の構築状況
(西から)



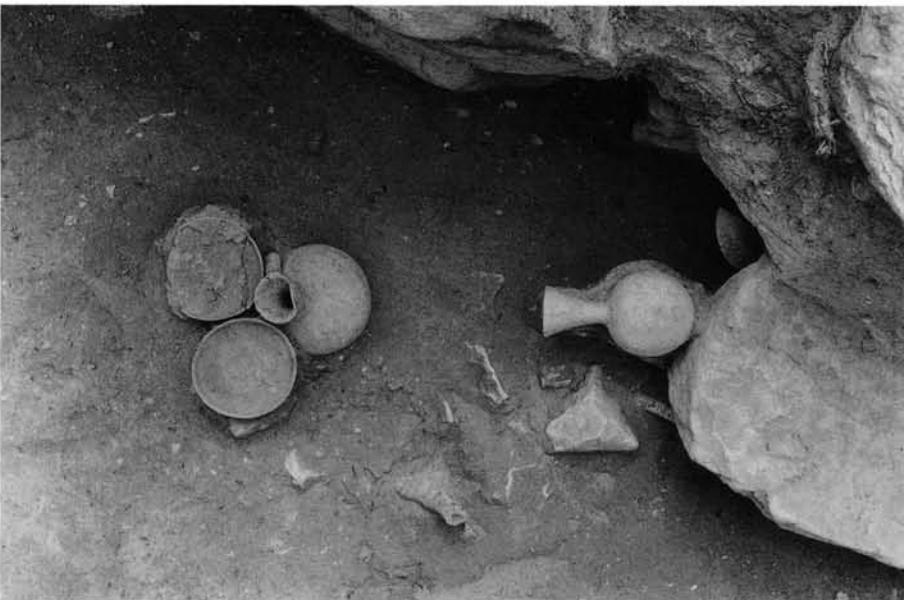
(3)三角4号墳墳丘盛土の堆積状況
(南から)



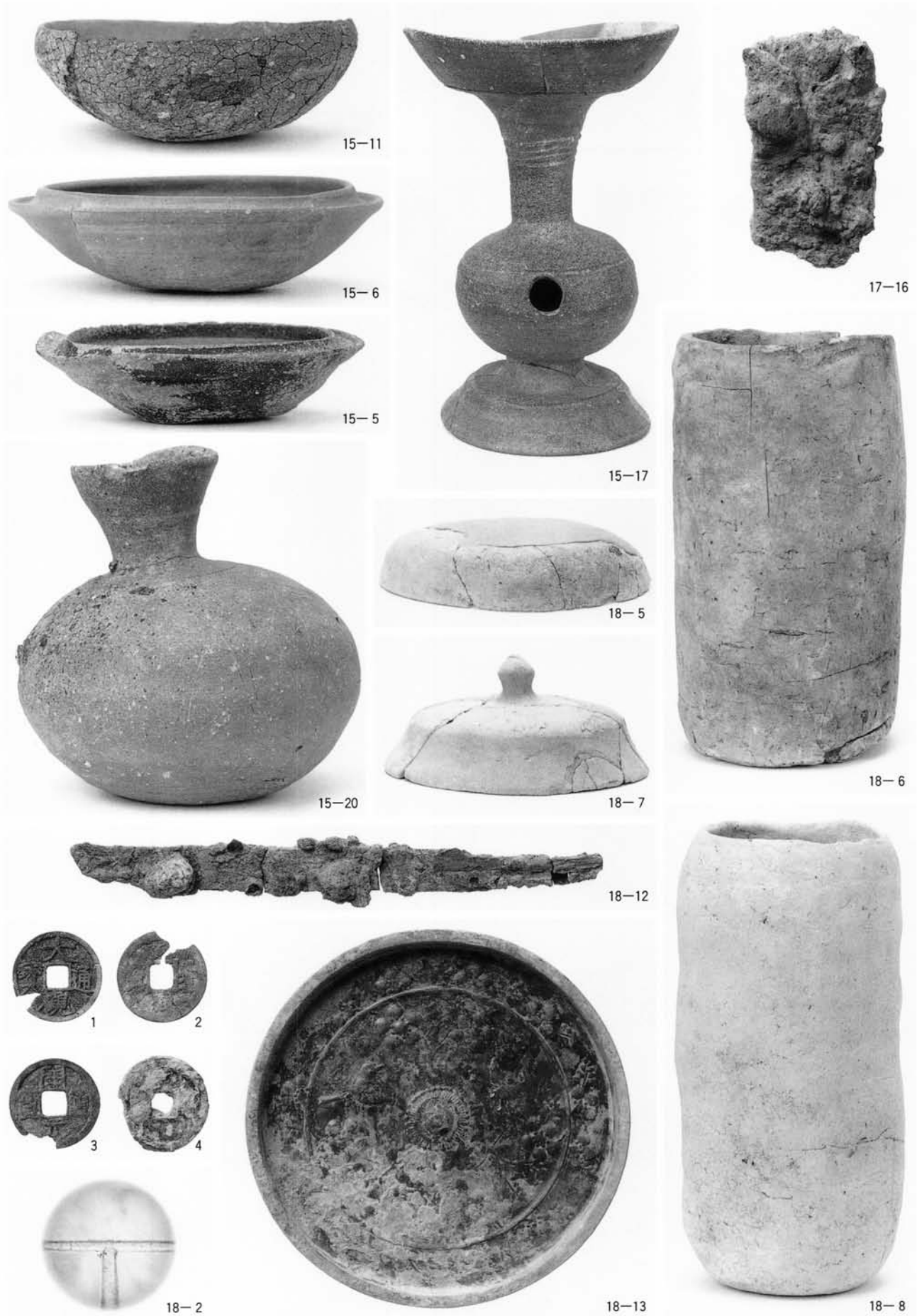
(1)三角 4 号墳石室堀形東半部
(南から)



(2)三角 4 号墳墳丘北側の溝
(東から)

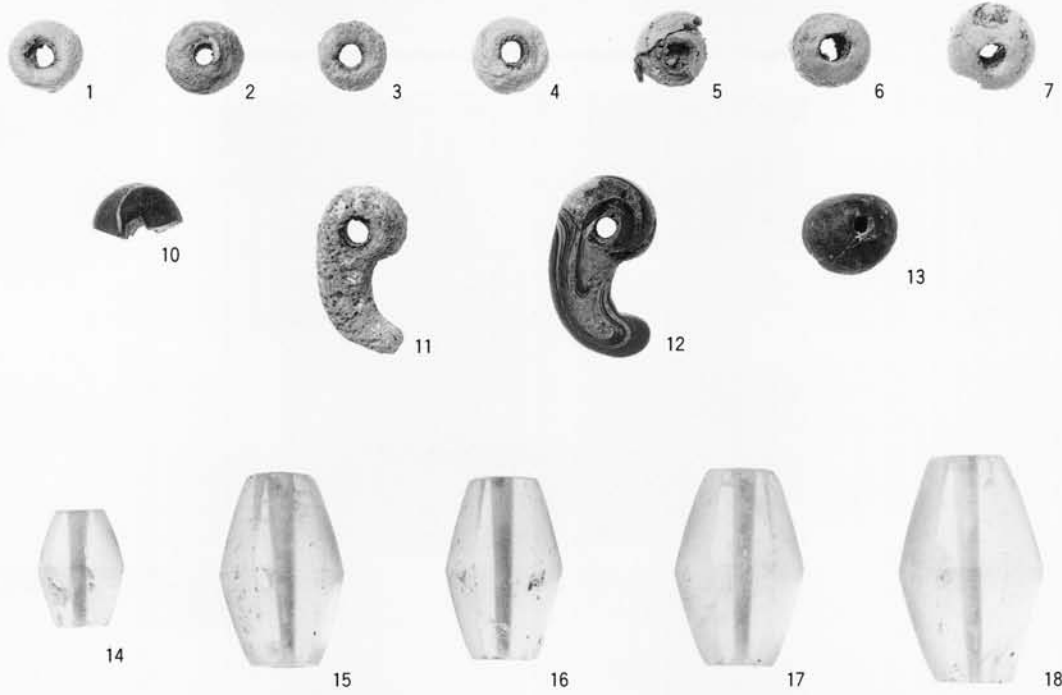


(3)三角 4 号墳石室内遺物出土状況
(南東から)

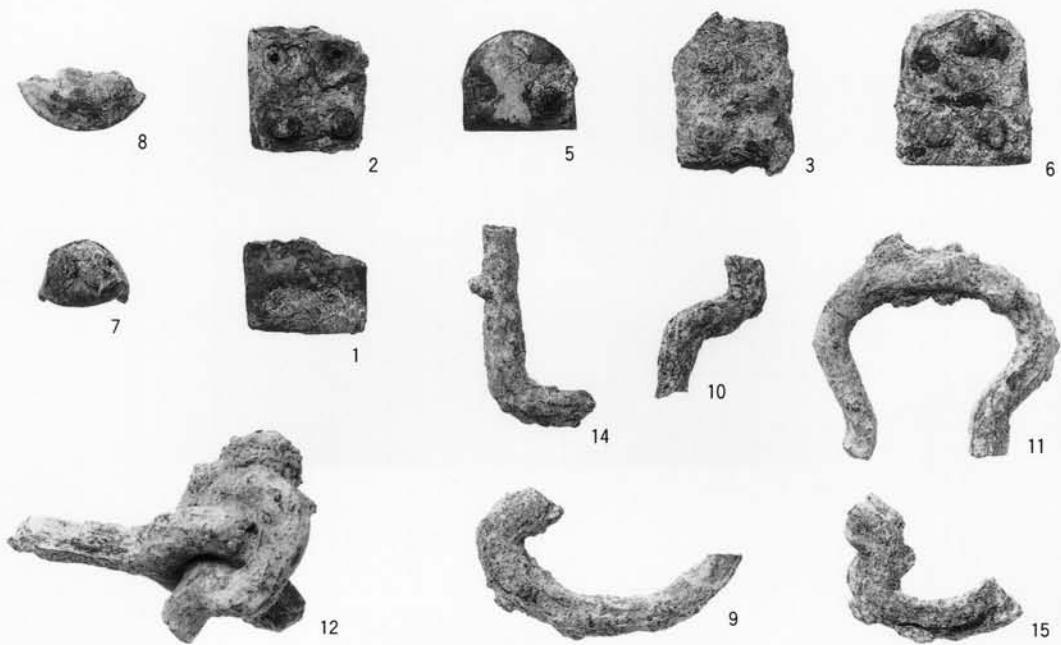


出土遺物(1)

図版第10 三角古墳群第2次

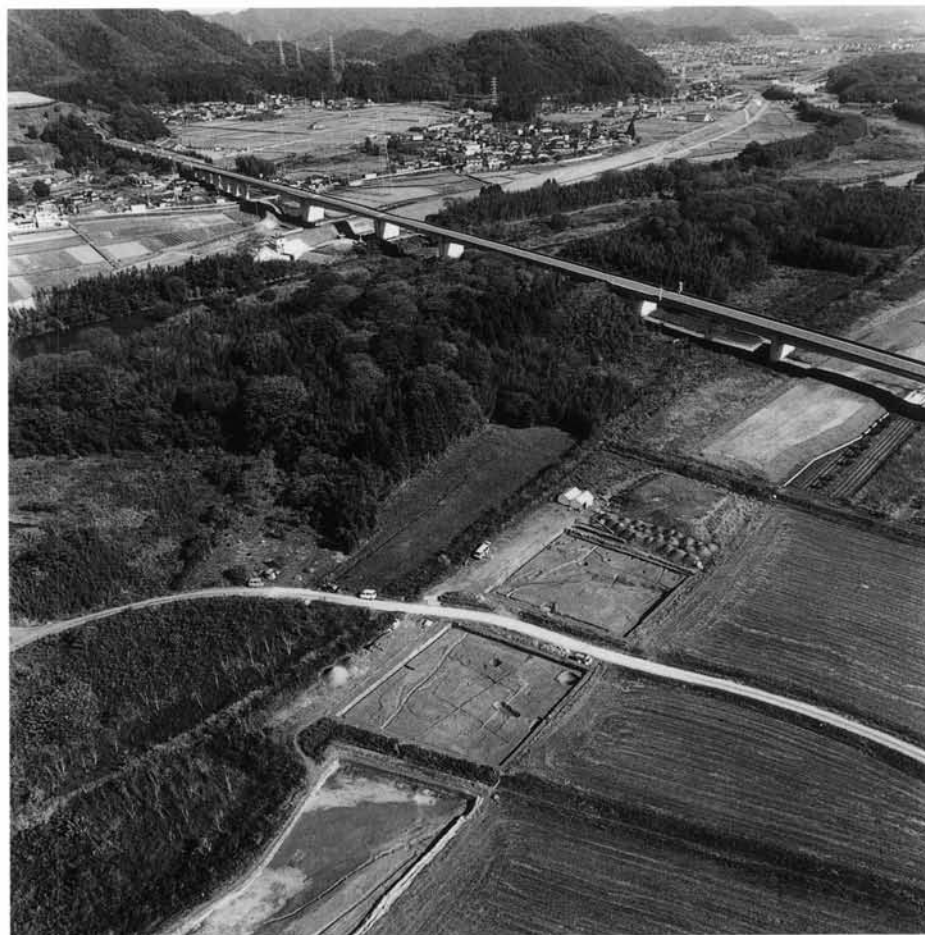


(1)出土遺物(2)



(2)出土遺物(3)

図版第11 観音寺遺跡



(1)調査区全景(南西から)



(2)調査区全景(東から)

図版第12 観音寺遺跡



(1)平成14年度調査地全景(東から)



(2)平成14年度調査A地区東半部
全景(下が北)

図版第13 観音寺遺跡

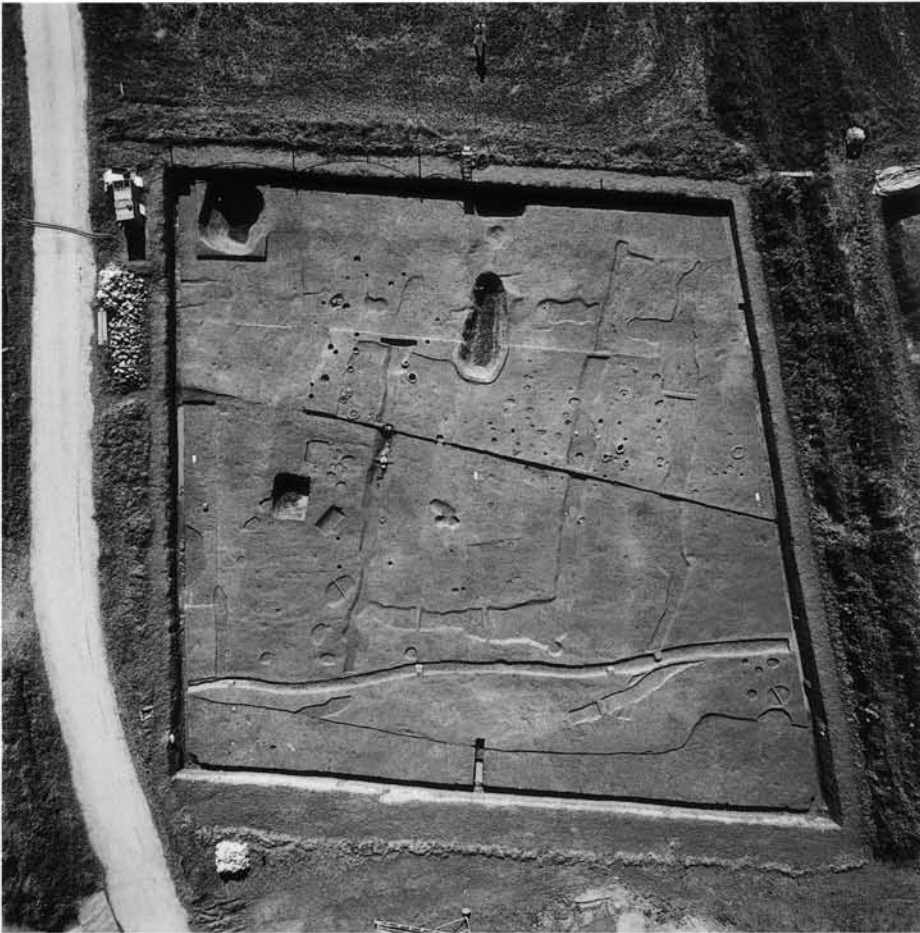


(1) A地区遠景(南から)



(2) A地区全景(下が北)

図版第14 観音寺遺跡



(1) B地区全景(下が北)



(2) C地区全景(上が北)

図版第15 観音寺遺跡



(1) A地区環濠 S D03071
(北西から)



(2) A地区環濠 S D03071
(北西から)

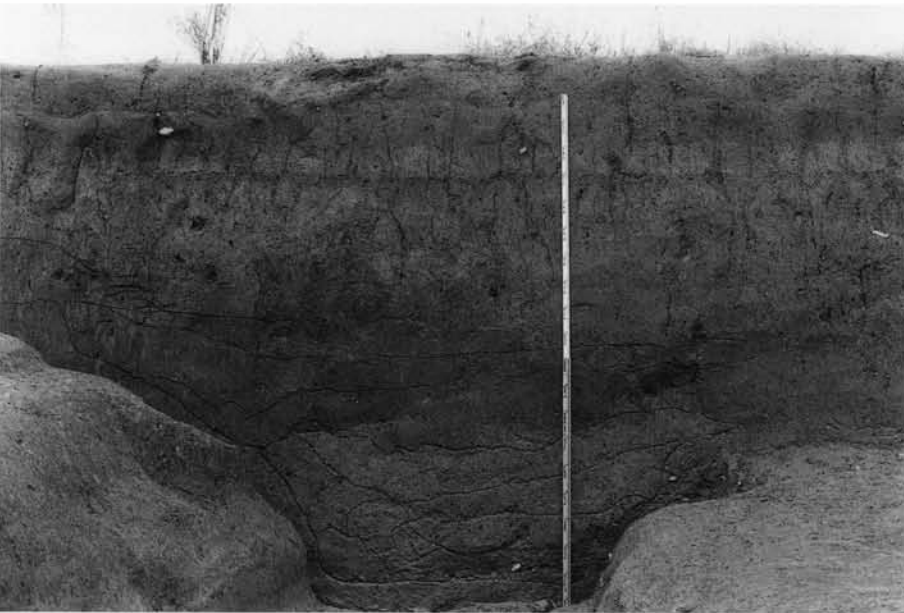


(3) A地区環濠 S D03071 (北から)

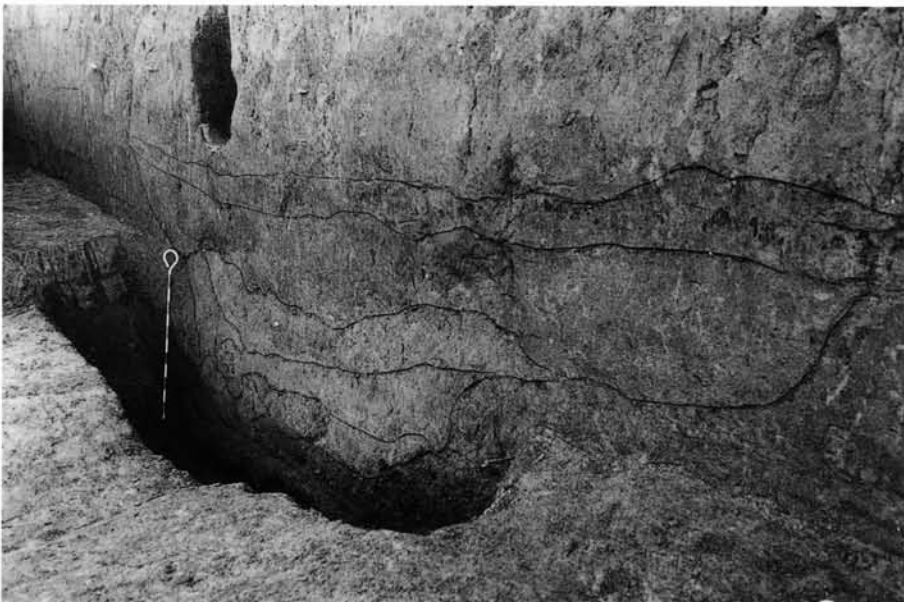
図版第16 観音寺遺跡



(1) A地区環濠 S D03071(北から)



(2) A地区環濠 S D03071南端断面
(北から)



(3) 同上拡大(北西から)

図版第17 観音寺遺跡



(1) A地区土坑 S K03089
(弥生時代中期) (南東から)



(2) A地区土坑 S K03090
(弥生時代中期) (北から)



(3) A地区土坑 S K03100
(弥生時代中期) (南から)



(1) A地区土坑 S K03086
(弥生時代後期)(東から)



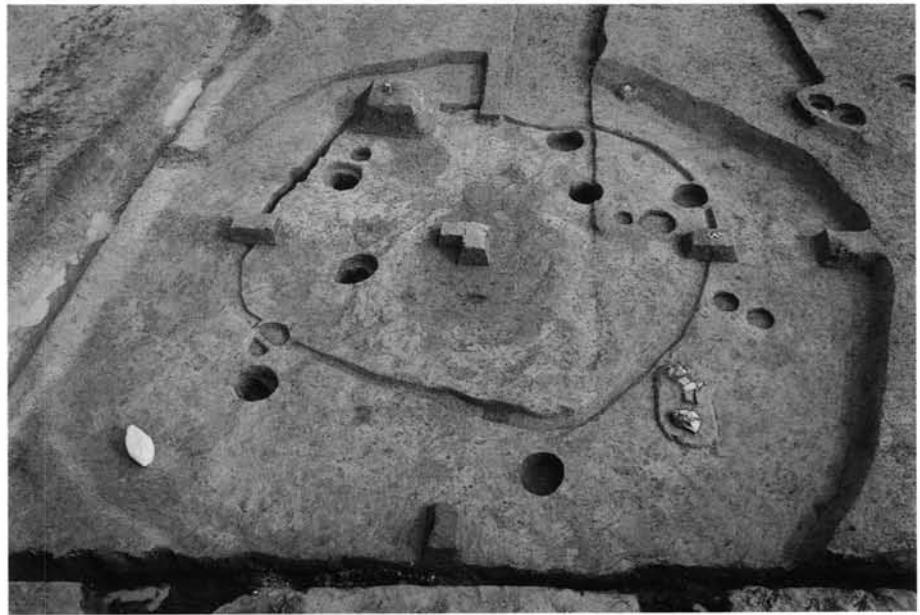
(2) A地区土坑 S K03098
(弥生時代後期)(西から)



(3) A地区土坑 S K03103
(弥生時代後期)(東から)



(1) A地区弥生時代土坑群(北から)



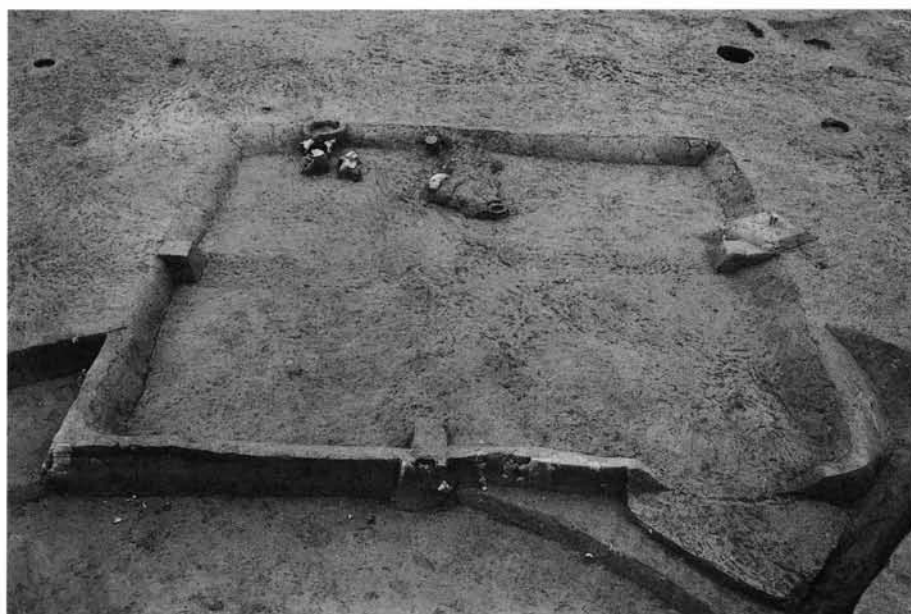
(2) A地区竪穴式住居跡 S H02084
(西から)



(3) A地区竪穴式住居跡 S H03097
(東から)



(1) A地区竪穴式住居跡 S H02150
(東から)

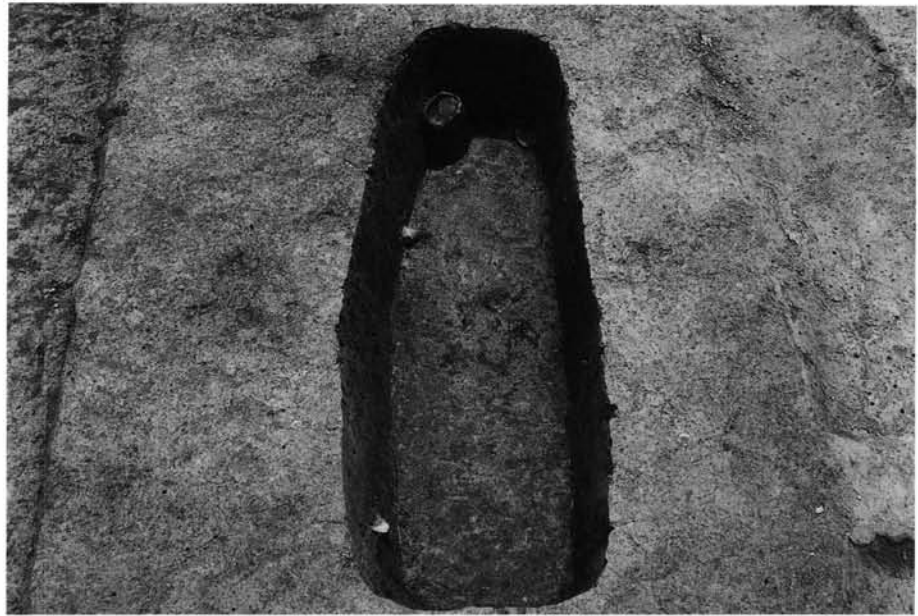


(2) A地区竪穴式住居跡 S H02086
(南東から)



(3) B地区竪穴式住居跡 S H03120
(北から)

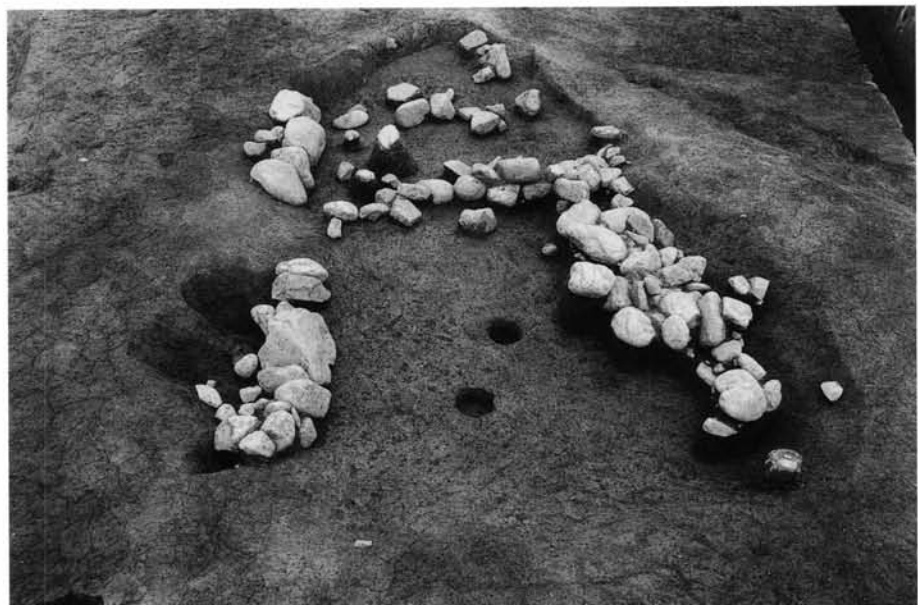
(1) A地区土壙墓 S T03005
(西から)



(2) A地区土壙墓 S T03005
遺構内出土土器(南西から)



(3) A地区土坑 S K03001(西から)





(1) B地区方形周溝遺構1
掘削作業風景(北から)



(2) B地区方形周溝遺構1
溝内出土土器(遺物番号336)
(北から)



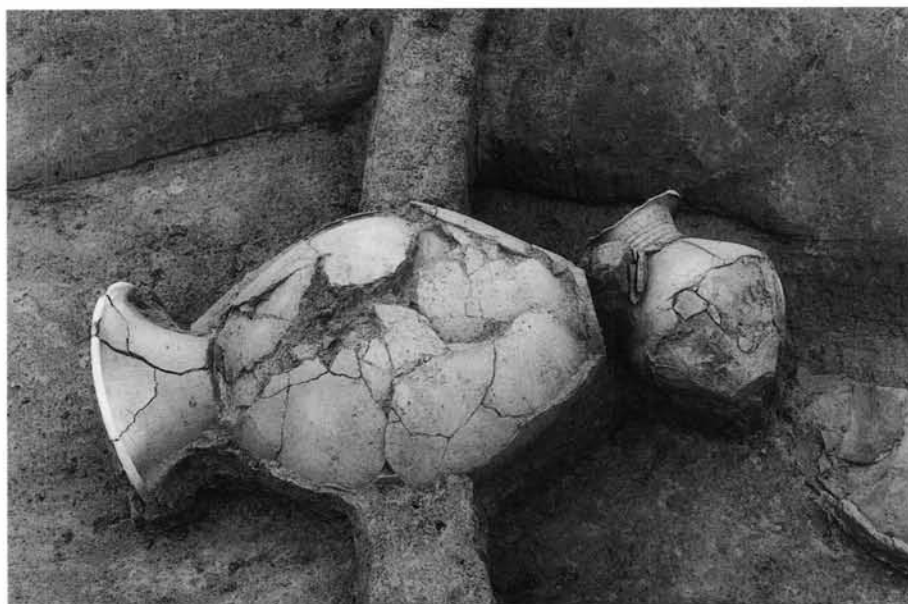
(3) B地区方形周溝遺構1
出土土器実測作業風景
(北西から)



(1) B地区方形周溝遺構1
溝内出土土器(南から)



(2) B地区方形周溝遺構1 溝内
出土土器335・333・336ほか
(北東から)



(3) B地区方形周溝遺構1
溝内出土土器333・335(西から)



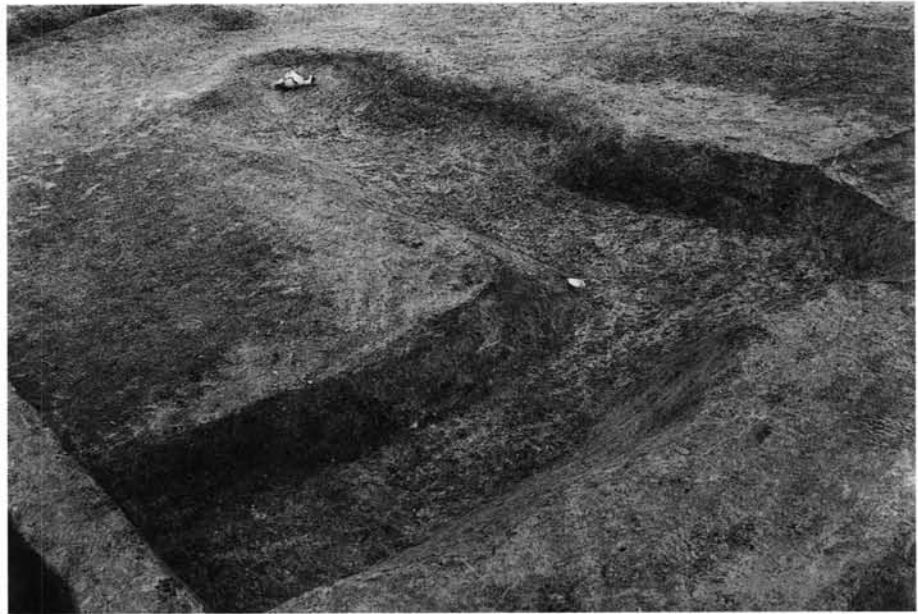
(1) B地区方形周溝遺構 1
溝内出土土器340(東から)



(2) B地区方形周溝遺構 1
溝内出土土器338・342(南から)



(3) B地区方形周溝遺構 1
溝内出土土器342と炭化材
(東から)



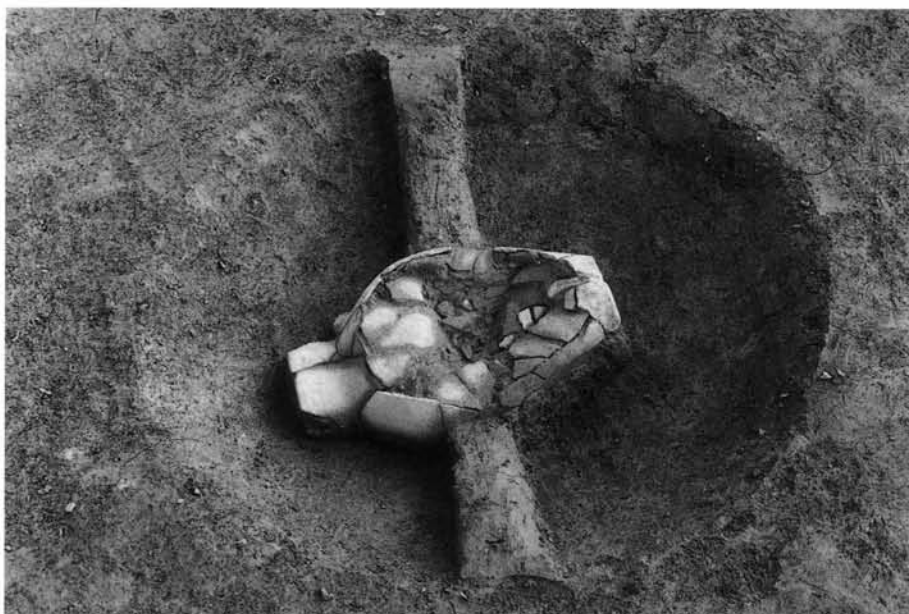
(1) B地区方形周溝遺構1 南西隅
(北西から)



(2) B地区方形周溝遺構1
土器334出土状況(北西から)



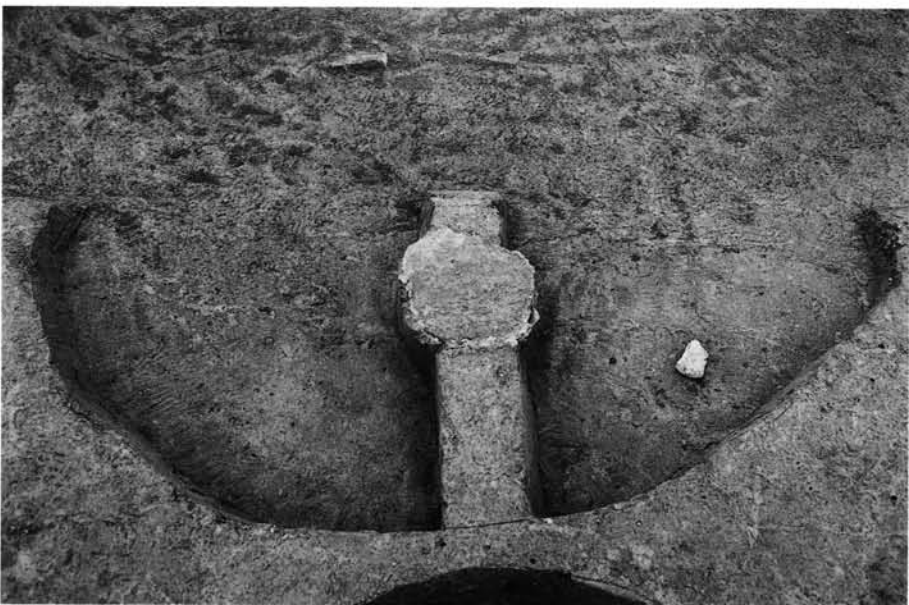
(3) B地区方形周溝遺構1 全景
(北から)



(1) B地区土坑 S K03128
(北西から)



(2) B地区土坑 S K03129(北から)



(3) B地区土坑 S K03109
(南西から)



(1)土坑 S K03003(東から)



(2)土坑 S K03004(南東から)



(3)土坑 S K03004断面(南から)

図版第28 観音寺遺跡



(1) B地区田畑区画S X03137
(西から)



(2) C地区全景(南東から)



(3) C地区溝完掘状況(東から)



6



9



32



55



64



61



71



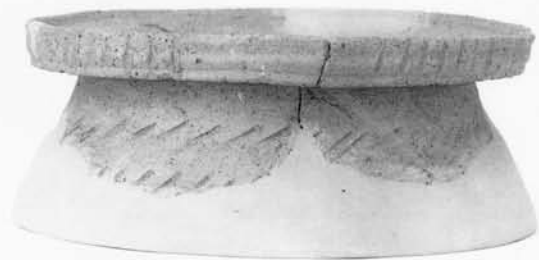
69



90



106



118



96



122



141



172



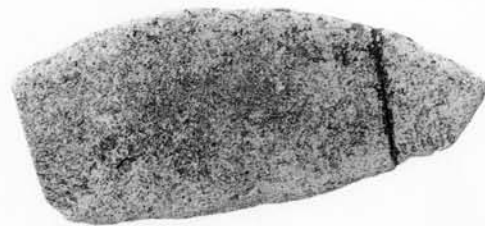
131



152



155



140



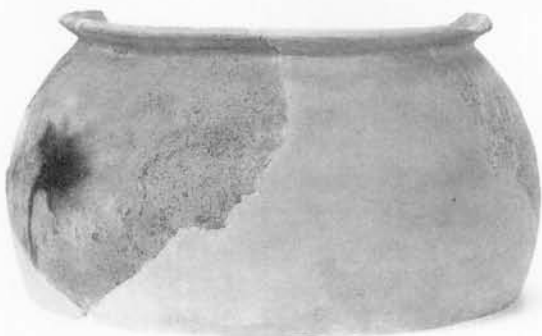
127



183



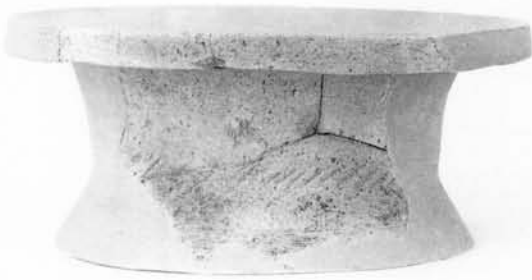
197



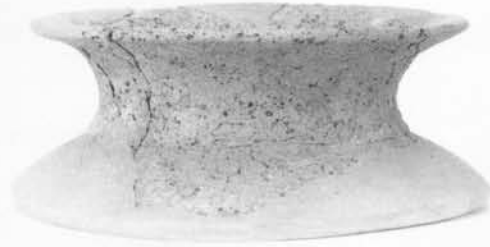
192



198



249



252



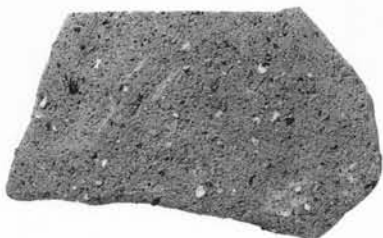
256



263



281



297



306



309



335



336



333



334



345



350



347



337



348



340



341



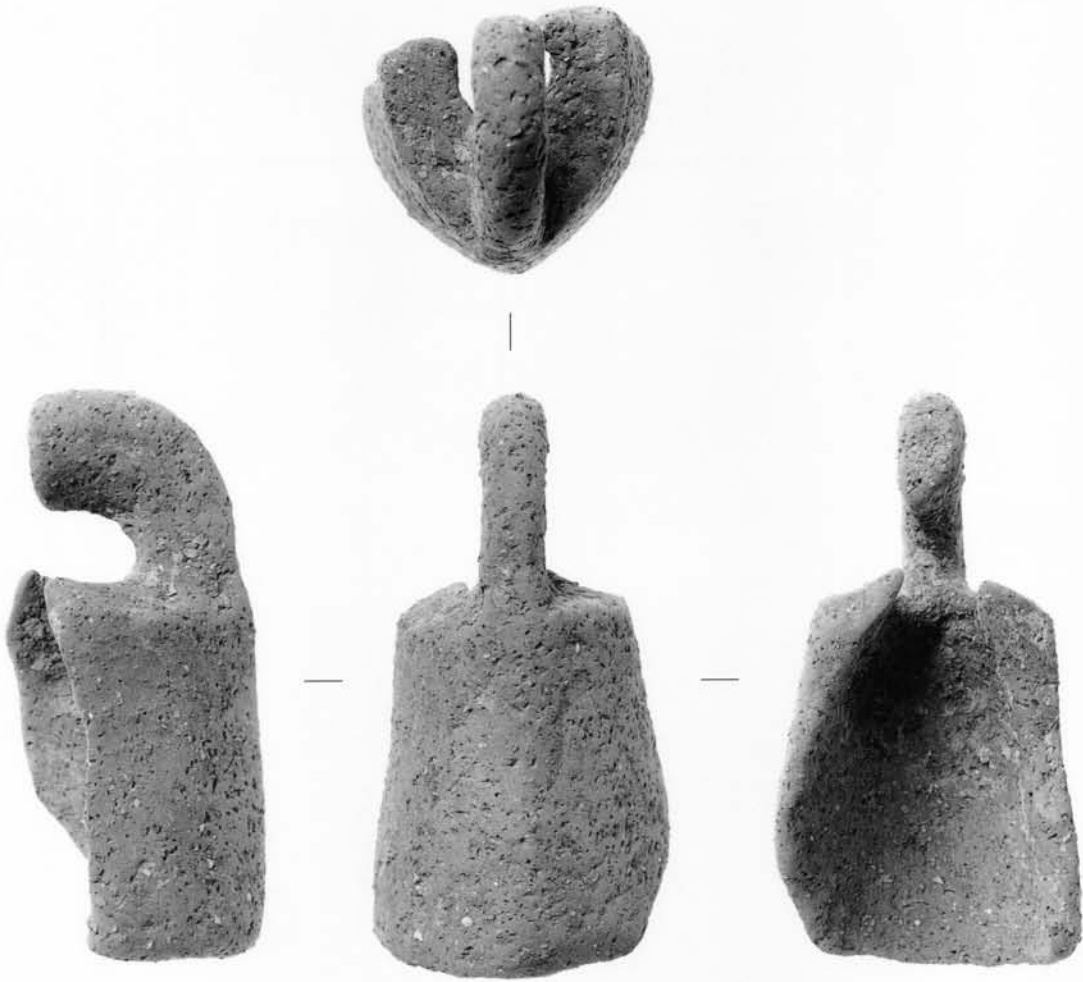
342



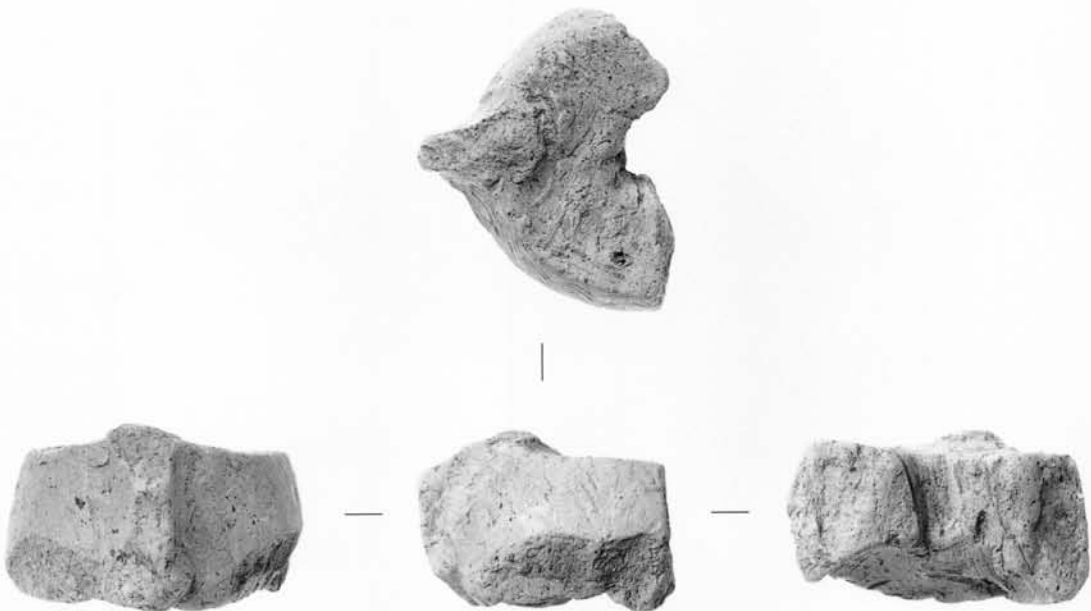
261



102



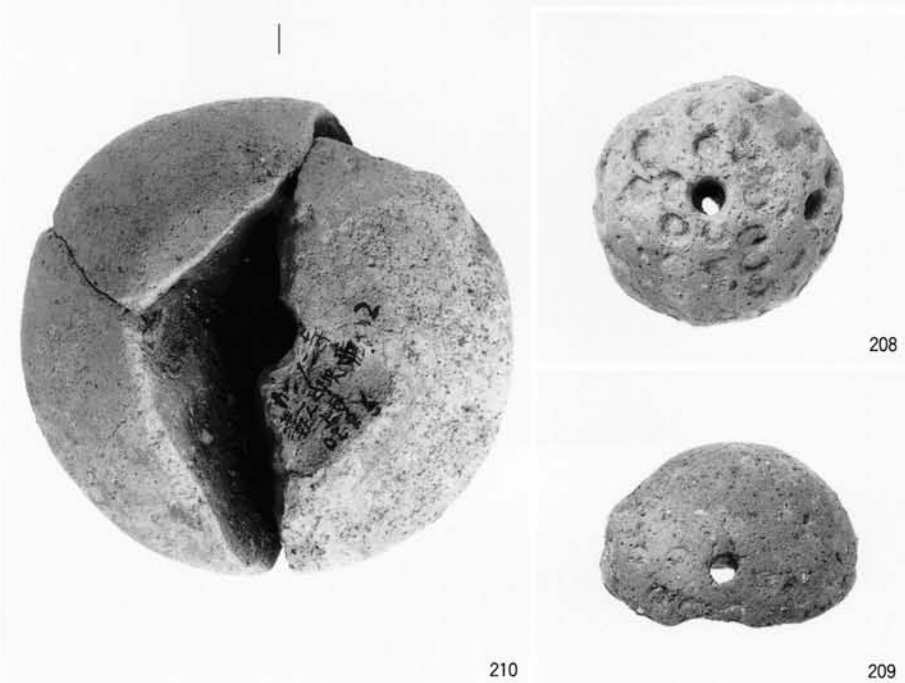
206



207



205



208

210

209



(1) 諸畑遺跡全景(南から)



(2) A地区全景(北から)



(1) B地区全景(北から)



(2) C地区全景(南から)



(1) 竪穴式住居跡 S H01・02
完掘状況(南から)



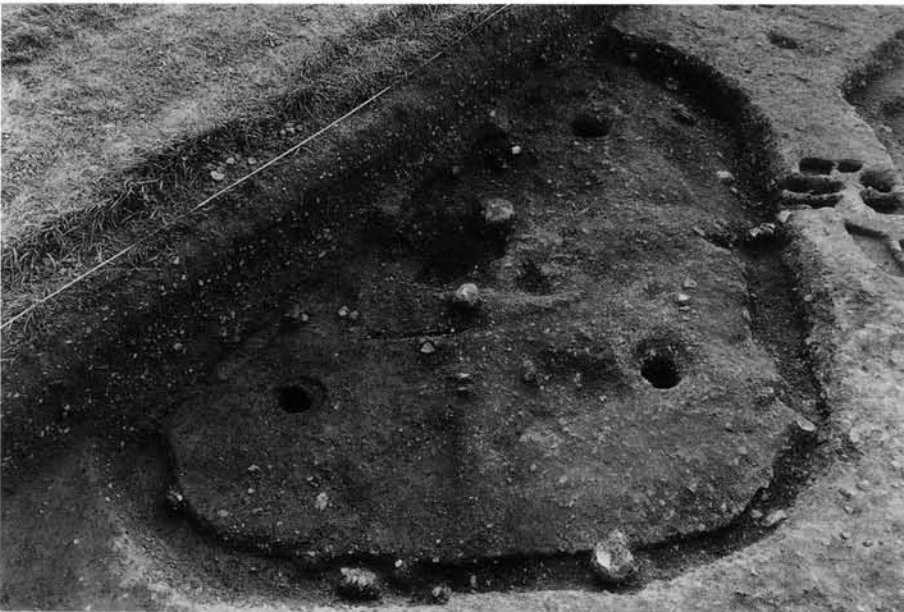
(2) 土坑 S K07 煙道部炭化材
検出状況(東から)



(3) 竪穴式住居跡 S H04
遺物出土状況(北西から)



(1) 竪穴式住居跡 S H03
炭化材検出状況(北東から)



(2) 竪穴式住居跡 S H03
遺物出土状況(北東から)



(3) 竪穴式住居跡 S H03完掘状況
(北東から)



(1) 竪穴式住居跡 S H03
遺物出土状況(1) (西から)



(2) 竪穴式住居跡 S H03
遺物出土状況(2) (北から)



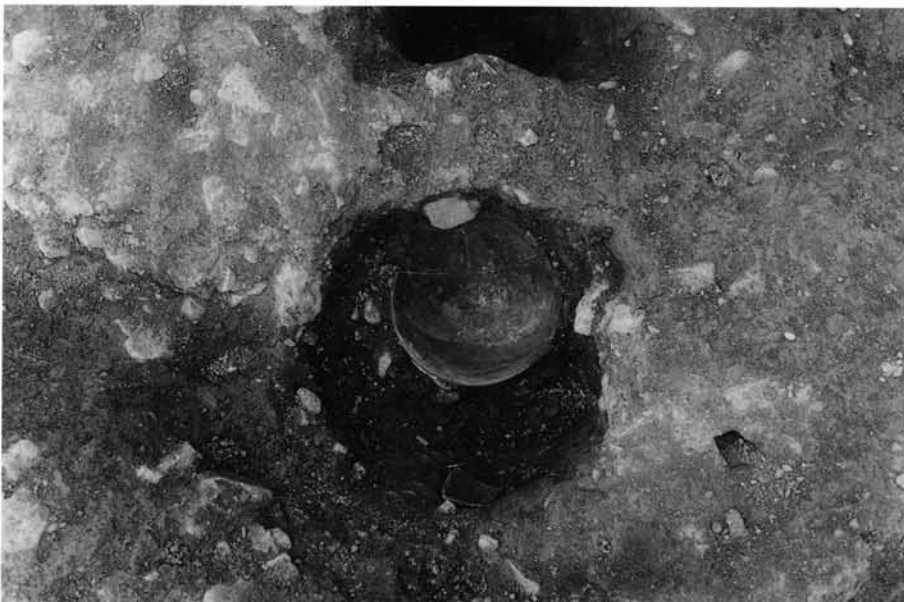
(3) 土坑 S K14 遺物出土状況
(東から)



(1)不明遺構 S X01完掘状況
(南西から)



(2)土坑 S K11遺物出土状況
(南から)



(3)柱穴 Pit06遺物出土状況
(南から)



(1) 竪穴式住居跡 S H05 完掘状況
(北から)



(2) 竪穴式住居跡 S H06 完掘状況
(北西から)



(3) 竪穴式住居跡 S H09 完掘状況
(北西から)



(3) 竪穴式住居跡 S H08完掘状況 (東から)



(2) 竪穴式住居跡 S H08遺物出土状況 (東から)



(1) 竪穴式住居跡 S H07完掘状況 (北から)



14



69



15



37



17



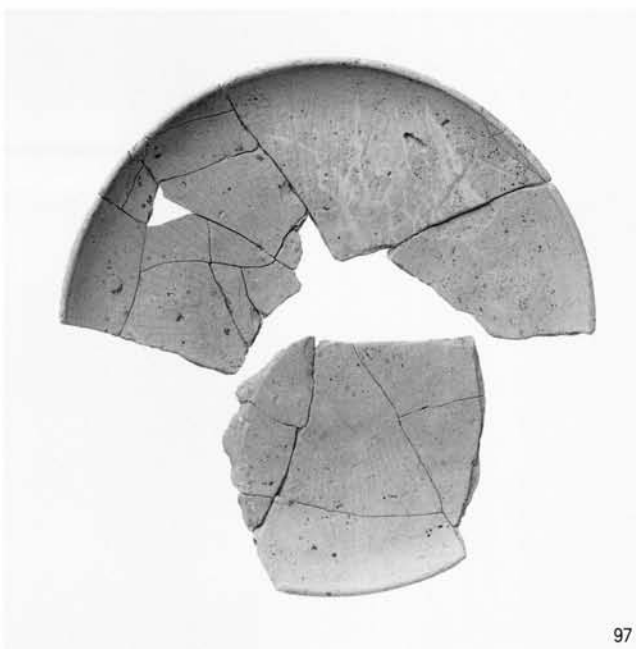
40



19



43





(1) A地区調査前(北から)



(2) B・C地区調査前(北東から)



(3) A地区調査風景(南から)



(1) A地区検出遺構全景(北から)



(2) A地区検出遺構全景(南から)



(3) A地区掘立柱建物跡
S B14・19(北から)



(1) A地区掘立柱建物跡
S B14・19(西から)



(2) A地区土坑S K56
集石検出状況(西から)



(3) 土坑S K56完掘状況(西から)



(1)A地区溝SD2(東から)



(2)A地区掘立柱建物跡SB14
柱穴P44(東から)



(3)B地区検出遺構全景(西から)



(1)B地区柵 S A89(東から)



(2)B地区井戸 S E 111(南から)



(3)B地区井戸 S E 111(北から)



(1) B地区溝S D90(北から)



(2) C-2・3地区検出遺構全景
(北から)



(3) C-3地区検出遺構全景
(北から)



(1) C-3地区掘立柱建物跡
S B320・溝 S D317(南から)



(2) 溝 S D317(南から)



(3) 溝 S D317(北から)



(1) C-3地区掘立柱建物跡
S D320(東から)



(2) C-2地区柵 S A340
(南東から)



(3) C-2地区谷部(北から)



(1) C-1 地区溝群全景(1)(西から)



(2) C-1 地区溝群全景(2)(西から)



(3) C-1地区溝SD113(東から)



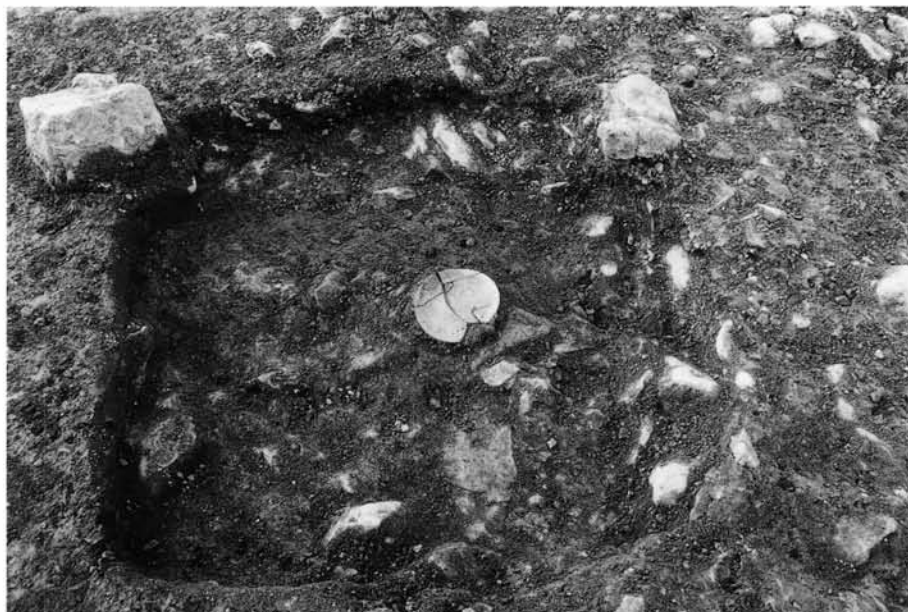
(1) C-1 地区溝 S D 113 須恵器甕
出土状況(北から)



(2) C-1 地区溝 S D 113 須恵器甕
出土状況(東から)



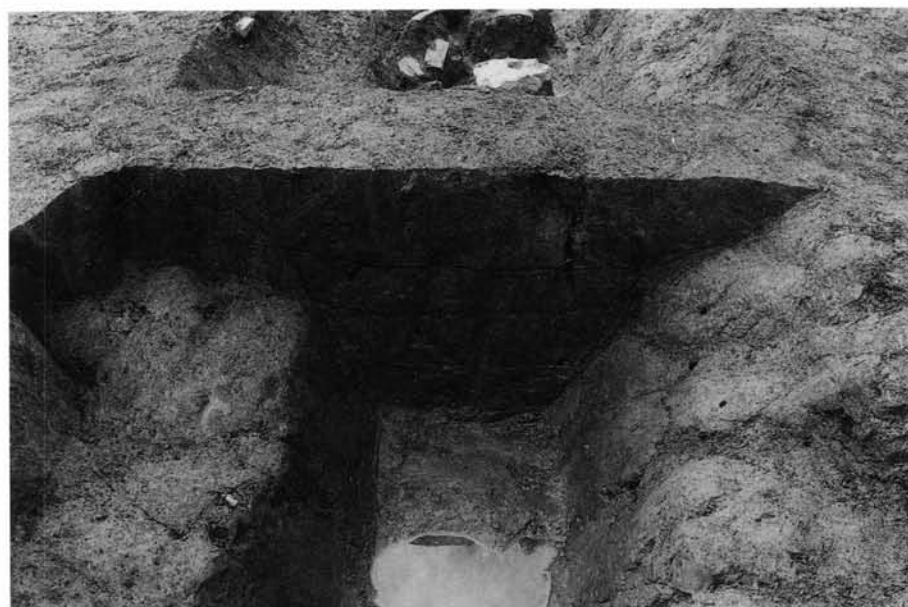
(3) C-1 地区検出遺構全景
(西から)



(1) C-3 地区柱穴 P327
土師器皿出土状況(東から)



(2) C-1 地区溝 S D 1 畦断面
(東から)



(3) C-1 地区溝 S D 113 畦断面
(東から)



(1)C-2・3地区全景(北東から)



(2)C-2・3地区全景(西から)



(3)C-2・3地区全景(左が北)



27



29



28



30



19



1



2



8



5



6



25



24



36



48



49



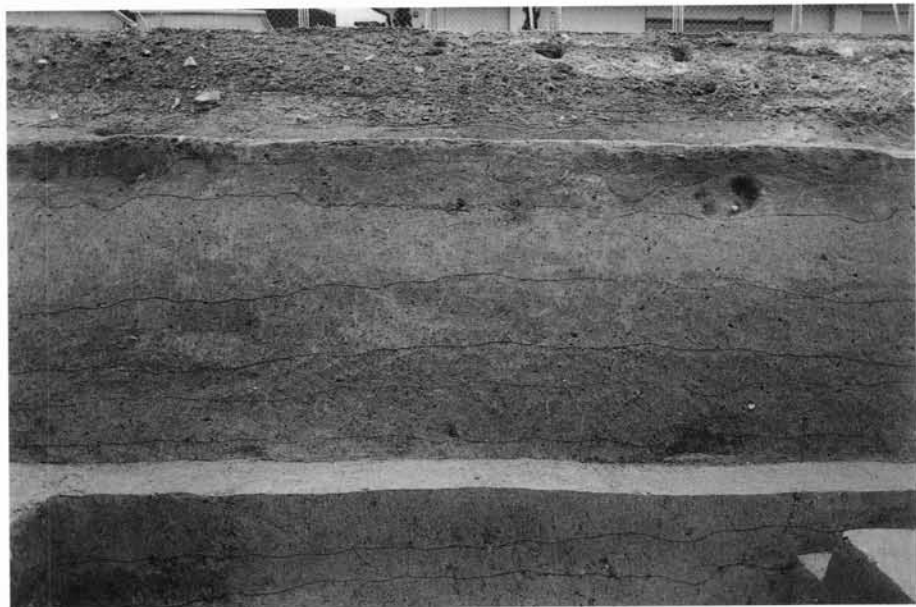
52



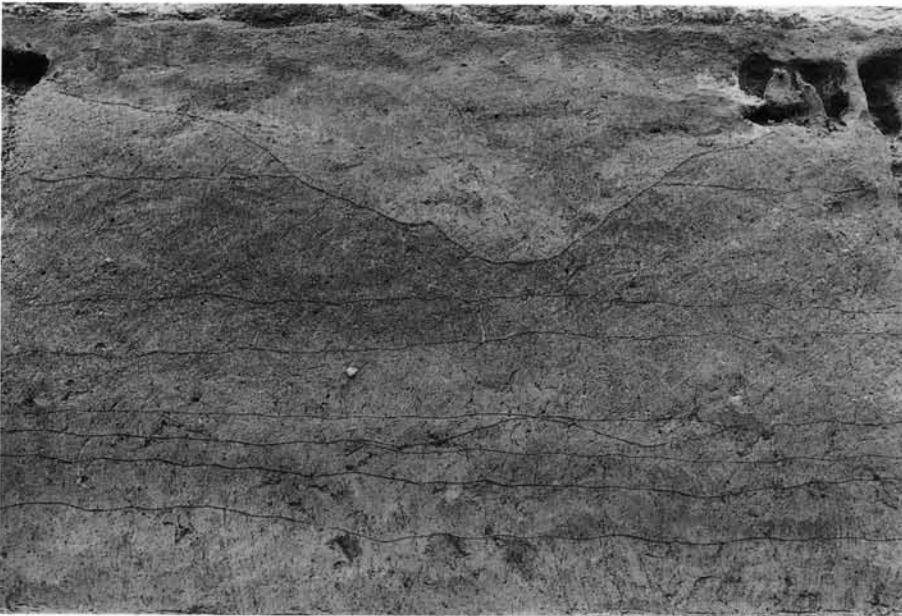
(1)調査地遠景(南東から)



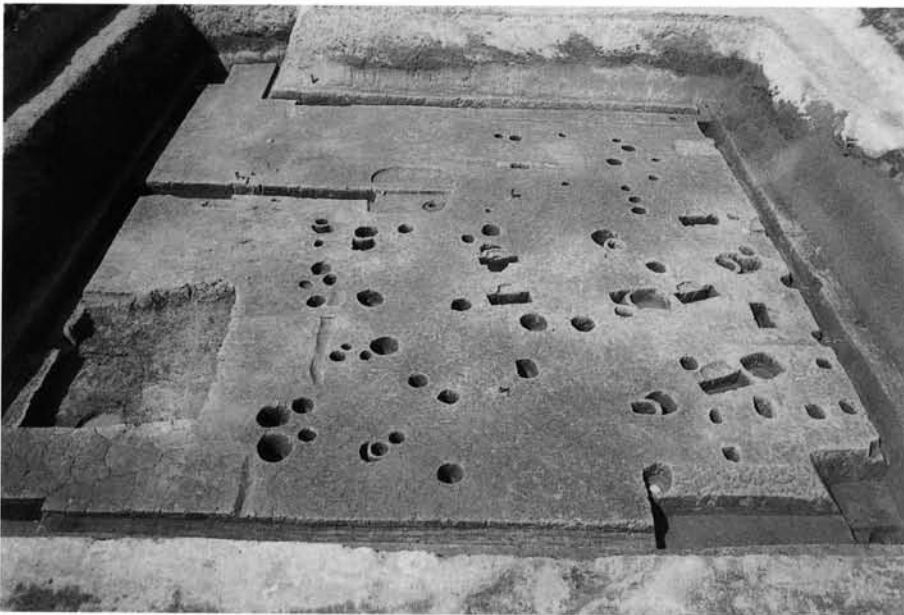
(2)調査前全景(南西から)



(3)南壁土層断面



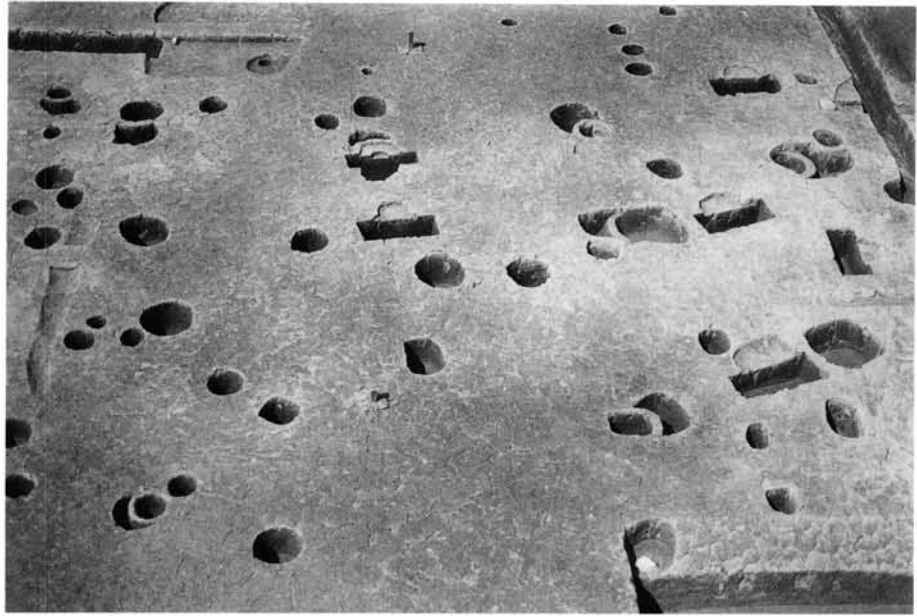
(1) 坪境溝周辺南壁土層断面



(2) 調査区全景(南から)



(3) 南東区近景(西から)



(1)南東区柱穴群検出状況(南から)



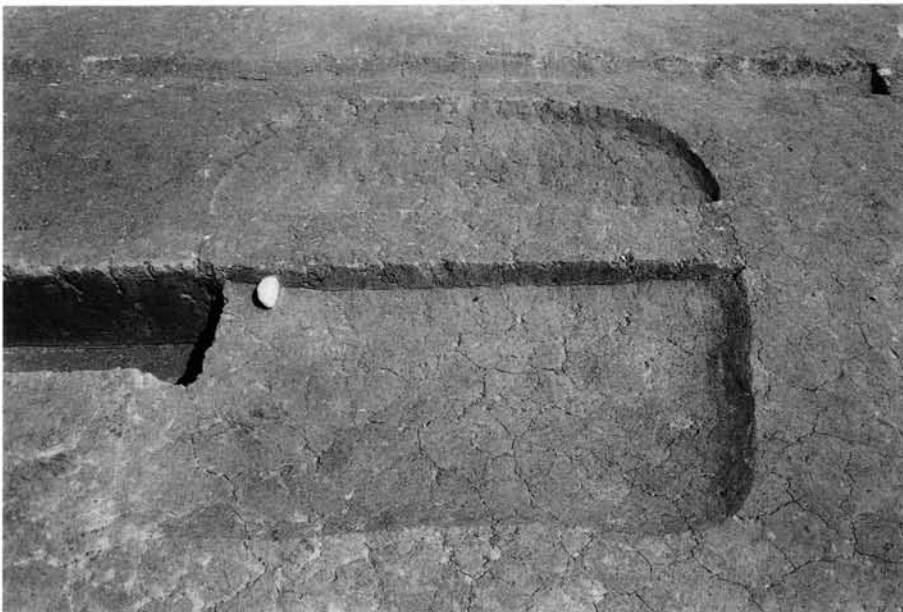
(2)掘立柱建物跡S B21(南から)



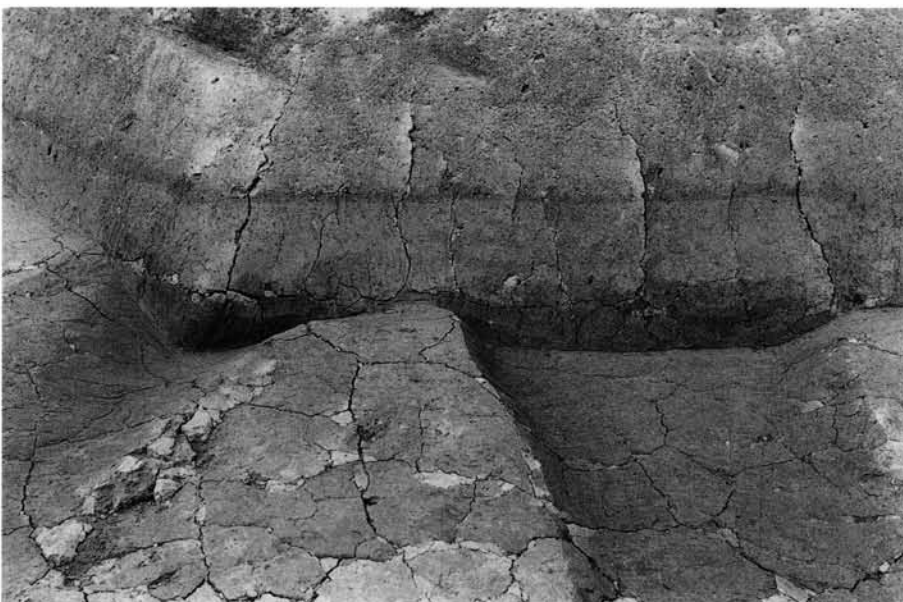
(3)柱穴S P 9 断面(南から)



(1)土坑 S K 44検出状況(西から)



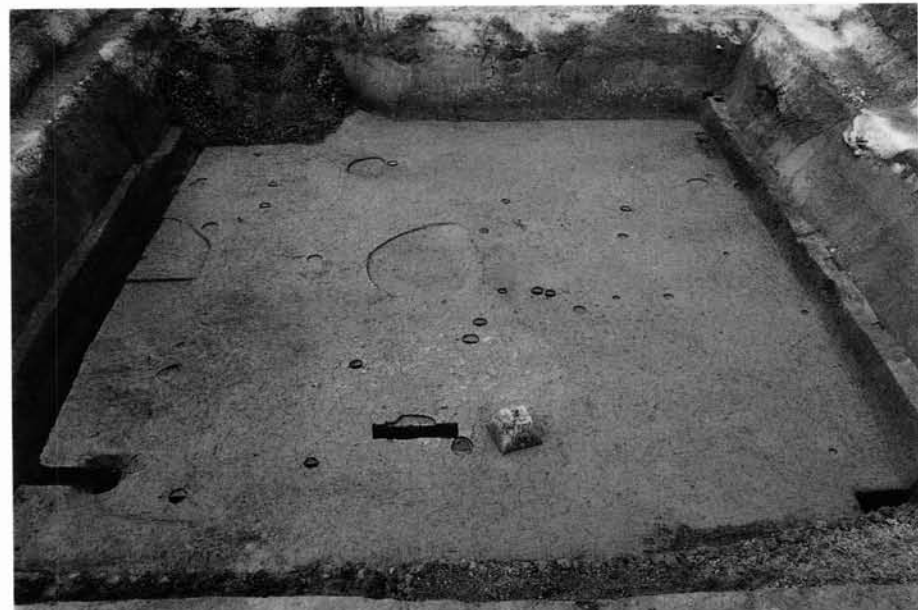
(2)土坑 S K 12全景(南から)



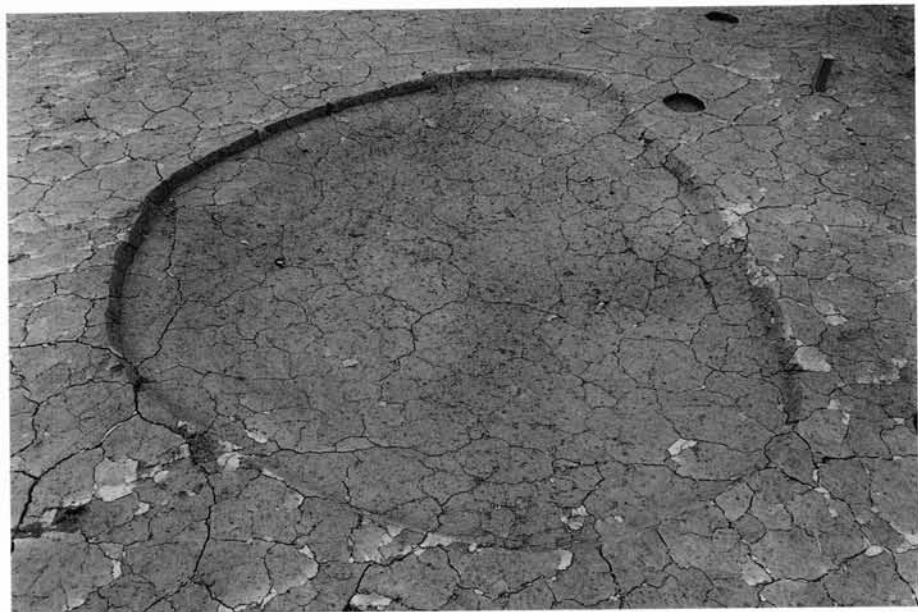
(3)溝 S D 1・2 北部検出状況
(南から)



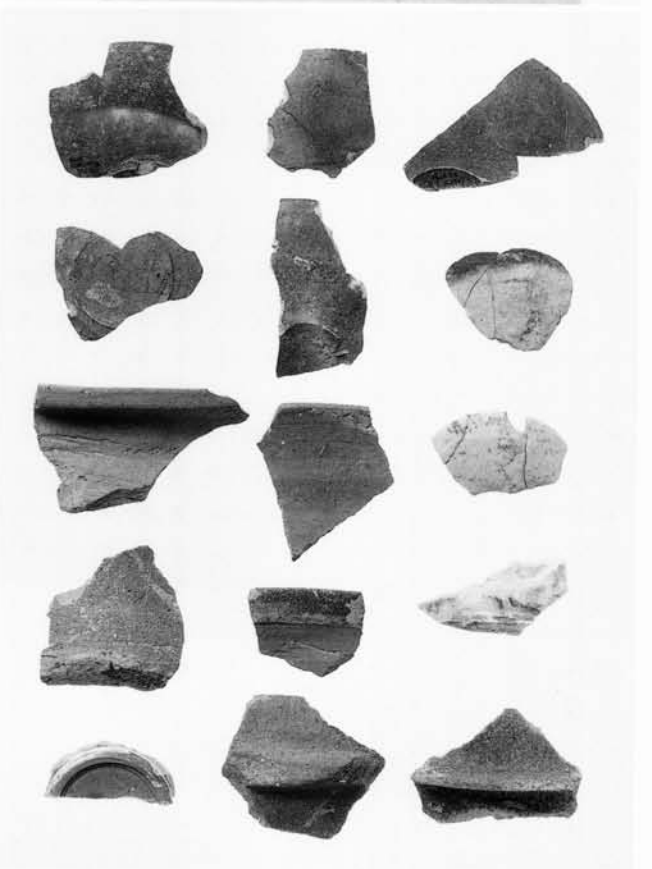
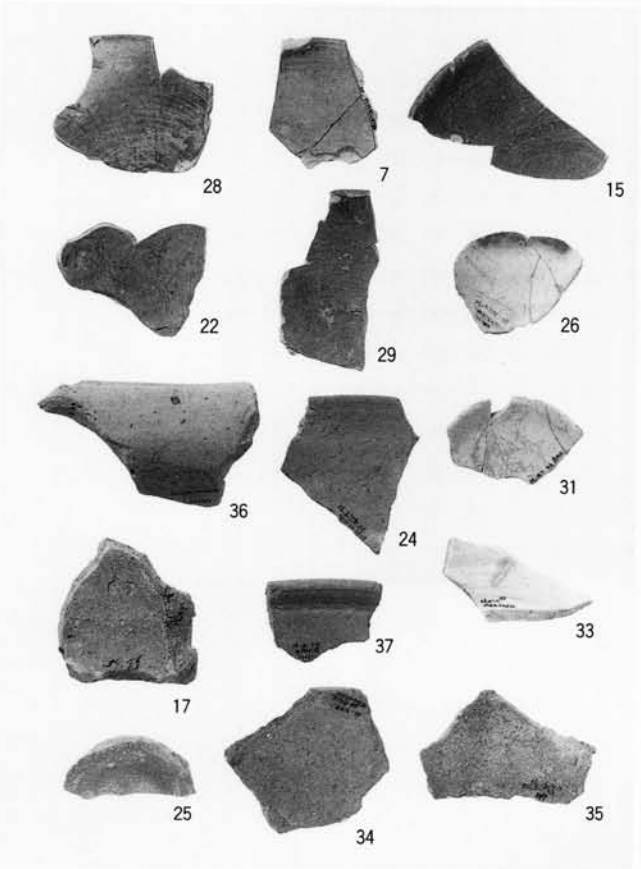
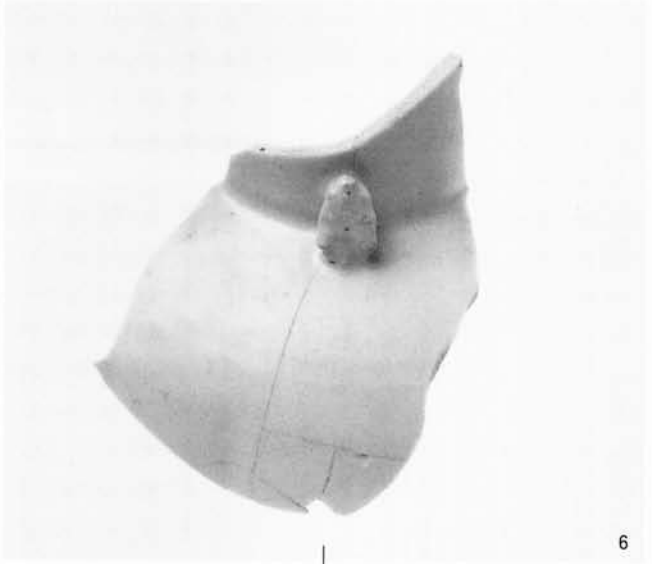
(1)上層遺構面調査区作業風景
(北西から)



(2)下層遺構面調査区全景(南から)



(3)土坑S K45(南から)



報告書抄録

ふりがな								
書名								
副書名								
巻次								
シリーズ名	京都府遺跡調査概報							
シリーズ番号	第115冊							
編著者名								
編集機関	(財)京都府埋蔵文化財調査研究センター							
所在地	〒617-0002 京都府向日市寺戸町南垣内40-3				Tel 075(933)3877			
発行年月日	西暦 2005 年 3 月 28 日							
ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
所収遺跡名	所在地	市町村	遺跡番号	° ' "	° ' "			
みすみこふんぐんだいにじ 三角古墳群第2次	きょうとふまいづるししもあく 京都府舞鶴市下安久	26202		35° 28' 06"	135° 20' 00"	20040514 ~ 20040825	600	道路建設
かんのんじいせき 観音寺遺跡	きょうとふふくちやましあざかんのんじ 京都府福知山市宇観音寺	26201	82	35° 18' 28"	135° 11' 30"	20030507 ~ 20031219	3,090	河川改修
もろはたいせきだいさんじ 諸畑遺跡第3次	きょうとふふないぐんやぎちようもろはたこあざまつもと 京都府船井郡八木町諸畑小字松本	26402		35° 06' 04"	135° 32' 17"	20040906 ~ 20041129	600	農業基盤整備
ながおかきょうあとうきょうだいはっぴやくくにじゅうくじ・ともおかいせき 長岡京跡右京第829次・友岡遺跡	きょうとふながおかきょうしこあざにしやま 京都府長岡京市友岡小字西山	26209	91・98	34° 55' 02"	135° 41' 19"	20040726 ~ 20050121	900	道路建設
むくのきいせきだいなじ 椋ノ木遺跡第7次	きょうとふそうらくぐんおおあざしもこまこあざむくのき 京都府相楽郡精華町大字下狛小字椋ノ木	26366		34° 46' 25"	135° 47' 54"	20040818 ~ 20041001	300	建物建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
三角古墳群 第2次	古墳 経塚	古墳中～後期 古墳後期 中世	円墳2基/木棺直葬墳 方墳1基/横穴式石室墳 経塚3基/埋納土坑	鉄斧 須恵器/土師器/玉類 /鉄器類 土師質筒形容器/瓦 器/土師器/銭貨/鉄 刀/和鏡	三角2・ 3・4号墳 の調査、 2・3号墳 から経塚各 2基検出
観音寺遺跡	集落	縄文 弥生 古墳 奈良/平安 鎌倉/室町	土坑 環濠/竖穴式住居跡/土坑/溝/ 方形周溝遺構 竖穴式住居跡/土坑 柱穴/土坑/溝 柱穴/土坑/溝	縄文土器/石器 弥生土器/土製品/石 器 土師器/須恵器 土師器/須恵器 陶磁器	蟬形土製 品、銅鐸形 土製品の出 土
諸畑遺跡第 3次	集落	弥生末～古墳前期 奈良～鎌倉	竖穴式住居跡/土坑 土坑/溝/柱穴	弥生土器/土師器 土師器/須恵器/瓦器 /瓦質土器/白磁/青 磁	弥生時代末 の焼失竖穴 式住居跡
長岡京跡右 京第829次・ 友岡遺跡	都城/集落跡	飛鳥 平安～鎌倉	掘立柱建物跡 溝/土坑/井戸/柱穴	土師器/須恵器 黒色土器/瓦器/瓦質 土器/瓦	
椋ノ木遺跡 第7次	集落	平安～鎌倉	掘立柱建物跡/溝/土坑	須恵器/土師器/瓦器 /中世陶器	条里制地割 に規制され た建物跡群

備考：北緯・東経の値は世界測地系に基づく。

京都府遺跡調査概報 第115冊

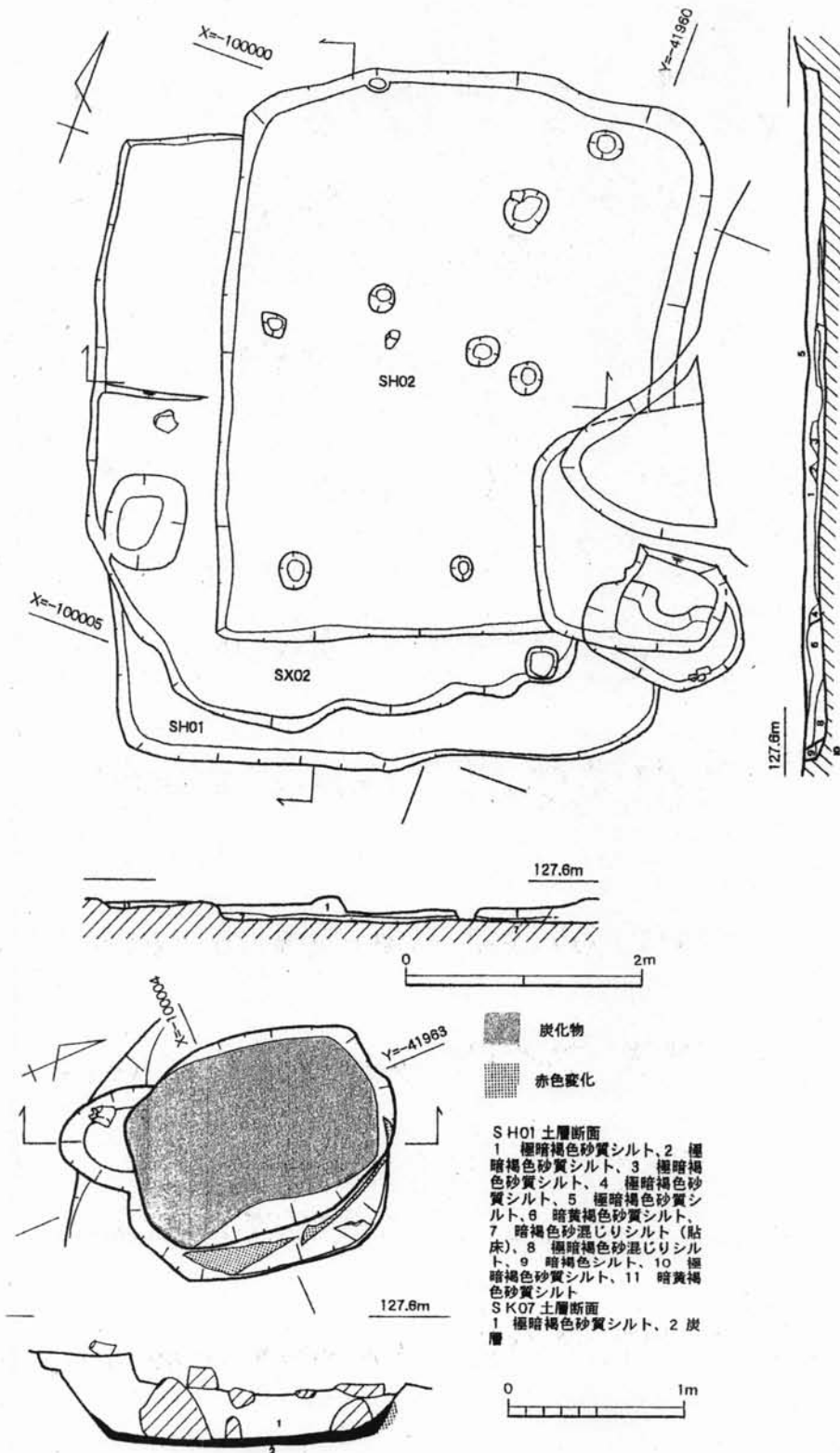
平成17年3月28日

発行 (財)京都府埋蔵文化財調査研究
センター

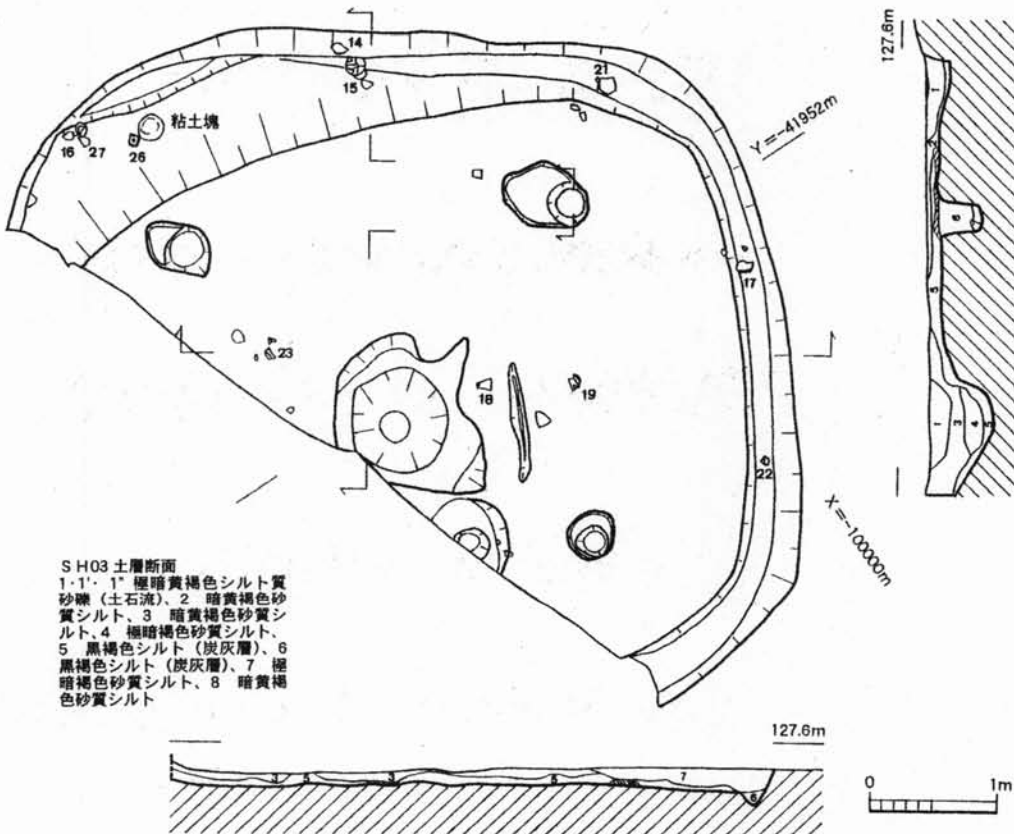
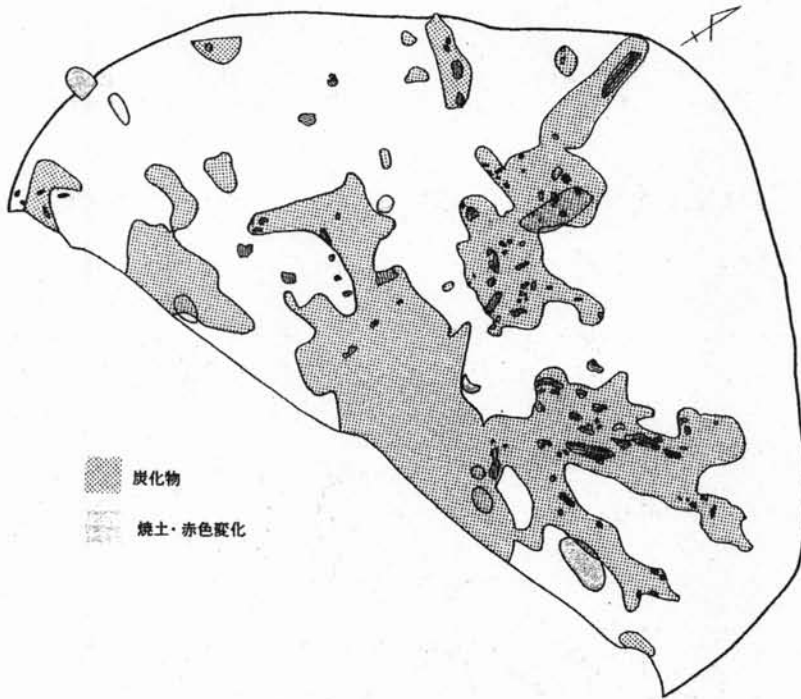
〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3
Tel (075)933-3877(代) Fax (075)922-1189
<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

印刷 三星商事印刷株式会社

〒604-0093 京都市中京区新町通竹屋町下ル
Tel (075)256-0961(代) Fax (075)231-7141



第109図 竪穴式住居跡 S H01・02、類竈 S K07平面・断面図



第110図 竪穴式住居跡 S H03平面・断面図